

首里城跡

一大台所、料理座地区周辺発掘調査報告書



平成27（2015）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡

一大台所、料理座地区周辺発掘調査報告書一

平成27（2015）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

首里城跡は、1879年の琉球処分までの約500年以上にわたって、琉球王国の中枢として機能していたグスクでしたが、昭和20年の沖縄戦により、正殿をはじめとする多くの建造物や城壁などが焼失、破壊を受けました。また、戦後は同地に琉球大学が設置され、校舎建設などの造成によって大きく地形も改変されました。しかし、昭和30年に琉球政府指定史跡に、昭和47年に本土復帰に伴い国指定史跡となり、昭和58年度に首里城歓会門・久慶門の復元整備が完了するなど、沖縄県内で首里城復元に向けた機運が次第に高まっていきました。

そして、昭和47年度から当時の沖縄開発庁からの助言や補助を得ながら沖縄県によって首里城跡復元整備事業が開始されました。その後、昭和60年度の閣議決定を受けて内郭地区は国営沖縄記念公園、周辺地区を県営公園とし、平成4年度には正殿、北殿、南殿、奉神門などの施設が再建され、首里城公園として一部開園しました。その後も復元整備に伴う発掘調査が現在に至るまで、ほぼ毎年度、実施されています。

本報告書は、平成8年度に発掘調査を実施した料理座・大台所地区とその周辺の発掘調査成果をまとめたものです。当該地区にかつて所在していた料理座並びに大台所は、昭和初期頃までは既に姿を消していることから、その詳細について不明な点が多くあります。そのため、今回の発掘調査において新たに確認された石積みや石敷き、石畳などの遺構は、当該地区の復元整備に向けての重要な基礎データになるものと思われます。

また、本報告書が地域のまちづくりの資料に活用されることもより、歴史教育、生涯学習等の資料として生かされるとともに、文化財の保存に対する理解を深めることにつながれば幸いです。

最後に、本事業の実施に際してご指導・ご助言を賜りました文化庁をはじめ、各方面からご協力・ご尽力をいただきました沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所 首里出張所等の関係機関に対し、心から感謝申し上げます。

平成27（2015）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 下地英輝

例　　言

1. 本報告書は国の「都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）」における首里城復元整備に伴い、平成 8（1996）年度に実施した首里城跡 大台所、料理座地区周辺の発掘調査成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は沖縄県教育庁文化課が平成 8（1996）年度に実施し、資料整理作業は沖縄県立埋蔵文化財センターが平成 26（2014）年度に実施した。両事業とも沖縄開発庁沖縄総合事務局・国営沖縄記念公園事務所の受けて受託事業として実施した。
3. 発掘調査及び資料整理作業にあたり、調査体制の項で記した多くの方々に資料の分析・同定・指導を頂いた。記して感謝を表したい。
4. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図を使用した。
5. 本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。
6. 本報告書の編集は、調査体制の項で記した多くの方々の協力のもと盛本勲が行い、各章の執筆は次のとおり行った。
盛本 勲 第 1 章～第 5 章、第 6 章第 16 節～第 18 節、第 24 節、第 7 章
山本 正昭 第 6 章 1 節～第 5 節、第 12 節～第 15 節、第 20 節、第 21 節、第 23 節
新垣 力 第 6 章第 6 節～第 11 節、第 19 節、第 22 節
7. 本書掲載の調査時の写真は盛本勲、矢沢秀雄が撮影し、出土遺物の撮影は矢舟章浩、島袋久美子が行った。
8. 発掘調査で得られた出土品、図面、写真等の記録はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 城の沿革	3
第3節 城の変遷と整備事業	6
第3章 調査の概要	7
第1節 調査地域	7
第2節 調査区の設定と調査の概要	9
第4章 層序	11
第5章 遺構	12
第6章 出土遺物	23
第1節 青磁	23
第2節 白磁	42
第3節 染付	47
第4節 色絵	55
第5節 中国産褐釉陶器	56
第6節 その他の輸入陶磁器	61
第7節 本土産陶磁器	71
第8節 沖縄産施釉陶器	79
第9節 沖縄産無釉陶器	88
第10節 陶質土器	92
第11節 瓦質土器	96
第12節 土器	102
第13節 屋瓦	103
第14節 塚	112
第15節 石製品	114
第16節 貝製品	116
第17節 骨製品	117
第18節 ガラス玉	119
第19節 煙管	121
第20節 埋堀	122
第21節 金属製品	122
第22節 銭貨	125
第23節 円盤状製品	129
第24節 貝類及び獸魚類遺存体	130
第7章 総括	131
報告書抄録	

挿図目次

図目次

第1図 沖縄本島の位置図	4	第29図 本土産陶磁器(1)	75
第2図 首里城跡の位置及び周辺の遺跡	5	第30図 本土産陶磁器(2)	76
第3図 首里城舊城圖(横内家絵図)(明治 初期)	8	第31図 本土産陶磁器(3)	77
第4図 平成8年度発掘調査区位置図 (網点部分)(横内家絵図)	8	第32図 本土産陶磁器(4)	78
第5図 旧琉球大学校舎配置図(網点部 分:工芸校舎)	9	第33図 沖縄産施釉陶器(1)	86
第6図 グリッド配置図	15	第34図 沖縄産施釉陶器(2)	87
第7図 遺構図	19	第35図 沖縄産無釉陶器(1)	90
第8図 青磁(1)碗	34	第36図 沖縄産無釉陶器(2)	91
第9図 青磁(2)碗	35	第37図 陶質土器(1)火炉・蓋・急須・鍋・ 焙烙	95
第10図 青磁(3)碗・皿	36	第38図 陶質土器(2)土瓶・鉢・皿・竈	96
第11図 青磁(4)盤	37	第39図 瓦質土器(1)鉢	99
第12図 青磁(5)盤	38	第40図 瓦質土器(2)鉢	100
第13図 青磁(6)盤・鉢	39	第41図 瓦質土器(3)蓋・欄干	101
第14図 青磁(7)瓶・水注・酒会壺・香炉・ 器台	40	第42図 土器	102
第15図 青磁(8)駒・器種不明	41	第43図 高麗系瓦(丸瓦・平瓦)・大和系 瓦(丸瓦)	105
第16図 白磁(1)碗・小碗・杯・皿	45	第44図 明朝系瓦1(軒丸瓦)	106
第17図 白磁(2)鉢・小鉢・杯・瓶・壺	46	第45図 明朝系瓦2(軒平瓦)	107
第18図 染付(1)碗	51	第46図 明朝系瓦3(丸瓦)	108
第19図 染付(2)碗	52	第47図 明朝系瓦4(丸瓦・平瓦)	109
第20図 染付(3)皿・鉢・瓶	53	第48図 明朝系瓦5(平瓦)	110
第21図 染付(4)杯・壺・香炉	54	第49図 明朝系瓦6(平瓦)	111
第22図 色絵 碗・皿・鉢・瓶	56	第50図 塚	113
第23図 中国産褐釉陶器(1)壺	58	第51図 石製品	115
第24図 中国産褐釉陶器(2)壺	59	第52図 貝製品・骨製品	118
第25図 中国産褐釉陶器(3)壺・鉢	60	第53図 煙管	121
第26図 その他の輸入陶磁器(1)	69	第54図 坪堀	122
第27図 その他の輸入陶磁器(2)	70	第55図 金属製品	124
第28図 その他の輸入陶磁器(3)	71	第56図 錢貨(1)	127
		第57図 錢貨(2)	128

表 目 次

第 1 表 青磁観察一覧(1)	23	第 30 表 本土産陶磁器観察一覧(2)	73
第 2 表 青磁観察一覧(2)	24	第 31 表 本土産陶磁器観察一覧(3)	74
第 3 表 青磁観察一覧(3)	25	第 32 表 沖縄産施釉陶器出土状況	81
第 4 表 青磁観察一覧(4)	26	第 33 表 沖縄産施釉陶器観察一覧	85
第 5 表 青磁観察一覧(5)	27	第 34 表 沖縄産無釉陶器観察一覧	89
第 6 表 青磁観察一覧(6)	28	第 35 表 陶質土器出土状況	93
第 7 表 青磁観察一覧(7)	29	第 36 表 陶質土器観察一覧	94
第 8 表 青磁碗出土状況	30	第 37 表 瓦質土器出土状況	97
第 9 表 青磁皿・碗 or 皿・小碗出土状況	31	第 38 表 瓦質土器観察一覧	98
第 10 表 青磁盤・鉢・大鉢出土状況	32	第 39 表 土器観察一覧	102
第 11 表 青磁酒会壺・壺・大碗 or 大鉢・ 瓶・大瓶・大瓶 or 酒会壺・壺 or 瓶・壺 or 大瓶・酒会壺 or 瓶・大 花瓶 or 壺・小壺出土状況	33	第 40 表 土器・硬質土器出土状況	102
第 12 表 青磁小碗 or 杯・杯・六角杯・八角 杯・馬上杯・器台・茶托・合子・香 炉・水注・袋物・器種不明出土状況	41	第 41 表 屋瓦観察一覧(1)	103
第 13 表 白磁観察一覧(1)	42	第 42 表 屋瓦・壁材出土状況	103
第 14 表 白磁観察一覧(2)	43	第 43 表 屋瓦観察一覧(2)	104
第 15 表 白磁出土状況	44	第 44 表 塚観察一覧	112
第 16 表 染付観察一覧(1)	47	第 45 表 塚出土状況	112
第 17 表 染付観察一覧(2)	48	第 46 表 石製品観察一覧	114
第 18 表 染付観察一覧(3)	49	第 47 表 石製品出土状況(1)	114
第 19 表 染付観察一覧(4)	50	第 48 表 石製品出土状況(2)	114
第 20 表 色絵観察一覧	55	第 49 表 貝製品観察一覧	116
第 21 表 色絵出土状況	55	第 50 表 骨製品出土状況	117
第 22 表 中国産褐釉陶器出土状況	56	第 51 表 ガラス玉観察一覧(1)	119
第 23 表 中国産褐釉陶器観察一覧(1)	56	第 52 表 ガラス玉観察一覧(2)	120
第 24 表 中国産褐釉陶器観察一覧(2)	57	第 53 表 ガラス玉出土状況	120
第 25 表 その他の輸入陶磁器出土状況	63	第 54 表 煙管出土状況	121
第 26 表 タイ産褐釉陶器出土状況	66	第 55 表 煙管観察一覧	121
第 27 表 その他の輸入陶磁器観察一覧(1)	67	第 56 表 坙塙観察一覧	122
第 28 表 その他の輸入陶磁器観察一覧(2)	68	第 57 表 坙塙出土状況	122
第 29 表 本土産陶磁器観察一覧(1)	72	第 58 表 金属製品観察一覧(1)	122
		第 59 表 金属製品観察一覧(2)	123
		第 60 表 金属製品出土状況	123
		第 61 表 錢貨法量観察一覧	125
		第 62 表 錢貨出土状況	126
		第 63 表 円盤状製品観察一覧	129
		第 64 表 円盤状製品出土状況	129
		第 65 表 貝類及び獸魚類遺存体数量表	130

図版目次

図版1 調査区近景(南西より) ······	134	図版 29 中国産褐釉陶器(2)壺 ······	154
図版2 大台所地区:調査光景(西より) ···	134	図版 30 中国産褐釉陶器(3)壺・鉢 ···	155
図版3 大台所地区:溝(南より) ······	134	図版 31 その他の輸入陶磁器(1) ······	156
図版4 大台所地区:溝(西より) ······	135	図版 32 その他の輸入陶磁器(2)(3) ···	157
図版5 大台所地区:西石列(南より) ······	135	図版 33 本土産陶磁器(1) ······	158
図版6 大台所地区:西石列(北より) ······	135	図版 34 本土産陶磁器(2) ······	159
図版7 大台所地区:西石列(南東より) ···	136	図版 35 本土産陶磁器(3) ······	160
図版8 料理座地区:東石畳及び東石列 (南東より) ······	136	図版 36 本土産陶磁器(4) ······	161
図版9 料理座地区:東石畠及び東石列 (西より) ······	136	図版 37 沖縄産施釉陶器(1) ······	162
図版 10 料理座地区:東石畠及び東石列 近景(西より) ······	137	図版 38 沖縄産施釉陶器(2) ······	163
図版 11 料理座地区:東石畠及び東石列 (南側) ······	137	図版 39 沖縄産無釉陶器(1) ······	164
図版 12 料理座地区:東石畠及び東石列 (東より) ······	137	図版 40 沖縄産無釉陶器(2) ······	165
図版 13 青磁(1)碗 ······	138	図版 41 陶質土器(1)火炉・蓋・急須・鍋・焙烙 (2)土瓶・鉢・皿・竈 ······	166
図版 14 青磁(2)碗 ······	139	図版 42 瓦質土器(1) 鉢 ······	167
図版 15 青磁(3)碗・皿 ······	140	図版 43 瓦質土器(2) 鉢 ······	168
図版 16 青磁(4)盤 ······	141	図版 44 瓦質土器(3)蓋・欄干 ······	169
図版 17 青磁(5)盤 ······	142	図版 45 土器 ······	170
図版 18 青磁(6)盤・鉢 ······	143	図版 46 屋瓦(1) ······	170
図版 19 青磁(7)瓶・水注・酒会壺・香炉・器台 ···	144	図版 47 屋瓦(2) ······	171
図版 20 青磁(8)駒・器種不明 ······	145	図版 48 屋瓦(3) ······	172
図版 21 白磁(1)碗・小碗・杯・皿 ······	146	図版 49 屋瓦(4) ······	173
図版 22 白磁(2)鉢・小鉢・杯・瓶・壺 ······	147	図版 50 屋瓦(5) ······	174
図版 23 染付(1)碗 ······	148	図版 51 塚 ······	175
図版 24 染付(2)碗 ······	149	図版 52 石製品 ······	176
図版 25 染付(3)皿・鉢・瓶 ······	150	図版 53 貝製品・骨製品 ······	177
図版 26 染付(4)杯・壺・香炉 ······	151	図版 54 ガラス玉 ······	178
図版 27 色絵 碗・皿・鉢・瓶 ······	152	図版 55 煙管 ······	178
図版 28 中国産褐釉陶器(1)壺 ······	153	図版 56 埋堀 ······	178
		図版 57 金属製品 ······	179
		図版 58 錢貨(1) ······	180
		図版 59 錢貨(2) ······	181
		図版 60 円盤状製品 ······	181

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

国指定史跡首里城跡は、昭和61(1986)年の閣議決定により、内郭地区4.2haが国土交通省所管の「ロ号国営公園」に指定され、国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）として復元整備されることが決定するとともに、城郭外側の区域約17.8haが県営公園として位置づけられ、年次的に整備事業が進められている。

これまでに、国営(内郭)地区は正殿、南北殿、奉神門、御庭、下御庭、二階殿等の整備が完了し、都市公園あるいは公園管理施設として機能している。一方、城郭外側の県営公園地区も国営公園(内郭地区)と併行して、年次的に整備が進められ、これまでに龍潭エリア、上之毛エリア、首里杜館エリア等の整備が完了し、国営公園の補助公園、あるいは附属施設として機能している。

これらの整備に際しては、沖縄県教育委員会(所管：文化財課)により、事前に遺構確認のための発掘調査が実施され、その成果等に基づいて、建物等の規模や構造等を把握したうえで行われているということは多言を要しない。

本報告の対象となっている大台所、料理座跡地区の発掘調査も上記整備計画の一環としての遺構確認を目的に実施したものである。

発掘調査は、平成8(1996)年度国営公園整備事業として、資料整理及び調査報告書作成は、平成26(2014)年度国営公園整備事業として、県教育委員会(所管：文化財課)が国(所管：内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園)から予算の委託を受けて、行ったものである。

第2節 調査の体制

発掘調査から資料整理及び報告書作成に至る間の体制は、下記の通りである(職名等は当時のものである)。

【発掘調査】

事業 主体 仲里 長和(沖縄県教育委員会教育長、1996年度)

事業 所管 大城 将保(沖縄県教育委員会文化課課長、1996年度)

川満 一成(〃 副参事、1996年度)

日超 国昭(〃 課長補佐、1996年度)

事業 事務 稲嶺 靖子(沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1996年度)

比屋根正治(〃 主幹兼管理係長)

村山 佐代(〃 管理係主査)

新垣 敏子(〃 管理係副主査)

発掘調査等 渡辺 誠(名古屋大学文学部教授・考古学)

指導 甲元 眞之(熊本大学文学部教授・考古学)

高倉 洋彰(西南学院大学文学部教授・考古学)
手塚 直樹(鎌倉考古学研究所所長・考古学)
安里 翳淳((財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集主幹・考古学)
大橋 康二(佐賀県教育庁文化財課副課長・考古学・陶磁器)

発掘 担当 盛本 熱 (沖縄県教育委員会文化課史跡整備係主任)
発掘調査補 矢沢 秀雄(沖縄県教育委員会文化課嘱託調査員)
助 員 比嘉 優子(〃〃)

発掘調査作業員(五十音順)：安次嶺政寿、上江洲春子、大城フサ子、大田吉光、嘉味
田千枝子、喜舎場盛安、幸地ヨシ子、小橋川幸子、玉城
史子、中原ミツ子、中村フサ子、比嘉洋子、宮城澄子、
山内利江子。

【資料整理及び調査報告書作成業務】

事業 主体 諸見里 明(沖縄県教育委員会教育長、2014 年度)
事業 所管 嘉数 卓 (〃〃 文化財課参事兼課長、2014 年度)
仲宗根英之(〃〃 管理班長、2014 年度)
金城 亀信(〃〃 記念物班長、2014 年度)

事業 実施 下地 英輝(沖縄県立埋蔵文化財センター所長、2014 年度)
新垣 勝弘(〃〃 総務班長、2014 年度)
盛本 熱 (〃〃 調査班長、2014 年度)
比嘉 瞳 (〃〃 総務班主任、2014 年度)
山本 正昭(〃〃 調査班主任専門員、2014 年度)
新垣 力 (〃〃 調査班主任、2014 年度)

資料整理嘱託員(五十音順)：赤嶺雅子、伊藤恵美利、石嶺敏子、池原直美、瑞慶覧尚
美、高良三千代、並里千佳、比嘉紗恵里、宮里美也子。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

首里城跡は、那覇市街東北方の琉球石灰岩台地から成る首里台地に築城された琉球王国の王宮跡である(第1図)。現在の地籍は、那覇市首里当蔵3丁目1番となっている。

王宮の立地する首里は、標高130m前後の琉球石灰岩の丘陵上に形成された城下町である。

城跡の所在する一帯は、北方に標高100～280mの末吉大地から虎頭山、弁ヶ嶽に至る丘陵によって、南方に金城川が流れる凹地、さらには識名丘陵、東方は南風原町との境界を流れるナゲーラ川、西方は真嘉比川に囲まれ、他地域とは隔絶されている。

このように、四方が丘陵や谷川などの自然の障壁に囲繞された首里台地の南縁部に首里城は築かれ、要塞としての条件を十二分に満たした王宮としての立地にふさわしい地理的環境にある。

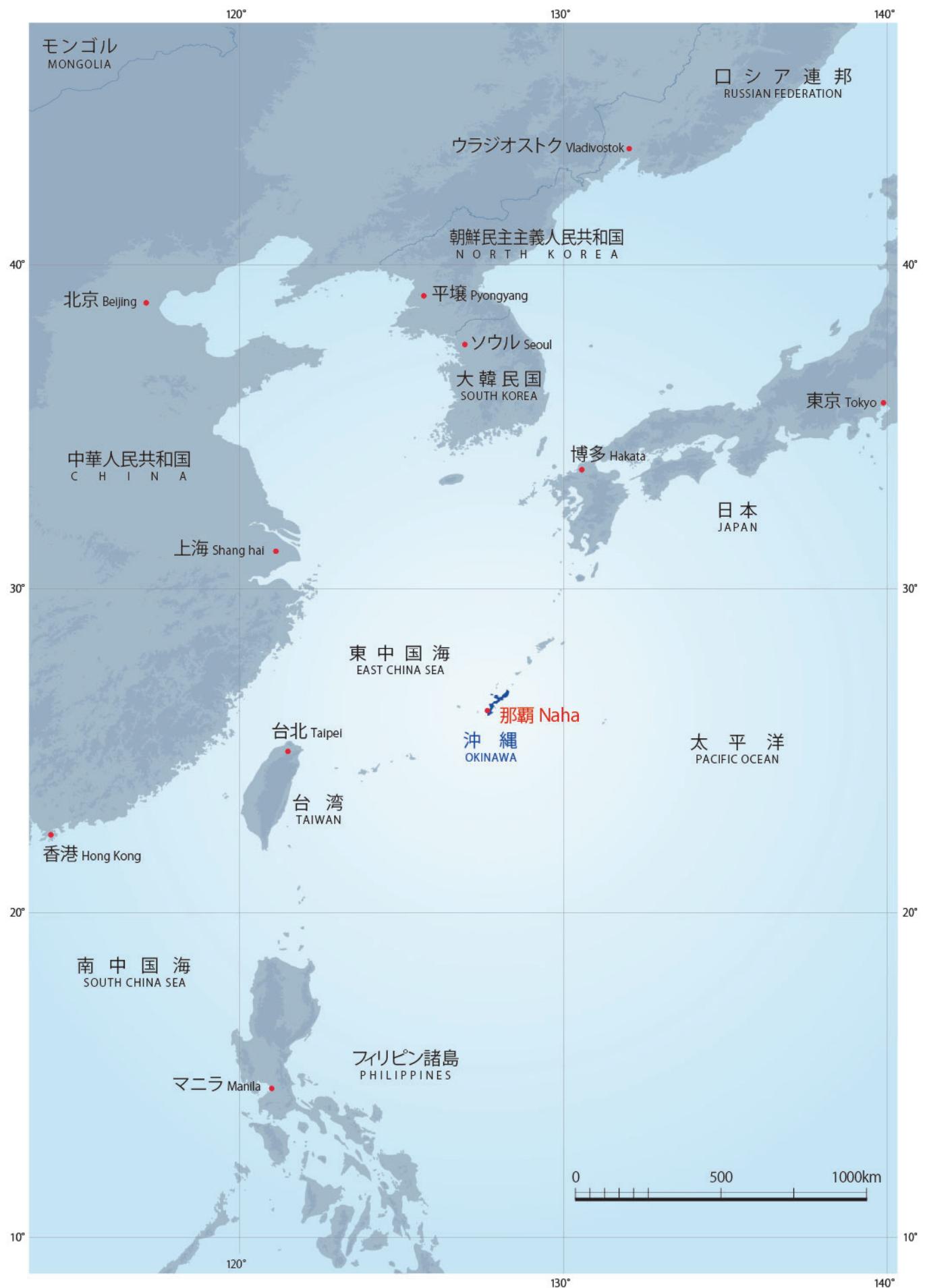
また、城の南西眼下には那覇の街や城が隆盛を極めていた頃の貿易港であった那覇港を控えていたことも、貿易立国をなしていた琉球社会の往時の社会的背景を鑑みると、好条件の立地であった。

述べてきたように、首里城は一帯では最高所に立地することから、王宮の外郭石積みの東西端に設けられたアザナと称される物見や京の内南側の物見からは、北方に中山王の王宮であった浦添城跡を経て、遠くは座喜味城跡が立地する丘陵を、西方には慶良間諸島や渡名喜島の島々を経て、良好な天候の際には遠く久米島までもが望見できる。一方、東方には久高島や大里城跡、糸数城跡の立地する丘陵を、南方には多々名グスクや八重瀬グスクが立地する丘陵が望める立地条件にある。

第2節 城の沿革など

グスクの築城および築城主等の詳細については判然としない部分もあるが、現存する沖縄最古の金石文である「あんこくさんじゅかぼくのきひ安國山樹花木之記碑」(宣徳2年・1427年)によると、時の国王であった尚巴志は、城の大々的な整備事業を行い、王城の威容を高め併せて遊息の地(公園)を造園する目的で「王城外」の安國山に龍潭と称する人工池を掘って台を築き、松柏・花木等を植え、太平の世の象徴として永遠に記念するとの記録がある。この記録からして、尚巴志王の代(1422～1439年)には王宮としての基本的な構造や縄張りはほぼ確立していたであろうと推されよう。

以後、琉球の三山統一(1429年)を経て、第一尚氏さらには第二尚氏王統と国王の変遷が続くが、第二尚氏王統の第3代尚真王(1477～1526年)や第4代尚清王(1527～1555年)代に北西部に歓会門や久慶門を設けたり、東南側の城郭石積みを二重に構築し、東南部に繼世門を設けるなど城内外の拡張や整備等を経て、最終的な城の全貌ができ上がったものとされる。



第1図 沖縄本島の位置図



第3節 城の変遷と整備事業など

前節で述べたように、首里城跡は尚巴志王代(1422～1439年)に築城され、沖縄県が発足した明治12(1879)年までの約450年余にわたって、琉球王国の王宮が所在したところである。

城の中心的建物である正殿や南北殿、奉神門、歓会門、瑞泉門、白銀門等の建物群は、その学術的価値から大正14(1925)年に国宝指定を受け、国家的歴史遺産となっていた。

しかし、去る沖縄戦において、城の直下に日本陸軍の沖縄総司令部壕(旧32軍司令部壕)が設営されたことによって、城一帯は集中砲火を浴びることになり、地上にあった城内外の国宝建造物群等の貴重な文化遺産の数々が、城壁等の一部を残してことごとく焼失してしまい、国宝指定も解除となってしまった。

さらに、この戦災に拍車をかけるように、終戦直後の昭和25(1950)年には、焦土化とした城の跡地に旧琉球大学が創設されることになり、4.2haの内郭に所狭しと校舎や事務棟等の建物が建設されるとともに、一部の地形改変までもが行われ、大きく変貌してしまった。

この変貌ぶりに県民は心を痛め、旧琉球政府文化財保護委員会などが中心となり、先祖が残した貴重な文化遺産の復元、修復に取り組み、昭和31～32(1956～1957)年の園比屋武御嶽石門の復元整備に端を発し、昭和32～33(1957～1958)年には守礼門を、昭和35～42(1960～1967)年には龍淵橋及び円鑑池を、昭和43(1968)年には円覚寺総門と弁財天堂、昭和44(1969)年には天女橋の復元を行っている。

そして、昭和47(1972)年の沖縄県の本土復帰とともに、戦災文化財の復元整備事業として、歓会門～久慶門一帯の外郭石垣部分を首里城城郭等復元整備事業として位置づけ、事業が推進された。

また、昭和59(1984)年には旧琉球大学キャンパスが首里城内から西原町・宜野湾市。中城村の1市1町1村を跨ぐ地域への移転が完了するとともに、内郭4.2haが建設省所管の「口号国営公園」に指定され、国の都市公園整備事業(国営沖縄記念公園首里城地区)で復元整備することが閣議決定されるとともに、城郭外の区域約17.8haが県営公園として位置付けられ、首里城跡の本格的な復元整備が始動した。

史跡首里城跡の復元整備は、史跡整備の基本である遺構調査の成果をベースにし、王国時代の修理記録や絵図等をはじめ、戦前の写真や図面および国宝指定時の実測図やメモ、古老への聞き取り調査等、あらゆる史資料のクロスチェックに基づく精度の高い復元再建であることが評価され、2000年12月に他の9ヶ所のグスクや関連遺産群とともに「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されている。

第3章 調査の概要

第1節 調査地域

発掘調査を実施した地域は、首里城の正殿、南殿、北殿、奉神門等の中心的な建物群が位置する南東側で、繼世門の北西、二階殿の南側にあたる地点である(第4図・網点部)。

当該地域は大台所(ウフデージュ)及び料理座と称された城内での儀式の供物料理や日常の進上料理などを賄う厨房及び役所の役割を担った建物が配置されていたところである(第4図)(宮里 1983 a、1983 b、真栄平 1993、宮城 1996、久手堅 2000)。

大台所(ウフデージュ)の創建年代は明らかでないが、1622(尚豊2)年に毛泰運豊見城親方盛良が百次御鎖之側に任せられていることから『球陽(巻五)』、その頃には建造され、御内原の料理を掌っていたと考えられている(久手堅 2000)。

当該所には大屋^{おおやこ}子^こ2人、筆者2人、加勢筆者3人、庖丁1人、下代2人の役人をおいて、来客の接待および諸礼式のときの中級以下の料理や国王の日常の料理をつかさどっていたようである(宮里 1983 a、真栄平 1993、宮城 1996、久手堅 2000)。また、米・砂糖・雑穀・乾物・薪炭などを管理する諸座諸藏の一つで、大屋^{おおやこ}子^こと筆者の4人を大台所役といい、手代2人とともに心付役であったことである(宮里 1983 a)。

一方、大台所の西30m程に設けられていた料理座は、『琉球國由来記』等によると、元来「漬物座」と称され、漬物や乾物、調味料、香辛料やその他の食品または薪炭などを管理したが、1736年(尚敬24)に「料理座」として建造、改名し独立機能をもたせたようである(久手堅 2000)。新たに「料理座」が設けられた背景に関し、久手堅憲夫は「儀式の供物料理、日常の進上料理など、大台所では対応できなくなったことによると考えられる」とする(久手堅 2000)。

当該役所には大屋^{おおやこ}子^こ7人、筆者1人、加勢筆者7人、下代2人を置き、貴賓の接待や諸礼式のときの高級料理の調理をつかさどったとされる。大八子・筆者の4人を御料理座役といい、心付役の一つである。1年の勤務で、米・砂糖・肉類・野菜類などを取り扱い、そのなかから役得として収入を得ていたようである(宮里 1983 b)。

このように城の食に関する重要な機能を有した厨房及び役所であったが、1909年(明治42)首里区へ払い下げられた。払下げ時の建物の名称は大台所が「下役料理座」、料理座は「用物奉行所及び料理座」と記されている(真栄平 1993、宮城 1996)。

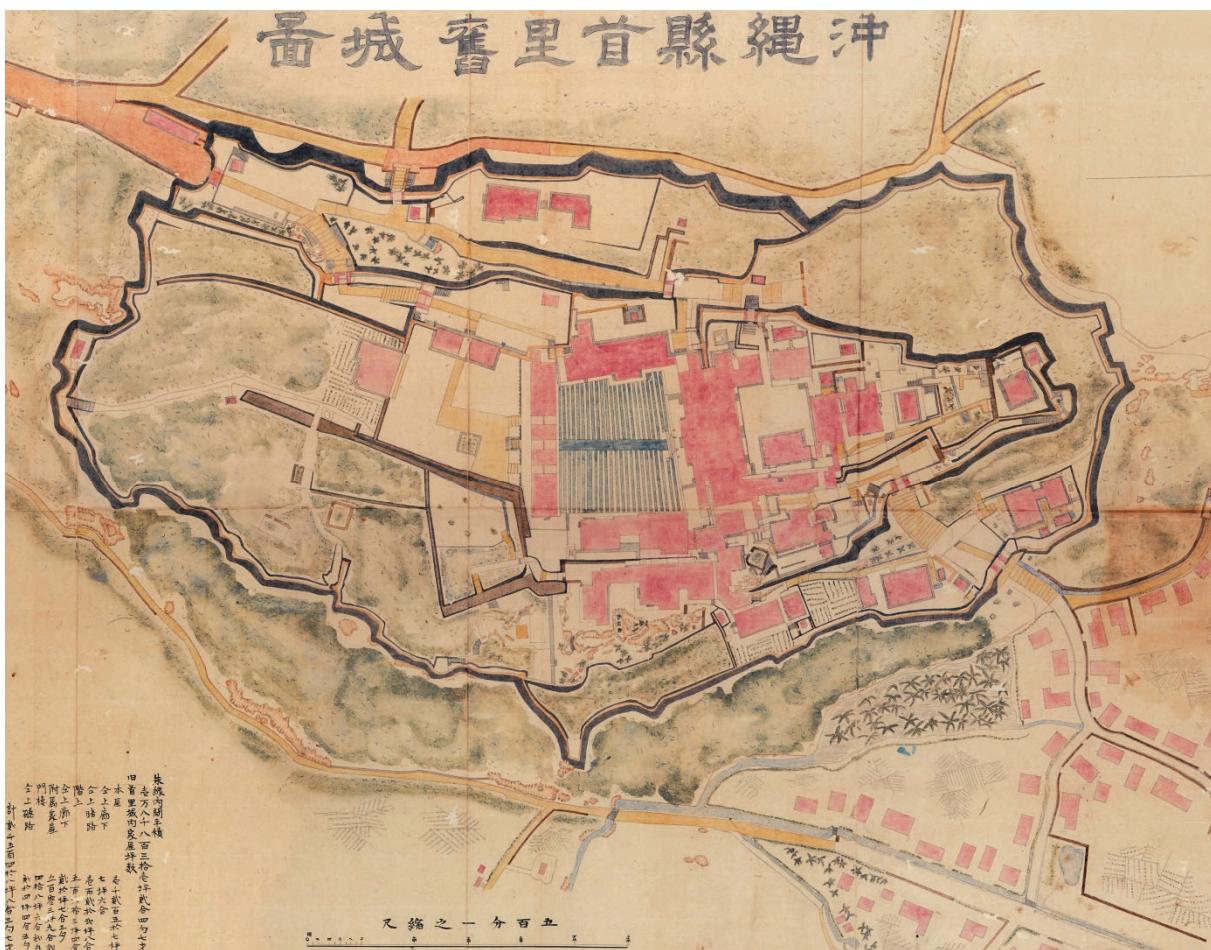
しかし、両建物とも昭和初期には既に姿を消しており、跡地は放置されて雑草が繁茂し、礎石すら残らず、その構造も伝えられず、殿舎の名称だけが残されていた。

このようなことから、建物の位置等に関しては不明な点が少なくなく、発掘調査に依拠しなければならない点が多かった。

第1章第1節でも述べたように、調査の契機が大台所および料理座等の所在していた一帯の整備を目途としたものであったことから、当該地域の遺構等の確認調査を主目的に行つた。

調査地点の地籍と対象面積は、下記の通りである。

那覇市首里当蔵三丁目1番 約920 m²

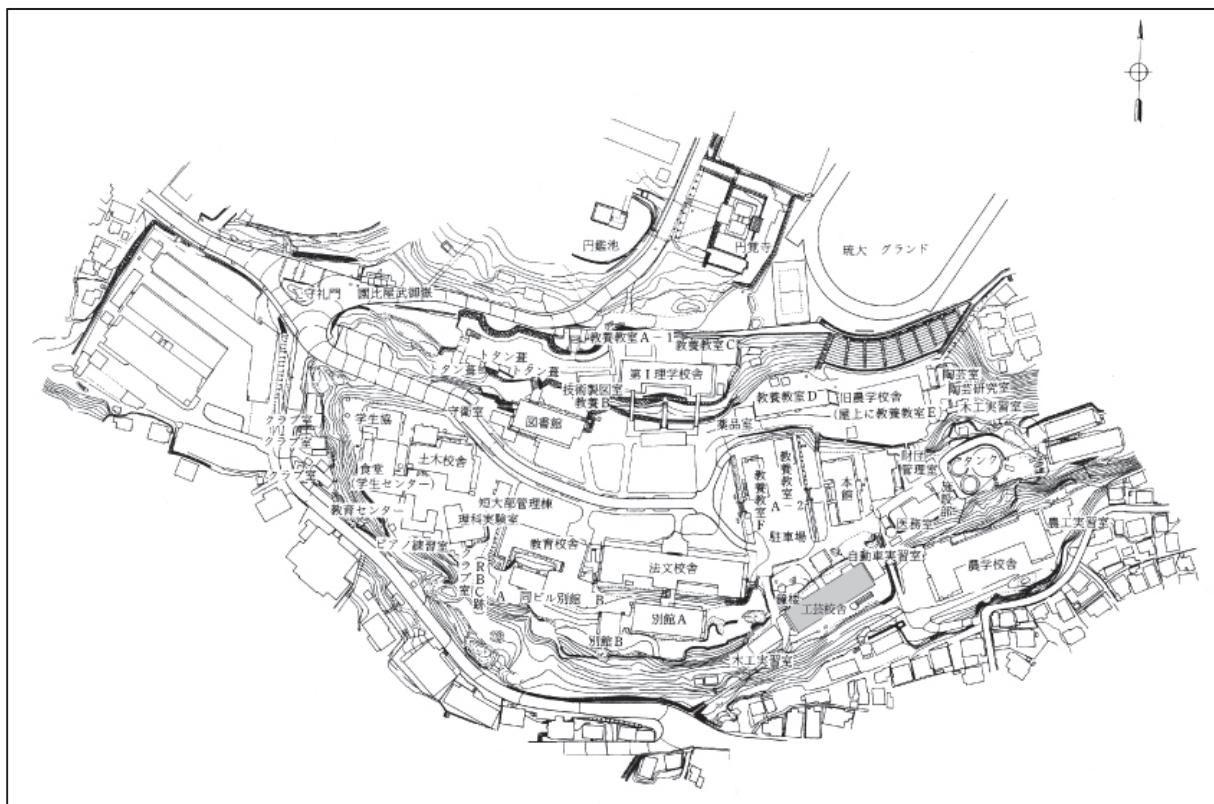


第3図 首里城舊城圖(横内家絵図：明治初期)



第4図 平成8年度発掘調査区位置図(網点部分：横内家絵図)

那霸市歴史博物館所蔵



第5図 旧琉球大学校舎配置図(網点部分：工芸校舎)

発掘作業は、1996年8月1日より着手し、翌1997年2月28日までの延べ181日間にわたって行った。

調査対象地は、北側の内郭地区から外郭石積み間の東西に延びた緩やかな傾斜をなした地域である。当該地には、旧琉球大学時に工芸校舎(東西棟)が設置されていたことから(第5図)、調査区内の至るところにフーチング基礎が残存していた。

一帯は、昭和53(1984)年の大学が西原町・宜野湾市・中城村に跨る新キャンパスへ移転完了するとともに荒撫地化し、調査着手時には牧草やススキをはじめとした雑草木が繁茂した状態にあった。

このようなことから、作業は初めに重機(バックホー)により、これらの除去作業から調査地の北辺と南辺部に $2 \times 2\text{ m}$ および $3 \times 3\text{ m}$ の試掘穴を9箇所ほどを設け、堆積土層等の確認を行った。

第2節 調査区の設定

グリッド設定は、対象地のほぼ中央部付近を南北の10ラインとし、そのほぼ中央部に位置する箇所をG列とした、 $4 \times 4\text{ m}$ のグリッドを対象地全域に設定した。

結果、南北にB～K列、東西に1～22列を設定し、各グリッドはこれらのアルファベットと数字を組み合わせて用いることにした。なお、各グリッドの示準は、北西隅の交点で示した。

その後、基本的な堆積土層を把握するために、対象地の西側部の5列にて南北方向に、南側部のG列で東西方向へのT字状のトレンチを設定し、試掘穴では把握できなかった本

体部分の堆積土層等の確認を行った。

その結果、概して表土下20cm前後までは表土・腐植土層で、その下位に比較的薄い遺物包含層が確認され、地山の琉球石灰岩の岩盤及びその風化土壌である赤土(島尻マージ層)へ移行していく状況を呈していることが判った。

このため、本来ならば表土・腐植土層はバックホー等の機械力を導入して除去する必要があり、導入が可能な地点については機械力により実施した。

全体的な堆積土層の状況としては、西側から東側にかけて傾斜をなしているうえ、琉球石灰岩の岩盤が対象地のほぼ全域に広がっており、岩盤間等の凹部は堆積層が比較的厚かったものの、露頭岩あるいは表土・腐植土層を除去した段階で岩盤が露出した箇所では薄い堆積をなしていた。

このような状況等からして、次章層序でも述べているように、若干高まりを呈している西側の料理座地区から緩傾斜をなして下がっている東側の大台所地区への流入堆積も含まれているであろう、と考えた。

その後、2~3列間隔で土層観察用の畔(セクションベルト)を設け、各グリッドごとに基本的には10cmレベルで掘り下げながら発掘調査を進行して行った。

全体的な作業としては、廃土置き場が東西両側の調査区外にしか確保できなかつたため、常に中央部付近を先行して進め、それから東西方向へと進行させて行った。

<参考文献>

久手堅憲夫, 2000 :『南島文化叢書 22 首里の地名－その由来と縁起－』。第一書房。東京。
真栄平房敬, 1993 : 第7章 近代の首里城。『首里城復元記念誌 聖なる首里城 歴史と復元』。

p275~315。首里城復元期成会。那覇。

宮城栄治, 1996 : 古都首里のまちづくりについて 歴史的変遷の検証－1 (「首里市制10周年記念誌」に見える明治以降の変遷)。pp31~40。首里城研究。No.2。首里城研究会。那覇。

宮里朝光, 1983 a : 大台所 おおだいじょ(ウフデージュ)。沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典 上巻』。pp399。沖縄タイムス社。那覇。

宮里朝光, 1983 b : 料理座 りょうりざ。沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典 下巻』。pp960。沖縄タイムス社。那覇。

第4章 層序

周知のように、首里城跡は沖縄戦による砲火や戦後の旧琉球大学設置時の造成などで、直接的な破壊を受けているため、城としての文化層等が確認できるのは大学設置時の造成層下の極めてわずかの部分である。

第3章第1節 調査地域でも述べたように、調査対象地区は西から東、すなわち料理座跡から大台所跡にかけて緩傾斜地形をなしているうえ、各所に琉球石灰岩の露頭岩が露出している状況であった。

このようなことから、表土・腐植土層を除去後、琉球石灰岩の露出が見られない箇所においては、表土・腐植土層下に遺物を含んだ黒褐色の土層が見られたものの、層厚も一定していないうえ、差異が少なくない。

概して、堆積土層の基本層位は地山も含めて、I～III層の3枚である。このうち、遺物包含層はII層であり、当該層は地点によっては細分可能な場所もあるが、分別して記述するほどの差ではない。

下記のように、調査対象地区全域で、基本的にはほぼ同様の堆積状況を示す。

I 層 = 表土・腐植土層である。暗褐色を呈した石灰岩礫混じりの層である。調査対象地全域に近・現代遺物を混じており、攪乱を受けている。その中でも、とりわけ、東側は石灰岩塊や現代陶器やガラス片等を混じるとともに、凹凸や間隙を呈していた。

II 層 = 拳大から親指大ほどの琉球石灰岩礫を比較的多く含んだ黒褐色土層である。基本的には単一層であるが、地点によっては細分可能な場所も認められたが、分別して記述するほどの大きな差異ではない。

出土遺物は、貝類を中心とした食料残滓や陶磁器などの人工遺物が見られるが、夥しい出土状態ではなく、どちらかと言えば散発的である。

III 層 = 基盤の赤土(マージ)層である。いたる所に旧琉球大学時の工芸校舎の基礎工であるフーチングが残存しており、石積みや石敷き等の建物に関わる遺構が寸断されていた。

第5章 遺構

検出された遺構は、大台所に関連するものとして、中央石列、中央石敷き、溝、西石列、料理座に関するものとして、東石畳、東石列(石積み)が確認された(第6図)。

以下に、各々の遺構の概要について述べる。

第1節 大台所地区

1. 中央石列

調査区右端寄り中央部のD 7 d から東隣のグリッドに向け、右上がりから左下がりの斜め45度方向に延びた石列遺構である。

形態や構造等から推して、比較的小振りの琉球石灰岩を積み上げた石積みの根石部分であろう。

2. 中央石敷き

1. の中央石列に北接して構築された石敷き遺構である。構造等からして、石列と対をなしたものであったことが窺える。位置からして、3. の溝遺構に対し、垂直方向に延びているが、両者間に設置したサブトレンチでは検出されていないことからあるいは溝遺構の手前で終結していたものと考える。

10~20cm程の琉球石灰岩の拳大から親指大の礫を敷き詰めて構築されている。

3. 溝

調査区中央部やや東側で検出された溝遺構である。両側および底面とも石造りによって構築されており、幅約30cm、深さ約30cmを測る。

溝の西側石は、破壊によって南側端と北側約三分の一程は欠落している。溝遺構構造のプロセスは、側石が欠落した部分の観察結果からして、U字状に掘削した土中溝に底石を敷いた後、両側石を立石して構築したことが判る。

建物との関係については判然としないが、当該溝はおそらく建物に沿って構築されていたものと推するが判然としない。

4. 西石列(石畠)

調査区中央部よりやや西側で検出された石列(石畠)遺構である。残存幅約60cm前後を測る。

敷かれた石の大きさはさまざまであるが、基本的な構造は、上面を平坦に加工した琉球石灰岩を組み合わせて石畠を構築している。段差を有する南側の石畠は、段差部分と縁に長方形状の縁石で区画し、その中に板状石を嵌めこんでいる。

一段高い部分の幅広部分の石畠はほぼ中央部分が破壊を受けて剥されており、東

側の一段下がった部分との境目の縁石のみが残存する状況となっている。

第2節 料理座地区

1. 東石畳

後述する2.の東石列(石積み)の東側で検出された石畳遺構である。石畳の幅は約1.75mを測り、残存長は約3mを測る。

構造は、北側端に東西方向の立ち上がりを設けるとともに、南側端には一段下がった段差を構築しているが、当該箇所にも扁平状の琉球石灰岩を張石状に張って面を構築している。

石畳は、大きさ10~20cm大程の扁平な板状石を密に敷き詰めて構築されている。

2. 東石列(石積み)

調査区西端で検出された石列(石積み)遺構である。石列(石積み)の構造は片面積みで、北から南方向へ延びてきて、トレンチ南端近くでR状のコーナーをして西方向へ曲がって延びている。

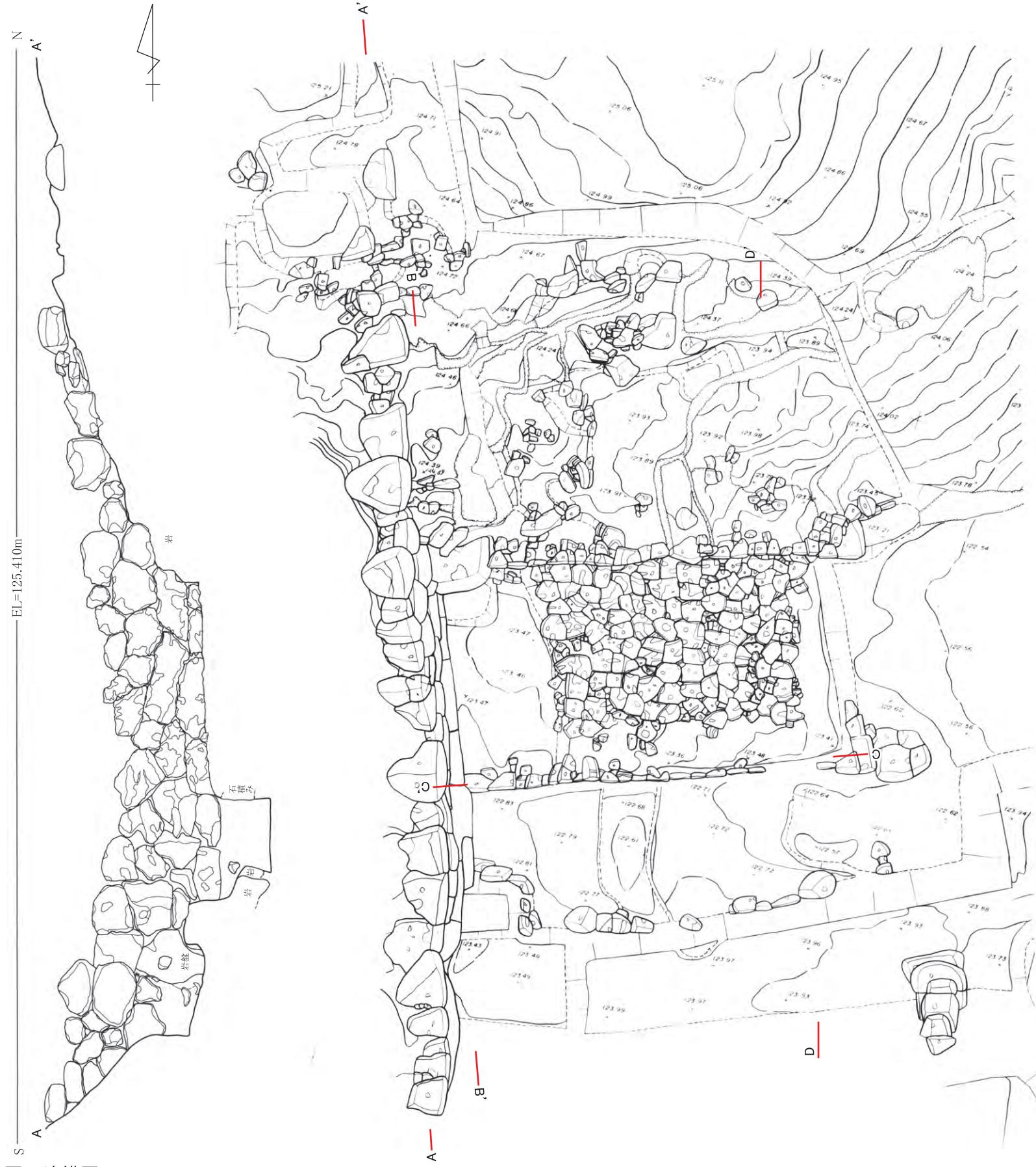
石列(石積み)内部には拳大前後の栗石やコーラルの石粉等を充填しており、基礎構築を行っていることが判る。

当該場所は二階殿南側にあたり、あるいは二階殿の構築目的で地拵え等を行った際の基壇的性格を有したものかと考える。

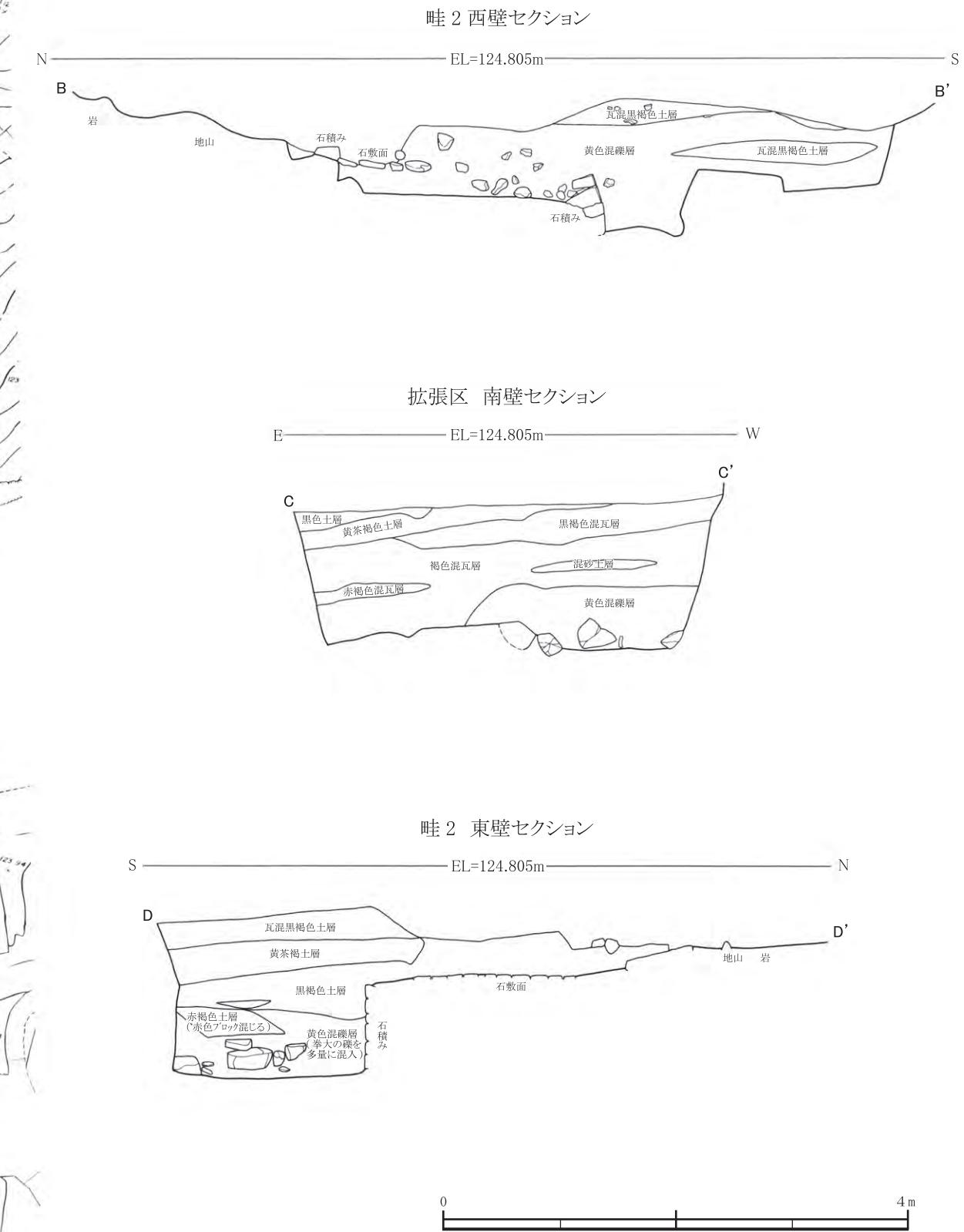


第6図 グリッド配置図

石垣西側石垣立面図



第7図 遺構図



第6章 出土遺物

第1節 青磁

出土点数は2131点で、主体は龍泉窯系で器種は碗が多くを占めている。碗の次に皿、盤があり、壺や瓶、鉢といった大型製品や香炉や杯、天目台、蓋置、水注といった特殊な器形も数は少ないが見られる。成形が雑な資料も碗や皿といった小型製品に見られ、雑器として場内にて用いられたことが窺われる。これらの大半は搅乱層や表土層から出土しており、遺構に伴うものは僅少である。また、2次的に火を受けて損傷している資料もあることから、首里城内の建物が焼失した際に使用、もしくは所蔵していたものであると思われる。主な器種については以下に記す。

碗：外面に細蓮弁を配する直口口縁碗が最も多く出土している。また、雷文帶碗や無文外反碗、数は少ないが鎬蓮弁文碗などが見られる。全体的に小破片が多く、接合により線形が窺えるものは1点のみであった。また、成形が粗いものも多数みられ、雑器として持ち込まれていたことが窺える。

皿：主に腰折皿と口折皿に大別することができる。腰折皿には口縁部を稜花にするものも見られる。前2者と比べて数は少ないが外反皿も見られる。碗と同様に成形が粗いものも多数みられ、雑器として持ち込まれていたことが窺える。

盤：鎬縁盤が主体を占めている。口径が40cmを超えるものから25cm以下のものまでサイズにバリエーションが見られる。文様は主に蓮弁文が用いられており、丸彫りでかなり略化した意匠から鎬蓮弁で丁寧に描かれたものまで見ることができる。

第1表 青磁観察一覧（1）

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種分類	部位	素地	口径 器高 底径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第8図 図版13 1	蓮 弁 文 碗	口縁部	かなり密。や や大きい気泡 が見られる。	— — —	内外面共に淡い青緑 色の釉が厚く施される。	口縁部がわずかに外反する。外面 胴部には鎬蓮弁文が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第8図 図版13 2			密で黒色微粒 子が比較的多 く混入する。	12.2 — —	内外面共に青緑色の 釉が厚く施される。	直口口縁碗で、口唇部は丸く收め ている。外面胴部にやや盛り上がり を有する無鎬蓮弁文が見られる。	大台所 黒土層
第8図 図版13 3			密で黒色微粒 子が混入す る。	16.6 — —	内外面共に暗オリーブ 色の釉が薄く施される。	直口口縁碗で、外面胴部には鎬蓮 弁文が見られる。弁間に界線が描か れている。	二階殿 コーラル 層
第8図 図版13 4			密で黒色微粒 子が混入す る。	— — —	内外面共に青緑色の 釉が厚く施される。	口縁端部が僅かに肥厚する直口口 縁碗。細めの鎬蓮弁が外面胴部に 見られる。	大台所 黒土層
第8図 図版13 5		口縁部～底部	やや密で粒子 は灰白色とな る。	13.1 6.8～ 7.0 5.0	オリーブ色の釉が内外 面共に施されている。 疊付と外底面の一部が 露胎となる。	直口口縁のやや小ぶりな碗。蓮弁 の描かれ方は雑で弁間と弁先が対 応するが、弁单位では描かれてい ない。	料理座 埋土
第8図 図版13 6		口縁部	やや粗く、粒 子は灰白色と なる。	14.3 — —	オリーブ色の釉が内外 面共に施されている。	口縁端部が僅かに肥厚する直口口 縁碗。蓮弁は外面胴部に弁間と弁 先がそれぞれ描かれている。内面 口縁近くに圈線が見られる。	大台所 南トレント

注「—」：計測不可

第2表 青磁観察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 底径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第8図 図版13 7	蓮弁文碗	口 縁 部	やや粗く、黒色 粒子が僅かに見 られる。	13.6 — —	内外面共に青緑色の釉 が厚く施される。	直口口縁のやや小ぶりな碗。蓮弁文 が外面胴部に見られるが、弁間に對し て弁先が描かれていない箇所も見ら れるように、かなり雑に描かれている。 内面胴下部には、ヘラ描きによる捻花 文と思われる文様が見られる。	継世門 コーラル 層
第8図 図版13 8			密で黒色微粒子 が混入する。	13.6 — —	内外面共に青緑色の釉 が厚く施される。一部、 2次的焼成による変色 が見られる。	口縁端部が肥厚する直口口縁碗。外 面にはやや盛り上がりを有する無錫の 細蓮弁文が見られる。	継世門 褐色土層
第8図 図版13 9			やや密で粒子は 灰白色となる。	12.4 — —	オリーブ色の釉が内外 面共に薄く施されてい る。	直口口縁のやや小ぶりな碗。弁先を 有しない蓮弁文が外面胴部に描かれ ている。また、蓮弁の上から幅広の鋸 歯文が見られる。また、内面口縁近く に圈線が見られる。	大台所 南トレンチ
第8図 図版13 10			やや密で黒色粒 子が僅かに見ら れる。	14.0 — —	オリーブ色の釉が内外 面共に薄く施されてい る。	直口口縁のやや小ぶりな碗。弁間と 弁先が対応しない雑な蓮弁文が外面 胴部に描かれる。内面胴下部には、 ヘラ描きによる花弁と思われる文様が 見られる。	二階殿 南トレンチ
第8図 図版13 11			やや密で黒色粒 子が僅かに混入 する。	13.8 — —	淡緑色の釉が内外面共 に薄く施されている。	直口口縁碗で外面胴部に弁間と弁先 が対応しない蓮弁文が描かれる。内 面胴部にも複数の縦位沈線が描かれ る。	二階殿 表採及び 表土層
第8図 図版13 12		底 部	やや密で黒色粒 子が混入する。	14.0 — —	内外面共に青緑色の釉 が薄く施される。	直口口縁碗で外面胴部に2条一組で 弁間が描かれるが、弁先は描かれ ず、口縁部直下に2条の圈線が見ら れる。	二階殿 表採及び 表土層
第8図 図版13 13			やや粗く、白色 の粗粒子が混入 する。	14.8 6.2 5.2	暗オリーブ褐色の釉が 内外面共に薄く施され る。畳付から外底面にかけて露胎となり、内底面 は輪状に剥き取る。	口縁部が波状となる直口口縁碗で弁 先は描かない。焼成は不十分で、 全体的に褐色がかっている。また、高 台の一部が変形している。高台内削り は浅い。	大台所 表採及び 表土層
第8図 図版13 14			密で白色の粗粒 子が混入する。	7.1 — —	青緑色の釉が内面から 高台内側まで薄く施され る。高台内は蛇の目状 に釉剥ぎがなされる。	高台は低く、幅広の畠付となる。胴部 の立ち上がりが緩やかであることから 大振りの碗になるものと思われる。	継世門 東西石列
第8図 図版13 15			密で白色の粗粒 子が混入する。	— — 5.4	透明度のある淡い青緑 色の釉が内外面共に施 される。高台内は蛇の目 釉剥ぎがなされる。	高台は低く、畠付は丸味を有する。外 面胴部に2条一組で弁間が描かれ、 内面胴部にも蓮弁文、内底面には花 文内に判読不明の字款が見られる。	二階殿 瓦礫層
第8図 図版13 16			密で白色の粗粒 子が混入する。 大小の気泡が多 く見られる。	— — 7.6	透明度のある淡い青緑 色の釉が内外面共に施 される。高台内は蛇の目 釉剥ぎがなされる。	内底面に菊花と思われるスタンプ文が 見られる。また重ね焼きの際に溶着した 粘土塊が内底面に見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第8図 図版13 17			やや粗く、大小 の気泡が見られ る。	— — 6.0	青緑色の釉が内外面共 に施される。高台内は蛇 の目釉剥ぎがなされる。	高台は低く、ハの字状に外側へ開く。 外面胴部には幅広のヘラ描きの弁間 が、内面には圈線内に草花文が描か れている。	料理座 石列
第9図 図版14 18			やや粗く、微小 な気泡が多く見 られる。黒色素 粒子も僅かに混 入する。	— — 4.7	暗オリーブ色の釉が内 外面共に施される。高台 から外底面にかけて露 胎となるが、かなり雑に 施釉される。施釉の厚み は斑が見られる。	高台は低く、畠付の幅は一定ではな い。内底面に菊のスタンプ文が施さ れ、外面には蓮弁文の弁間下部が見 られる。	継世門 表採及び 表土層

注「—」:計測不可

第3表 青磁観察一覧（3）

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 底径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第9図 図版14 19			密で気泡が僅かに見られる。	— 5.6	透明度のある青緑色の釉が内外面共に施される。外底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。	厚めの高台で、畠付の幅は一定ではない。外面には細蓮弁が、内底面には「顧氏」銘と思われる字款とその周辺には渦状の沈線が描かれている。	大台所 赤褐色土層
第9図 図版14 20			やや粗く、白、黒色粗粒子が混入する。	— 5.8	淡緑色の釉が内外面共に薄く施されている。高台内面途中まで施釉される。	厚めの高台で、畠付の幅は狭い。外面には細蓮弁が、内底面には双魚文のスタンプ文が見られる。	二階殿 南トレンチ
第9図 図版14 21	雷文 帶碗	口縁部	やや粗く、白、黒色粗粒子が混入する。	15.6 — —	暗オリーブ色の釉が内外面共に施される。	直口口縁碗で、口唇部に向かつて次第に器壁が厚くなる。内外面共に丁寧な雷文帯が施されている。	二階殿 表採及び 表土層
第9図 図版14 22			密で黒色粗粒子が僅かに混入する。	15.6 — —	青緑色の釉が内外面共、やや厚めに施される。	直口口縁碗で、内外面共、胴部には草花文が描かれている。外面口縁部直下にはやや略化した雷文帯が見られる。	繼世門 コーラル層
第9図 図版14 23			やや粗く、白、黒色粗粒子が混入する。	14.8 — —	透明度のある明緑色の釉が内外面共、やや厚めに施される。	直口口縁碗で、外面にはかなり略化した雷文帯が見られる。また、内面白縁部直下にはやや太めの圈線が一条見られる。	大台所 南トレンチ
第9図 図版14 24	碗	底部	粗く、黄、白、黒の粗粒子が比較的多く混入する。	— — 6.5	暗オリーブ色の釉が内外面共に施される。施釉は雑で斑が見られる。高台内は蛇の目釉剥ぎが、内底面は輪状に釉剥ぎがなされている。	高台の厚みは薄く、胴部への立ち上がりが緩やかである。内面には区画線が縦位に入り、その内部に草花文が配されている。	大台所 南トレンチ
第9図 図版14 25			やや粗く、白、黒色粗粒子が混入する。	— — 4.65	暗オリーブ色の釉が内外面共に施される。高台内は蛇の目釉剥ぎがなされる。	高台径が小さく、胴部への立ち上がりが急であることから小振りな碗であると考えられる。外面には草文、内底面には圈線内に判読不明の字款が見られる。	繼世門 東西石列
第9図 図版14 26			密で大きい気泡が見られる。	— — 5.4	透明度のあるオリーブ色の釉が内外面共に厚く施される。高台内は蛇の目釉剥ぎがなされる。	高台は低く、高台内の内繰りは浅い。内外胴部には草文が、内底面には圈線と捻花文が見られる。	繼世門 表採及び 表土層
第9図 図版14 27	外反 碗	口縁部 ～底部	やや粗く、白、黒色粗粒子が混入する。また気泡が僅かに見られる。	15.8 6.2 6.8	オリーブ色の釉が内外面共に薄く施される。畠付から外底面にかけて露胎となる。	無文外反碗で、高台は低く、腰部は膨らみを有し、口縁部へ移行する。	大台所 南トレンチ
第9図 図版14 28			やや粗く、白色粗粒子が多く混入する。	16.6 7.5 6.6	明緑色の釉が内外面共に薄く施される。高台内面途中から外底面にかけて露胎となる。	無文外反碗で、高台はやや高く、畠付は尖り氣味となる。腰部は膨らみを有している。	二階殿 表採及び 表土層
第9図 図版14 29		口縁部	密で黒色粗粒子が混入する。	— — —	内外面共に淡い青緑色の釉が施される。	口縁端部が僅かに外反する。外面口縁直下には3条、内面白縁直下には1条の圈線が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第9図 図版14 30	碗	底部	密で黒色粗粒子が混入する。気泡も僅かに見られる。	— — 5.8	透明度のある明緑色の釉が内外面共に薄く施される。高台内面途中から外底面にかけて露胎となる。	内底面に判読不明の字款が見られる。高台を中心円形に割れていることから、円盤状製品として2次利用された可能性がある。	二階殿 表採及び 表土層
第10図 図版15 31			やや粗く、気泡が僅かに見られる。	— — 5.4	暗オリーブ色の釉が内外面共に施される。高台から外底面にかけて露胎となるが、かなり雑に施釉される。内底面には円形の釉剥ぎがなされる。	高台は低く、成形は雑である。また、高台内の内繰りは浅く、ハの字状に外側へ広がる。	二階殿 表採及び 表土層

注 「—」:計測不可

第4表 青磁観察一覧（4）

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 底径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第10図 図版15 32	碗	底部	密	— — 3.8	少し緑がかった灰白色の釉が畳付けを除く内外面に施される。	高台はかなり低く、高台内の内縁も浅い。内底面は壅み、腰部は膨らみを有する。景德鎮の白磁の可能性もある。また、粗い貫入が目立つ。	大台所 赤褐色土層
第10図 図版15 33	大碗	底部	密で褐、白色粗粒子が混入する。	— — 7.5	透明度のあるオリーブ色の釉が内外面共に施されている。高台内は蛇の目釉剥ぎがなされている。	かなり大振りの碗で、全体的に器壁が厚い。高台は高く、畳付は丸味を帯びる。内外面の胴部には草文が、内底面には圈線とその中に捻花文が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第10図 図版15 34	碗	底部	やや粗く、白色粗粒子が混入する。	— — 4.6	釉が酸化炎焼成され黄褐色となる。畳付のみ露胎となる。	小振りの型造り無文碗。内底面に不明瞭ながら圈線と思われる沈線が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第10図 図版15 35	小碗	口縁部～底部	かなり密で白色粗粒子が混入する。	10.7 5.6 5.5	明緑色の釉が内外面共に施される。外底面は露胎となる。	口縁部が外反する小碗で、外面には唐草文が描かれる。	二階殿 表採及び 表土層
第10図 図版15 36	口折皿	口縁部～底部	密で大小の気泡が見られる。	12.0 3.1 5.9	明緑色の釉が内外面共に施される。高台内は蛇の目釉剥ぎがなされる。	高台はハの字状に外側へ広がる。外面には雑に描かれたヘラ描きの蓮弁文が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第10図 図版15 37		口縁部	密で黒色粗粒子が多く混入する。	12.6 — —	透明度のある明緑色の釉が内外面共にやや厚く施される。	内面の鍔部分に雷文帯が丁寧に描かれる。外面には雑に描かれたヘラ描きの蓮弁文が見られる。	繼世門 表採及び 表土層
第10図 図版15 38			密で黒色粗粒子が多く混入する。	13.0 — —	透明度のある明緑色の釉が内外面共に厚く施される。	内面の鍔部分に略化した雷文帯が描かれる。外面には雑に描かれたヘラ描きの細蓮弁文が見られる。	二階殿 埋土
第10図 図版15 39		皿	やや粗い。白、黒色の少し粗い粒子が混入する。	12.2 — —	黄緑色の釉が内外面共に施される。	口縁部が外反するやや深めの皿。内面に鑿彫りの細蓮弁文が密に見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第10図 図版15 40			やや粗い。白色粗粒子が多く混入する。細かな気泡が多く見られる。	— — 6.6	青緑色の釉が内外面共に薄く施される。高台から外底面にかけて露胎となり、内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。	福建・廣東系で高台は低く、厚みがある。焼成はやや不良で高台内は赤褐色を呈する。	二階殿 表採及び 表土層
第10図 図版15 41	腰折皿	口縁部～底部	密で黒色粗粒子が混入する。	13.4 3.6 6.5	明緑色の釉が内外面共に施される。高台内は露胎となる。	内外面胴部にかなり略化した唐草文と、外面腰部に雑に描かれた幅広の蓮弁文が見られる。内底面にも文様が見られるが全体構成は不明。	繼世門 表採及び 表土層
第10図 図版15 42			やや粗い。白色粗粒子が混入する。細かな気泡が多く見られる。	12.4 2.85 6.1	明緑色の釉が内外面共に施される。高台内は一部露胎となる。	口縁部は稜花となり、内面口縁部直下に2条一組の圈線と内底面に幅広の圈線が見られる。	繼世門 コーラル層
第10図 図版15 43	外反皿	口縁部	密で白色微粒子が多く見られる。黒色微粒子も僅かに混入する。	23.8 — —	内外面共に淡い青緑色の釉が薄く施される。	口縁部が大きく開く外反皿。直下に2条の圈線が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第11図 図版16 44	鍔縁盤	口縁部	密で大小の気泡が見られる。	— — —	明緑色の釉が内外面共に施される。	やや深みを有する盤。洗か。内面胴部には青海波文が密に配され、鍔部には波状文、外面胴部には片切り彫りの剣先蓮弁文が見られる。	二階殿 表採及び 表土層

注 「—」:計測不可

第5表 青磁観察一覧（5）

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 底径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第11図 図版16 45	稜花盤	口縁部	密で黒色粗粒子が僅かに混入する。	31.2 — —	透明度のある青緑色の釉が内外面共に施される。	稜花の輪郭に対応して鍔部に沈線が描かれる。また、内面胴部には片切り彫りの蓮弁文とその上部に瑞雲文が見られる。外面胴部にも片切り彫りの蓮弁文が見られる。	継世門 南トレンチ
第11図 図版16 46			密で大小の気泡が見られる。白色粗粒子が混入する。	24.0 — —	青緑色の釉が内外面共に厚く施される。	稜花の輪郭に対応して鍔部に沈線が描かれる。内面胴部にはかなり略化した草花文が、外面には一弁に鎬を2本有する蓮弁文が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第11図 図版16 47	盤	底部	密で黒色粗粒子が混入する。また気泡が多く見られる。	— — 13.3	明緑色の釉が内外面共に施される。外底面には透明釉が薄く施される。	外面胴部に鎬を2本有する蓮弁文が、内面胴部には草文が見られる。また、内底面には波状文が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第11図 図版16 48	鍔縁盤	口縁部	やや粗く、気泡が見られる。白色微粒子が混入する。	22.4 — —	内外面共に淡い青緑色の釉が薄く施される。	口縁端部の摘み上げは大きく、鍔部の幅は狭い。内面胴部に幅の狭い蓮弁文が密に配されている。	二階殿 表採及び 表土層
第11図 図版16 49		口縁部	やや粗く、大小の気泡が見られる。	— — —	透明度のある青緑色の釉が内外面共に施される。	口縁端部を少し摘み上げている。器面が大きく窪む幅広の蓮弁文が内面胴部に見られる。	大台所 黒土層
第11図 図版16 50		口縁部～底部	密で大小の気泡が見られる。白色粗粒子が混入する。	43.2 8.4 28.4	青緑色の釉が内外面共に厚く施される。外底面中央は円形に釉剥ぎされる。	口縁端部を少し摘み上げている。外面胴下部に圈線が1条、内面胴部には幅広の窓削りによる蓮弁文が密に配されている。	二階殿 表採及び 表土層
第12図 図版17 51		口縁部	やや粗く、小さい気泡が見られる。また、白色微粒子が混入する。	43.2 — —	青緑色の釉が内外面共に厚く施される。	口縁端部を少し摘み上げている。内面胴部には幅広の窓削りによる蓮弁文がやや間隔を開けて配される。	継世門 埋土
第12図 図版17 52	盤	底部	やや粗い灰白色の粒子。白色の粗粒子が多く混入する。	— — 8.9	暗オリーブ色の釉が内外面共に施される。疊付は露胎となる。外底面は円形に釉が剥ぎ取られる。	高台はかなり低い。内底面は圈線とその中央に魚文のスタンプ文が見られる。	継世門 ユーラル層
第12図 図版17 53		口縁部	やや粗い灰白色の粒子。白色粗粒子が混入する。	23.5 — —	オリーブ色の釉が内外面共に施される。	薄手の盤。外面胴部に7本と4本単位の櫛描文が見られる。	継世門 表採及び 表土層
第12図 図版17 54		口縁部～底部	粗く、大小の気泡が多く見られる。	24.8 6.8 10.5	釉が酸化炎焼成され黄褐色となる。疊付のみ露胎となる。	口縁端部の摘み上げは大きく、鍔部の幅は狭い。小振りな盤である。高台は碁笥底状となる。内面胴部に幅の狭い蓮弁文が密に配されている。	二階殿 表採及び 表土層
第12図 図版17 55		底部	やや粗く、小さい気泡が多く見られる。	— — 28.0	透明度のある青緑色の釉が内外面共に施される。外底面は蛇の目状に釉剥ぎされる。	高台は低く、かなり厚い。内底面には七宝繋ぎ文と、3本単位の櫛で描いたラマ式蓮弁の花弁を描く。圈線が見られる。胴部には唐草文か。	継世門 埋土
第13図 図版18 56	盤	底部	密で大小の気泡が多く見られる。	— — 18.5	青緑色の釉が内外面共に施される。	高台は高く、かなり厚い。内底面に圈線が見られる。	大台所 黒土層
第13図 図版18 57			密	— — —	淡い青緑色の釉が内外面共に厚く施される。内底面は2次的に火を受けている。	器壁は薄く、内底面に貼り付けの双魚文が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第13図 図版18 58	鉢	口縁部	密で黒色微粒子が混入する。	19.0 — —	透明度のある青緑色の釉が内外面共に厚く施される。	口縁部が、くの字状に外反する。内外面胴部に草花文が、外面胴下部に剣先蓮弁文が見られる。	大台所 南トレンチ

注 「—」:計測不可

第6表 青磁観察一覧（6）

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 底径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第13図 図版18 59	鉢	口縁部	密で気泡が僅かに見られる。	— — —	透明度のある青緑色の釉が内外面共に厚く施される。	口縁部の外反が強く、クの字状となる。内面胴部は青海波文、外面胴部には剣先蓮弁文が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第13図 図版18 60	大鉢	口縁部	密で気泡が見られる。また、白色微粒子が混入する。	28.0 — —	青緑色の釉が内外面共に厚く施される。	外面口縁部直下に2条一組の圈線とその内部に唐草文が帶状に配される。胴部と内面胴部に牡丹唐草文が見られる。	繼世門 コーラル層
第13図 図版18 61		胴部	密で黒色微粒子が混入する。	— — —	透明度のある青緑色の釉が内外面共に施される。	外面には幅広の芭蕉文が、内面には唐草文が見られる。鉢か。	二階殿 表採及び 表土層
第13図 図版18 62	六角杯	口縁部	密で気泡が多く見られる。	— — —	青緑色の釉が内外面共に厚く施される。	口縁部が外反し、内面口縁直下に丸彫りの圈線が見られる。外面には角部を葉脈に見立てた鎬蓮弁文が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第13図 図版18 63	蓋置	底部	密	— — 4.9	淡い青緑色の釉が外面のみ薄く施される。	六もしくは八角形の蓋置の高台。器壁は薄く、高台はハの字状に開く。	二階殿 表採及び 表土層
第13図 図版18 64	大瓶	胴部	やや粗く、微小な気泡が見られる。	— — —	青緑色の釉が内外面共に薄く施される。	かなり大型の瓶の胴部で、立ち上がりはほぼ直である。剣先蓮弁文が密に配されている。	二階殿 表採及び 表土層
第13図 図版18 65	水注	把手	密で白色微粒子が混入する。	— — —	青緑色の釉が内外面共に施される。全面的に、2次的に火を受けている。	水注の把手か。本体部が隅丸方形頸部になると見られる。	大台所 黒土層
第14図 図版19 66	酒会壺	口縁部	密で黒色粒子が多く混入する。	21.2 — —	透明度のある青緑色の釉が内外面共に厚く施されている。口縁端部と口唇部のみ露胎となる。	胴上部に幅広の圈線が1条見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第14図 図版19 67			やや粗く、気泡が見られる。	— — 15.8	淡い青緑色の釉が内外面共に施されている。高台下部から畳付にかけて露胎となる。	外面に箆削りの細蓮弁文を密に配する。	二階殿 表採及び 表土層
第14図 図版19 68			密で大小の気泡が多く見られる。大粒の黒色粒子が僅かに混入する。	— — 18.4	青緑色の釉が外面は厚く、内面は薄く施されている。	外面に箆削りの細蓮弁文を密に配する。高台外面に粘土塊が溶着している。	二階殿 表採及び 表土層
第14図 図版19 69		底部	密で大小の気泡が多く見られる。白、黒色微粒子が混入する。	— — 18.0	透明度のある青緑色の釉が内外面共に厚く施されている。高台下部から畠付にかけて露胎となる。	外面胴部に鎬を2本有する蓮弁文を配する。また、外面高台下部に溶着した粘土塊を難に除去した釉割れが見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第14図 図版19 70			密で大小の気泡が多く見られる。白、黒色微粒子が混入する。	— — 19.8	青緑色の釉が内外面共に施されている。畠付は露胎となり、内底面は蛇の目状に釉剥ぎされる。	高台は低く、畠付の幅は広い。また、高台内の内割りは浅い。外面高台下部の釉垂れが著しく、高台内に多数の粘土塊が溶着する。施釉の処理並びに成形はかなり難である。	二階殿 栗石層

注 「—」:計測不可

第7表 青磁観察一覧（7）

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 底径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第14図 図版19 71	香炉	口縁部	密で大粒の褐色粒子が僅かに混入する。	14.8 — —	青緑色の釉が外面は厚く、内面は薄く施されている。	口縁部は鍔状となる。	繼世門 コーラル層
第14図 図版19 72			密	6.4 — —	淡い青緑色の釉が外面は厚く、内面は胴上部までは薄く施されている。	胴部は直に立ち上がり、口縁部がくの字状に内湾する。	二階殿 表採及び 表土層
第14図 図版19 73		胴部	密で黒色微粒子が混入する。	— — 9.4	淡い青緑色の釉が外面にのみ薄く施されている。	器壁は薄く、胴部がくの字状に内傾する。	二階殿 表採及び 表土層
第14図 図版19 74		底部	密で黒色微粒子が僅かに混入する。	— — 7.0	淡い青緑色の釉が内外面共に薄く施されている。畳付から外底面にかけて露胎となる。	高台は低く、高台内の内削りは浅い。筒形の香炉と考えられる。	二階殿 表採及び 表土層
第14図 図版19 75	天目台	底部	かなり密で白色粗粒子が混入する。気泡も僅かに見られる。	— — 5.4	青緑色の釉が内外面共に厚く施されている。高台下部から畳付にかけて露胎となる。	高台から受け部にかけて全体的に器壁が厚い。	二階殿 表採及び 表土層
第14図 図版19 76	器台	脚部	密で黒色粗粒子が混入する。	— — —	青緑色の釉が内外面共に厚く施されている。	器台の脚部か。器壁がかなり厚い。	二階殿 表採及び 表土層
第14図 図版19 77		底部	密で白、黒色粗粒子が混入する。気泡も僅かに見られる。	— — 17.9	青緑色の釉が内外面共に厚く施されている。外底面は露胎となる。	大型長頸瓶を載せる花盆台か。五葉文の透かしと思われる縁取り文様が見られる。	二階殿 瓦礫層
第14図 図版19 78		底部？	密で白、黒色粗粒子が混入する。	— — —	灰オリーブ色の釉が側面にのみ施される。	円形の孔が中央に開けられている。器の受けか。	繼世門 コーラル層
第15図 図版20 79	将駒棋の	-	密	— — —	全面露胎となる。	表裏面に駒銘が刻まれているが、破片資料のため判読不明。	繼世門 表採及び 表土層
第15図 図版20 80	器種 不明	胴部	密で白、黒色粗粒子が混入する。	— — —	明緑色の釉が内外面共に厚く施されている。	三足香炉の胴部か。2条の突線内に貼り付けの菊花文が見られる。	料理座 埋土
第15図 図版20 81		底部	密で黒色微粒子が多く混入する。	— — 9.8	透明度のある青緑色の釉が内外面共に厚く施される。	底部と脚部の接続部であると考えられる。内底面には文様が見られる。また、粘土塊が溶着している。	二階殿 表採及び 表土層
第15図 図版20 82		不明	粗く、白色粗粒子が多く混入する。気泡も見られる。	— — —	暗オリーブ色の釉が内外面共に薄く施されている。内面胴下部は露胎となる。	胴丸形の瓶、壺か。肥前系の陶器で丁子風呂の可能性がある。円形透かしの窓と思われる削りぬきがある。やや焼成不良である。	出土地 不明

注 「-」:計測不可

第8表 青磁碗出土状況

器種・部位 出土地	口～ 底部		口縁部					胴部				底部								（ 高台 底の部 のみ）	底部 (真底)	合計	
	蓮 弁 文	無 文	蓮 弁 文	雷 文	波 状 文	横 帶 文	有 文	無 文	蓮 弁 文	雷 文	有 文	無 文	蓮 弁 文	ス タ ン プ 文	印 花 文	蓮 弁 文 +	ス タ ン プ 文 +	蓮 弁 文 +	有 文	無 文			
出土地																							
二階殿	表採及び表土層	2	64	24		2	5	89	91	1	60	114	7	4	2		1	5	5	39	6	2	523
	埋土		1					1	3			2											7
	瓦礫層		1	1			1		4		2							1		4			14
	コーラル層		1						3		1	1								1			7
	黒土層		2	1				1	2			1								1			8
	赤褐色土層											2											2
	褐色土層		2	1					2			1								1			7
	上層											2											2
	下層		4	1				3	2		2	1		2						1			16
	磴道		1																				1
料理座	南トレンチ		5						4			3						1					13
	埋土	1	3	1			1		1			2									2		11
	コーラル層		1				1	1	3														6
大台所	石列		4						3			2						1					10
	表採及び表土層		6	1				3	3		4	5	1				1		1	1			26
	埋土							2	2		1												5
	瓦礫層		4	1			1	6	5		4	3	1						1				26
	コーラル層										1												1
	黒土層		7	2	1		10	16		5	17	1	1						6	1			67
	赤褐色土層		5					3		1	1						1		1				12
	下層																		1				1
	東西石列		3							2	1												6
	南トレンチ	1	14	3	1		6	5		2	3	1				1		1	1				39
継世門	南北トレンチ														1								1
	中央トレンチ							2				3								1			6
	表採及び表土層		6	3			5	6	18		7	20	2				3		1	9	3		83
	埋土		5	1		1	1	8	14		7	17	1	2			1		6	3	1		68
	瓦礫層										1												1
	コーラル層		18	6			12	13		4	18		3	1	1		1	2					79
	黒土層							1	2		1	4						1	1				10
	褐色土層		2					1															3
	東西石列		3	2			3	3		4	3	1	1			1		1					22
	建物1		1				1	2			3												7
	磴道									1	1							1					3
	南トレンチ		1																				1
	テストピット		1							1	1		1						1				5
出土地不明				1			5	3		1								1					11
合 計	1	3	165	49	2	3	15	161	207	1	109	233	15	14	5	1	9	9	12	78	15	3	1,110

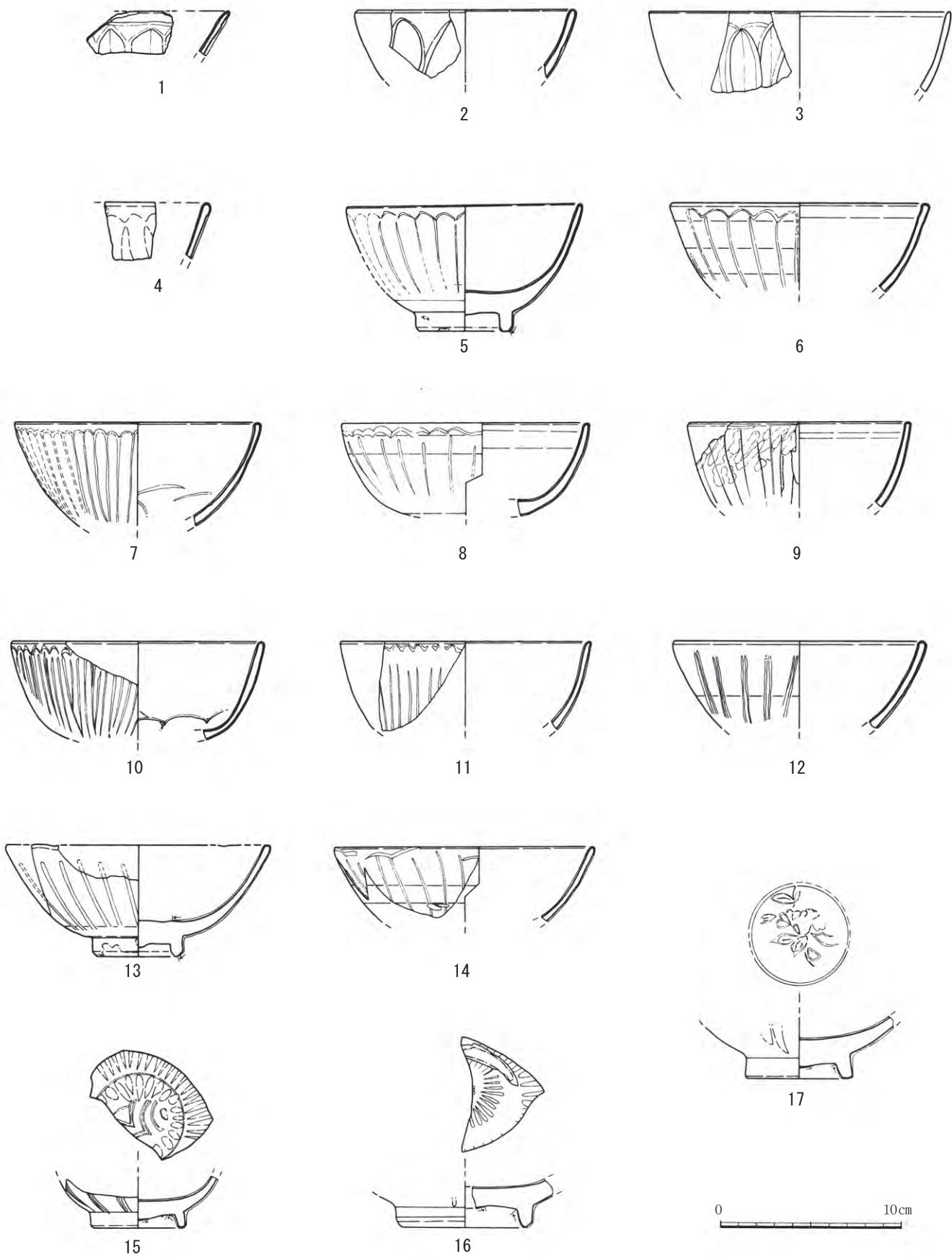
第9表 青磁皿・碗or皿・小碗出土状況

第10表 青磁盤・鉢・大鉢出土状況

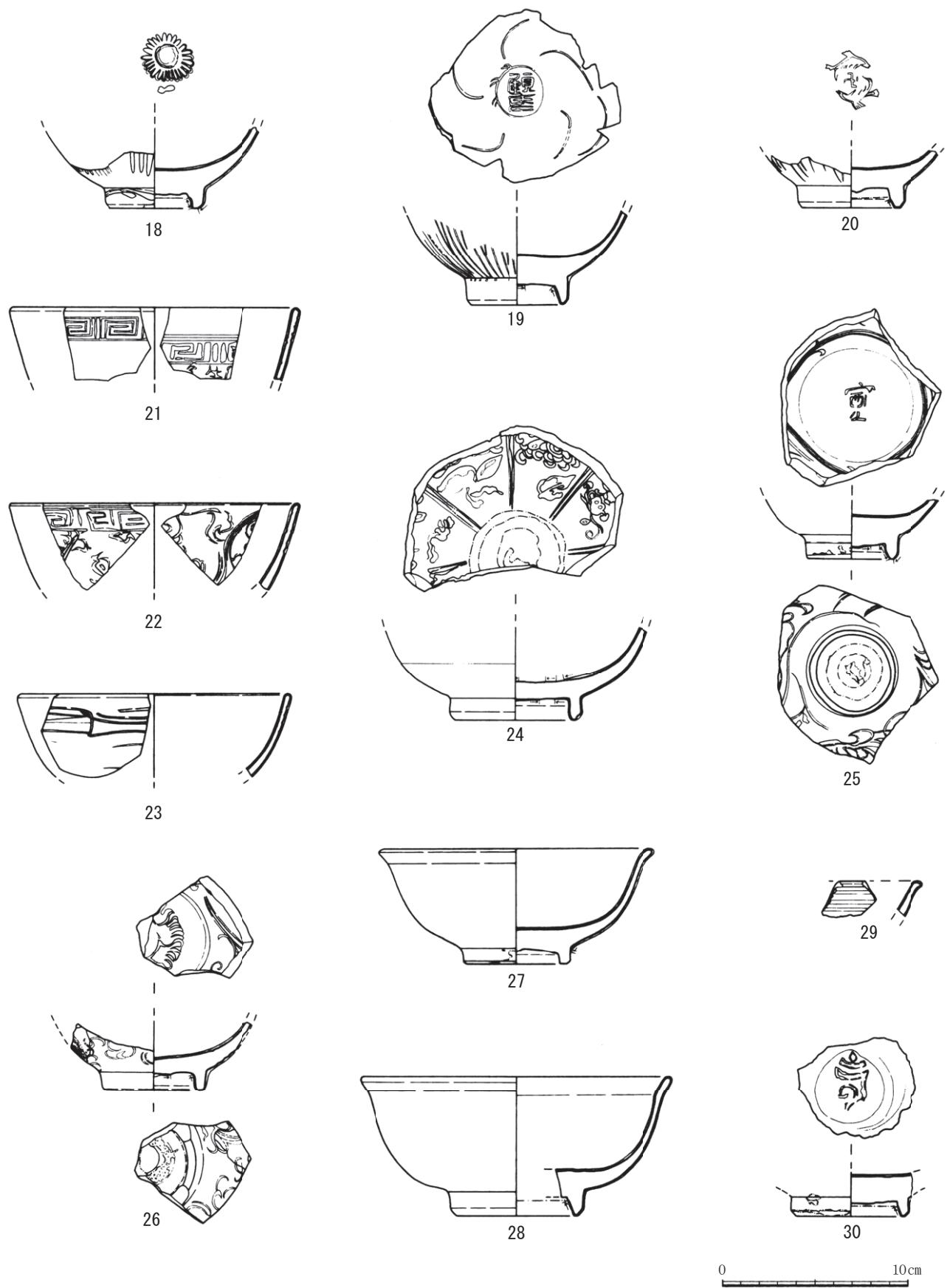
部位・分類	盤																鉢			大鉢			合計
	口～底部		口縁部				胴部				底部						口縁部	口縁部	胴部				
	蓮弁文	蓮弁文	唐草文	稜花	有文	無文	蓮弁文+有文	蓮弁文	有文	無文	蓮弁文	ラマ敷蓮弁文	蓮弁文+有文	双魚文	スタンプ文	有文	無文	蓮弁文	唐草文	芭蕉文+			
出土地																							
二階殿	表採及び表土層	2	18		9	6	16	18	4	4	12	2		4	1	1		9	1		1	108	
	埋土							1														1	
	瓦礫層				1			1						3				2				7	
	下層					1								1								2	
料理座	埋土									1												1	
	コーラル層							1	1													2	
	石列				1																	1	
大台所	表採及び表土層					2												1				3	
	埋土													2								2	
	瓦礫層			1	1	2		1										1				6	
	コーラル層					1												1				2	
	黒土層		5	2		2	1	1	2	1				2				4				20	
	赤褐色土層			1				1	1													3	
	褐色土層					1					1							1				3	
	東西石列						1															1	
	南トレンチ		2		2			1						1				1				7	
	中央トレンチ							1														1	
縦世門	表採及び表土層		5		3	1	6	4	1	1	2			2				3				28	
	埋土		2		2		3	1		2			1	1								12	
	コーラル層			1	2		2	6		1	1		1				2		1			17	
	黒土層										2											2	
	東西石列				4		1															5	
	磴道							1														1	
	南トレンチ		1		1																	2	
	テストピット						1		1					1				1				4	
合 計		2	33	1	27	11	37	35	12	11	19	3	1	18	1	2	1	23	2	1	1	241	

第11表 青磁酒會壺・壺・大碗or大鉢・瓶・大瓶・大瓶or酒會壺・壺or瓶・壺or瓶・大花瓶or壺・小壺出土狀況

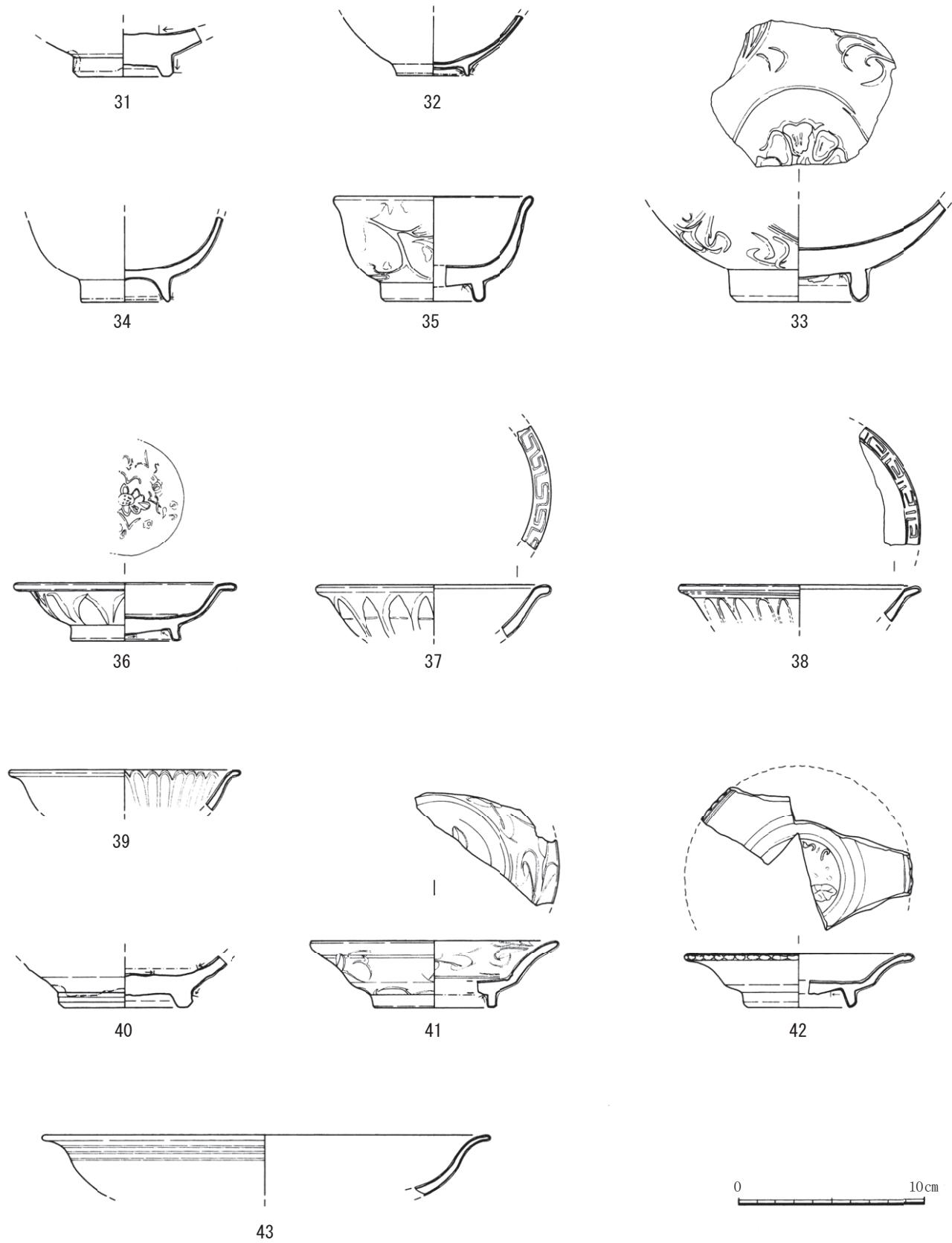
器種・部位・分類	酒会壺		大碗or大鉢		瓶		大瓶		酒会壺		大壺 or 瓶		大壺 or 瓶		小壺 or 花瓶		合 計		
	口 縁 部	胴 部	底部	蓋	胴 部	底部	口 縁 部	頸 部	胴 部	底部	胸 部	底部	胸 部	底部	胸 部	底部	口 縁 部		
出土土地	無文	蓮弁文	有文	真底	無文	蓮弁文	有文	無文	有文	無文	蓮弁文	有文	無文	蓮弁文	有文	蓮弁文	有文	1	
表採及び表土層	7	17	22	1	7	2	3	3	2	4	5	1	2	2	8	2	1	1	140
埋土																			1
二階殿	瓦礫層	1																	2
栗石層	コーラル層	1																	1
南トレンド	南トレンド	1																	1
料	埋土		2				1												3
理	コーラル層	1																	1
座	石列	1																	1
大台所	表採及び表土層	1																	5
下層	埋土	1																	3
東西石列	瓦礫層	1	2				2	1											10
南トレンド	黒土層	1	4	1			1	1											20
表採及び表土層	下層																		1
理土	東西石列																		3
コーラル層	南トレンド	1																	4
建物1	表採及び表土層	2	7	2	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	4	34	
壁道	理土	1	1	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	21	
世	コーラル層	1																	7
門	黒土層																		1
総	建物1																		1
テ	壁道																		2
ストビット	南トレンド																		1
合計	合計	11	25	42	1	11	3	8	6	2	5	14	5	3	1	1	3	19	



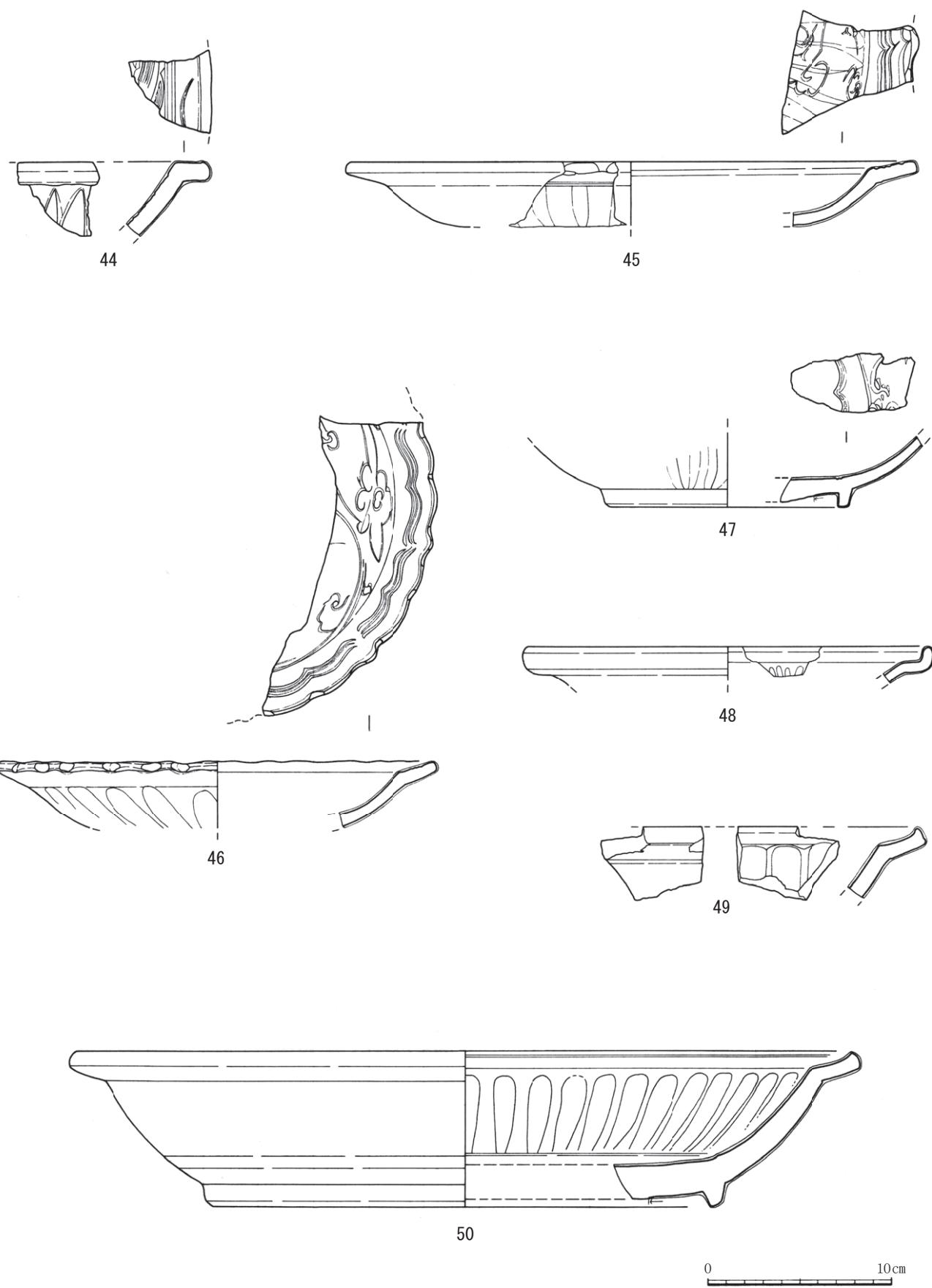
第8図 青磁（1）碗



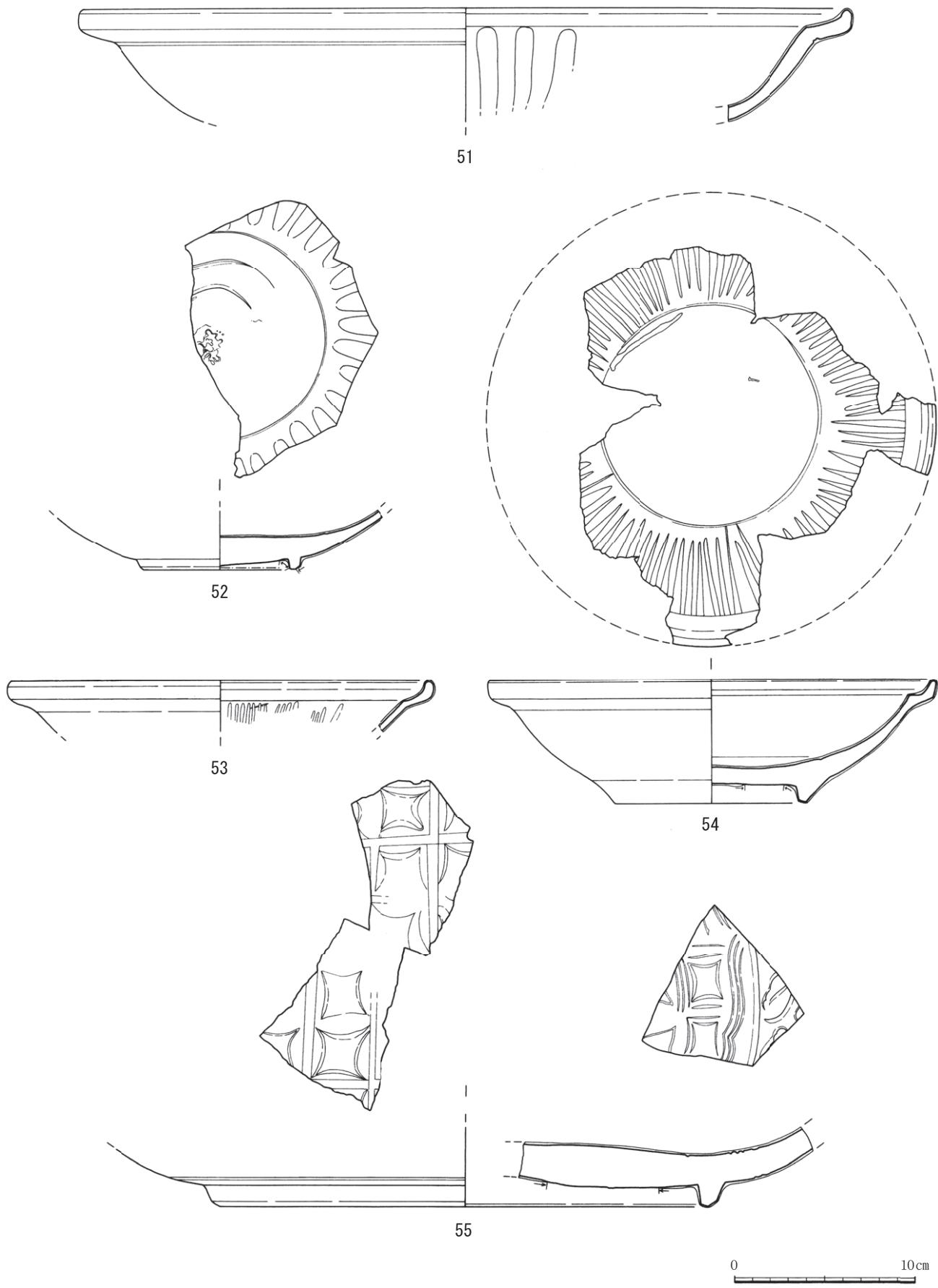
第9図 青磁（2）碗



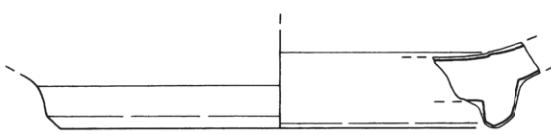
第10図 青磁（3）碗・皿



第11図 青磁（4）盤



第12図 青磁（5）盤



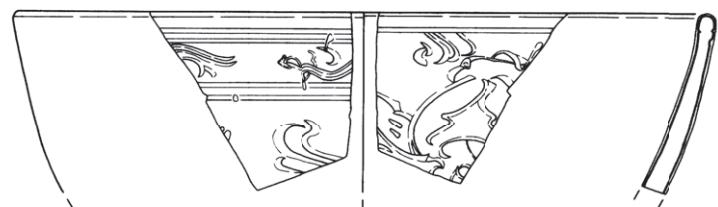
56



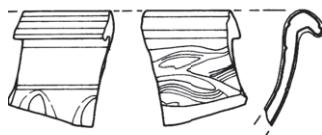
57



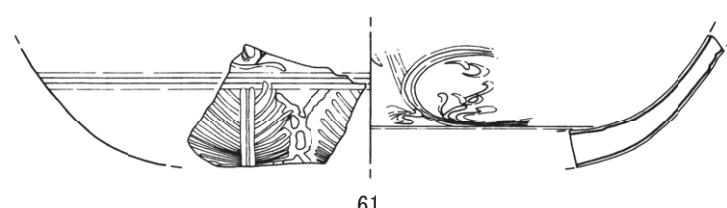
58



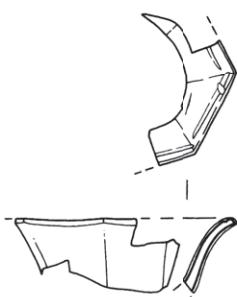
60



59



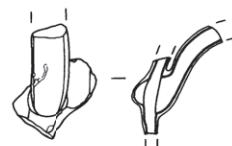
61



62



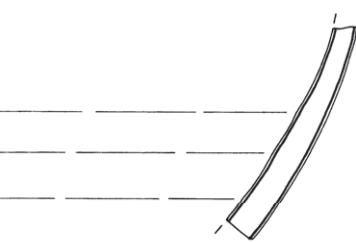
63



65

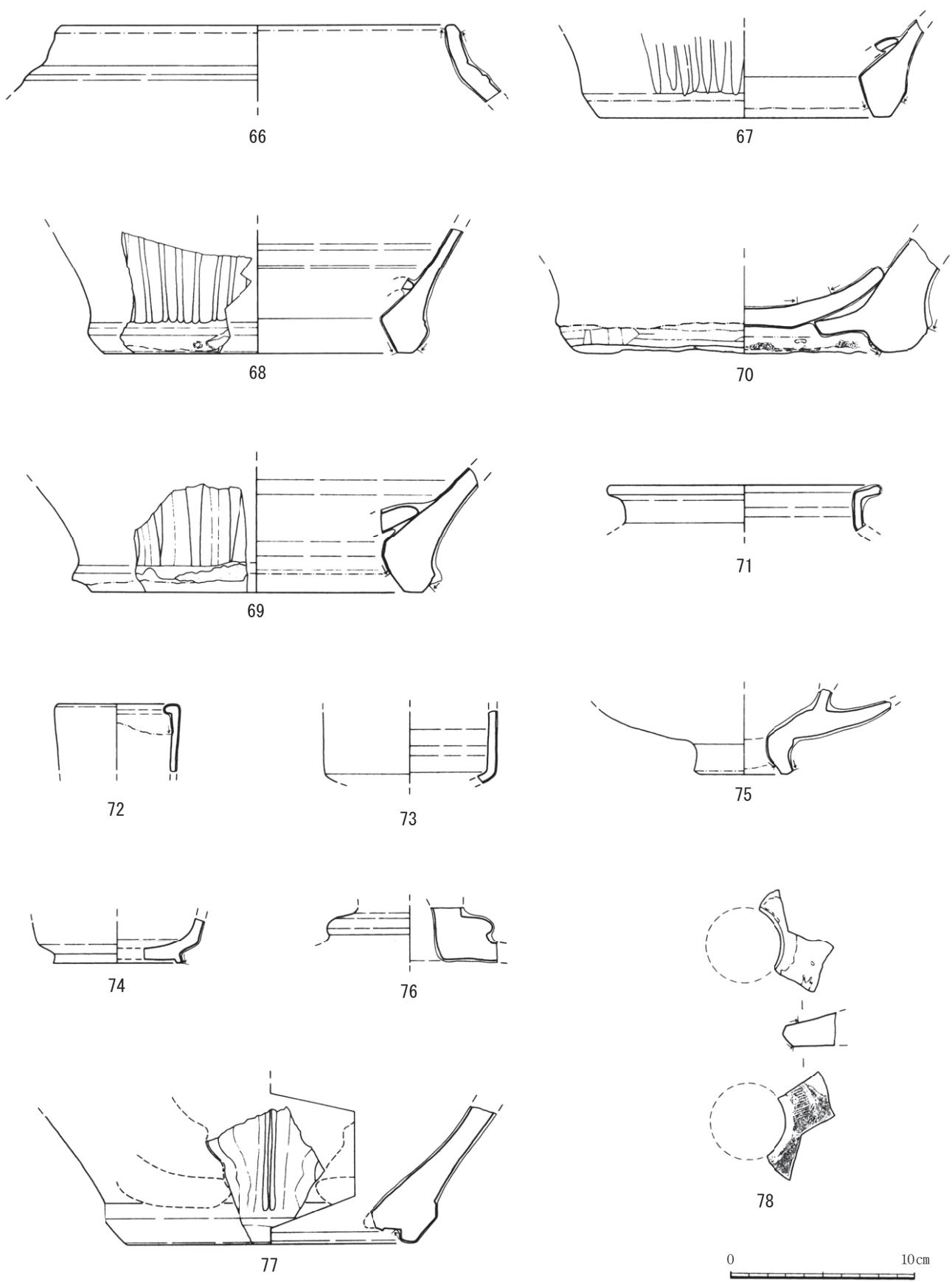


64

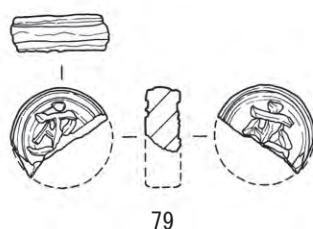


0 10cm

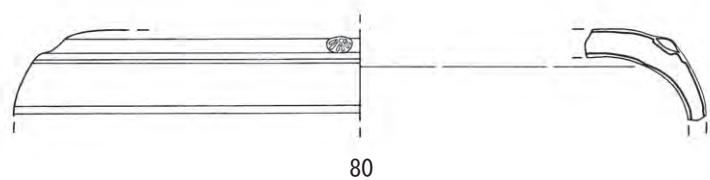
第13図 青磁（6）盤・鉢



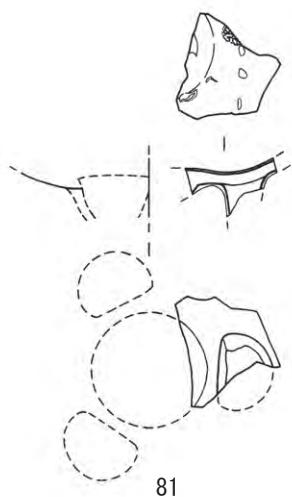
第14図 青磁（7）瓶・水注・酒会壺・香炉・器台



79



80



81



82

0 10 cm

第15図 青磁 (8) 駒・器種不明

第12表 青磁小碗or杯・杯・六角杯・八角杯・馬上杯・器台・茶托・合子・香炉・水注・袋物・器種不明出土状況

器種・部位 出土地	小碗 or杯	杯		六角 杯	八角 杯	馬上 杯	器台		茶托	(合 身 子)	香炉			天目台	水注	袋物	蓋置	器種不明				合計				
		口 縁部	口 縁部	胴 部	口 縁部	口 縁部			口 縁部	口 縁部	口 縁部	胴 部	底 部	底 部	把手	胴 部	底 部	将棋の駒	部位 不明							
		有 文	菊 花 文	蓮 弁 文	鎬 蓮 弁 文	無 文	無 文	有 文	無 文	不 明	蓮 弁 文	無 文	無 文	無 文	無 文	無 文	無 文	蓋	有 文	無 文	有 文	無 文				
二階殿	表採及び 表土層	1	1	2	1	1	1	3		1	1	1	3	2	2	1		1	1	1	2	1	4	4	36	
	瓦礫層								1														1	2		
	南トレンチ												1											1		
料理座	埋土																	1						1		
大台所	瓦礫層																					1		1		
	黒土層							1								1							1	3		
継世門	表採及び 表土層														1			1						2		
	コーラル層							1					1										2	4		
出土地不明																							1	1		
合 計		1	1	2	1	1	1	5	1	1	1	1	5	2	3	1	1	1	1	2	2	1	2	4	9	51

第2節 白磁

出土点数は335点で、器種は碗、皿が多い。最も古い資料ではビロースクタイプの碗が1点見られ、輪花鉢や鳥の餌入れといった希少な資料も見られる。大型製品に類する資料はあまり得られておらず、皿や杯といった小型製品には型作りのものが見られる。また、これまでの当該遺跡では出土事例が少ない安平壺の口縁部と肩部が得られている。雑な成形の資料が多く見られることから、日用品として使用されたことが窺える。

第13表 白磁観察一覧（1）

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種分類	部位	素地	口径 器高 底径	施釉	器形・文様などの特徴	出土地
第16図 図版21 1	碗	口縁部	灰白色の微粒子で密	17.6 — —	内面から外面口縁下部まで施釉される。	薄手の外反碗で線彫りによる渦文が連続して外面胴部に見られる。	大台所 黒土層
第16図 図版21 2		口縁部～底部	灰白色の微粒子で密。白・黒色素粒子が多く混入する。気泡が見られる。	16.6 5.9 6.0	外面胴下部から内底面にかけて露胎となる。	口縁部が外反するビロースクタイプで内底面には圈線内に草花文が線彫りで描かれている。外面胴部には2条一組の界線が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第16図 図版21 3		口縁部	白色の微粒子で密。	13.4 (6.3) —	内外面共に薄く施釉される。	薄手の小振りな直口口縁碗で外面口縁下部に圈線が一条見られる。	繼世門 埋土
第16図 図版21 4		口縁部～底部	灰白色の微粒子で密。気泡が見られる。	12.6 4.9 7.1	透明度のある灰白色的釉が外面胴部から内面胴部にかけて施される。	浅めの直口口縁碗。口唇部は尖り、高台は低く、断面は逆台形状となる。外面口縁下部に不明瞭であるが吳須による圈線が見られる。また、内底面には輪状の窯道具を切り取った痕跡が見られる。	二階殿 瓦礫層
第16図 図版21 5		底部	淡黄色のやや粗い粒子で気泡が多く見られる。	— — 6.4	透明度のある明緑灰色の釉が内面と外面高台途中まで施される。	低い高台で造りが粗い。外面の釉垂れが著しく、一部が畳付まで垂れる。器表面には微細な孔が多数見られる。	大台所 瓦礫層
第16図 図版21 6	筒型碗	底部	灰白色の微粒子で密。気泡が僅かに見られる。	— — 4.9	全体的に薄く釉が施される。高台下部から畠付にかけて露胎となる。	高台はやや高く、薄手となる。腰部の立ち上がりが急で、体部の器壁は厚い。	大台所 南トレンチ
第16図 図版21 7	小碗	口縁部	白色の微粒子で密。	8.9 — —	内外面共に薄く施釉される。	小碗で、全体的に薄手である。口縁部が緩やかに外反し、口唇部は尖る。	二階殿 表採及び 表土層
第16図 図版21 8		底部	白色の微粒子で密。	— — 4.6	内外面共に薄く施釉され、高台下部から畠付にかけて露胎となる。	薄手の小碗で、高台は低い。外面胴部にはスタンプによる陽刻の花文が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第16図 図版21 9	杯	口縁部	白色の微粒子で密。	6.0 — —	内外面共に薄く施釉される。	口唇部が尖る外反口縁で、外面に陽刻の葉文が見られる。かなり器壁が薄い。	二階殿 表採及び 表土層
第16図 図版21 10		口縁部	白色の微粒子で密。	— — —	内外面共に薄く施釉される。	口唇部が尖る外反口縁で、外面に陽刻の葉文が見られる。かなり器壁が薄い。	二階殿 表採及び 表土層
第16図 図版21 11		口縁部～底部	灰白色の微粒子で密。	3.6 1.8 1.6	内面と外面は胴下部まで薄く施釉される。	型造りの小杯で、口縁部が僅かに肥厚する。	大台所 東西石列
第16図 図版21 12		口縁部	灰白色の微粒子で密。	19.8 — —	内外面共に薄く施釉される。	薄手の外反皿。器表には微細な孔が多数見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第16図 図版21 13		口縁部～底部	白色の微粒子で密。	12.7 3.1 6.7	内外面共に薄く施釉される。高台下部から畠付にかけて露胎となる。	薄手の外反皿で高台は低く、内傾する。口縁端部は水平になり、鍔状を呈する。	二階殿 南トレンチ

注 「—」:計測不可、():推定

第14表 白磁観察一覧（2）

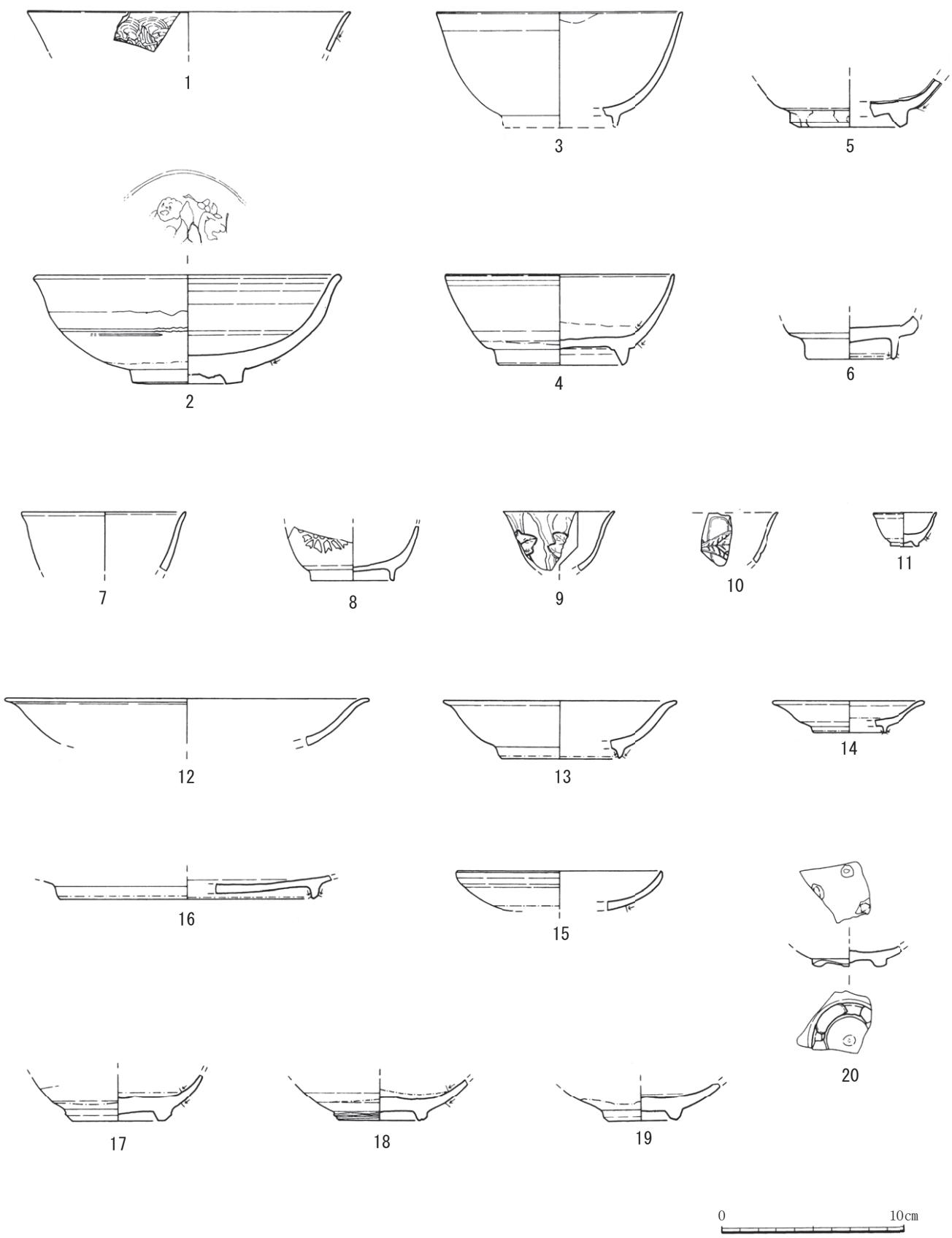
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 底径	施釉	器形・文様などの特徴	出土地
第16図 図版21 14	皿	口縁部～ 底部	白色の微粒子で 密。気泡が僅かに 見られる。	8.3 1.75 3.9	内外面共に薄く施釉 される。高台下部か ら畳付にかけて露胎 となる。また、内底面 は円状に釉が搔き取 られる。	小型の腰折れ皿。外面腰部の稜 線は不明瞭である。	二階殿 瓦礫層
第16図 図版21 15		口縁部	白色のやや粗い粒 子で密。	11.3 — —	内外面共に薄く施釉 される。外面胴下部 が露胎となる。	薄手の内湾皿。口唇部は僅かに 平坦に仕上げている。	繼世門 表採及び 表土層
第16図 図版21 16		底部	白色の微粒子で 密。黒色粗粒子が 僅かに見られる。気 泡が見られる。	— — 13.8	内外面共に薄く施釉 される。高台下部か ら畳付にかけて露胎 となる。	薄手の外反皿か。高台は低く、内 傾する。器表には面には微細な孔 が多数見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第16図 図版21 17			灰白色のやや粗い 粒子で、密。	— — 5.8	透明度のある釉が外 面胴部に薄く施され る。	高台は低く高台外面に段を有す る。また高台から外底面にかけて の成形は粗い。胴下部は膨らみを 有する。染付碗の可能性もある。	二階殿 表採及び 表土層
第16図 図版21 18			白色の微粒子で 密。黒色微粒子が 多く混入する。	— — 5.2	透明度のある釉が外 面胴部に薄く施され る。	高台は低く、内割りは浅い。また、 成形はかなり粗い。	二階殿 表採及び 表土層
第16図 図版21 19			白色の微粒子で 密。黒色粗粒子が 混入する。	— — 4.3	外面胴部に薄く施さ れる。外面胴下部か ら外底面にかけて露 胎となる。	高台は低く、内割りは浅い。	繼世門 コーラル層
第16図 図版21 20			灰白色のやや粗い 粒子で密。	— — 4.0	透明度のある釉が内 面のみに薄く施され る。	高台には抉りが見られる。成形は 粗く、畠付は水平に切られていな い。直口皿か。	繼世門 東西石列
第16図 図版21 21	鉢	口縁部～ 底部	白色の微粒子で 密。	14.0 5.2 6.8	透明度のある釉が全 体的に薄く施される。 高台下部のみ露胎と なる。	型作りの輪花皿。直口口縁で口唇 部は尖る。また、内底部と胴部との 接続部をラマ式蓮弁の弁花状に 成形している。	二階殿 瓦礫層
第16図 図版21 22		底部	白色の微粒子で 密。	— — 5.2	全体的に薄く施され る。畠付のみ露胎と なる。	型作りで、内外面の胴部には陽刻 の菊花文が見られる。	二階殿 黒土層
第16図 図版21 23	小 鉢	底部	灰白色のやや粗い 粒子で密。気泡が 水化に見られる。	— — 5.8	全体的に薄く施され るが、斑がある。底部 は露胎となる。	ベタ底で外面胴下部に圈線が一 条見られる。内底面には粘土塊が 多数、付着している。	出土地 不明
第16図 図版21 24	壺 ?	胴部	灰白色の微粒子で 密。黒色粗粒子が 混入する。気泡が僅 かに見られる。	— — —	透明度のある釉が全 体的に薄く施される。 一部、釉が施されて いない部分も見られ る。	安平壺の肩部か。胴部には胴上 部と胴下部の接着痕が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第16図 図版21 25	壺	口縁部	灰白色の微粒子で 密。黒色粗粒子が 混入する。気泡が僅 かに見られる。	8.0 — —	全体的に薄く施され る。口唇部から内面 口縁部直下は露胎 になるが、施釉が難 になる。	薄手の小型の壺。肩部に稜線が 見られる。	繼世門 埋土
第16図 図版21 26	鳥 入れ 餅	口縁部	白色の微粒子で 密。	4.4 — —	透明度のある釉が全 体的に薄く施される。	口縁部は直口となり、肩部と胴部と の間に接着痕が見られる。また、 把手が肩部に付く。	繼世門 コーラル層
第16図 図版21 27	壺	口縁部	灰白色の微粒子で 密。白色粗粒子が 多く混入する。	6.2 — —	透明度のある釉が外 面のみ施されてい る。	安平壺の口縁部。内面の成形は 粗く、器表面の凹凸が著しい。口 唇部の成形処理は不十分である。	二階殿 表採及び 表土層

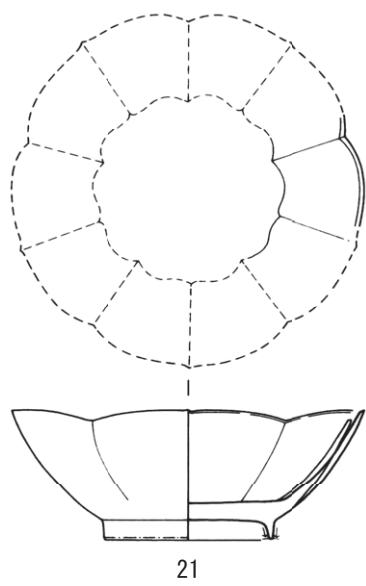
注 「-」:計測不可、():推定

第15表 白磁出土状況

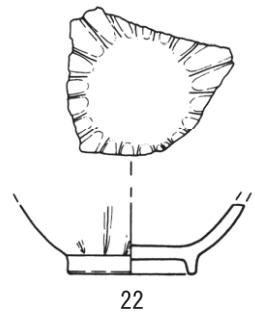
器種・部位	碗				小碗		筒型碗		皿				瓶				鉢		小鉢		壺		壺?		瓶 or 壺		杯		安平壺		蓋		袋物		鳥の餌入れ		器種不明	合計
	口 縁 部 （ 龍 文 脇 部 あり ）	口 縁 部 （ 脇 部 あり ）	脇 部	底 部	口 縁 部	脇 部	底 部	底 部	口 縁 部 （ 脇 部 あり ）	口 縁 部	脇 部	底 部	口 縁 部	頸 部	脇 部	底 部	口 縁 部 （ 脇 部 あり ）	底 部	口 縁 部	頸 部	脇 部	底 部	口 縁 部 （ 脇 部 あり ）	底 部	口 縁 部	頸 部	脇 部	底 部	口 縁 部 （ 脇 部 あり ）	底 部	口 縁 部	脇 部	底 部	口 縁 部	脇 部	底 部		
出土地																																						
一 階 段	表採及び 表土層	2	33	27		10	15	1	17		17	16	25	1	1	6	1			1	2	2	1	1	3		2	1	6	2	4	7	204					
	瓦礫層	1	1	3			1			1		1								1															10			
	コーラル層		1	2																																3		
	黒土層			2									1	1							1														7			
	褐色土層												1																							1		
	下層			1																2																1		
	磴道																																				2	
料理 座	南トレンチ			1						1	3		1																						6			
	埋土				1				1																											2		
大 台 所	コーラル層												1																							1		
	表採及び 表土層		1	2			1			1																									5			
	埋土												1																							1		
	瓦礫層		1	1		1							1		2																				1			
	コーラル層												1		1																					2		
	黒土層		3	2	1		1			3	1			1																				3				
	赤褐色 土層		2		1								1																						4			
	褐色土層			1																																1		
	下層			1																																1		
	東西石列				1																															2		
	南トレンチ		1	1					1	1	1		1																					6				
	中央 トレンチ					1																														1		
	出土地不明		2	1																																2		
合 計	3	54	50	1	16	18	5	19	1	3	31	24	43	2	2	8	1	1	1	1	3	2	2	1	1	3	1	1	3	1	8	2	6	1	16	335		



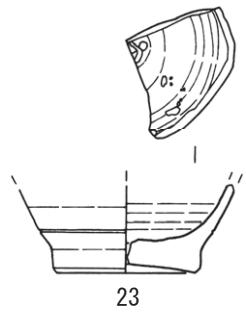
第16図 白磁（1）碗・小碗・杯・皿



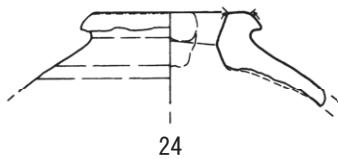
21



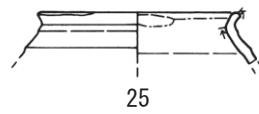
22



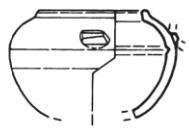
23



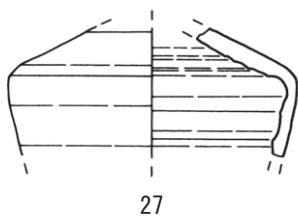
24



25



26



27



第17図 白磁（2）鉢・小鉢・杯・瓶・壺

第3節 染付

出土した中国産陶磁器の中でも青磁に次いで多く出土している。器種は碗と皿が多く、杯、鉢や瓶も見られる。碗と皿は呉須の発色が鈍く、施釉も雑な粗製品が多数あることから、日用雑器として使用されたことが窺える。また、僅少であるが香炉、酒会壺、香炉などの製品も見られる。ほとんどの資料が明～清代にかけての染付であるが、壺や蓋など7点が元様式の染付に比定することができる。また、生産地の大半は景德鎮や徳化、福建沿岸部であると考えられる。

第16表 染付観察一覧（1）

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第18図 図版23 1	碗	口 縁 部	密で大小の 気泡が多く 見られる。	19.0 — —	外反碗で外面には胴部に菊？唐花文 が内面は口縁部直下に四方櫛文が見 られる。	透明釉が内外面共に施され る。また、口唇部のみが露胎と なる。	二階殿 表採及び 表土層
第18図 図版23 2			密で白色微 粒子が混入 する。	11.8 — —	大きく開く外反口縁で、外面には草文 が、内面には2条の界線内に、梵字文 か略化した雷文を横位に連続させる。	透明釉が内外面共に薄く施さ れる。	繼世門 表採及び 表土層
第18図 図版23 3			密	17.4 — —	口縁端部が僅かに肥厚する外反碗 で、外面胴部に菊唐草文が、内面口 縁部直下には波濤帶文が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施さ れる。2次的に火を受けている ため、全体的にくすみが見ら れ、器表面はざらつく。	二階殿 表採及び 表土層
第18図 図版23 4			密で大小の 気泡が多く 見られる。	17.0 — —	口縁部が直口し、外面胴部に宝相華 唐草文と外面口縁部直下に波濤帶 文、内面胴部には蓮唐草文と内面口 縁部直下に四方櫛文が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施さ れる。	大台所 南トレンチ
第18図 図版23 5			密で気泡が 見られる。黒 色粗粒子が 僅かに混入 する。	11.8 — —	口縁部が直口するかなり薄手の碗。外 面には白抜きの牡丹唐草文が見られ る。背景は呉須でベタ塗りされる。内面 口縁部直下には2条の圈線が見られ る。	透明釉が内外面共に薄く施さ れる。	大台所 南トレンチ
第18図 図版23 6		碗	やや粗く、黒 色粗粒子が 混入する。	14.6 — —	外面胴部には竜文と瑞雲、内面口縁 部直下には雷文帶が見られる。また、 内面胴下部には圈線が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施さ れる。	大台所 南トレンチ
第18図 図版23 7			やや粗く、黒 色粗粒子が 混入する。	12.0 — —	外面胴部にかなり略化した草花文と外 面口縁下部に2条の圈線が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施さ れる。2次的に火を受けている ため、全体的にくすみが見ら れ、器表面はざらつく。	二階殿 表採及び 表土層
第18図 図版23 8	底 部	密で黒色微 粒子が多く 混入する。	— — 5.9	内底面に瑞雲と団龍文が、外底面に 「大明成化年製」の銘が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施さ れる。疊付には離れ砂が溶着 する。	大台所 南トレンチ	
第18図 図版23 9			やや粗く、 黒、褐色粗 粒子が混入 する。気泡も 見られる。	— — 5.1	外面胴下部に芭蕉文と内底面に菊花 文が見られる。内底面は蓮子状とな る。	透明釉が内外面共に薄く施さ れ、疊付が露胎となる。外底面 の釉が一部露胎となる。	二階殿 南トレンチ
第18図 図版23 10		口 縁 部	密で黒色微 粒子が僅か に混入する。	14.4 6.3 7.5	外反口縁碗。外面胴部に寿字文と半 花散らし文、胴下部には略化した蓮弁 文が見られる。内面は口縁下部に1 条、胴下部に2条健堅が見られる。	やや不透明の釉が内外面共 に薄く施される。高台下部から 疊付にかけて露胎となる。	二階殿 表採及び 表土層
第18図 図版23 11	口 縁 部 ～ 底 部	やや粗く、大 小の気泡が 見られる。	13.0 6.65 6.0	直口口縁碗。外面は胴部にアラベスク 文と口縁部に波濤帶文、内面は口縁 下部に2条の圈線と内底面は圈線内に 十字花文が見られる。	やや不透明の釉が内外面共 に薄く施される。高台下部から 疊付にかけて露胎となる。	大台所 南トレンチ	

注 「—」:計測不可

第17表 染付観察一覧（2）

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第18図 図版23 12	碗	口 縁 部 ・ 底 部	密で小さい 気泡が見ら れる。	13.6 6.3 6.4	直口口縁碗。外面は胴部にアラベスク文と口 縁部に波濤帶文、内面は口縁下部に太めの 圈線と内底面に花尽くし文か。胴部の立ち上 がりは直で腰部で大きく膨らみを有する。	やや不透明の釉が内外面共に薄く施され る。高台下部から畳付けにかけて露胎とな る。	大台所 南トレン チ
第18図 図版23 13			密で小さい 気泡が見ら れる。	— — 5.0	直口口縁碗の底部か。外面にアラベスク文と 内定面員は十字花文が見られる。	やや不透明の釉が内外面共に薄く施され る。高台下部から畳付にかけて露胎となる。 外底面の釉が一部露胎となる。	大台所 南トレン チ
第19図 図版24 14			やや粗く、 黒色粗粒子 が僅かに混 入する。	15.2 5.5 8.5	直口口縁碗で高台が低い。外面胴部に略化 した草花文とコンニャク印判文、鳳凰の丸文 が見られる。内面には口縁下部と幅広の圈 線が胴部と内底面の境に見られる。吳須が 滲み、文様が明瞭ではない。	透明釉が内外面共に薄く施される。内底面 は輪状に釉剥ぎされ、外面は高台部のみ 露胎となる。口唇部から外面胴部にかけて 粗砂が溶着している。	二階殿 表採及び 表土層
第19図 図版24 15			やや粗く、 小さい気泡 が見られ る。	12.6 4.65 6.4	高台が低く、逆三角形状の断面を呈する。外 面胴部に略化した草花文とコンニャク印判文 が見られる。内面には口縁下部と幅広の圈 線が胴部と内底面の境に見られる。吳須が 滲み、文様が明瞭ではない。	透明釉が内外面共に薄く施される。内底面 は輪状に釉剥ぎされ、外面は高台部のみ 露胎となる。	二階殿 表採及び 表土層
第19図 図版24 16			密で黒色微 粒子が混入 する。気泡 が見られ る。	12.5 4.55 6.6	小振りな直口口縁碗で、口縁端部は肥厚す る。高台は低い逆三角形状の断面を呈する。 外面胴部に略化した草花文が見られる。 内面には口縁下部と幅広の圈線が胴部と内 底面の境に見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。高台か ら畳付にかけて露胎となる。内底面は蛇の 目状に釉剥ぎされる。	二階殿 表採及び 表土層
第19図 図版24 17		口 縁 部	やや粗い。 大小の気泡 が多く見ら れる。	16.0 — —	小振りな直口口縁碗で、口縁端部は肥厚す る。外面胴部にコンニャク印判文、おそらく鳳 凰の丸文が見られる。内面には幅広の圈線が 口縁下部と胴部と内底面の境に見られる。 吳須が内底面に点状に付く。	やや不透明の釉が内外面共に薄く施され る。内面胴下部から露胎となる。施釉はか なり雑で、器表には微細な孔が多数見られ る。	出土地 不明
第19図 図版24 18			やや粗く軟 質。	14.6 — —	直口口縁碗で、外面には口縁部直下に2条 の圈線内に渦文を連続して配し、胴部にも 渦文が見られる。内面には幅広の圈線が口 縁下部に見られる。	やや不透明の釉が内外面共に薄く施され 、器表には微細な孔が多数見られる。口唇部 の釉が一部剥げている。	料理座 石列
第19図 図版24 19	小 碗	口 縁 部	密で黒色粗 粒子が僅か に混入す る。	9.8 — —	小振りな直口口縁碗で、全体的に器壁がか なり薄い。外面には草花文とその下部に蓮 弁文が見られ、内面口縁下部に2条の圈線 が見られる。胴部に突線がある。	透明釉が内外面共に薄く施される。	繼世門 埋土
第19図 図版24 20			密で気泡が 見られる。	8.0 — —	型作りの直口口縁碗。外面胴部に魚藻文 が、内面には2条一組の圈線が口縁下部と 胴下部にそれぞれ見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。	二階殿 表採及び 表土層
第19図 図版24 21			密	7.6 — —	口縁部が外反する小碗もしくは小杯か。外 面には胴部にアラベスク文と四割菱、胴下部 に蓮弁文が見られる。内面口縁下部に波濤 文帶が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。また、 口唇部には錆釉が細こされる。	二階殿 表採及び 表土層
第19図 図版24 22		底 部	かなり密	— — 3.6	高台が比較的高く、内底面は窪む。内底面 と外面胴部には菊唐草文と胴下部に蓮弁 文、外底面に圈線と印款が見られる。本土產 磁器(有田系)の可能性あり。	透明釉が内外面共に薄く施される。畳付と 高台内面下部は露胎となる。	二階殿 表採及び 表土層
第19図 図版24 23			密で褐色の 粗粒子が僅 かに見られ る。	— — 3.6	外底面には草文、外底面には圈線内に字款 が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。畳付と 高台内面下部は露胎となる。	二階殿 表採及び 表土層
第19図 図版24 24			密	— — 3.3	外面胴部には魚卵様の丸繋ぎ文と波状文、 外底面には圈線内に字款、内底面には県施 院内に魚文が見られる。	やや不透明の釉が内外面共に厚く施され る。畳付には離れ砂が付着する。	二階殿 表採及び 表土層
第19図 図版24 25	大 碗	口 縁 部	やや粗く、 軟質で黒色 粗粒子が混 入する。気 泡が多少見 られる。	23.2 — —	口縁部が外反する大ぶりの碗。外面にはコ ンニャク印判による花文と草文が交互に配さ れる。内面には口縁下部と幅広の圈線が見 られる。	やや不透明の釉が内外面共に厚く施され る。	二階殿 表採及び 表土層

注「—」:計測不可

第18表 染付観察一覧（3）

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第19図 図版24 26	大碗	底部	密で気泡が僅かに見られる。	— — 8.4	高台は内傾し、胴部は大きく膨らむ。外面胴部には蓮唐草文と胴下部にラマ式蓮弁文、内底面には圈線内に花尽し文か。	透明釉が内外面共に施される。高台下部から畳付にかけて露胎となる。	出土地 不明
第19図 図版24 27			密で大小の気泡が多く見られる。	— — 7.6	高台は内傾し、胴部は大きく膨らむ。外面胴部には牡丹唐草文と内底面には圈線内に草文が見られる。	透明釉が内外面共に施される。高台下部から畳付にかけて露胎となる。	大台所 黒土層
第20図 図版25 28	皿	口 縁 部 底部	やや粗く、軟質。	12.2 2.5~2.7 6.6	高台は内傾する外反口縁皿。外面胴部には略化した宝相華唐草文、内底面には玉取獅子文が見られる。	やや不透明の釉が内外面共に雜に施される。高台下部から畳付にかけて露胎となる。内底面には砂粒が付着する。また、内外面共に細かい貫入が明瞭に見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第20図 図版25 29			密で気泡が見られる。	12.0 2.65~2.85 6.6	高台は内傾する外反口縁皿。外面胴部には略化した花唐草文、内底面には圈線内に十字花文が見られる。	透明釉が内外面共に施される。高台下部から畳付にかけて露胎となる。外底面に多数の小孔が見られる。	出土地 不明
第20図 図版25 30			密で気泡が見られる。	9.0 2.3 4.6	高台は内傾する小振りな外反皿。外面胴部に宝相華唐草文、内底面には圈線内に十字花文が見られる。	透明釉が内外面共に雜に施される。高台下部から畳付にかけて露胎となる。	繼世門 埋土
第20図 図版25 31			密で気泡が見られる。	9.0 2.0 4.4	小振りな直口皿。底部は基筈底で底部は僅かに盛り上がる。外面胴下部に略化した蓮弁文と内底面には圈線内に捻子花文が見られる。	やや不透明の釉が内外面共に雜に施される。高台から外底面にかけて露胎となる。	大台所 南トレチ
第20図 図版25 32	皿	底部	密で黒色微粒子が多く見られる。	— — 6.0	大振りの皿。底部は低い高台となり、中央は盛り上がる。内底面には圈線内に「天啓」銘の字款が見られる。	透明釉が内外面共に施される。高台周辺に多数の砂粒が溶着する。全面的に、2次的に火を受けている。	二階殿 表採及び 表土層
第20図 図版25 33		口 底 縁 部 部 底部	密で黒色微粒子が混入する。	8.6 2.7 3.9	直口皿。高台は高く、外底面の内割りは浅い。外面には略化した草花文が見られる。	透明釉が内外面共に施される。内底面と高台下部から外底面にかけて露胎となる。外面には粗い貫入が明瞭に見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第20図 図版25 34		胴部	密で黒色粗粒子が混入する。	— — —	厚手の皿もしくは盤の胴部。内面には牡丹、外面には唐草文が見られる。	透明釉が内外面共に施される。全面的に、2次的に火を受けている。	繼世門 埋土
第20図 図版25 35	盤	底部	密で黒色粗粒子が混入する。	— — —	厚手の盤の底部。内底面には草文が見られる。	透明釉が内面に薄く施される。	繼世門 表採及び 表土層
第20図 図版25 36			密で黒色粗粒子が混入する。	— — —	厚手の盤の底部。内底面には草花文が見られる。	透明釉が内面に薄く施される。	二階殿 表採及び 表土層
第20図 図版25 37	(深 皿)	口 縁 部	やや粗く、黒色微粒子が多く混入する。	— — —	口縁部は外反し、鍔状となる八角鉢。外面には梅樹文、内面には口縁直下に市松様の文様が見られる。	透明釉が内面に薄く施される。全面的に、2次的に火を受けている。	二階殿 表採及び 表土層
第20図 図版25 38	鉢	底部	密で大粒の黒色粒子が僅かに混入する。	— — 10.0	腰部が大きく折れて、胴部は直に立ち上がる鉢。高台は低い。外面胴部に花弁状の文様と圈線が3条見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。高台下部から畳付けにかけて露胎となる。	二階殿 表採及び 表土層

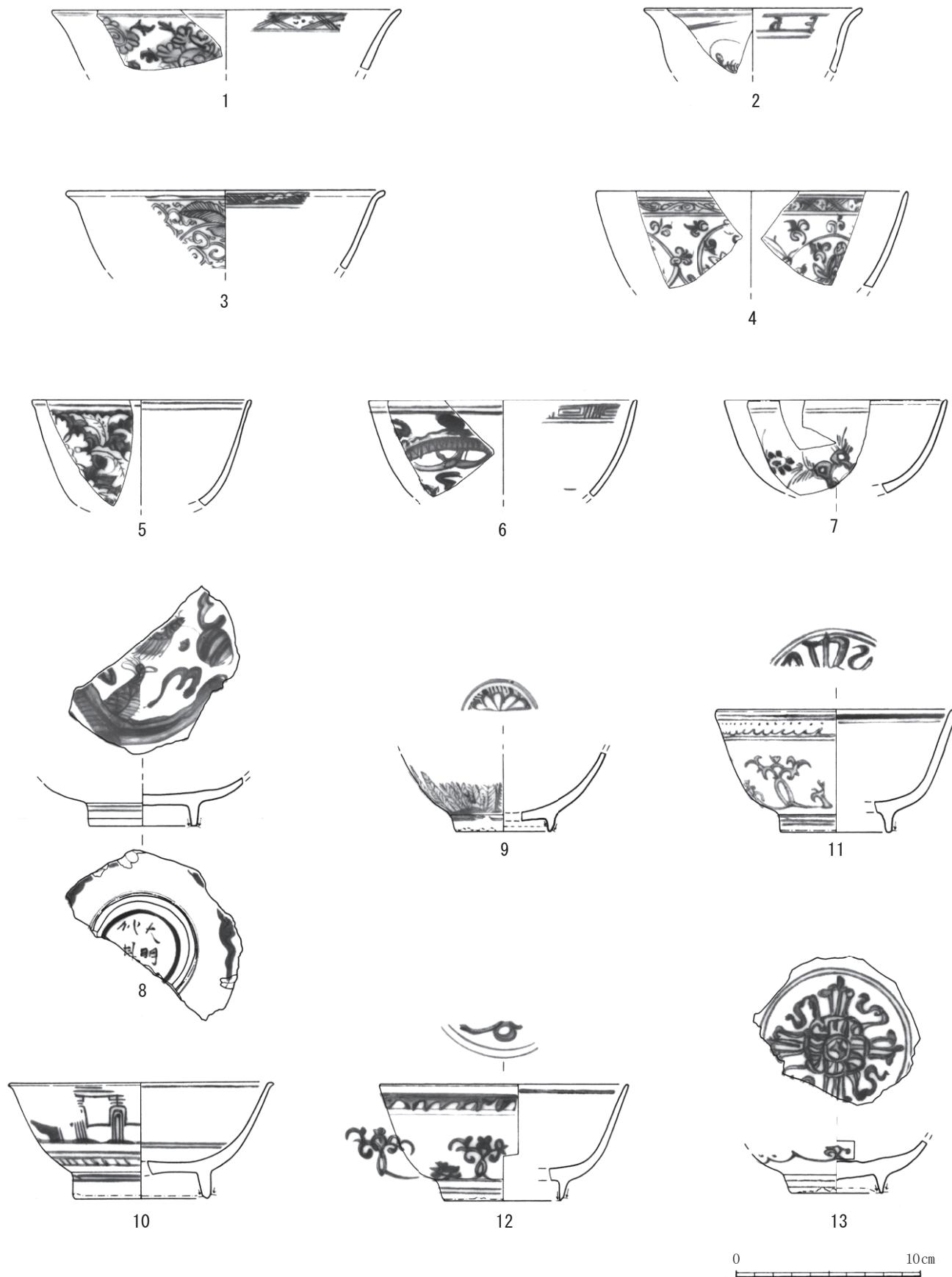
注 「—」:計測不可

第19表 染付観察一覧（4）

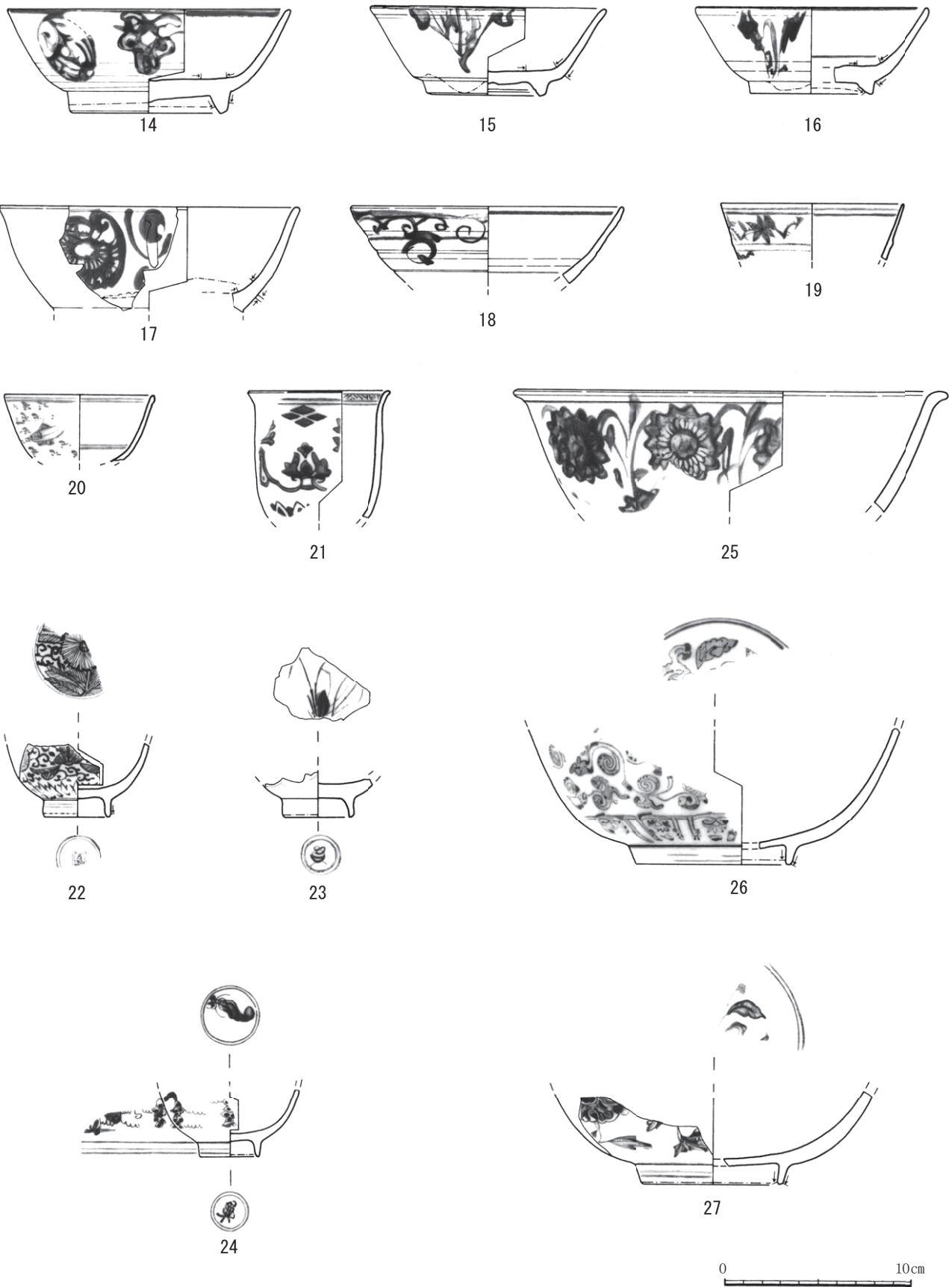
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第20図 図版25 39	瓶	口 縁 部	密で黒色微粒子 が混入する。	6.1 — —	口縁部は外反し、口縁端部が肥厚する。外面頸部には芭蕉葉文と口縁下部と幅広の圈線が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。	二階殿 表採及び 表土層
第20図 図版25 40		胴 部	密で、黒色微粒子 が混入する。	— — —	薄手の瓶胴部か。外面胴部に龍と瑞雲が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。内面は一部露胎となる。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 41	杯	口 底 縁 部 部	密	3.6 2.1 1.4	型作りの口縁部が外反する杯。外面胴部には豹柄文と外底面には銘款。	透明釉が内外面共に薄く施される。高台下部から畳付にかけて露胎となる。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 42	馬 上 杯	口 縁 部	粗い。白色微粒子 が多く混入する。	8.8 — —	口縁は直口する。外面胴部には文様が見られるが全体構成は不明。	透明釉が内外面共に薄く施される。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 43		底 部	密で黒色微粒子 が僅かに混入する。	— — 4.8	脚部から底部にかけての部位で、脚部内は中空となる。	外面の脚部から高台下部まで透明釉が薄く施される。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 44	酒 蓋 会 壺	脚	密で黒色微粒子 が多く混入する。	— — —	蓋の端部から掛かりにかけての部位。外面に華唐草文が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 45	壺	胴 部	密で黒色微粒子 が多くの混入する。 また、大小の気泡 が見られる。	— — —	胴上部か。外面には渦文、ラマ式蓮弁文、草文、瑞雲文が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 46			密で大小の気泡 が多く見られる。	— — —	器壁はかなり厚いことから大型の壺か。外面に文様が見られるが全体構成は不明。	透明釉が内外面共に薄く施される。外面は2次的に火を受けている。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 47	香 炉	底 部	粗く白、黒色粗粒子 が見られる。	— — —	内湾する脚付鉢。全体的に器壁が厚い。外面胴部には牡丹唐草文が見られる。脚部は獅子の顔を象っている。	胎の直上に白土を塗布しその上に透明釉が薄く施されている。胴下部から外底面と内底面は露胎となる。また内外面共に貫入が明瞭に見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 48	蓋	端 部	密	外径16.8 内径14.2	小型壺の蓋。全体的に器壁が薄く、掛かりも短い。外面には文様が見られるが全体構成は不明。	透明釉が内外面共に薄く施される。外面は掛けから鰐部にかけて露胎となる。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 49	器 種 不 明	胴 部	密	— — —	壺の胴部で器壁は厚い。外面には白抜きの草花文とラマ式蓮弁文が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。全体的に、2次的に火を受けている。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 50			密で気泡が見られる。	— — —	壺の胴部で器壁は厚い。外面には白抜きで鱗が描かれていることから龍文か魚文が描かれていると思われる。	透明釉が内外面共に薄く施される。外面は2次的に火を受けている。	二階殿 表採及び 表土層
第21図 図版26 51			密で黒色微粒子 が多くの混入する。	— — —	壺の胴部で外面には牡丹唐草文が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。	大台所 表採及び 表土層
第21図 図版26 52			密で黒色粒子が 多く混入する。	— — —	壺の胴部で外面には線描きの蓮池文が見られる。	透明釉が内外面共に薄く施される。全体的に、2次的に火を受けている。	二階殿 表採及び 表土層

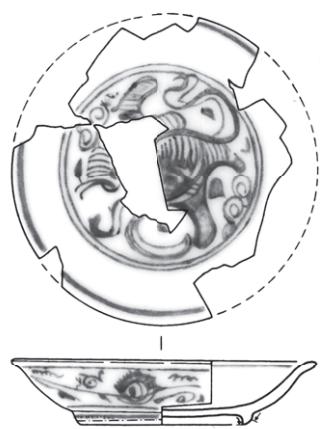
注「—」:計測不可



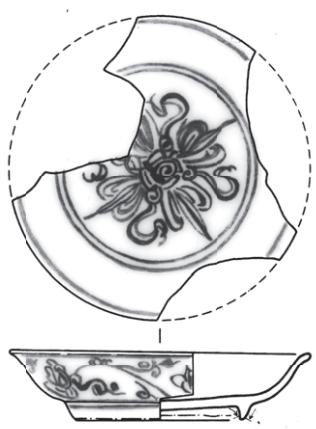
第18図 染付（1）碗



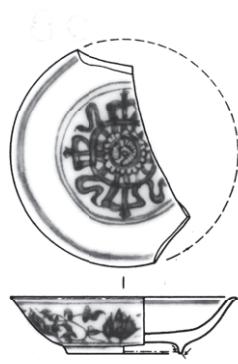
第19図 染付（2）碗



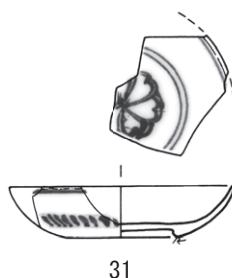
28



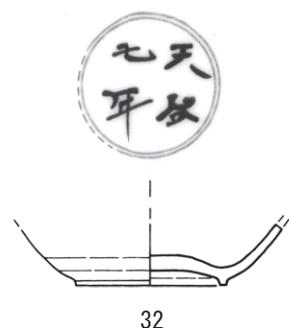
29



30



31



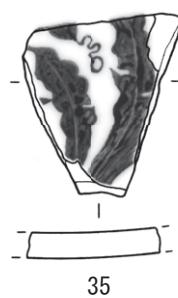
32



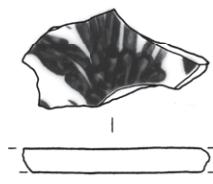
33



34



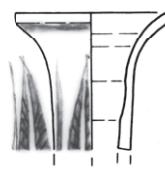
35



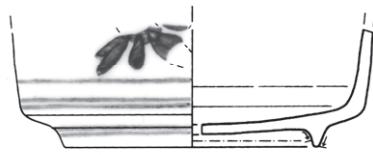
36



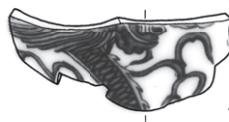
37



38



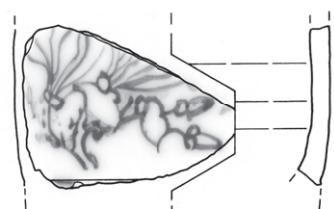
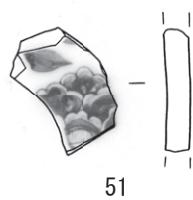
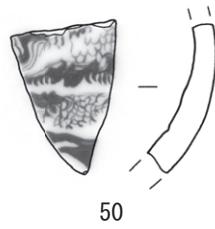
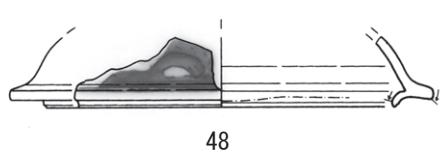
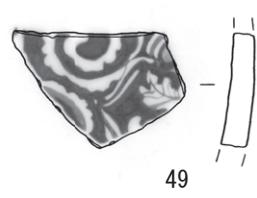
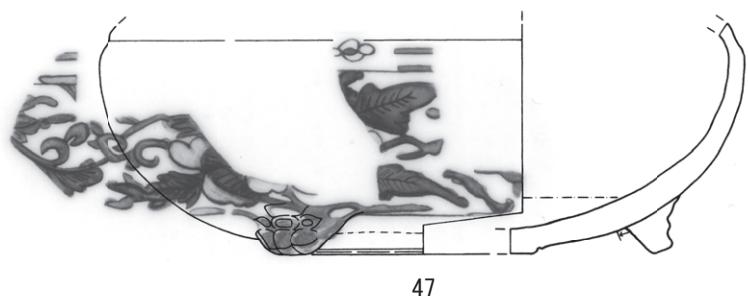
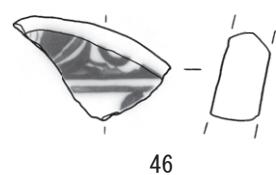
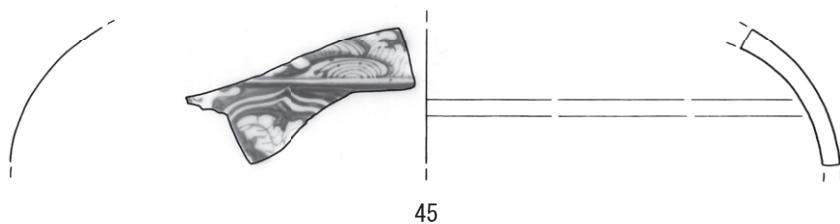
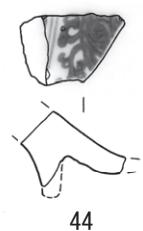
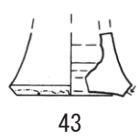
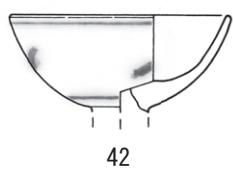
39



40



第20図 染付（3）皿・鉢・瓶



0 10 cm

第21図 染付(4)杯・壺・香炉

第4節 色絵

出土点数は13点で、器種は碗、皿が多い。最も古い資料ではビロースクタイプの碗が1点見られ、輪花鉢や鳥の餌入れといった希少な資料も見られる。大型製品に類する資料はあまり得られておらず、皿や杯といった小型製品には型作りのものが見られる。また、これまでの当該遺跡では出土事例が少ない安平壺の口縁部と肩部が得られている。雑な成形の資料が多く見られることから、日用品として使用されたことが窺える。

第20表 色絵観察一覧

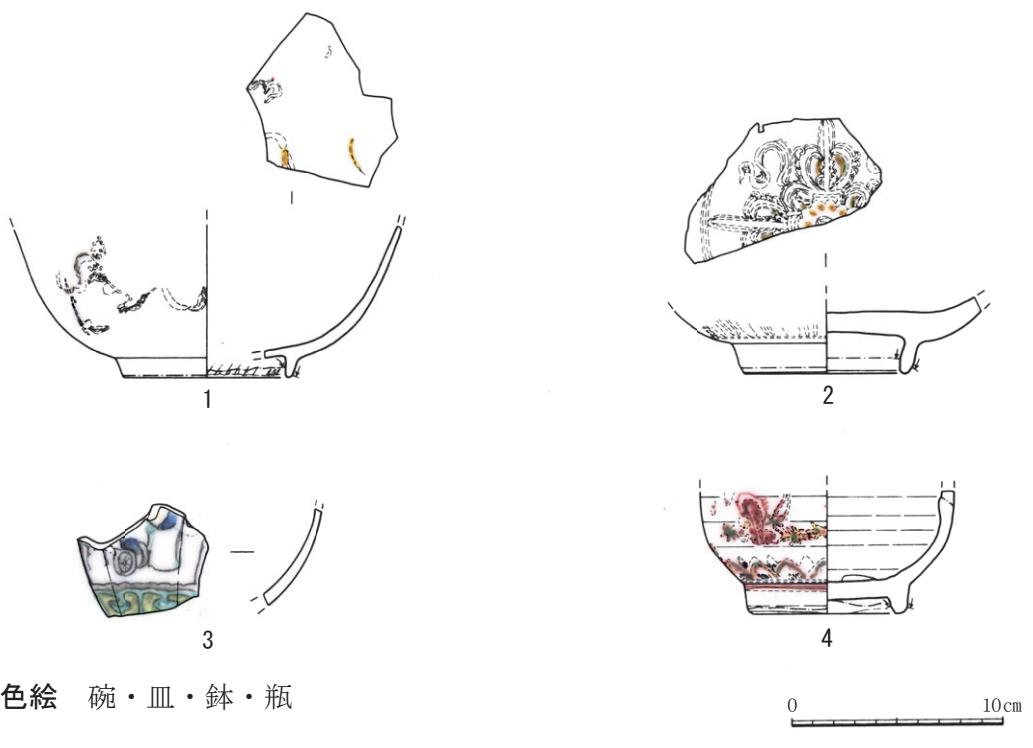
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第22図 図版27 1	碗	底部	密で黒色微粒子が混入する。	— — 8.1	高台は低く、内傾している。胴部は膨らみを有しながら口縁部へ移行する。外面胴部には鳳凰が、内底面には瑞雲文が上絵付けされているが、色はほとんど剥落している。	透明釉が薄く全体的に施される。高台下部から畳付にかけて露胎となる。	大台所 赤褐色土層
第22図 図版27 2	盤	底部	密で気泡が僅かに見られる。	— — 7.9	高台は高く、器壁は全体的に厚い。また、腰部は大きく膨らみを有する。外面には蓮弁文が、内底面には十字花文が上絵付けされるが、色はほとんど剥落している。	透明釉が薄く全体的に施される。高台下部から畠付にかけて露胎となる。	繼世門 コーラル層
第22図 図版27 3	鉢	胴部	密	— — —	輪花状に象られる鉢の胴部。外面には人物文とその下部にラマ式蓮弁が翡翠釉で上絵付けされている。	透明釉が薄く全体的に施される。	二階殿 表採及び 表土層
第22図 図版27 4	瓶	底部	密で黒色砂粒が僅かに混入する。大小の気泡が見られる。	— — 7.6	胴部には太湖石が胴下部には略化した蓮弁文が上絵付けされている。	透明釉が薄く全体的に施される。高台下部から畠付にかけて露胎となる。外底面には粘土塊が溶着している。	繼世門 埋土

注 「—」:計測不可

第21表 色絵出土状況

出土地	器種・部位	碗			皿		盤		鉢			壺		瓶		袋物		蓋		器種不明	合計	
		口縁部	胴部	底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部	部位不明	端部	胴部	底部	1	1	1	1			
二階殿	表採及び表土層	1			1				1				1	1					5			
	南トレンチ								1											1		
大台所	黒土層												1								1	
	赤褐色土層			1									1							1	3	
繼世門	表採及び表土層		1																		1	
	埋土												1								1	
	コーラル層						1														1	
合計		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	13		



第22図 色絵 碗・皿・鉢・瓶

第5節 中国産褐釉陶器

出土点数は9208点で、器種はほぼ壺に限られる。壺は薄手の小型壺から厚手の大型壺まで大きさにバリエーションが窺われる。また、頸部が短い資料が多く、中には頸部が見られない資料もある。底部から胴部にかけては直線状に大きく開く資料から、途中で膨らみを有する資料まで見ることができる。外底面には粘土塊が溶着している資料が多く見られる。壺以外では鉢が1点出土している。

第22表 中国産褐釉陶器出土状況

部位	点数	重量(kg)
口縁部	277	24.12
頸部	172	7.9
耳	15	0.24
肩部	417	23.4
胴部	7820	141.18
底部近く	314	15.6
底部	193	17.21
合計	9,208	229.65

単位:cm

第23表 中国産褐釉陶器観察一覧(1)

挿図番号 図版番号	器種分類	部位	素地	口径 器高 底径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第23図 図版28 1	壺	口縁部	密で白、褐色の大粒粒子が多く混入する。	10.8 — —	2次的に火を受けて、白色に変色している。	小型の壺で全体的に器壁が薄い。口縁部は外反し、玉縁状に肥厚する。	二階殿 黒土層
第23図 図版28 2			密で大小の白色の粒子が多く混入する。気泡も見られる。	23.4 — —	暗オリーブ色	口唇部は平坦で、水平となる。頸部は短い。肩が大きく張り、全体的に器壁が厚い。内面には成形痕が明瞭に確認できる。	二階殿 表採及び 表土層
第23図 図版28 3			密で大小の白色の粒子が多く混入する。気泡が多く見られる。	18.8 — —	黒褐色	口唇部は平坦で、水平となる。頸部は短い。内外面には成形痕が明瞭に確認できる。	繼世門 埋土
第23図 図版28 4			密で大小の白色の粒子が多く混入する。気泡が多く見られる。	13.8 — —	黒褐色、施釉は雑で一部露胎となる。	口唇部は平坦となり、外側へ傾く。頸部は短く、器壁は全体的に厚い。外面肩部には円弧状の成形痕が見られる。	繼世門 コーラル 層
第23図 図版28 5			やや粗く、白、褐色の大粒の粒子が多く混入する。気泡が多く見られる。	18.9 — —	暗褐色で一部、青色に変色している。	口唇部は丸味を有し、外側へ傾く。器壁は全体的に厚い。内外面肩部には円弧状の成形痕が見られる。	繼世門 埋土

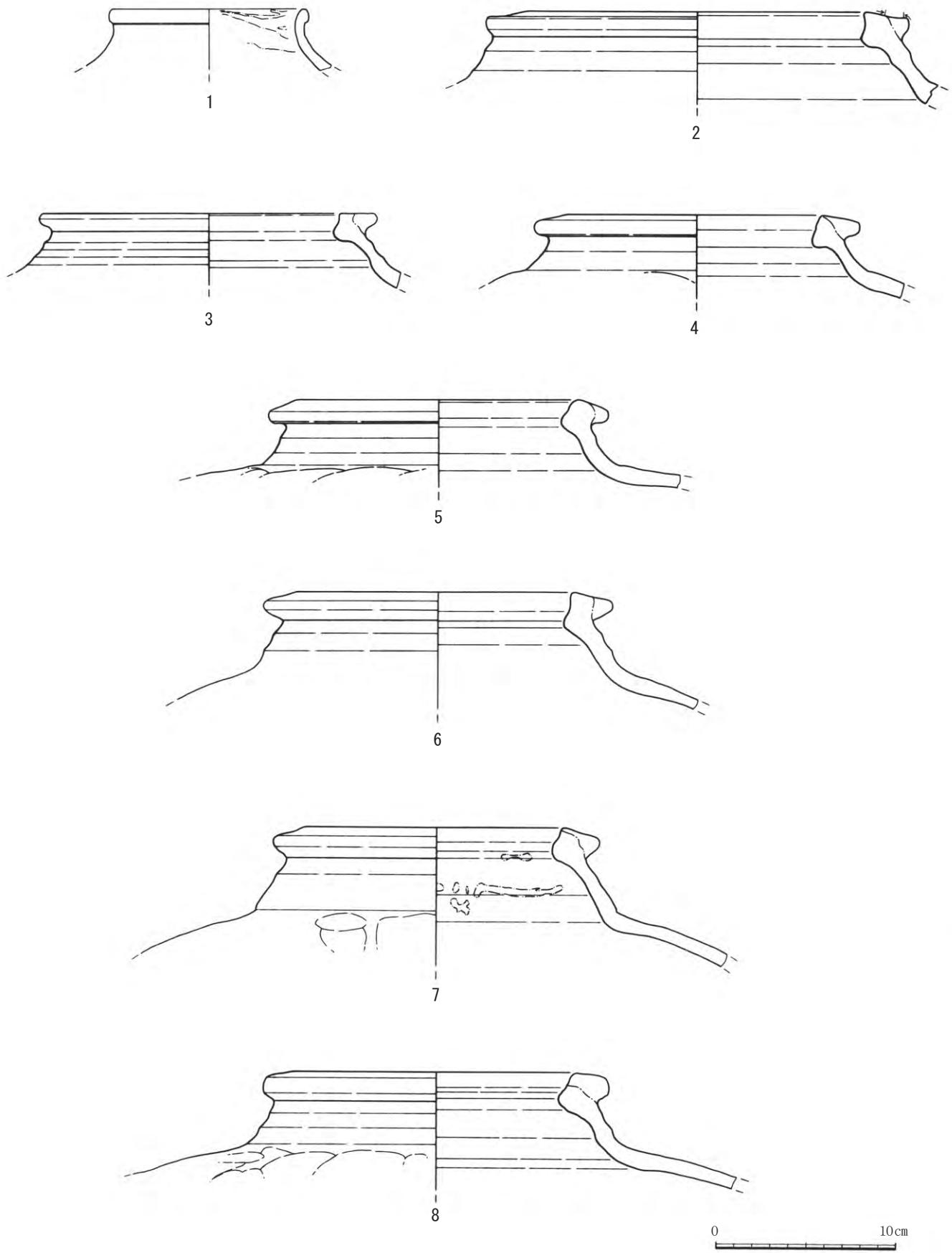
注「—」:計測不可

第24表 中国産褐釉陶器観察一覧 (2)

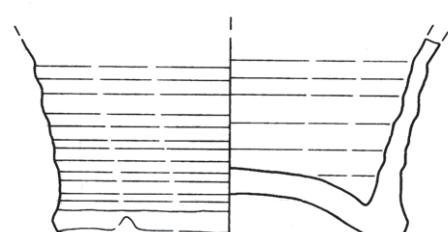
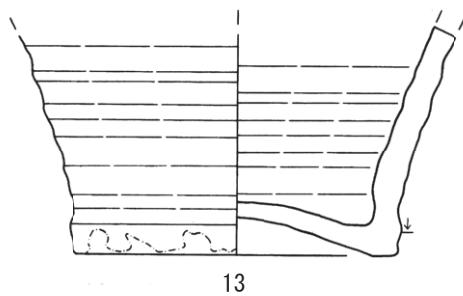
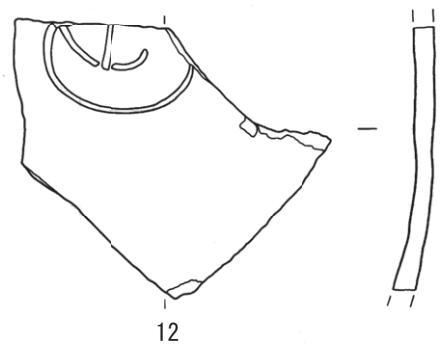
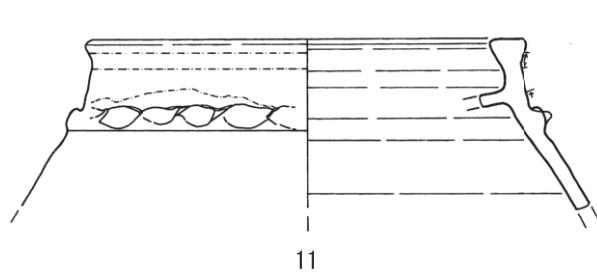
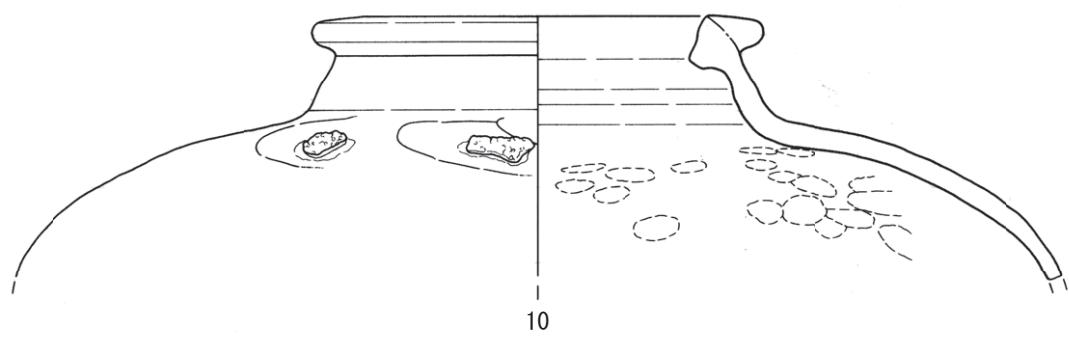
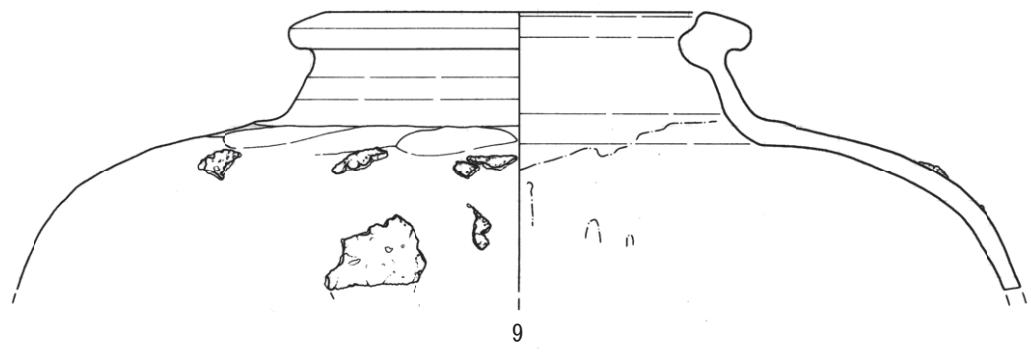
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種分類	部位	素地	口径 器高 底径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第23図 図版28 6	壺	口縁部	密で褐色の大粒粒子が多く混入する。気泡が多く見られる。	19.9 — —	暗褐色で一部、青色に変色している。	口唇部は平坦となり、水平となる。頸部には2条の突線が見られる。肩部は大きく張る。また器表には砂粒が溶着する。	二階殿 表採及び 表土層
第23図 図版28 7			密で大小の白色の粒子が多く混入する。焼成が不十分で褐色となる。	18.1 — —	黒褐色、施釉は雑で一部露胎となる。	口唇部は平坦となり、外側へ傾く。頸部には2条の突線が見られる。肩部は大きく張る。施釉は雑で内面頸部は一部露胎となる。	繼世門 コーラル層
第23図 図版28 8			やや粗く、大小の白、黒色粒子が多く混入する。	19.2 — —	黒褐色で透明度はやや高い。	口縁の内端には蓋受けとしての段が見られる。外面肩部には円弧状の成形痕が見られる。	繼世門 南トレーナ
第24図 図版29 9			密で大小の白、黒色粒子が多く混入する。	18.4 — —	暗オリーブ褐色	口唇部は平坦となり、外側へ傾く。頸部には2条の突線が見られる。肩部には砂粒が溶着する。また、口縁の内端には蓋受けとしての段が見られる。釉は、肩部は外面から内面肩部まで施される。	繼世門 コーラル層
第24図 図版29 10			やや粗く、大粒の褐色砂粒と白色微粒子が混入する。	18.0 — —	オリーブ褐色から黄褐色	口唇部は平坦で、水平となる。頸部は短い。	繼世門 コーラル層
第24図 図版29 11		胴部	密で褐色微砂と白色微砂が混入する。	17.6 — —	頸部には帯状に暗赤褐色、胴部には灰白色の釉が施される。	胴部と頸部の間に縄状突線が見られる。内面には口縁下部に蓋受けの掛かりが見られる。胴部はあまり膨らまない。	繼世門 埋土
第24図 図版29 12			密で大小の粗粒子が混入する。	— — —	黒褐色	外面には箇による銘が見られるが、判読は不明。	繼世門 コーラル層
第24図 図版29 13	底部	底部	密で白色粗砂が混入する。	— — 12.9	外面はオリーブ色、内面は灰白色	底部は上げ底状で胴部は直線状となる。外面の釉垂れが著しい。	繼世門 テストピット
第24図 図版29 14			やや粗く、白、黒、褐色微砂が混入する。	— — 14.2	オリーブ黒色	底部は上げ底状で胴部は直線状となる。内外面共に蛇腹状の成形痕が見られる。	二階殿 表採及び 表土層
第25図 図版30 15			密で白、黒色微砂が混入する。	— — 14.6	暗オリーブ色	底部は上げ底状で胴部は直線状となる。外底面には多数の粘土塊が溶着している。	繼世門 コーラル層
第25図 図版30 16		底部	密で白色粗砂が混入する。	— — 15.6	暗オリーブ色	胴部は内外面共に蛇腹状の成形痕が見られ、立ち上がりは直線状となる。外底面には多数の粘土塊が溶着している。	二階殿 表採及び 表土層
第25図 図版30 17			密で白、黒色微砂が混入する。大きな気泡が見られる。	— — 14.8	暗オリーブ色	胴部は内外面共に蛇腹状の成形痕が見られ、立ち上がりは直線状となる。外底面には多数の粘土塊が溶着している。一部、焼膨れが見られる。	大台所 表採及び 表土層
第25図 図版30 18			密で白、黒色粗砂が混入する。大きな気泡が見られる。	— — 18.6	外面はオリーブ黒色、内面は暗オリーブ色	胴部は内外面共に蛇腹状の成形痕が見られ、立ち上がりは直線状となる。外底面には多数の粘土塊が溶着している。	二階殿 表採及び 表土層
第25図 図版30 19	鉢	口縁部	密で褐色粗砂が多く混入する。大小の気泡が見られる。	33.8 — —	浅黄色、内面は露胎。	全体的に器壁は薄く、口縁端部には縄状に刻みが入る。	繼世門 南トレーナ

注 「—」:計測不可

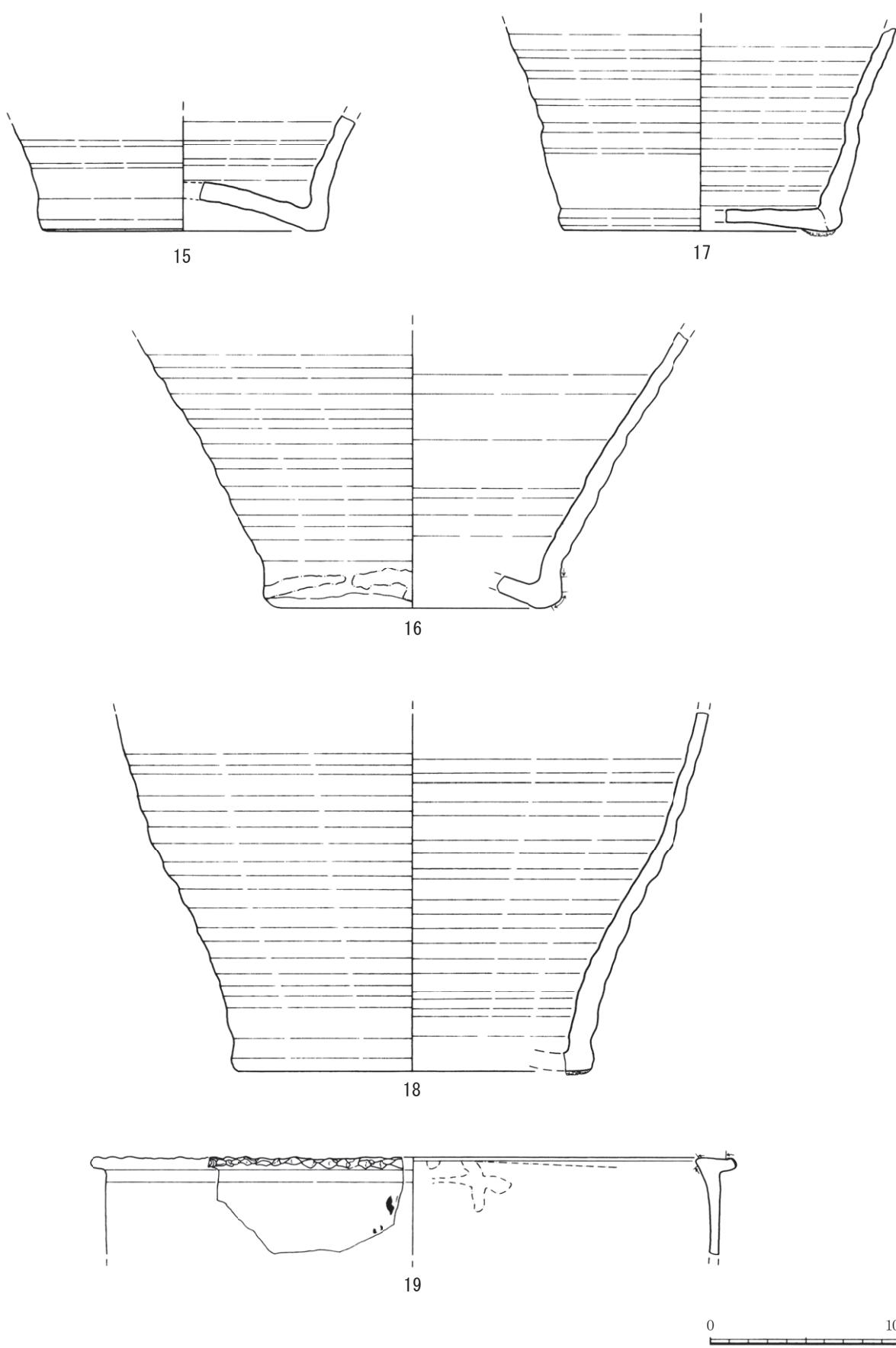


第23図 中国産褐釉陶器（1）壺



0 10 cm

第24図 中国産褐釉陶器（2）壺



第25図 中国産褐釉陶器（3）壺・鉢

第6節 その他の輸入陶磁器

本節では青磁・白磁・青花・褐釉陶器といった主要な製品以外の中国産陶磁器と、タイ・ベトナム・朝鮮で生産された陶磁器を「その他の輸入陶磁器」として取り扱う。以下、産地別に製品や器種の特徴を記し、詳細は観察表に示す。

1. その他の中国産陶磁器（第26図1～11、第27図12・13）

黒釉陶器：天目と称される鼈甲口の碗（1）が出土している。

瑠璃釉：蓋付きの筒形碗（2）と型成形の小杯（3）がみられる。前者が明代、後者が清代に位置づけられる。

緑釉：鍔縁の皿（4）や盤（5）、口縁部の断面形態が「T」字状を呈する鉢（6）、口縁が朝顔状に開く瓶（7）など多種多様な器種が確認されている。

翡翠釉：肩から胴部上位に最大径を持つ瓶（8）が出土している。

法花：広口の大型壺と考えられる胴部片（9）を図化した。

無釉陶器：口縁部の断面形態が「T」字状を呈する鉢（10、11）や、口縁部内面に蓋受部を持つ水注（12）などがみられる。

紫砂：茶壺と称される急須の底部（13）が確認されている。

2. タイ産陶磁器（第27図14～21）

土器：俗にハンネラとも称される硬質の土器で、器種は蓋甲を窪ませ中央に宝珠状の撮を持つ蓋が得られている（14～16）。

青磁：双耳瓶と考えられる底部（19）がみられる。

鉄絵：口唇部に蓋受部を持つ合子の身（18）が確認されている。

褐釉陶器：四耳壺の口縁部（19、20）と底部（21）を図化した。いずれの器形も平底の底部からやや開き気味に立ち上がり、口縁がラッパ状に開くものである。

3. ベトナム産陶磁器（第27図22～24、第28図25）

白磁：確認された器種は碗のみである。外面に線彫りで文様を描くもの（22）と、内面に型押しの文様がみられるもの（23）がある。

青花：ベトナム産の中で最も多様な製品がみられるが、全て小片のため今回は小型壺の口縁部（24）を図化した。

色絵：碗の底部（25）が出土している。両面に赤や緑の上絵付けで文様を描く。

4. 朝鮮産陶磁器（第28図26）

白土や黒土を象嵌した青磁が出土しており、今回は皿（26）を図化した。

第25表 その他の輸入陶磁器出土状況

第26表 タイ産褐釉陶器出土状況

出土地	器種・部位	壺					鉢		瓶		合計
		口 縁 部	頸 部	耳	胴 部	底 部	口 縁 部	頸 部	胴 部		
二階殿	表採及び表土層	28	26	21	625	19	2	1		722	
	埋土	1	3		6	1				11	
	瓦礫層	1	1	1	20	1				24	
	コーラル層			1		1				2	
	黒土層				1	9	1			11	
	赤褐色土層					6				6	
	褐色土層			3		10	4			17	
	上層	1				3				4	
	下層	4	1		18	2				25	
	南トレンチ			1		7				8	
料理座	埋土	1	1	1	14	1				18	
	コーラル層	1	4		4	1				10	
	赤褐色土層				1	10				11	
	石列			1		14	1			16	
大台所	表採及び表土層	2	7	2	72	1				84	
	埋土					2				2	
	瓦礫層	1	4	5	39	3				52	
	コーラル層					9				9	
	黒土層	1	3	6	61					71	
	赤褐色土層	2	1		24	1				28	
	褐色土層			2	1	6	1			10	
	建物1					1				1	
	東西石列		4	3	40	3				50	
	南トレンチ	3	4	1	17	1				26	
	南北トレンチ	1				4				5	
	中央トレンチ				1	12				13	
	表採及び表土層	3	5		80	1				89	
縦世門	埋土	3	4	3	93	2	1	1	1	107	
	瓦礫層					3				3	
	コーラル層	6	14	12	190	12		1	1	235	
	黒土層	2				9				11	
	褐色土層			1			1			2	
	中層	2		1	4					7	
	建物1	1	1			5				7	
	東西石列	3	3	1	69	3				79	
	南トレンチ		2		4					6	
	テストピット	1	1		13	1				16	
出土地不明		1	1		1					3	
合計		69	99	61	1,505	61	3	1	2	1,801	

第27表 その他の輸入陶磁器観察一覧(1)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第26図 図版31 1	黒釉陶器	碗	口縁部	11.8 — —	胎土は褐色で細かい。両面に黒釉を施釉後、その上に褐釉を施釉(二度掛け)。中国・南平茶洋窯産。	二階殿 褐色土層
第26図 図版31 2	瑠璃釉	碗	口縁部 ～底部	12.8 14.0 9.6	胎土は白色で緻密。外面に瑠璃釉、内面に透明釉を施釉後、畳付と口唇部を釉剥ぎ。外面に金彩で文様を描くが剥落が著しい。外面に被熱跡が残る。中国・景德鎮窯産。	二階殿 表採及び 表土層
第26図 図版31 3	瑠璃釉	小杯	口縁部 ～底部	4.2 1.95 2.1	胎土は白色で緻密。外面に瑠璃釉、内面に透明釉を施釉後、畳付と口唇部を釉剥ぎ。中国・徳化窯産。	繼世門 埋土
第26図 図版31 4	緑釉	皿	口縁部	— — —	胎土は白色で緻密。体部を花弁形に成形し、鍔縁口縁の端部をわずかに折り返す(口唇部は波状に成形)。外面に緑釉、内面に透明釉を施釉。中国産。	繼世門 コーラル層
第26図 図版31 5	緑釉	盤	口縁部	— — —	胎土は褐色で荒い。口唇部を稜花状に成形。両面に緑釉を施釉。内面に線彫りで蓮花文を描く。中国・南部地域産。	繼世門 埋土
第26図 図版31 6	緑釉	鉢	口縁部	— — —	胎土は白色で緻密。外面に銅緑釉、内面に透明釉を施釉。中国産。	二階殿 表採及び 表土層
第26図 図版31 7	緑釉	瓶	口縁部	7.0 — —	胎土は白色で緻密。両面に緑釉を施釉。外面に線彫りで蕉葉文を描く。中国・南部地域産。	二階殿 瓦礫層
第26図 図版31 8	翡翠釉	瓶	胴部	— — —	胎土は白色で緻密。肩部に継ぎ跡がみられる。外面に翡翠釉を施釉する。中国・景德鎮窯産か。	繼世門 埋土
第26図 図版31 9	法花	壺	胴部	— — —	胎土は白色で緻密。外面に紫釉を施釉した後、白土の区画と緑の上絵付けで文様(蓮華文か)を描く。中国・景德鎮窯産。	繼世門 建物 I
第26図 図版31 10	無釉陶器	鉢	口縁部	— — —	胎土は褐色で荒く、混入物がみられる。両面に叩き成形の痕跡が残る。口縁部は外側折り返し成形。中国・南部地域産。	二階殿 瓦礫層
第26図 図版31 11	無釉陶器	鉢	口縁部	46.4 — —	胎土は暗褐色で荒く、混入物がみられる。両面に叩き成形の痕跡が残る。口縁部は内側折り返し成形。外面に縄目文を2条貼付。中国・南部地域産。	大台所 赤褐色土層
第27図 図版32 12	無釉陶器	水注	口縁部	8.7 — —	胎土は暗褐色で荒く、混入物がみられる。口唇部は垂直に切られ、口縁部内面に蓋受の突帯が巡る。中国・南部地域産。	大台所 黒土層
第27図 図版32 13	紫砂	急須	底部	— — 5.8	胎土は紫色で緻密。内面に轆轤痕が残る。中国・宜興窯産。	二階殿 表採及び 表土層

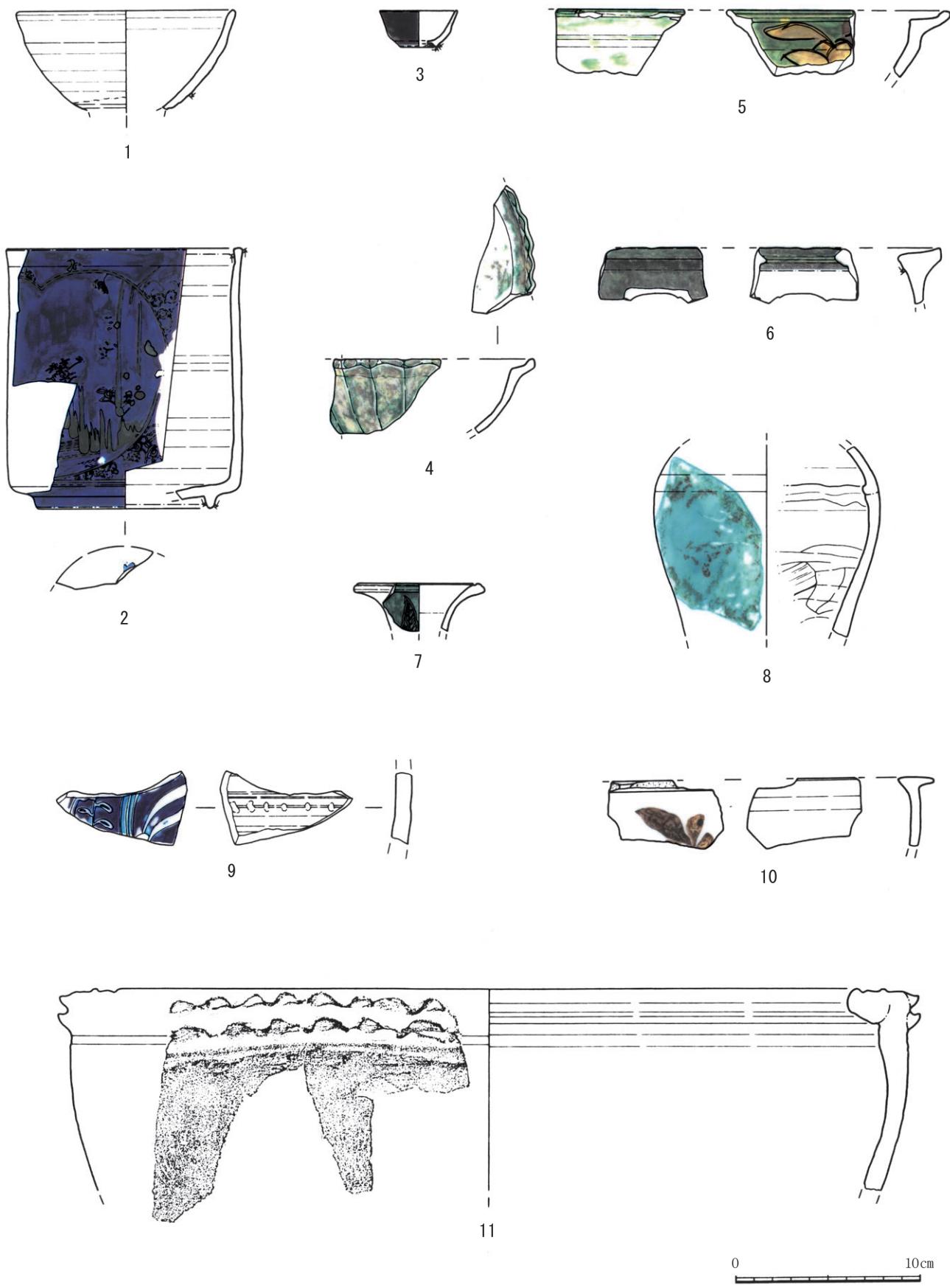
注 「—」:計測不可

第28表 その他の輸入陶磁器観察一覧(2)

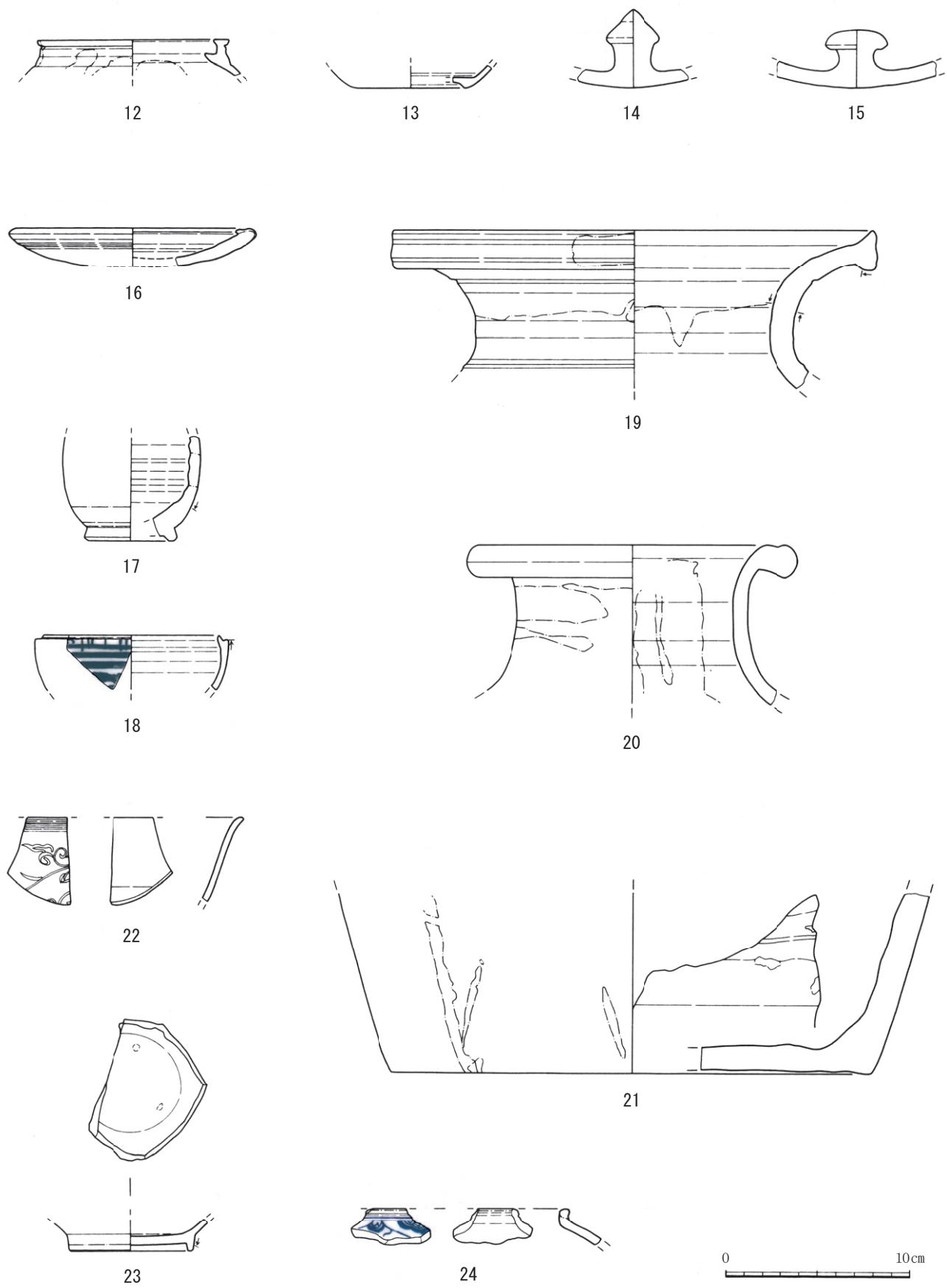
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第27図 図版32 14	タイ産 土器	蓋	撮	— — —	胎土は明褐色で荒く、混入物がみられる。両面にケズリ調整の痕跡が残る。	二階殿 磴道
第27図 図版32 15	タイ産 土器	蓋	撮	— — —	胎土は明褐色で荒く、混入物がみられる。両面にケズリ調整の痕跡が残る。	二階殿 瓦礫層
第27図 図版32 16	タイ産 土器	蓋	端部	端部径 13.4	胎土は明褐色で荒く、混入物がみられる。両面にケズリ調整の痕跡が残る。端部は上面に折り返し成形。	継世門 表採及び 表土層
第27図 図版32 17	タイ産 青磁	瓶	底部	— — 5.0	胎土は白色で細かい。内面に轆轤痕が残る。青緑色の釉薬を外面腰部まで施釉。外面に貫入が目立つ。タイ・シーサッチャナライ窯産。	二階殿 表採及び 表土層
第27図 図版32 18	タイ産 鉄絵	合子	口縁部	9.4 — —	胎土は灰色で荒く、黒色の混入物がみられる。内面に回転調整の痕跡が残る。外面に鉄絵で文様を描いた後、その上から透明釉を施釉する。タイ・シーサッチャナライ窯産。	二階殿 表採及び 表土層
第27図 図版32 19	タイ産 褐釉陶器	壺	口縁部	26.3 — —	胎土は暗褐色で荒く、混入物がみられる。断面に成形時の痕跡(積み上げ跡)が残る。両面に褐釉を施釉するが不徹底。タイ・シーサッチャナライ窯産。	継世門 コーラル層
第27図 図版32 20	タイ産 褐釉陶器	壺	口縁部	17.9 — —	胎土は暗褐色で荒く、混入物がみられる。断面に成形時の痕跡(積み上げ跡)が残る。両面に褐釉を施釉するが不徹底。タイ・メナムノイ窯産。	二階殿 表採及び 表土層
第27図 図版32 21	タイ産 褐釉陶器	壺	底部	— — 26.0	胎土は暗褐色で荒く、混入物がみられる。断面に成形時の痕跡(積み上げ跡)が残る。両面に褐釉を施釉するが不徹底。タイ・メナムノイ窯産。	二階殿 表採及び 表土層
第27図 図版32 22	ベトナム 産 白磁	碗	口縁部	— — —	胎土は白色で細かい。両面に透明釉を施釉。外面に線彫りで牡丹唐草文。北部ベトナム産。	大台所 赤褐色土 層
第27図 図版32 23	ベトナム 産 白磁	碗	底部	— — 6.6	胎土は白色で細かい。内底から高台外面まで透明釉を施釉。窯道具の溶着痕が内底に2ヶ所、疊付に2ヶ所残る。内面に型押しで波濤文を施す。北部ベトナム産。	継世門 表採及び 表土層
第27図 図版32 24	ベトナム 産 青花	壺	口縁部	— — —	胎土は白色で細かい。両面に透明釉を施釉後、口唇部を釉剥ぎ。外面に呉須で文様(蓮弁文か如意頭文)を描く。北部ベトナム産。	大台所 埋土
第28図 図版32 25	ベトナム 産 色絵	碗	底部	— — 6.7	胎土は白色で細かい。両面に透明釉を施釉後、疊付を釉剥ぎ。外面に赤の上絵付けで圈線、内底に赤と緑の上絵付けで二重圈線+蓮花文を描ぐが剥落が著しい。窯道具の溶着痕が内底に2ヶ所、疊付に2ヶ所残る。北部ベトナム産。	二階殿 埋土
第28図 図版32 26	朝鮮産 象嵌青磁	皿	胴部	— — —	胎土は灰色で細かい。内面に白土と黒土の象嵌で文様(界線+飛鶴文か)、外面に白土の象嵌で文様(界線+葉文か)を描く。	二階殿 黒土層

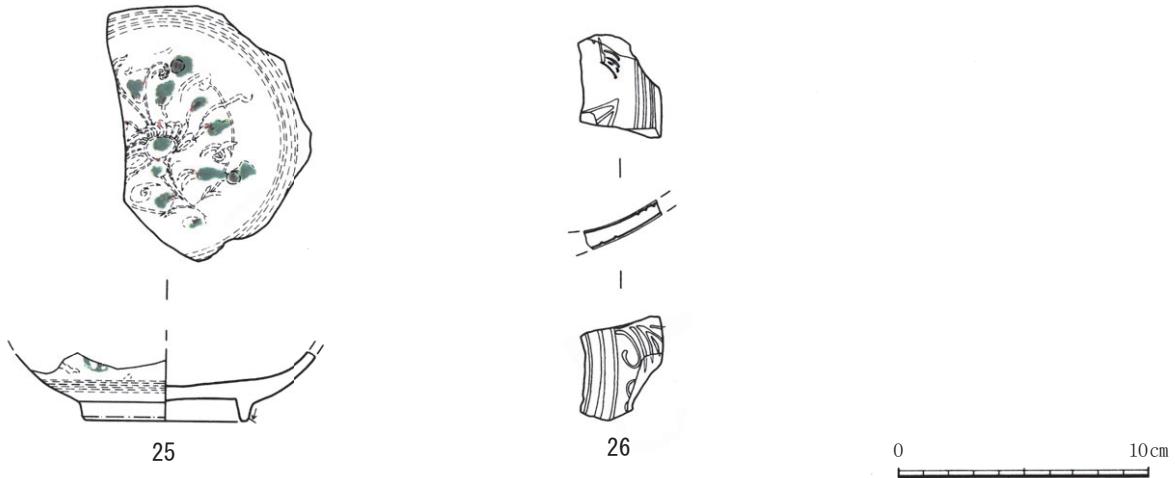
注 「—」:計測不可



第26図 その他の輸入陶磁器（1）



第27図 その他の輸入陶磁器（2）



第28図 その他の輸入陶磁器（3）

第7節 本土産陶磁器

本土産陶磁器には磁器（青磁・白磁・染付・色絵）と陶器があり、さらに産地別では肥前（肥前系含む）・関西系（京及び信楽系含む）薩摩・備前・瀬戸や美濃などの製品が確認されている。時期別だと16世紀代の資料が少量みられるものの、近世以降の資料が圧倒的に多い。また皿や鉢に特殊な器形の製品が一定量あり、それらが全て近世に位置づけられることから、当該期の首里城内における食器類利用状況の一端を窺うことができる。以下にそれぞれの特徴を述べ、個々の観察所見は第29～31表に記す。

1. 磁器（第29図1～9、第30図10～18）

青磁：瓶の底部（1）が出土している。

白磁：瓶または壺の底部（2）と思われる。

染付：碗は体部が半球形をなすもの（3）と、筒形に立ち上がるるもの（4）がある。皿は直口口縁の製品（5、6）のほか、型打ち成形で器形を雲形（7）や方形（8）にするものや、上面觀が長方形を呈する長皿（9）、口径が20cmを超える大皿（10、11）などがみられる。鉢は口縁部がラッパ状に開くもの（12）や、上面觀が正方形を呈するもの（13）が確認される。

色絵：碗・皿・蓋を図化した。碗は体部が丸みを帯び腰の張る製品（14～16）が多い。

皿はいわゆる長皿（17）で、蓋（18）は瓶や水注などに対応すると考えられる。

2. 陶器（第31図19～27、第32図28～38）

小碗：体部が半球形を呈するもの（19）。

皿：端反口縁のもの（20）や、上面觀が不定形（21）または多角形（22、24）を呈するものがみられる。

擂鉢：平底の底部から斜上方に開く口縁部を持ち、その外面下位に肥厚帯を貼付する。

内面には間隔の空いた擂目が施される（26）。

鉢：いわゆる兜鉢に近い形態を持つ小型の製品（25）と、口縁部の断面形態が「T」字状を呈する大型のもの（27）がある。

急須：胴部下位に注口の接続部を持つ大型の製品（28）と、胴部中位に最大径を持つ小形の製品（31、32）がみられる。

瓶：尿瓶の口縁部の可能性があるもの（29）と、線彫り文様が施される胴部資料（30）を図化した。

蓋：皿を伏せたような器形を持つもの（34）がある。

壺：器形は肩が張り無頸に近く、口縁部の断面形態が方形を呈するもの（35、36）と、有頸で肩部上位に紐状の横耳を貼付するもの（37、38）がみられる。

第29表 本土産陶磁器観察一覧(1)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第29図 図版33 1	青磁	瓶	底部	— — 7.8	胎土は白色で緻密。内面に轆轤痕が残る。外面に青磁釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第29図 図版33 2	白磁	瓶or壺	底部	— — 9.0	胎土は白色で緻密。内面に轆轤痕が残る。外面に白磁釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。肥前産か。	二階殿 表採及び 表土層
第29図 図版33 3	染付	碗	口縁部～ 底部	12.6 7.0 5.6	胎土は白色で緻密。釉薬は全体に施釉後、畳付を釉剥ぎ。外面に梅花文と界線、内底に二重圈線+花文を描く。肥前 産。	二階殿 表採及び 表土層
第29図 図版33 4	染付	碗	底部	— — 5.6	胎土は白色で緻密。釉薬は全体に施釉後、畳付を釉剥ぎ。外面に不明文(波濤文か)・界線・宝文、内底に二重圈線を 描く。肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第29図 図版33 5	染付	皿	口縁部～ 底部	13.2 4.2 5.0	胎土は灰白色で緻密。釉薬は内底から外面腰部まで施釉後、内底を蛇の目状に釉剥ぎ。内面に鳳凰文?を描く。肥 前系。	二階殿 表採及び 表土層
第29図 図版33 6	染付	皿	口縁部～ 底部	16.6 4.3 7.2	胎土は白色で緻密。釉薬は全体に施釉後、畳付を釉剥ぎ。内面に葉文と宝文?を描く。肥前産か(中国産の可能性あ り)。	二階殿 表採及び 表土層
第29図 図版33 7	染付	皿	口縁部	10.4 — —	胎土は白色で緻密。釉薬は両面に施釉。外面に唐草文、内 面に微塵唐草文の地に雷文か。肥前産。	二階殿 埋土
第29図 図版33 8	染付	皿	口縁部	12.1 — —	胎土は白色で緻密。釉薬は全体に施釉後、畳付を釉剥ぎ。外 面に花文と雷文帶、外底に銘款、内面に山水文を描く。 肥前産。	二階殿 表採及び 表土層

注 「—」:計測不可

第30表 本土産陶磁器観察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第29図 図版33 9	染付	皿	口縁部～ 底部	— — —	胎土は白色で緻密。釉薬は全体に施釉後、畳付を釉剥ぎ。 外面に唐草文と界線、内面に白抜き花唐草文と鋸歯文、内 底に花唐草文を描く。肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第30図 図版34 10	染付	皿	口縁部	25.6 — —	胎土は白色で緻密。釉薬は両面に施釉。外面に界線、内面 に山水文？を描く。肥前産。	大台所 赤褐色土層
第30図 図版34 11	染付	皿	口縁部	26.4 — —	胎土は白色で緻密。釉薬は両面に施釉。外面に唐草文、内 面に蛸唐草文を描く。肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第30図 図版34 12	染付	鉢	口縁部～ 底部	14.2 5.1 7.4	胎土は白色で緻密。釉薬は全体に施釉後、畳付を釉剥ぎ。 外面に花文、外底に圈線、内面及び内底に植物文を描く。 肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第30図 図版34 13	染付	鉢	口縁部	11.4 — —	胎土は白色で緻密。釉薬は両面に施釉。外面に飛龍文と 漢詩文、内面に草文と井桁文を描く。また口唇部を口錆状 に塗布。肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第30図 図版34 14	色絵	碗	口縁部	13.8 — —	胎土は白色で緻密。釉薬は両面に施釉。染付と赤・金の上 絵付けで外面に亀甲繋文、内面に亀甲繋文・梅花文を描 く。肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第30図 図版34 15	色絵	碗	底部	— — 6.4	胎土は白色で緻密。釉薬は全体に施釉後、畳付を釉剥ぎ。 染付と赤・金の上絵付けで外面に亀甲繋文・蔓唐草文・鋸 葉文、外底に銘款、内底に梅花文、内底に二重圈線+花 文を描く。肥前産。	二階殿 黒土層
第30図 図版34 16	色絵	碗	底部	— — 5.8	胎土は白色で緻密。釉薬は全体に施釉後、畳付を釉剥ぎ。 染付と赤・青・黄色の上絵付けで外面に花文、外底に圈線、 内面及び内底に宝文を描く。肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第30図 図版34 17	色絵	皿	口縁部～ 底部	— — —	胎土は白色で緻密。釉薬は全体に施釉後、畳付を釉剥ぎ。 内面に染付と赤・黄の上絵付けで飛龍文を描く。肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第30図 図版34 18	色絵	蓋	甲～端部	7.6 — 5.4	胎土は白色で緻密。釉薬は蓋甲に施釉。外面に染付と赤・ 黄の上絵付けで花文を描く。肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第31図 図版35 19	陶器	小碗	口縁部～ 底部	9.4 4.1 4.0	胎土は褐色で細かい。淡灰色の釉薬を内底から高台外面 に施釉するが気泡が目立つ(被熱の痕跡か)。九州系か。	二階殿 表採及び 表土層
第31図 図版35 20	陶器	皿	口縁部～ 底部	13.6 4.0 6.0	胎土は明褐色で細かい。褐色の釉薬を内底から高台際まで 施釉後、内底を蛇の目状に釉剥ぎ。肥前産。	二階殿 表採及び 表土層
第31図 図版35 21	陶器	皿	口縁部～ 底部	13.6 3.8 7.7	胎土は白色で細かい。直口皿の端部を折り、口唇部に細か い刻みを入れた変形皿(貝を模したものか)。透明釉を全体 に施釉後、畳付を釉剥ぎ。薩摩産か。	二階殿 表採及び 表土層
第31図 図版35 22	陶器	皿	口縁部～ 底部	15.2 5.0～5.3 9.0	胎土は褐色で細かい。上面観が長方形を呈する変形皿。透 明釉を内底から外面腰部まで施釉。外面に鉄絵？で植物 文を描く。京・信楽系か。	二階殿 表採及び 表土層
第31図 図版35 23	陶器	皿	底部	— — 4.4	胎土は灰色で細かい。灰褐色の釉薬を内底から外面腰部ま で施釉。肥前産。	繼世門 建物1

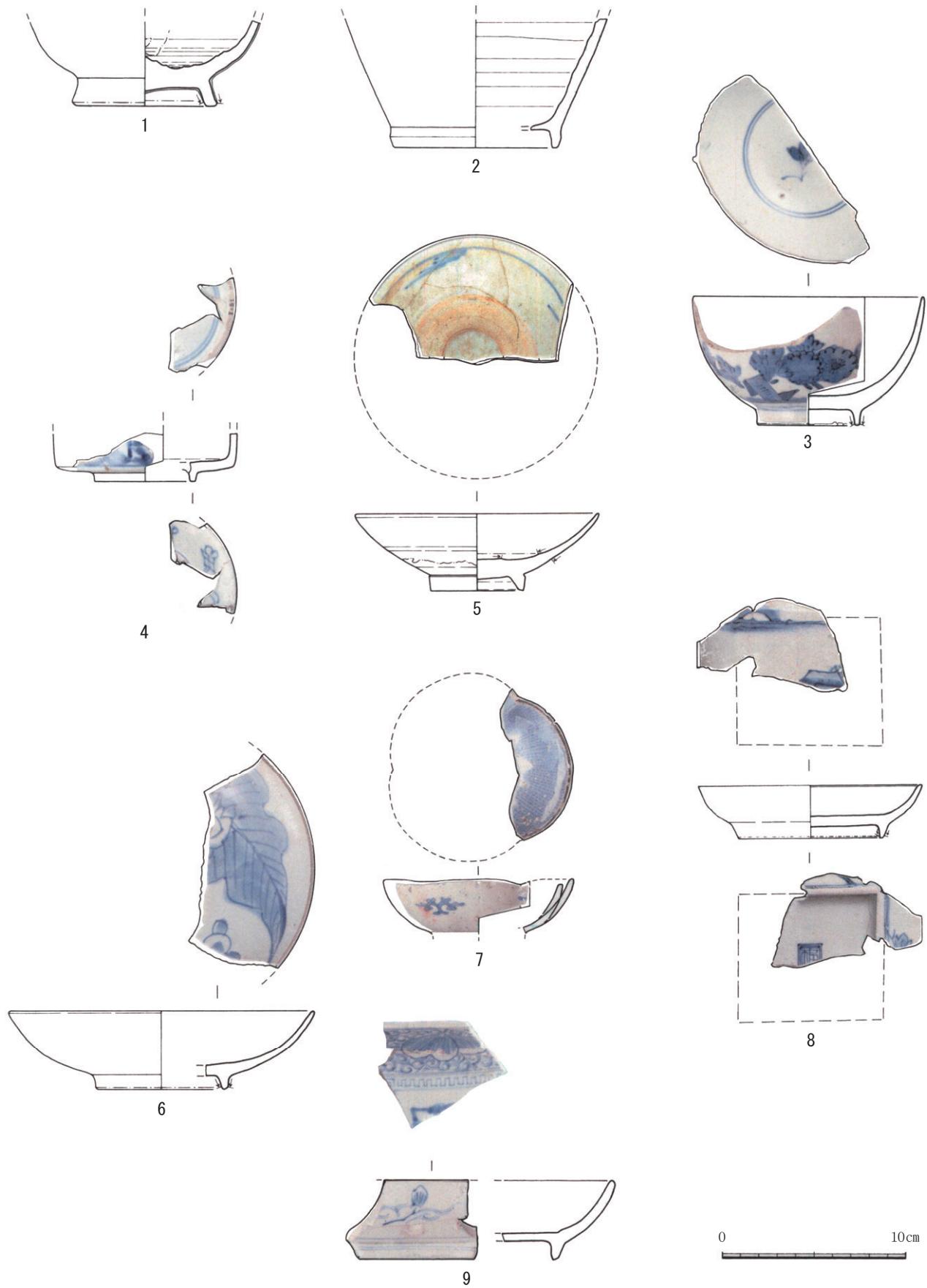
注 「—」:計測不可

第31表 本土産陶磁器観察一覧(3)

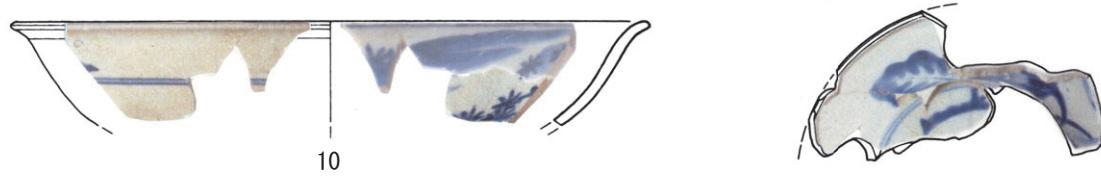
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第31図 図版35 24	陶器	皿	口縁部～ 底部	13.6 5.3 7.6	胎土は褐色で細かい。型打ちで胴部を花弁状に成形し、上面觀が六角形を呈する変形皿。透明釉を内底から外面腰部まで施釉。内面に鉄絵？で植物文を描く。京・信楽系か。	二階殿 表採及び 表土層
第31図 図版35 25	陶器	鉢	口縁部～ 底部	12.2 5.5 7.6	胎土は白色で細かい。透明釉を全体に施釉後、畳付を釉剥ぎ。全体に貫入がみられる。外面に吳須(鉄絵か)で花弁文を描く。薩摩產か。	二階殿 表採及び 表土層
第31図 図版35 26	陶器	擂鉢	口縁部	31.0 — —	胎土は明褐色で荒く、混入物がみられる。内面に9本単位の櫛目を施す。備前產。	二階殿 表採及び 表土層
第31図 図版35 27	陶器	鉢	口縁部	36.0 — —	胎土は暗褐色で荒く、混入物がみられる。暗褐色の釉薬を両面に施釉する。口唇部に焼成時の痕跡(貝目)が2ヶ所残る。薩摩產。	二階殿 表採及び 表土層
第32図 図版36 28	陶器	水注	口縁部	9.4 — —	胎土は暗褐色で荒く、混入物がみられる。胴部は瓜形に成形。黒釉を外面から内面口縁部まで施釉。九州產か。	二階殿 表採及び 表土層
第32図 図版36 29	陶器	瓶	口縁部	6.7 — —	胎土は暗褐色で荒く、混入物がみられる。黒釉を外面に施釉。尿瓶の口縁部か。薩摩產。	繼世門 建物1
第32図 図版36 30	陶器	瓶	胴部	— — —	胎土は橙色で細かい。器面に白化粧を施す。外面に線彫りと黒土象嵌で界線・花文・海藻文を描く。九州產か。	二階殿 赤褐色土層
第32図 図版36 31	陶器	急須	口縁部	7.1 — —	胎土は白色で細かい。透明釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。外面に吳須(鉄絵か)で花唐草文を描く。九州產か。	二階殿 表採及び 表土層
第32図 図版36 32	陶器	急須	底部	— — 6.0	胎土は紫色で細かい。国產と思われるが詳細は不明。	二階殿 表採及び 表土層
第32図 図版36 33	陶器	合子	口縁部～ 底部	5.1 2.4 8.6	胎土は白色で細かい。透明釉を全体に施釉後、撮端部(畠付)と庇端部(口唇部)を釉剥ぎ。全体に貫入がみられる。外面に吳須(鉄絵か)で千鳥文を描く。薩摩產か。	大台所 表採及び 表土層
第32図 図版36 34	陶器	蓋	甲～端部	7.2 2.2 15.0	胎土は白色で細かい。透明釉を全体に施釉後、撮端部(畠付)を釉剥ぎ。外面に吳須で圈線を描く。薩摩產か。	二階殿 表採及び 表土層
第32図 図版36 35	陶器	壺	口縁部	15.5 — —	胎土は暗褐色で荒く、混入物がみられる。褐色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。薩摩產。	二階殿 表採及び 表土層
第32図 図版36 36	陶器	壺	底部	— — 15.2	胎土は暗褐色で荒く、混入物がみられる。褐色の釉を両面に施釉。器面に回転調整の痕跡が残る。薩摩產。	繼世門 建物1
第32図 図版36 37	陶器	壺	口縁部	11.6 — —	胎土は灰色で細かい。内面に回転調整の痕跡が残る。外面に緑色の釉薬を施釉。信楽系か。	二階殿 表採及び 表土層
第32図 図版36 38	陶器	壺	底部	— — 14.4	胎土は灰色で細かい。内面に回転調整の痕跡が残る。信楽系か。	二階殿 表採及び 表土層

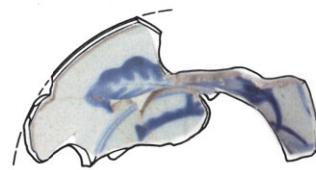
注 「—」:計測不可



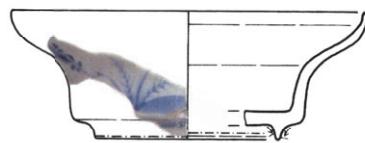
第29図 本土産陶磁器（1）



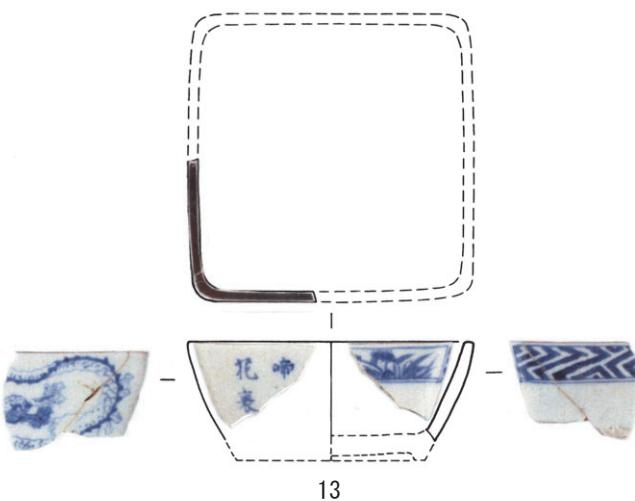
10



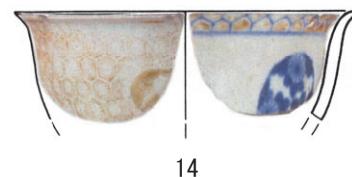
11



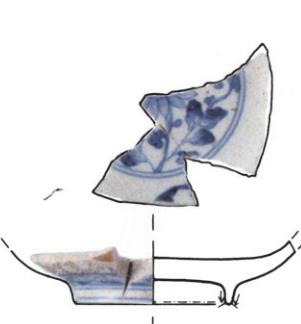
12



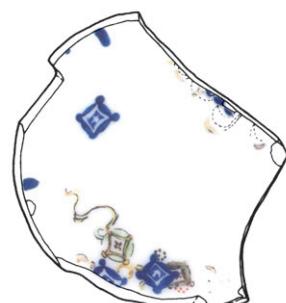
13



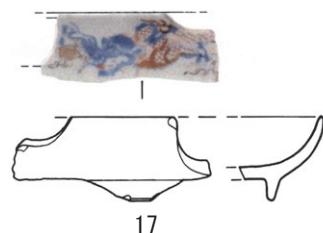
14



15



16



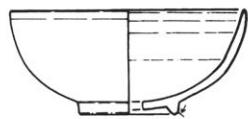
17



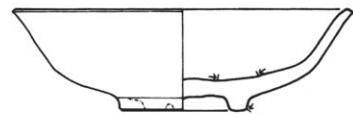
18



第30図 本土産陶磁器（2）



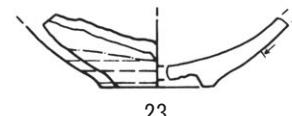
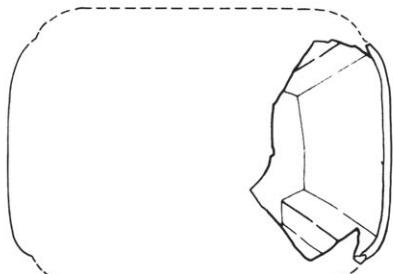
19



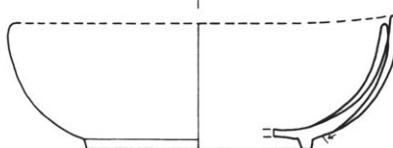
20



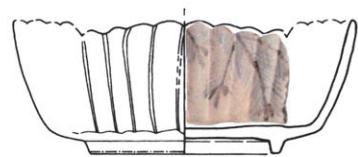
21



23



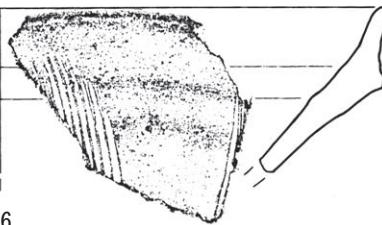
22



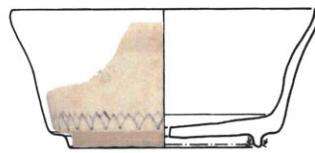
24



26



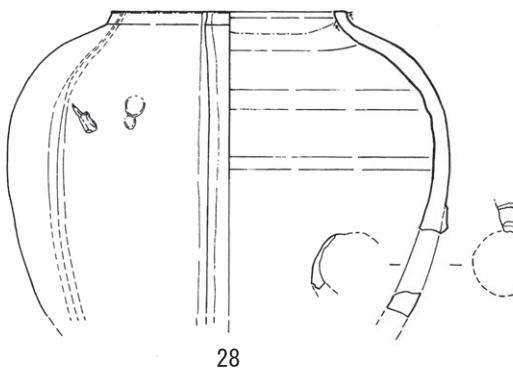
25



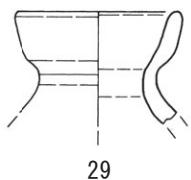
27

0 10cm

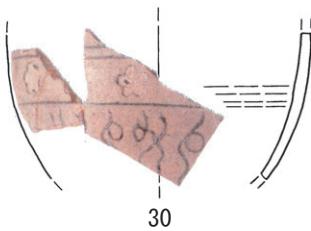
第31図 本土産陶磁器（3）



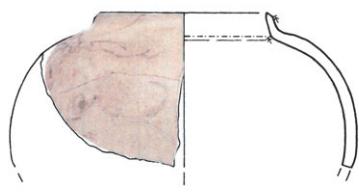
28



29



30



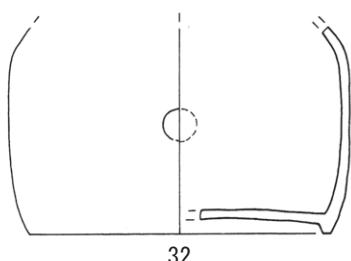
31



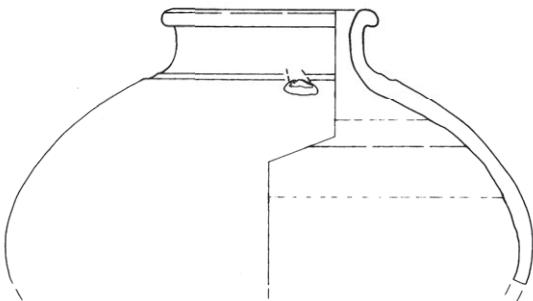
33



34

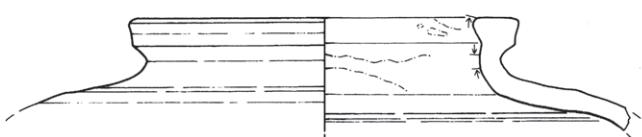


32

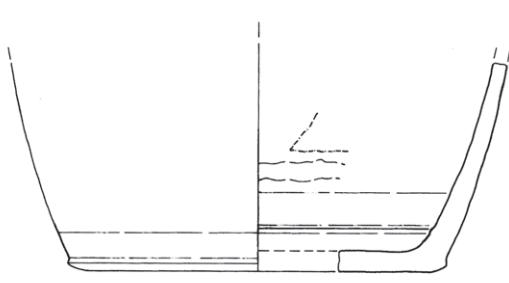


37

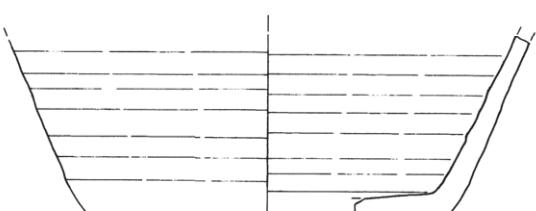
0 10 cm
(図37の縮尺)



35



36



38

0 10 cm
(図28～36の縮尺、図38の縮尺)

第32図 本土産陶磁器 (4)

第8節 沖縄産施釉陶器

方言で「上焼（ジョウヤチ）」と称される一群で、器の表面に灰釉・鉄釉（黒釉や褐釉を含む）・透明釉（素地に白化粧を施すものを含む）などの釉薬を塗布する製品を指す。器種は碗や皿などの食器類が最も多くみられるが、今回は鉢類（第34図10）や火炉などが一定量確認されていることから、これらの出土状況が調査区の性格に関係する可能性も考えられる。以下に図化資料の特徴を述べ、詳細は観察表に記す。

1. 碗（第33図1、2）

高台から斜上方に開き立ち上がるもの1と、腰部が丸みを帯び端反口縁を呈するもの2がみられる。釉薬は1が灰釉単掛けで、2は白化粧の上に透明釉を施す。また2は外面に文様を描く。

2. 小碗（第33図3～5）

腰部が丸みを帯びる端反口縁のものと、口縁部が直線的に立ち上がり筒形を呈するものが確認される。釉薬は褐釉と白化粧+透明釉掛け分け3と白化粧+透明釉の単掛け4、5がある。4と5は外面または内面に文様を描く。

3. 小杯（第33図6）

端反口縁を呈すると考えられるもの。釉薬は透明釉単掛け。

4. 皿（第33図7、8）

器形は端反口縁になるもの7と、直口口縁で口唇部を波状に成形するもの8がみられる。釉薬は7が白化粧+透明釉の単掛け、8が鉄釉と白化粧+透明釉の掛け分けとなる。

5. 鉢（第33図9、第34図10）

9は平底の底部からやや内彎気味に立ち上がり、口縁部を鎔縁状に成形する。口縁部の内面上位にみられる中仕切りには円形の孔が多数穿たれていることから、今回は火鉢として取り扱う。釉薬は透明釉単掛けで、外面に文様を描く。10は高台内割りの浅い底部から内彎気味に立ち上がるもので、内底に何らかの部位が接続していた痕跡を残す。本来の形態や用途は不明だが、今回は鉢の項目で紹介する。釉薬は飴釉単掛け。

6. 急須（第34図11、12）

11は洋梨形に近い下膨れの体部を持つもので、釉薬は透明釉単掛け。12は最大径が腰部付近に来る橢円形の胴部を持つもので、外底に3個の脚部を貼付する。釉薬は白化粧の上に透明釉を単掛けする。いずれも外面に文様を描く。

7. 蓋（第34図13）

大形の急須に対応すると考えられるもの。釉薬は黒釉単掛け。

8. 火入（第34図14）

腰部に稜を持ち直線的に立ち上がるるもの。釉薬は白化粧+透明釉単掛け。

9. 火炉（第34図15）

丸みを帯びた腰部からやや直線的に立ち上がり、口縁部に半円形の火窓を設ける。釉薬は褐釉単掛け。

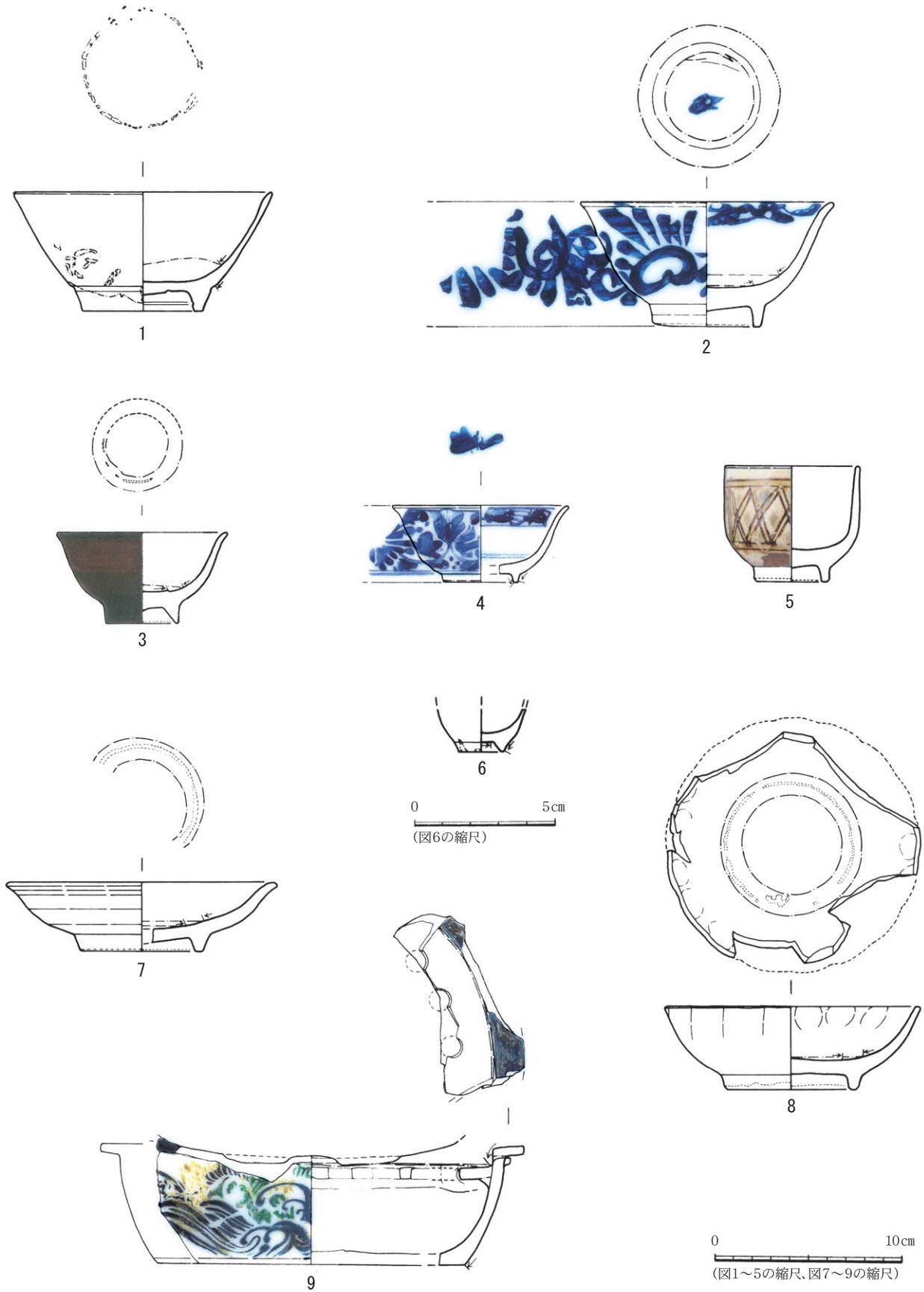
第32表 沖縄産施釉陶器出土状況

第33表 沖縄産施釉陶器観察一覧

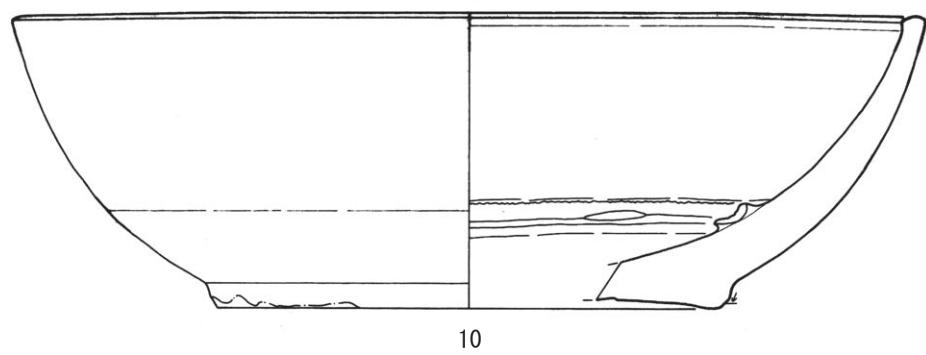
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第33図 図版37 1	碗	口縁部～ 底部	13.8 6.4 6.5	胎土は褐色で細かい。灰釉を内面胴部から外面胴部まで施釉。内底に焼成時の痕跡(砂目)が残る。	二階殿 表採及び 表土層
第33図 図版37 2	碗	口縁部～ 底部	13.5 6.65 5.8	胎土は褐色で細かい。白化粧+透明釉を全体に施釉後、内底を蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は釉剥ぎ後にアルミナを塗布。両面に呉須で花唐草文、内底に呉須で点文を描く。	継世門 埋土
第33図 図版37 3	小碗	口縁部～ 底部	9.1 4.85 3.8	胎土は灰色で細かい。褐釉を外面、白化粧+透明釉を内面に施釉後、内底を蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は釉剥ぎ後にアルミナを塗布。	二階殿 表採及び 表土層
第33図 図版37 4	小碗	口縁部～ 底部	9.5 4.1 4.0	胎土は褐色で細かい。白化粧+透明釉を全体に施釉後、畠付を釉剥ぎ。両面に呉須で花唐草文、内底に呉須で花文を描く。清朝磁器の模倣か。	大台所 表採及び 表土層
第33図 図版37 5	小碗	口縁部～ 底部	7.2 6.2 4.0	胎土は褐色で細かい。白化粧+透明釉を全体に施釉後、畠付を釉剥ぎ(その後アルミナを塗布)。外面に線彫りと呉須・飴釉で格子文を描く。	継世門 埋土
第33図 図版37 6	小杯	底部	— — 1.6	胎土は灰色で緻密。透明釉を内底から外面腰部まで施釉。	二階殿 表採及び 表土層
第33図 図版37 7	皿	口縁部～ 底部	14.4 3.7 6.6	胎土は褐色で細かい。白化粧+透明釉を全体に施釉後、内底を蛇の目状に釉剥ぎ。畠付は釉剥ぎ後にアルミナを塗布。内底露胎部にアルミナが付着。	二階殿 表採及び 表土層
第33図 図版37 8	皿	口縁部～ 底部	13.6 4.45 7.15	胎土は褐色で細かい。外面に褐釉、内面に白化粧+透明釉を施釉後、内底を蛇の目状に釉剥ぎ。畠付は釉剥ぎ後にアルミナを塗布。内底露胎部にアルミナが付着。	二階殿 表採及び 表土層
第33図 図版37 9	鉢	口縁部～ 底部	(22.6) — 16.3	胎土は灰色で緻密。透明釉を外底際から内面(中仕切り上面)まで施釉。外面に青・赤・黄の上絵付けで波濤文を描く。	二階殿 表採及び 表土層
第34図 図版38 10	鉢	口縁部～ 底部	36.4 11.7 20.0	胎土は褐色で細かい。飴釉を内底から高台外面まで施釉。内底に何らかの接続跡を残すが詳細は不明。	二階殿 表採及び 表土層
第34図 図版38 11	急須	口縁部	— — —	胎土は白色で緻密。透明釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。外面に呉須で波濤文?を描く。	二階殿 黒土層
第34図 図版38 12	急須	底部	— — 8.6	胎土は褐色で細かい。白化粧を全面に施した後、透明釉を外面に施釉。外面に線彫りと呉須・飴釉で格子文を描く。	二階殿 表採及び 表土層
第34図 図版38 13	蓋	甲～端	12.1 4.4 9.3	胎土は褐色で細かい。黒釉を蓋甲全体から端部内面まで施釉。	二階殿 表採及び 表土層
第34図 図版38 14	火入	口縁部～ 底部	9.6 8.35 6.6	胎土は褐色で細かい。白化粧を全体に施した後、透明釉を外面口縁部～腰部まで施釉し、呉須を口紅状に施す。口唇部の残存状態から使用頻度の高さが窺える。	二階殿 表採及び 表土層
第34図 図版38 15	火炉	口縁部～ 底部	26.5 17.4 13.6	胎土は褐色で細かい。褐色を内面口縁部から外面まで施釉(表面は鮫肌状を呈する)。外底にアルミナが付着。	二階殿 表採及び 表土層

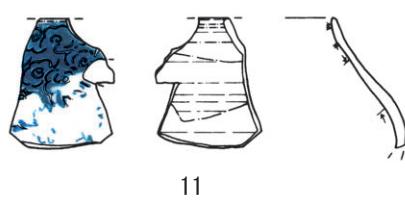
注 「-」:計測不可



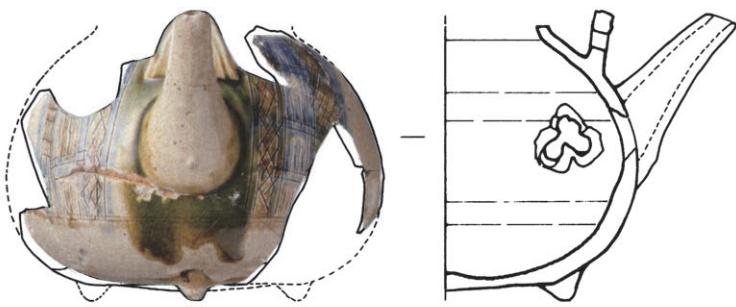
第33図 沖縄産施釉陶器（1）



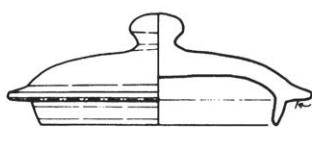
10



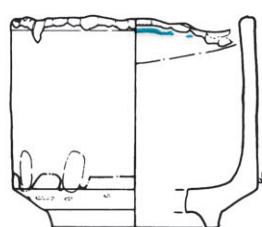
11



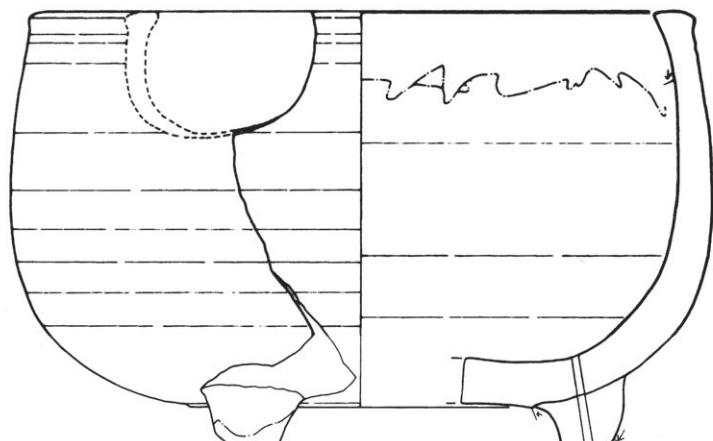
12



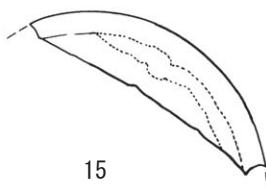
13



14



15



16



第34図 沖縄産施釉陶器（2）

第9節 沖縄産無釉陶器

方言で「荒焼（アラヤチ）」と称される一群で、主に高温で焼成された無釉の焼締陶器を指す場合が多いが、一部には泥釉やマンガン釉が施釉されるもの、または焼成温度の関係から軟質（触ると粉末が付着する）の製品もみられる。様々な器種が確認されているが、今回は鉢・壺・甕などの大型品が特に多く出土していることから、器種の偏りが調査区の性格に關係する可能性もある。以下、図化した器種の特徴を列記し、個々の所見は第34表に示す。

1. 皿（第35図1）

平底の底部から斜上方に立ち上がる直口口縁の小皿。燈明皿の用途が考えられる。

2. 火炉（第35図2）

肩部で内側に屈曲する器形で、外面に方形の把手を貼付する。

3. 瓶（第35図3）

口縁部を図化した。胴部以下の器形及び用途は不明だが、おそらく茄子形の胴部を持つ徳利と考えられる。

4. 蓋（第35図4、5）

円盤形の蓋甲に滑り止めを設けたもので、壺に対応すると考えられる。

5. 播鉢（第35図6）

平底の底部から斜上方に立ち上がるもので、口縁部直下に抉りを入れて稜を形成する。内面には全体的に播目を施すが、口縁部はナデ消される。

6. 鉢（第35図7、8、第36図9）

口縁部外面に波状の突帯を貼付するもの7や、口縁部を外側に折り曲げ鎧縁状を呈するもの8、口縁部の断面形態がバチ形を呈するもの9などが出土している。

7. 壺（第36図10、11）

10は肩の張りが弱く、砲弾形の胴部を持つ大形の三耳壺で、口縁部が玉縁状に肥厚する。

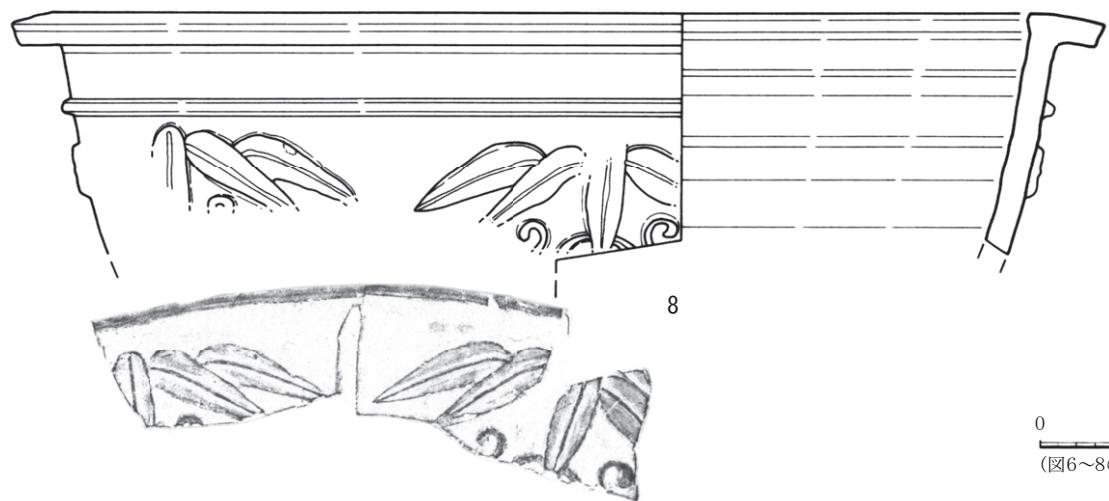
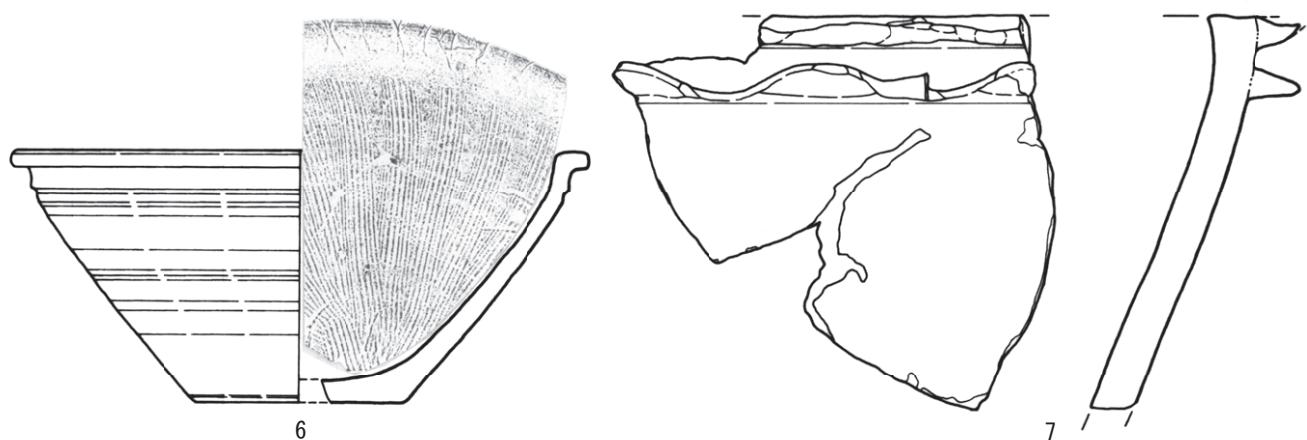
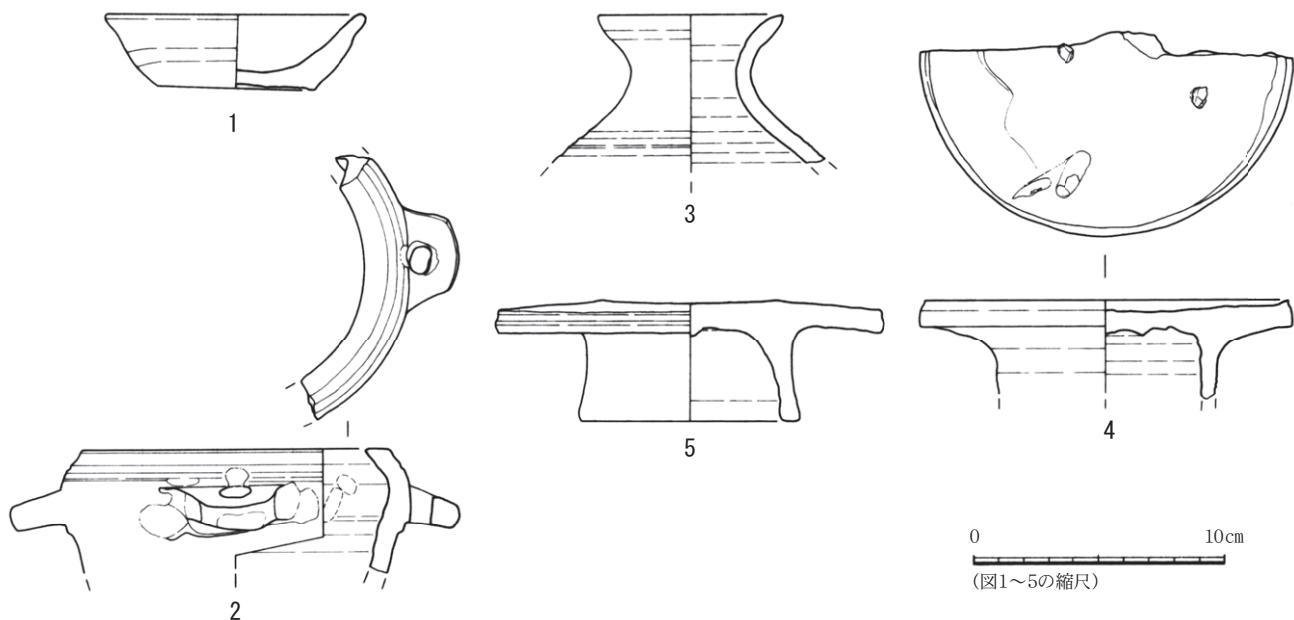
11は底部資料で器形の詳細は不明だが、全般的な特徴は10と類似すると考えられる。

第34表 沖縄産無釉陶器観察一覧

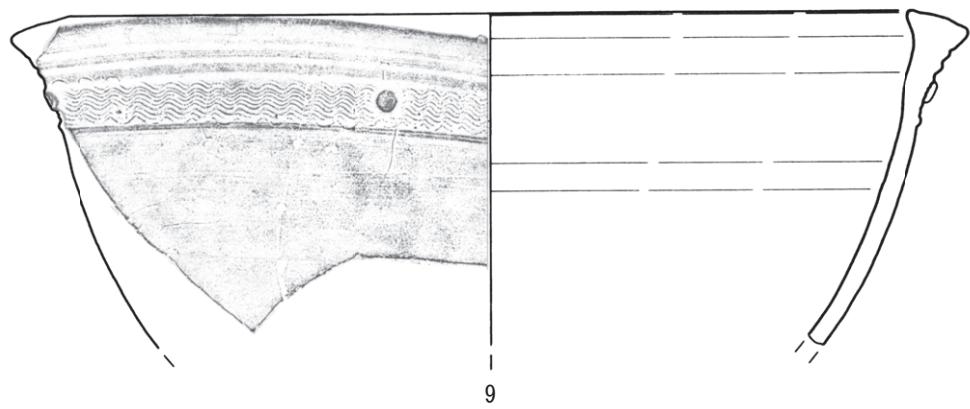
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第35図 図版39 1	皿	口縁部 ～底部	10.5 3.1 6.3	胎土は褐色で細かい。外面に回転調整の痕跡が残る。	出土地 不明
第35図 図版39 2	火炉	口縁部	12.3 — —	胎土は褐色で細かい。口縁部外面を階段状に成形し、肩部に板状の把手を貼付。	二階殿 表採及び 表土層
第35図 図版39 3	瓶	口縁部	7.4 — —	胎土は褐色で細かい。外面に陰圈線を数条巡らせる。	出土地 不明
第35図 図版39 4	蓋	甲～袴	14.9 — —	胎土は褐色で細かい。外面に回転調整の痕跡が残る。蓋甲上面に焼成時の痕跡(目跡)が3ヶ所残る。	大台所 表採及び 表土層
第35図 図版39 5	蓋	甲～袴	15.6 4.8 8.8	胎土は褐色で細かい。外面に回転調整の痕跡が残る。	二階殿 表採及び 表土層
第35図 図版39 6	擂鉢	口縁部 ～底部	30.7 13.35 11.0	胎土は褐色で細かい。外面に回転調整の痕跡が残る。内面に9本単位の櫛目を密に施し、櫛目の端は口縁部でナデ消される。焼成良好。	二階殿 表採及び 表土層
第35図 図版39 7	鉢	口縁部	— — —	胎土は褐色で細かい。内面に回転調整の痕跡が残る。外面口縁部に波状の突帯を2条貼付。	二階殿 表採及び 表土層
第35図 図版39 8	鉢	口縁部	58.0 — —	胎土は褐色で細かい。内面に回転調整の痕跡が残る。外面に圈線と草文を貼付。焼成良好。	二階殿 表採及び 表土層
第36図 図版40 9	鉢	口縁部	50.8 — —	胎土は褐色で細かい。内面に回転調整の痕跡が残る。外面に貼付の圈線+丸文と櫛描きの波状文を描く。	繼世門 建物1
第36図 図版40 10	壺	口縁部	15.0 — —	胎土は褐色で細かい。内面に回転調整の痕跡が明瞭に残る。肩部に陰圈線を1条巡らし、その上に紐状の横耳を貼付(三耳壺と推定)。焼成良好。	二階殿 表採及び 表土層
第36図 図版40 11	壺	底部	— — 20.8	胎土は褐色で細かい。内面に回転調整の痕跡が明瞭に残る。	二階殿 表採及び 表土層

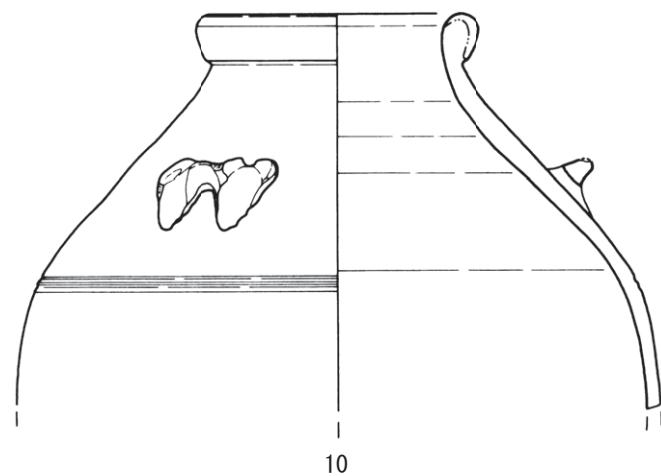
注 「—」:計測不可



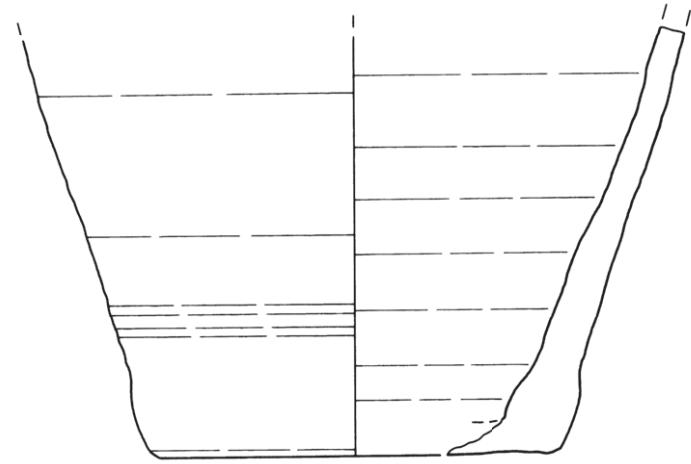
第35図 沖縄産無釉陶器（1）



9



10



11



0 10 cm

第36図 沖縄産無釉陶器（2）

第10節 陶質土器

方言で「赤物（アカムン）」「カマグワーヤチ」などと称される軟質の土器群である。鍋や土瓶のような直接火にかける道具を主体とするため、一般に焼成不良で触ると粉末が付着するものが多い。総数239点出土しており、器種は火炉・鍋・焙烙・鉢・燈明皿・土瓶・竈などが確認されている。以下に各器種の特徴を記し、個々の詳細は観察表に示す。

1. 火炉（第37図1～5）

胴部が球形を呈するもので、口縁部内面に三角形の器物受を持ち、胴部外面に板状の把手を貼付する。外面に白化粧土を用いて横線を数条巡らせるものもある。

2. 蓋（第37図6～10）

6と7は鍋に対応するもので、器形は皿を伏せた形を呈する。8～10は土瓶に対応すると考えられるもので、端部に向かって傾斜する蓋甲を有する。

3. 鍋（第37図13）

胴部が球形を呈し口縁部を外側に折り曲げるもので、口縁部外面に紐状の把手を貼付する。方言で「サークー」と称される資料である。

4. 焙烙（第37図14）

俗にフライパン状製品とも称される平底の浅鍋である。

5. 土瓶（第37図11、12、第38図15）

サイズや器形で異なる資料が多数みられるものの、いずれも直接火にかける製品であるため土瓶として扱う。基本的には腰部付近に最大径を持つ橢円形または算玉形の胴部を持ち、肩部に板状の把手を貼付する。

6. 鉢（第38図16）

平底の底部から斜上方に立ち上がり口縁部が内彎するもので、方言で「ミジクブサー」と称される。

7. 皿（第38図17）

平底の底部から斜上方に立ち上がるもので、燈明皿の用途が考えられる。

8. 竈（第38図18）

外面が肥厚し内面に器物受を貼付した口縁部を図化した。移動式の竈と考えられる。

第35表 陶質土器出土状況

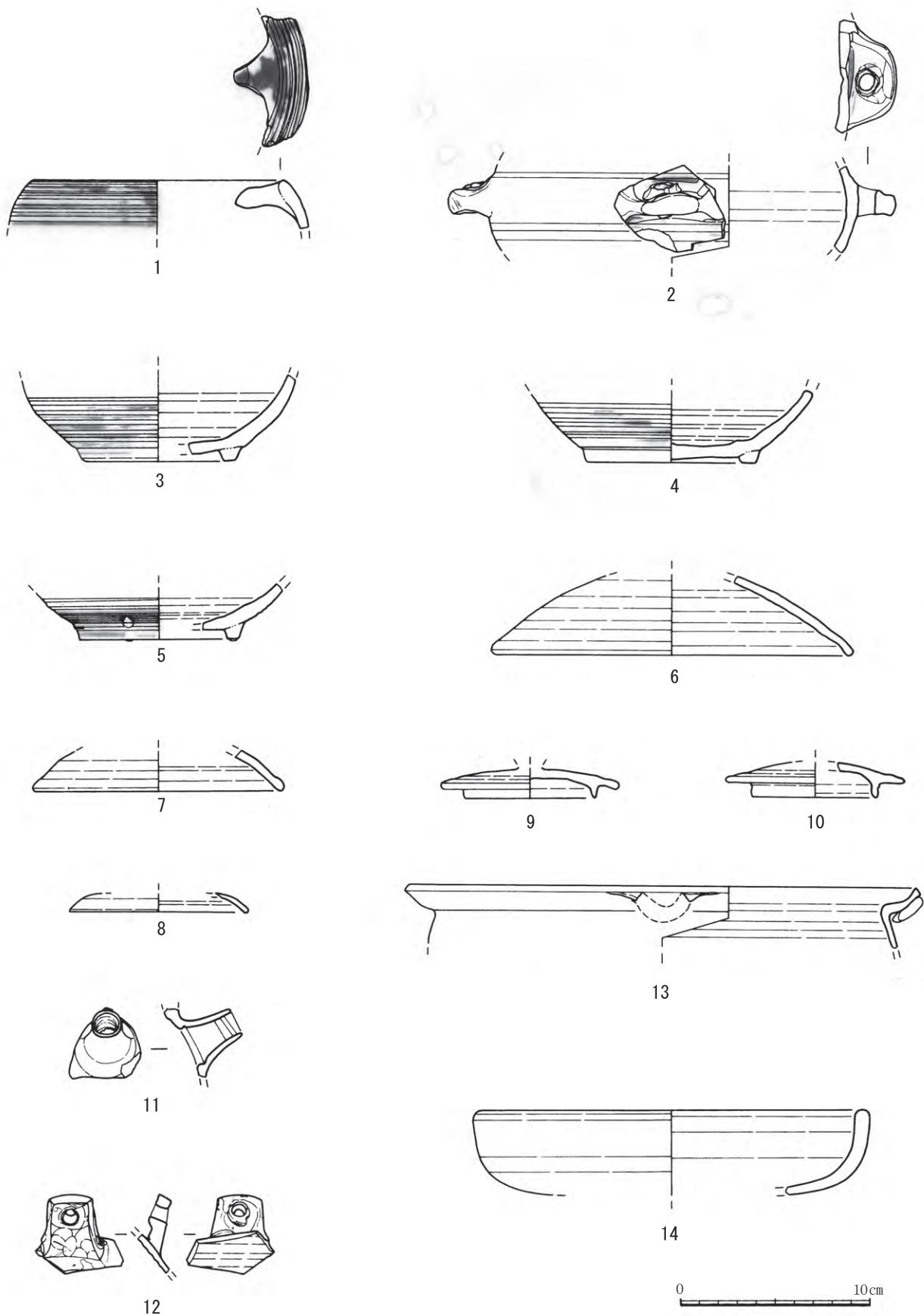
器種・部位	火炉			鍋			急須			鉢			袋物			土瓶			竈			羽口			焰口			器種不明			合計
	底部	口縁部	把手	底部	口縁部	把手	底部	口縁部	把手	蓋	底部	口縁部	把手	蓋	底部	口縁部	把手	蓋	底部	口縁部	把手	蓋	底部	口縁部	把手	蓋	底部	口縁部	把手	蓋	
出土地																															
表採及び表土層	1	9	13	7	1	11	16	8	1	1	2	4		2	3	1	9	2	3	19	1	1	7	1	1	29	1	1	5	161	
瓦礫層		1				1	1																							4	
黒土層																															2
赤褐色土層								1																							2
褐色土層																															1
砂道																			1												2
埋土			1																												1
料理石列																															1
表採及び表土層																															2
埋土																															1
瓦礫層																															3
コーラル層																															2
黒土層																															3
赤褐色土層																															1
建物1																															2
表採及び表土層																															16
埋土																															23
コーラル層																															1
赤褐色土層																															5
建物1																															2
東西石列																															2
南トレンチ																															2
出土地不明																															2
合計	1	12	21	9	1	13	29	17	1	5	2	2	5	2	2	3	3	10	2	4	27	2	1	8	2	1	1	40	1	1	7

第36表 陶質土器観察一覧

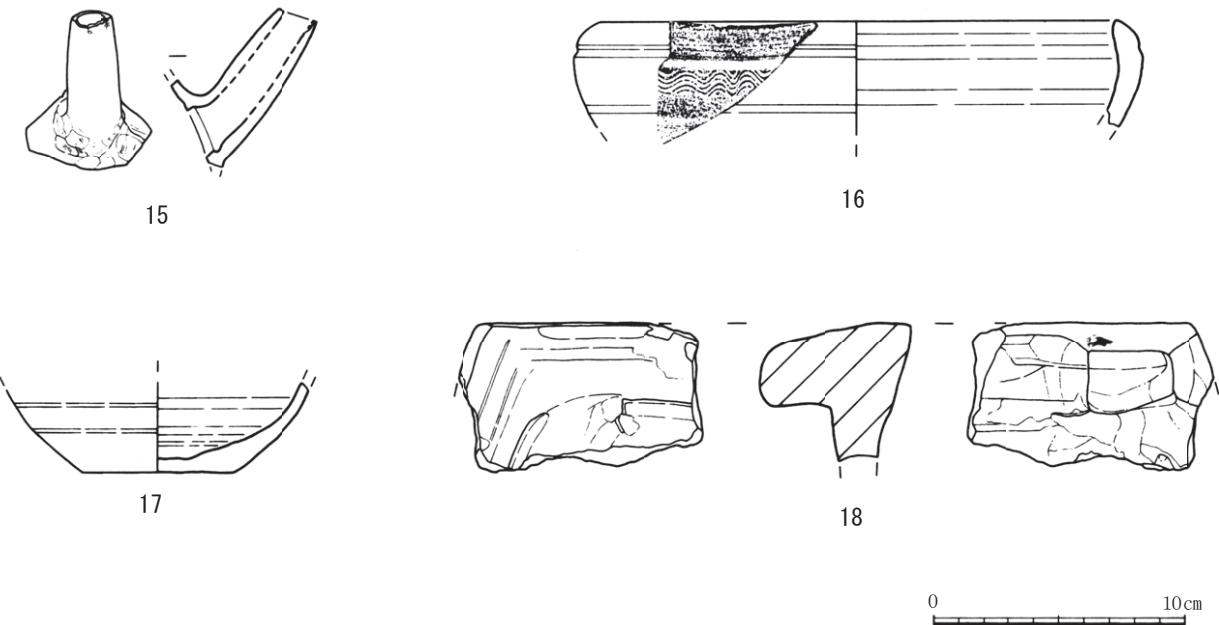
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第37図 図版41 1	火炉	口縁部	13.3 — —	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。外面に白化粧土で横線を数条巡らせる。	二階殿 表採及び 表土層
第37図 図版41 2	火炉	胴部	— — —	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。外面に板状の把手(中央に10mmの孔を穿つ)を貼付。	繼世門 表採及び 表土層
第37図 図版41 3	火炉	底部	— — 8.2	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。外面に白化粧土で横線を数条巡らせる。	大台所 表採及び 表土層
第37図 図版41 4	火炉	底部	— — 9.0	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。外面に白化粧土で横線を数条巡らせるが剥落が著しい。	二階殿 表採及び 表土層
第37図 図版41 5	火炉	底部	— — 8.4	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。外面に白化粧土で横線を数条巡らせる。	二階殿 表採及び 表土層
第37図 図版41 6	蓋	庇	縁径19.0	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。	二階殿 表採及び 表土層
第37図 図版41 7	蓋	庇	端部径13.2	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。	繼世門 埋土
第37図 図版41 8	蓋	庇	端部径9.4	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。	二階殿 表採及び 表土層
第37図 図版41 9	蓋	庇	端部径9.4 底径6.8	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。	二階殿 表採及び 表土層
第37図 図版41 10	蓋	庇～袴	縁径9.4 底径6.7	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。	二階殿 表採及び 表土層
第37図 図版41 11	急須	胴部	— — —	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。器面上に20mmの穴を穿ち、その上に全長3cmの注口を貼付。	二階殿 表採及び 表土層
第37図 図版41 12	急須	胴部	— — —	両面に回転調整の痕跡が残る。外面に板状の把手(端部中央に9mmの孔を穿つ)を貼付。	二階殿 表採及び 表土層
第37図 図版41 13	鍋	口縁部	30.7 — —	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。外面に紐状の把手を貼付。	二階殿 表採及び 表土層
第37図 図版41 14	焙烙	口縁部	20.9 — —	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。	二階殿 黒土層
第38図 図版41 15	土瓶	胴部	— — —	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。器面上に20mmの穴を穿ち、その上に全長5cmの注口を貼付。	二階殿 表採及び 表土層
第38図 図版41 16	鉢	口縁部	20.6 — —	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。外面に陰圏線+櫛描きの波状文を描く。	二階殿 表採及び 表土層
第38図 図版41 17	皿	底部	— — 6.0	胎土は橙色で細かい。両面に回転調整の痕跡が残る。小形の袋物(壺など)の可能性もある。	二階殿 表採及び 表土層
第38図 図版41 18	竈	口縁部	30.7 — —	胎土は橙色で細かい。外面に突帯、内面に器物受を貼付。	二階殿 表採及び 表土層

注「-」:計測不可



第37図 陶質土器 (1) 火炉・蓋・急須・鍋・焙烙



第38図 陶質土器（2）土瓶・鉢・皿・竈

第11節 瓦質土器

総数 398 点出土しており、うち残存状態の良好な資料を第39～41図に図示した。今回最も多く確認されている製品は円盤形または隅丸方形を呈する蓋で、その他には植木鉢や擂鉢などこれまで多数の出土例がみられる器種や、欄干の部材といった希少な資料が含まれる。以下、製品ごとに特徴を列記し、個々の観察所見は第37表に示す。

1. 植木鉢（第39図 1～6、第40図 7・9）

中央に孔の穿たれた平底の底部からやや丸みを帯びて立ち上がるもので、口縁部をわずかに内彎させる。口縁部の外面に縄目文を数条巡らせ、その間に牡丹唐草文を施す 1～7。またこれ以外に、盆栽用の鉢と考えられる箱形の容器 9 が出土している。

2. 擂鉢（第40図 8、10、11）

全体的な器形は備前焼の擂鉢に類似するもので、平底の底部から斜上方に立ち上がり、口縁部をやや内傾させる。内面には間隔の空いた擂目が施される。

3. 蓋（第41図 13～16）

全形が円盤形 13～15 または隅丸方形 16 を呈するもので、撮みや滑り止めを持たない板状の蓋になると考へられる。

4. 欄干（第41図 17、18）

建築部材であるが今回は本節で扱う。17 は親柱の上に取り付けられる逆蓮頭で、内部は空洞に仕上げられている。18 は筒状に成形された製品で、手摺に相当すると考へられる。

第37表 瓦質土器出土状況

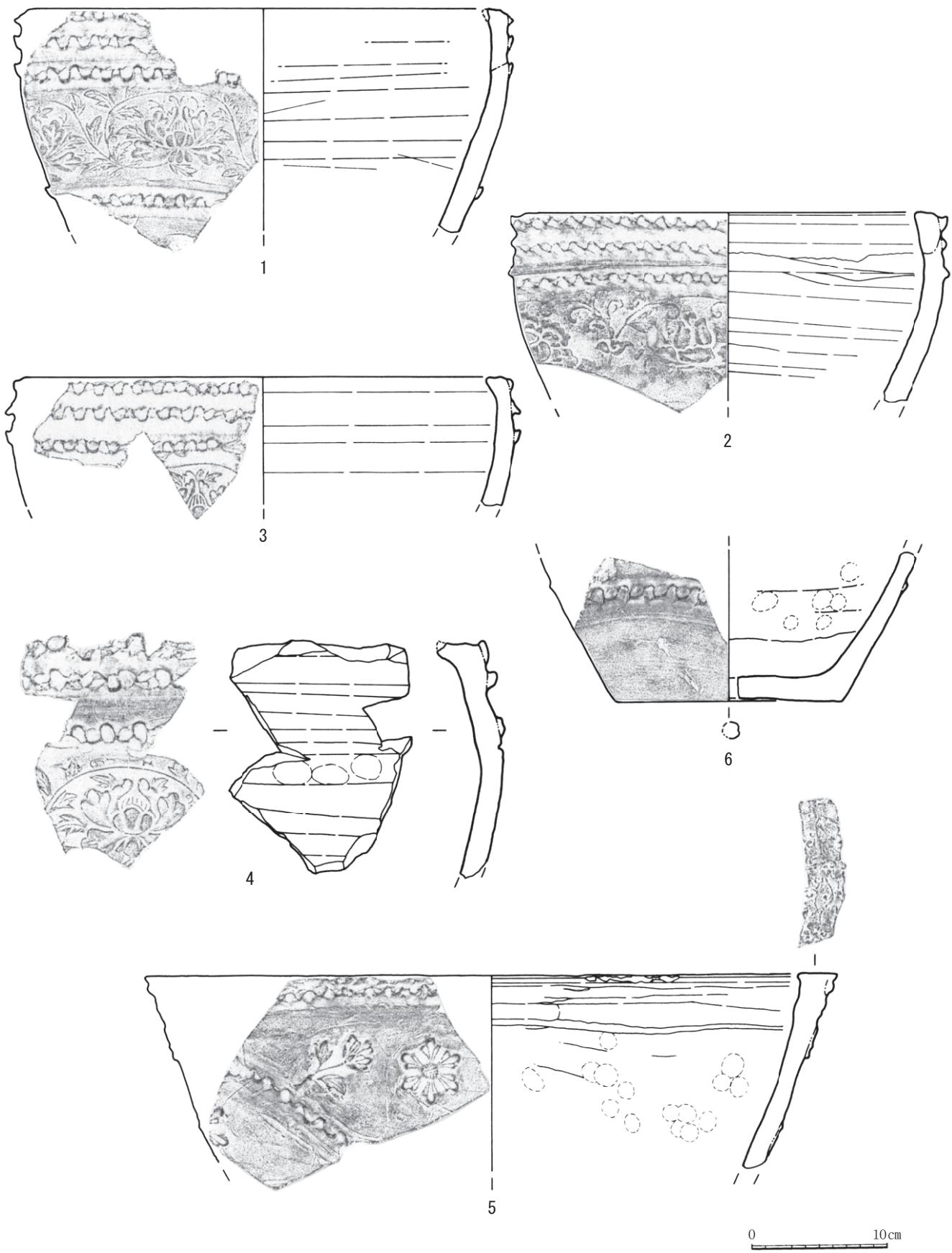
器種・部位 出土地	鉢		擂鉢		植木鉢			箱形容器		蓋		欄干		器種不明	合計
	口縁部	底部	口縁部	口縁部 底部	口縁部	胴部	底部	底部	甲部	縁部	逆蓮頭	手摺	部位不明		
二階殿	表採及び表土層			1	1	2	5	1	1	35	45			5	96
	埋土			1						3	1	1		6	
	瓦礫層					1	1				1			2	5
	黒土層								1	1	1			3	
	赤褐色土層									1				1	
	褐色土層			1		1				3	7			12	
	中層						1							1	
	下層								2	3				5	
料理座	南トレンチ					1				1				2	
	埋土									7	16			23	
	コーラル層		1			1	1			2	2			7	
大台所	石列						1			3	7	1		12	
	表採及び表土層						1		1	7	7			16	
	瓦礫層						2	2		1				5	
	コーラル層						3				2			5	
	黒土層						2			1	1			4	
	赤褐色土層				1	1				2	3	1		8	
	東西石列						1			2	2	1		6	
	南トレンチ	2	2			1	3			4	5			17	
継世門	中央トレンチ						1			1	1			3	
	表採及び表土層	2	1			2	3			5	3		1	17	
	埋土					2	3				1			6	
	コーラル層					2	1			45	35			83	
	黒土層					2	1							3	
	褐色土層					1					23			24	
	建物1												1	1	
	東西石列	1	1			1				3	5			11	
	南トレンチ							1			3			4	
出土地不明				1						6	4		1	12	
合 計		5	5	4	2	18	29	5	3	135	178	1	3	10	398

第38表 瓦質土器観察一覧

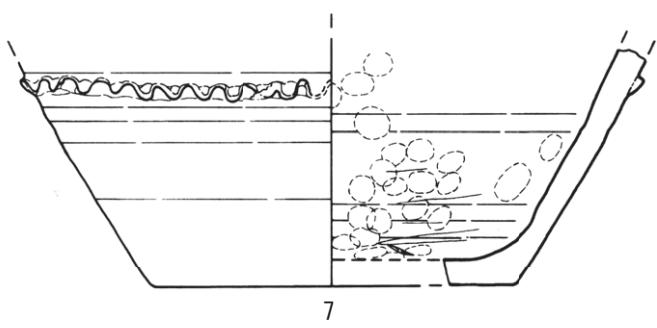
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第39図 図版42 1	鉢	口縁部	34.8 — —	胎土は灰色で細かい。内面及び断面に成形時の痕跡が残る。外面に貼付の縄目文4条+型押しの牡丹唐草文を施す。	大台所 南トレンチ
第39図 図版42 2	鉢	口縁部	32.2 — —	胎土は灰色で細かい。内面及び断面に成形時の痕跡が残る。外面に貼付の縄目文3条+型押しの牡丹唐草文を施す。	繼世門 表採及び 表土層
第39図 図版42 3	鉢	口縁部	36.9 — —	胎土は灰色で細かい。内面及び断面に成形時の痕跡が残る。外面に貼付の縄目文3条+型押しの牡丹唐草文を施す。	大台所 南トレンチ
第39図 図版42 4	鉢	口縁部	— — —	胎土は灰色で細かい。内面及び断面に成形時の痕跡が残る。外面に貼付の縄目文3条+型押しの牡丹唐草文を施す。	繼世門 東西石列
第39図 図版42 5	鉢	口縁部	51.3 — —	胎土は灰色で細かい。内面及び断面に成形時の痕跡が残る。外面に貼付の縄目文2条+型押しの牡丹唐草文、口唇部に型押しの唐草文を施す。	繼世門 表採及び 表土層
第39図 図版42 6	鉢	底部	— — 16.8	胎土は灰色で細かい。内面及び断面に成形時の痕跡が残る。外面に貼付の縄目文を1条施す。	大台所 南トレンチ
第40図 図版43 7	鉢	底部	— — 19.2	胎土は灰色で細かい。内面及び断面に成形時の痕跡が残る。外面に貼付の縄目文を1条施す。	大台所 南トレンチ
第40図 図版43 8	擂鉢	口縁部	30.8 — —	胎土は灰色で細かい。内面及び断面に成形時の痕跡が残る。	二階殿 褐色土層
第40図 図版43 9	鉢	口縁部	— — —	胎土は灰色で細かい。外面に突帯と花文を貼付する。	繼世門 コーラル層
第40図 図版43 10	擂鉢	口縁部～ 底部	32.3 12.5 21.2	胎土は灰色で細かい。内外面及び断面に成形時の痕跡が残る。内面に5本単位の櫛目を間隔を空けて施す。	大台所 赤褐色土層
第40図 図版43 11	擂鉢	口縁部～ 底部	25.4 12.5 13.8	胎土は灰色で細かい。内外面及び断面に成形時の痕跡が残る。内面に5本単位の櫛目を間隔を空けて施す。	二階殿 表採及び 表土層
第40図 図版43 12	鉢	底部	— — 36.2	胎土は灰色で細かい。内外面及び断面に成形時の痕跡が残る。	繼世門 表採及び 表土層
第41図 図版44 13	蓋	底	直径21.6	胎土は灰色で細かい。両面にヘラ状工具の痕跡が残る。	繼世門 南トレンチ
第41図 図版44 14	蓋	底	直径20.0	胎土は灰色で細かい。両面にヘラ状工具の痕跡が残る。	料理座 石列
第41図 図版44 15	蓋	底	直径14.4	胎土は灰色で細かい。両面にヘラ状工具の痕跡が残る。	繼世門 コーラル層
第41図 図版44 16	蓋	底	— — —	胎土は灰色で細かい。両面にヘラ状工具の痕跡が残る。	二階殿 表採及び 表土層
第41図 図版44 17	欄干	逆蓮頭	— — —	胎土は灰色で細かい。幅2cm程度の花弁を持つ逆蓮頭で、内側は空洞。	大台所 赤褐色土層
第41図 図版44 18	欄干	手摺	— — —	胎土は灰色で細かい。表面は滑らかに調整されている。内側は空洞。	大台所 東西石列

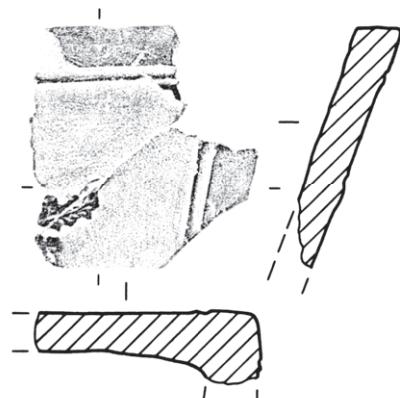
注 「-」:計測不可



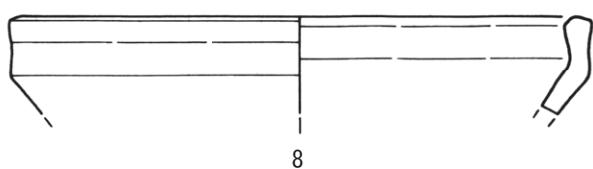
第39図 瓦質土器 (1) 鉢



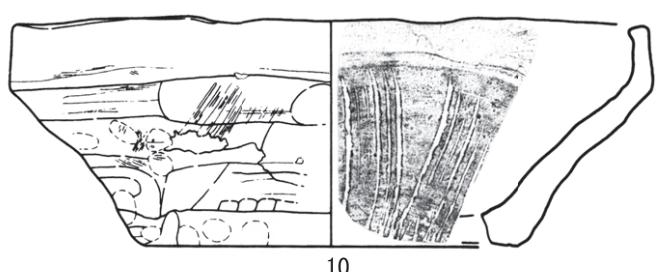
7



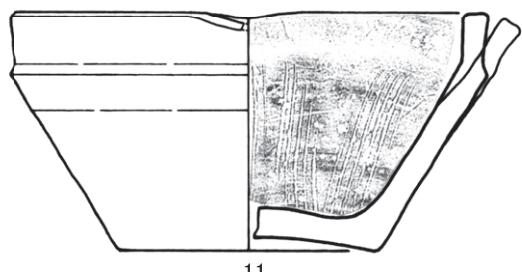
9



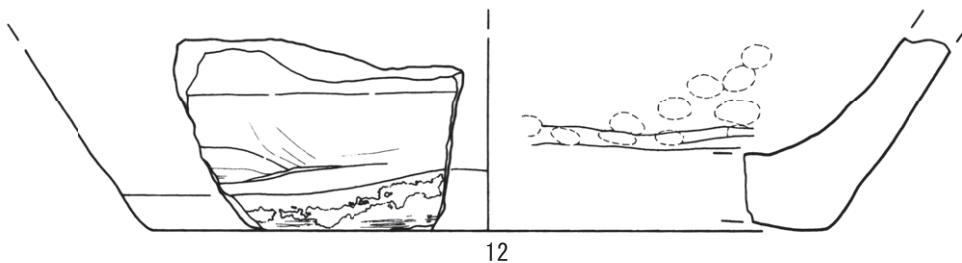
8



10



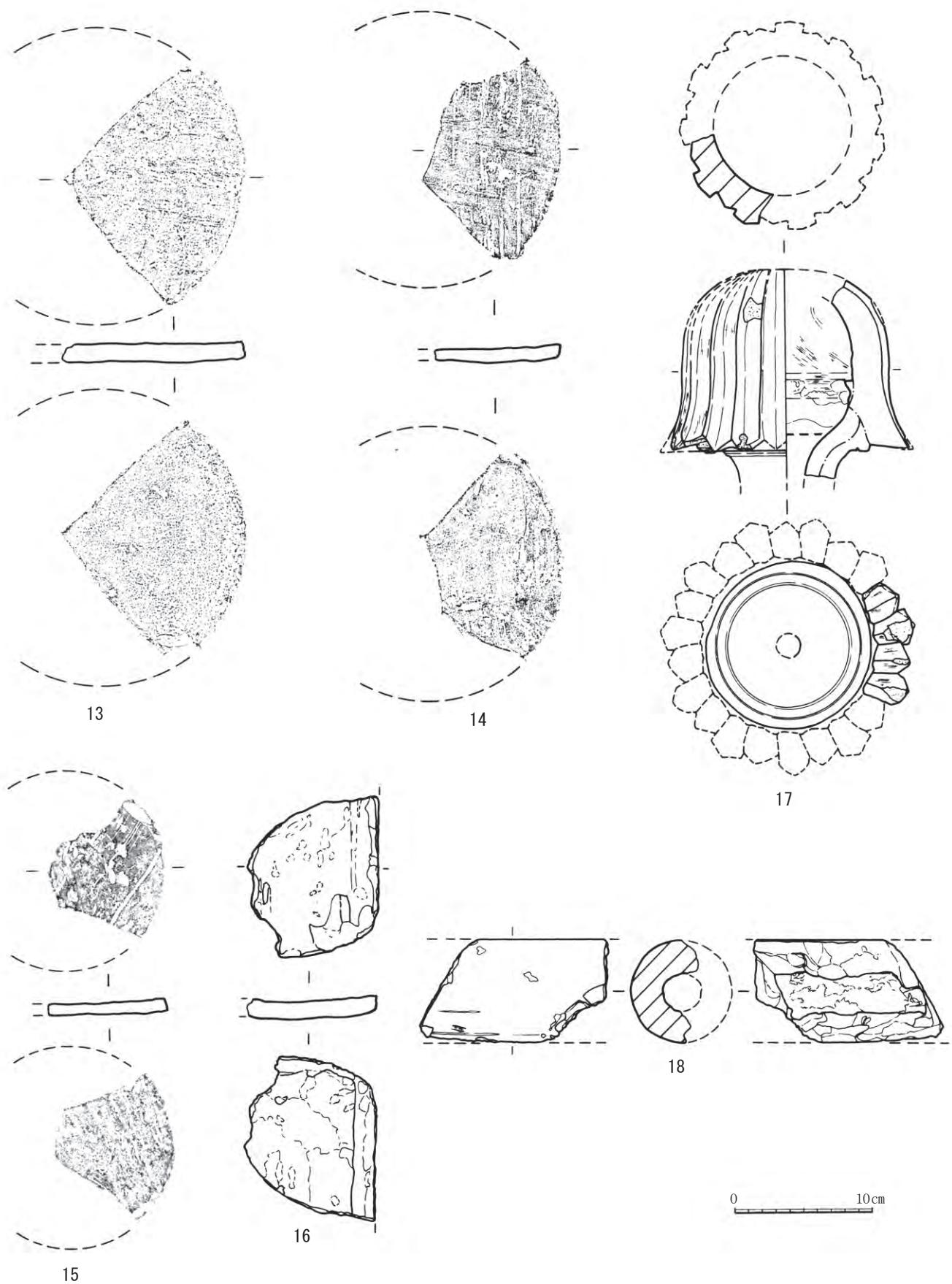
11



12

0 10 cm

第40図 瓦質土器（2）鉢



第41図 瓦質土器 (3) 蓋・欄干

第12節 土器

土器は総数80点出土している。器種は壺が主で、焼成は良好でかなり堅緻。また、薄手の資料が多く、様々な混和材を使っている。1点のみ近世の焙烙の把手部分が出土している。

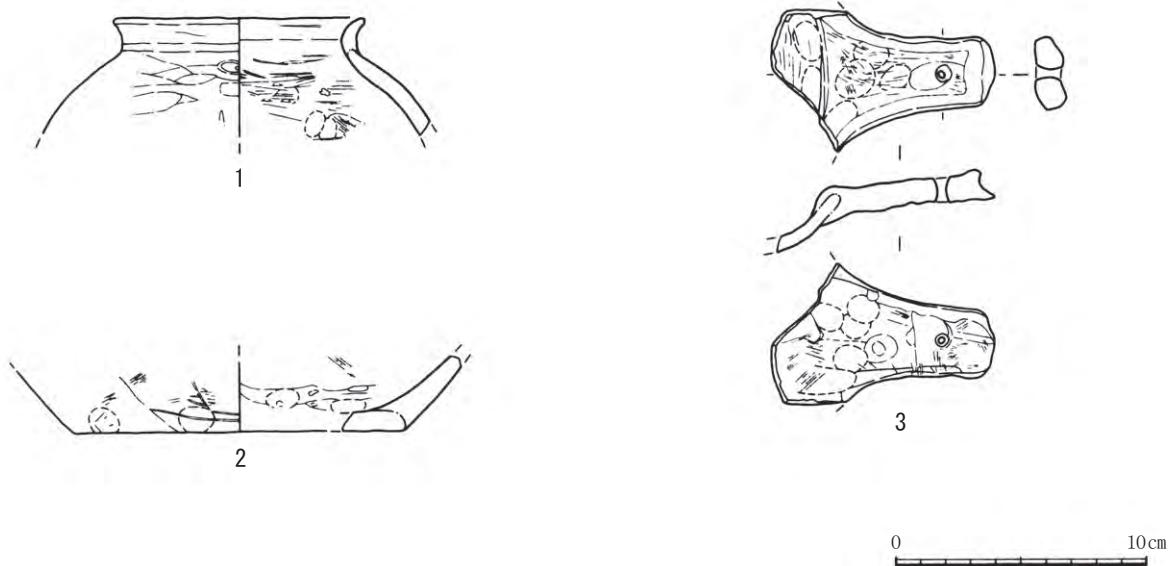
第39表 土器観察一覧

挿図番号 図版番号	種類 器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地	単位:cm
第42図 図版45 1	土器 壺	口縁部	10.0 — —	胎土は密で白色粗微粒子が大量に混入する。また、大きい気泡が見られる。器形は肩のやや張った外反口縁部を有する壺で、焼成は良好で堅緻。内面には指圧痕が見られる。外面は籠などの工具での調整痕が見られる。	二階殿 表採及び 表土層	
第42図 図版45 2	土器 不明	底部	— — 13.2	胎土はやや粗く、大粒の赤色粒や白色微砂、石英が多く混入する。形態は平底で胴部の立ち上がりは緩やかである。全体的にやや厚手である。外面は明褐色であるが、内面は黄褐色となる。	繼世門 赤褐色土層	
第42図 図版45 3	硬質土器 焙烙	把手	— — —	陶質で堅緻。孔が1ヵ所穿たれており、把手端部の側面は窪む。全体的に成形は粗い。体部は浅鉢状となる。	二階殿 表採及び 表土層	

注 「—」:計測不可

第40表 土器・硬質土器出土状況

出土地	器種・部位	土器										硬質土器					合計		
		壺		鉢		壺or鉢				器種不明			焙烙		器種不明				
		口 縁 部	頸 部	口 縁 部	胴 部	胴 部	(り × 胴) 印部 あ	底 部	胴 部	底 部	部 位 不 明	口 縁 部	把 手	底 部	胴 部	底 部			
二階殿	表採及び表土層	1	3	2	1	21		1	2	1		1	1	1	3		38		
	瓦礫層					2											2		
	褐色土層					2											2		
	磧道					1											1		
	南トレンチ		1												1		2		
料理座	石列					1									1		1		
	表採及び表土層					1											1		
	瓦礫層					1											1		
	黒土層					2											2		
	赤褐色土層					1											1		
	南トレンチ					3											3		
	中央トレンチ														1		1		
	表採及び表土層		1		11												12		
	三ツフル層				2												2		
	赤褐色土層				1												3		
	東西石列				2												2		
	南トレンチ				1												1		
	出土地不明				5												5		
	合計	1	4	3	1	57	73	1	2	2	1	1	1	1	3	1	80		
															7				



第42図 土器

第13節 屋瓦

瓦は出土遺物の中で最も多い。高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦が見られ、種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、軒瓦が主に見られる。高麗系瓦は丸瓦と平瓦が確認されており、何れも小片資料である。また、大和系瓦は丸瓦のみが確認されている。瓦の中でも大半を占めているのが明朝系瓦で軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、軒瓦が見られる。軒丸瓦の瓦当文は主に花柱を備え、花弁が全面的に広がるタイプと隅丸方形の花芯を上下に配し、花弁には多数の稜線を配するタイプの2種類に大別できる。他に丸瓦で孔が見られるものや平瓦で文様もしくは印が凹面に刻まれるもののが見られる。

第41表 屋瓦観察一覧（1）

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	部位	観察事項	出土地
第43図 図版46 1	高麗系 丸瓦		筒部径(推定):13.6cm。凸面には綾杉状の敲き文が見られる。凹面は凹凸が著しく、成形は粗い。明褐色。	二階殿 表採及び 表土層
第43図 図版46 2	高麗系 平瓦		凸面には綾杉状の敲き文が重なり、格子状となる。また、区画する縦横の凸線が見られる。凹面には布目が見られる。灰色。	繼世門 コーラル層
第43図 図版46 3	高麗系 平瓦		凸面には綾杉状の敲き文が重なり、格子状となる。また、区画する縦横の凸線が見られる。凹面には糸挽き痕が見られる。灰色。	繼世門 表採及び 表土層
第43図 図版46 4	大和系 丸瓦		凸面には廉縞状の文様が見られる。凹面の筒部は糸挽き痕が、玉縁部は凹凸が著しく見られる。灰色。	繼世門 コーラル層
第43図 図版46 5	大和系 丸瓦		凸面は丁寧に成形され、凹面は格子状に紐圧痕と糸挽き痕が見られる。側面の成形は丁寧に成される。褐色。	大台所 南トレンチ
第44図 図版47 6	明朝系 軒丸	瓦当	瓦当径:14.6cm。規格化された花文が見られる。花芯は格子状となり、その下部には横位で水平の稜線が見られる。丸瓦部との接合角度はほぼ直角。暗赤褐色。	二階殿 表採及び 表土層

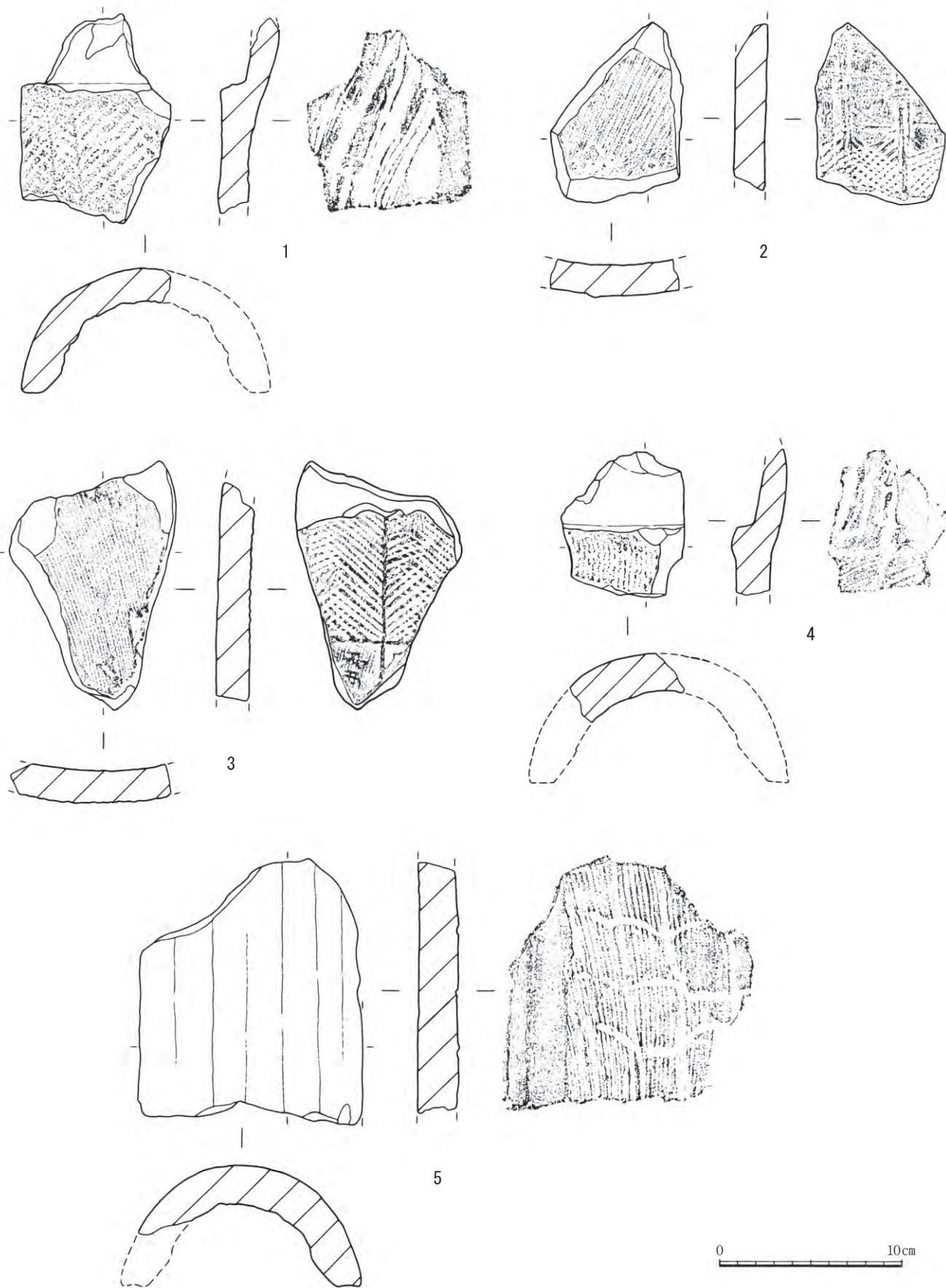
第42表 屋瓦・壁材出土状況

遺物	コンテナ サイズ*	コンテナ 数	重量 (kg)
高麗系瓦・大和系瓦・煉瓦・不明	S	2	10
明朝系瓦	軒丸	M	1
		L	16.3
	軒平	M	1
		L	17.24
	軒丸・軒平	M	1
		S	23.22
		M	18
	平瓦	L	56.8
		S	9.9
		M	87.27
	丸瓦	L	18.3
合 計		41	477.05
壁材	S	1	6.8
	M	1	12.1
合 計		2	18.9

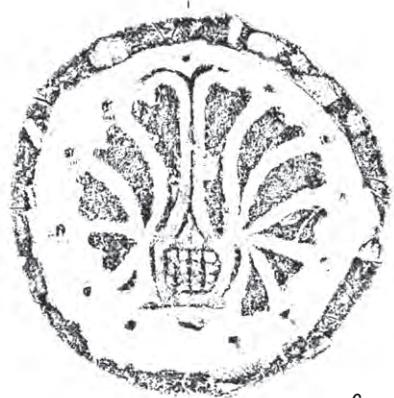
第43表 屋瓦観察一覧（2）

単位:cm

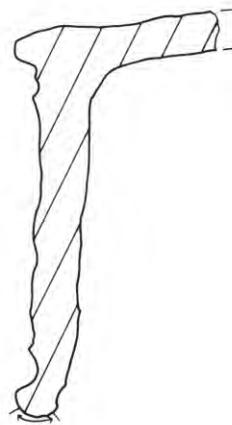
挿図番号 図版番号	種類	部位	観察事項	出土地
第44図 図版47 7	明朝系 軒丸	瓦当	瓦当径(推定):15.2cm。花芯内は格子状となり、その下部には横位でやや波打つ稜線が見られる。全体的に明褐色であるが一部、灰褐色となる。	二階殿 瓦礫層
第44図 図版47 8	明朝系 軒丸	瓦当	瓦当径:14.4cm。瓦当文の中央が不明瞭となる。成形が粗く、縁の凸線が歪となる。側面には漆喰が付着している。暗褐色。	二階殿 瓦礫層
第44図 図版47 9	明朝系 軒丸	瓦当	瓦当径(推定):14.3cm。花芯内は格子状となり、その下部には横位でやや波打つ稜線が見られる。全体的に胎土が粗く、細かい凹凸が見られる。赤褐色。	二階殿 表採及び 表土層
第44図 図版47 10	明朝系 軒丸	瓦当	瓦当径(推定):14.8cm。朱文は疎らで、花弁の構成は全体的に丸みを持たせており、花芯は隅丸方形となる。暗褐色。	二階殿 表採及び 表土層
第45図 図版48 11	明朝系 軒平	瓦当	縦(推定):11.7cm。横(推定):24.4cm。花芯内は格子状で、花弁は半円形状となる。両側の葉文は葉脈が突出し、棘状に飛び出す。灰色。	二階殿 下層
第45図 図版48 12	明朝系 軒平	瓦当	縦(推定):10.4cm。横(推定):24cm。上部の花芯内は格子状で、下部の花芯内は縦位の線が描かれる。花弁は半円形状となる。両側の葉文は葉脈が突出し、棘状に飛び出す。灰色。	二階殿 赤褐色土層
第45図 図版48 13	明朝系 軒平	瓦当	縦:11.2cm。横(推定):24.2cm。かなり明瞭に文様が見られる。文様の全体構成は11,12同じことから同汎を使用か。明褐色。	二階殿 表採及び 表土層
第45図 図版48 14	明朝系 軒平	瓦当	縦(推定):10.9cm。横(推定):24cm。文様の全体構成は11,12,13同じことから同汎を使用か。暗褐色。	二階殿 表採及び 表土層
第46図 図版49 15	明朝系 丸瓦		全長:32cm。玉縁:6.5cm。筒部:14.9cm。厚み:1.6cm。凹面は全体的に布目が見られ、面取り部は粗い仕上げとなっており、側面の仕上げも粗いが玉縁部側面は水平に面取りされる。灰色。	二階殿 表採及び 表土層
第46図 図版49 16	明朝系 丸瓦		全長:32.8cm。玉縁:5.8cm。筒部:14.9cm。厚み:約1.85cm。凹面は全体的に布目が見られ、面取り部は粗い仕上げとなっており、側面の仕上げも粗いが玉縁部側面は水平に面取りされる。暗褐色。	二階殿 表採及び 表土層
第47図 図版49 17	明朝系 丸瓦		凸面から凹面にかけて、直径約2cmの孔が穿たれている。凸面には漆喰が玉縁を除く範囲に全面塗布されており、凹面には布目が全面的に見られる。灰色。	二階殿 表採及び 表土層
第47図 図版49 18	明朝系 平瓦		狭端部:約19.8cm。長軸:約26.1cm。厚み:約1.5cm。凹面の成形は粗く、粘土継ぎの境が明瞭に見られる。凹面には全体的に大きく×状の沈線が見られる。凹面は黄褐色で凸面は暗赤褐色となるが焼き斑が見られる。	二階殿 黒土層
第48図 図版50 19	明朝系 平瓦		狭端長:18.3cm。広端長:20cm。長軸:25.4cm。厚み:1.3cm。端部と側面の成形はほとんど成されていない。凹面には漆喰が部分的に見られる。赤褐色。	繼世門 建物1
第48図 図版50 20	明朝系 平瓦		長軸:約25.1cm。厚み:約1.6cm。凹面の端部には、接続部としての段が見られる。また成形は粗く、漆喰が部分的に見られる。灰色。	二階殿 瓦礫層
第49図 図版50 21	明朝系 平瓦		長軸:約24.9cm。厚み:約1.5cm。凹面には布目が全面的に見られる。凸面の成形は丁寧に成されている。灰色。	二階殿 表採及び 表土層
第49図 図版50 22	不明		瓦質の破片資料。線彫りと籠彫りによる文様が見られるが、全体構成は不明。赤褐色。	大台所 赤褐色土層



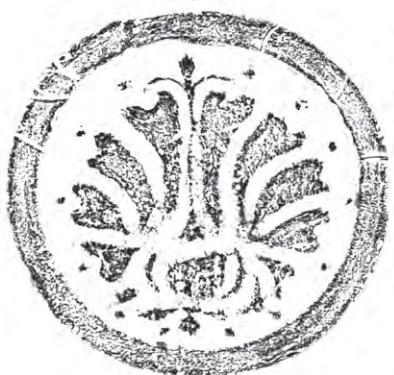
第43図 高麗系瓦：丸瓦、平瓦 大和系瓦：丸瓦



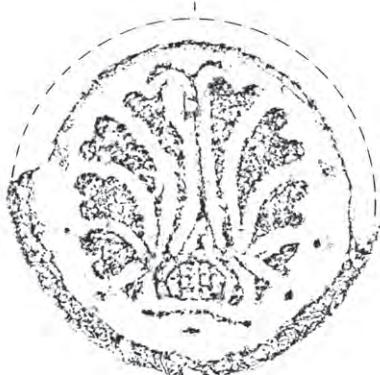
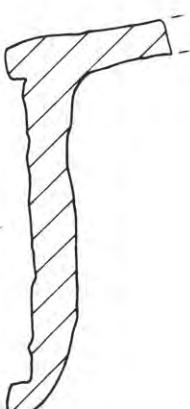
6



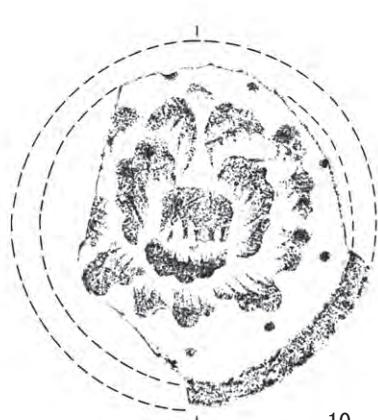
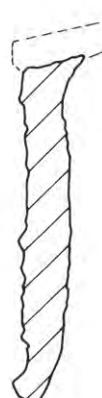
7



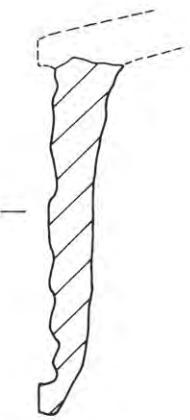
8



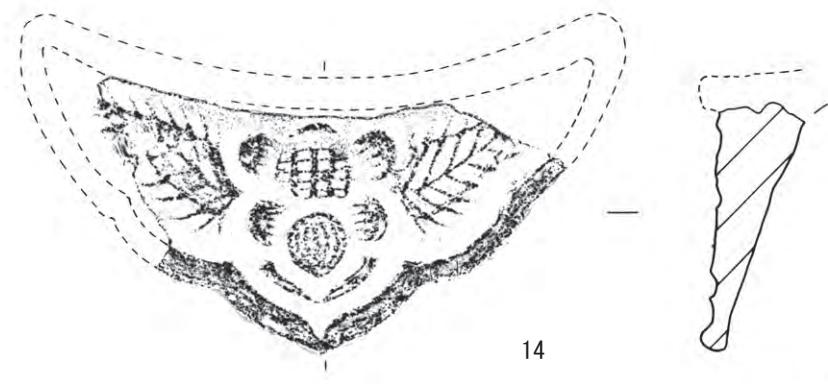
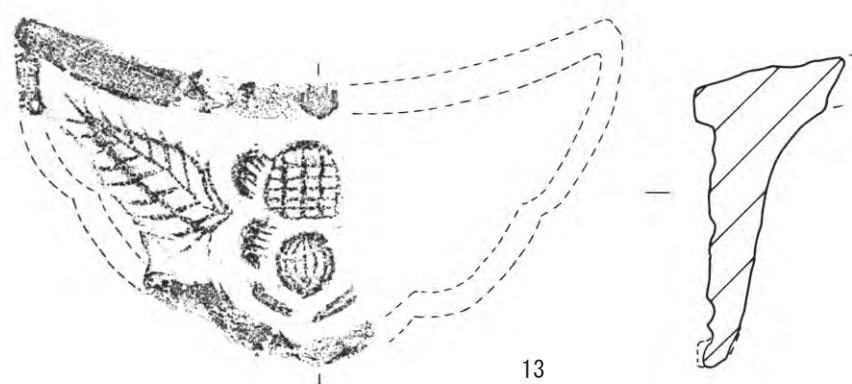
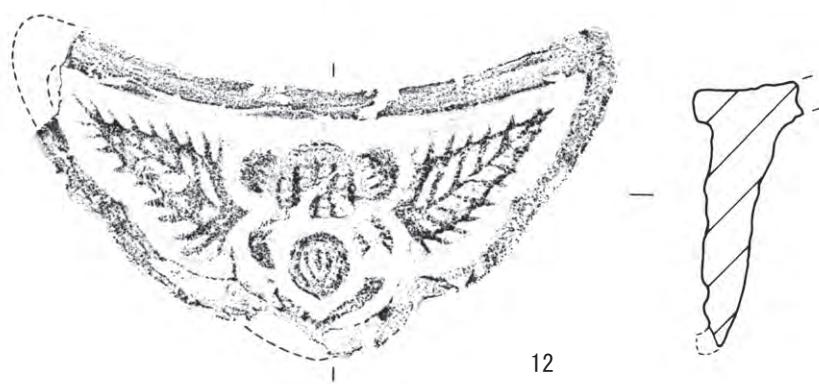
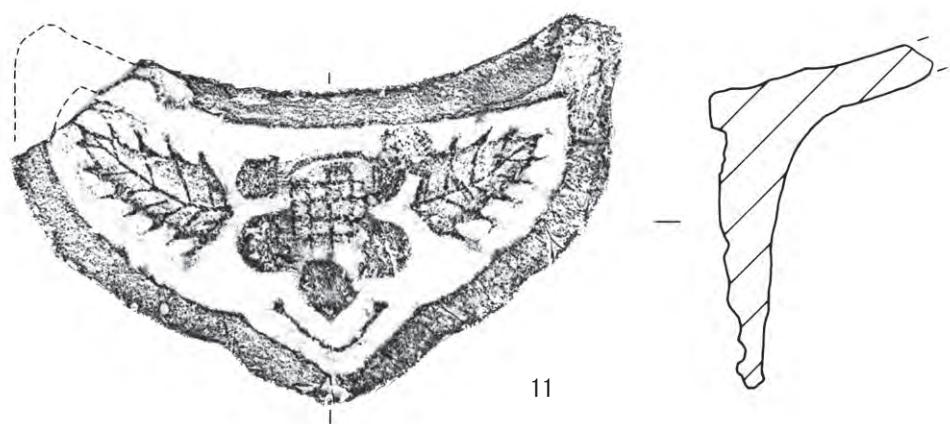
9



10

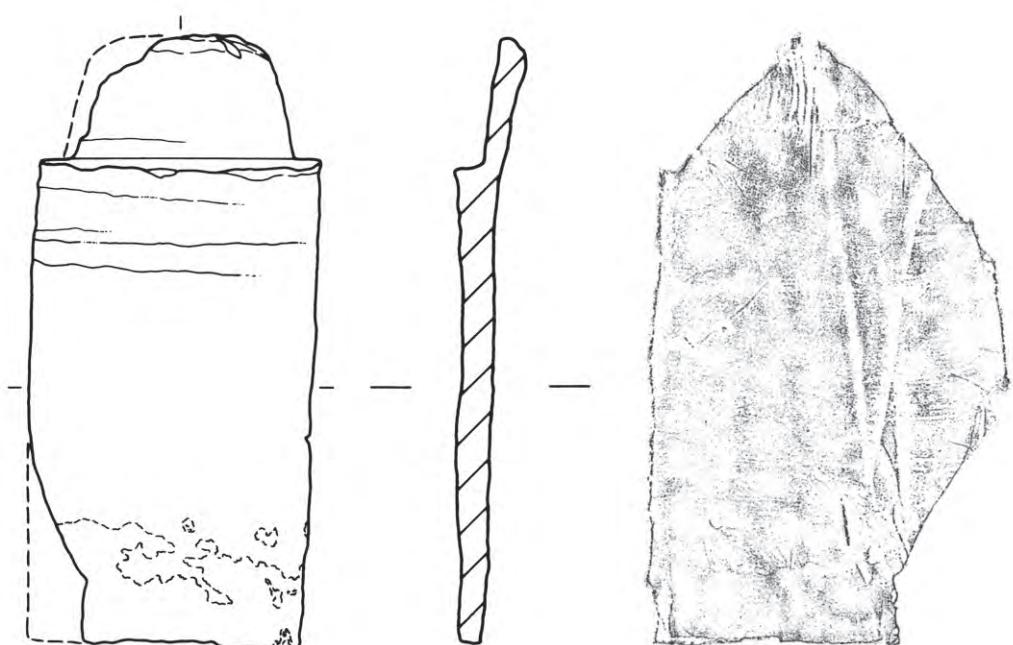


第44図 明朝系瓦 (1)：軒丸瓦

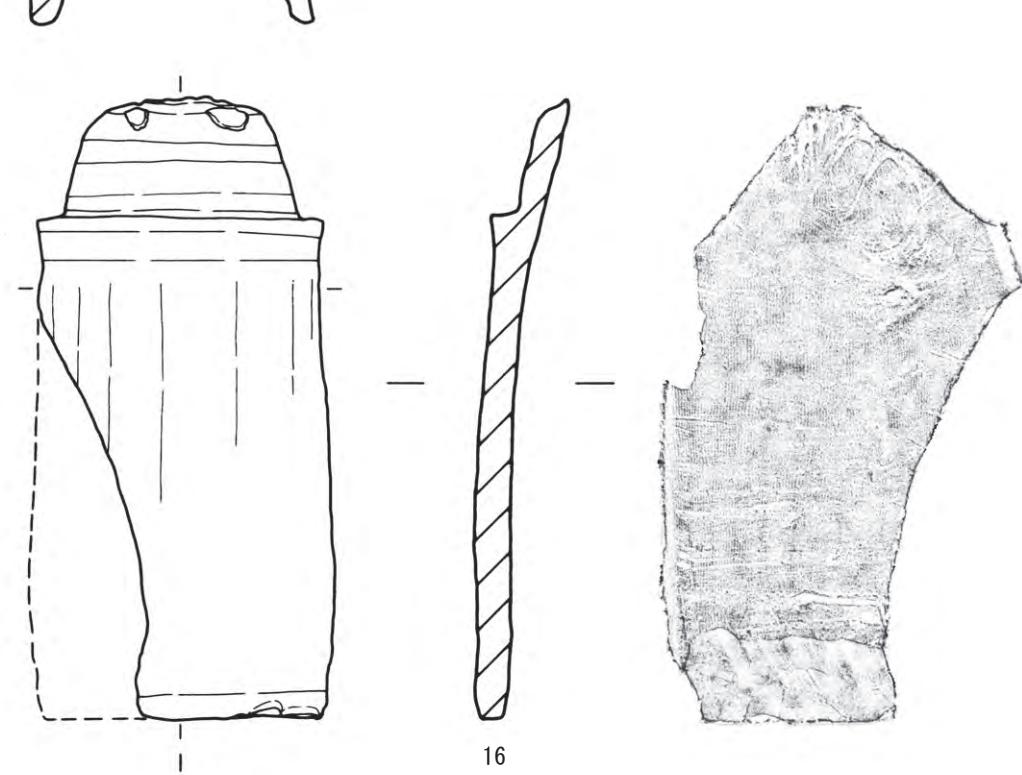


0 10 cm

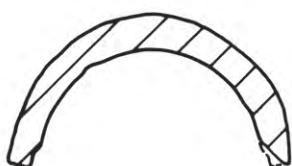
第45図 明朝系瓦（2）：軒平瓦



15

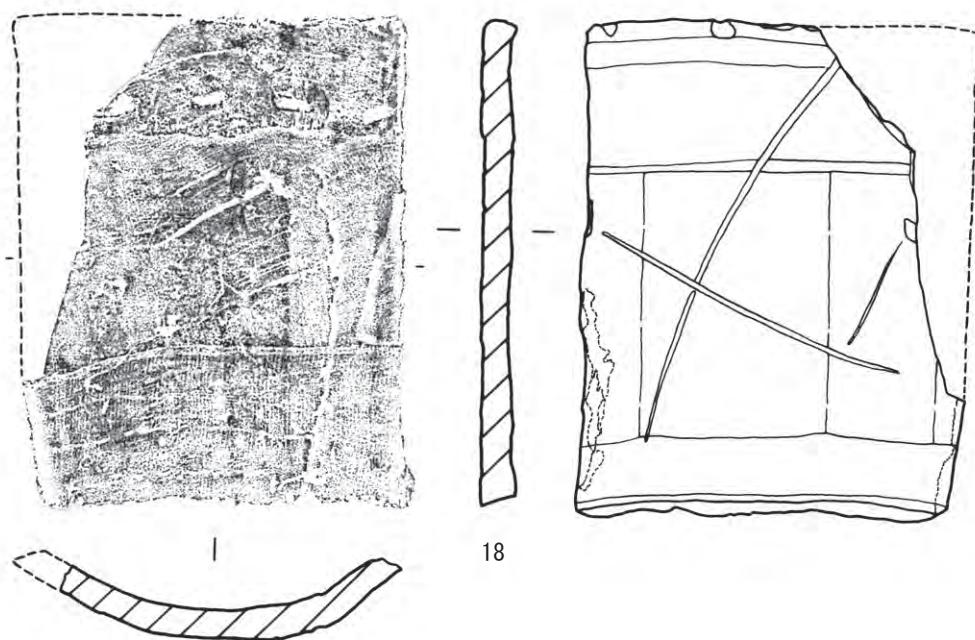
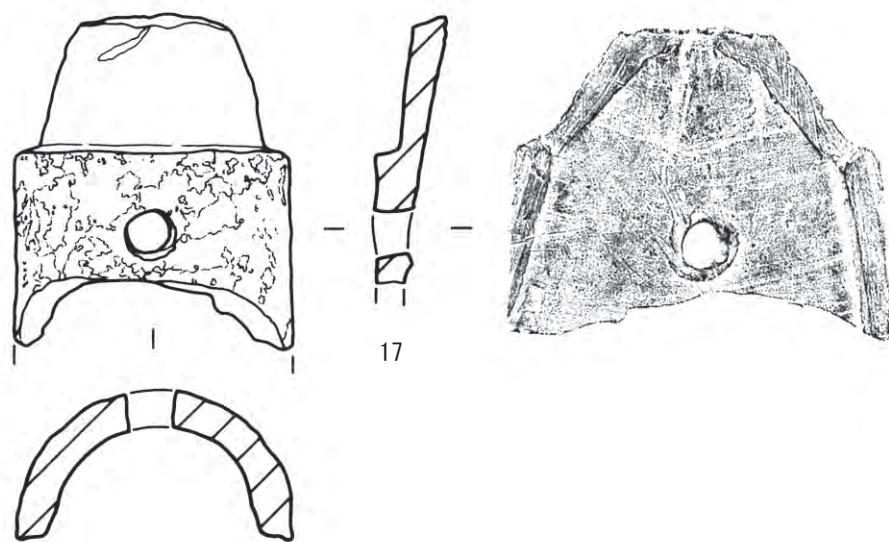


16



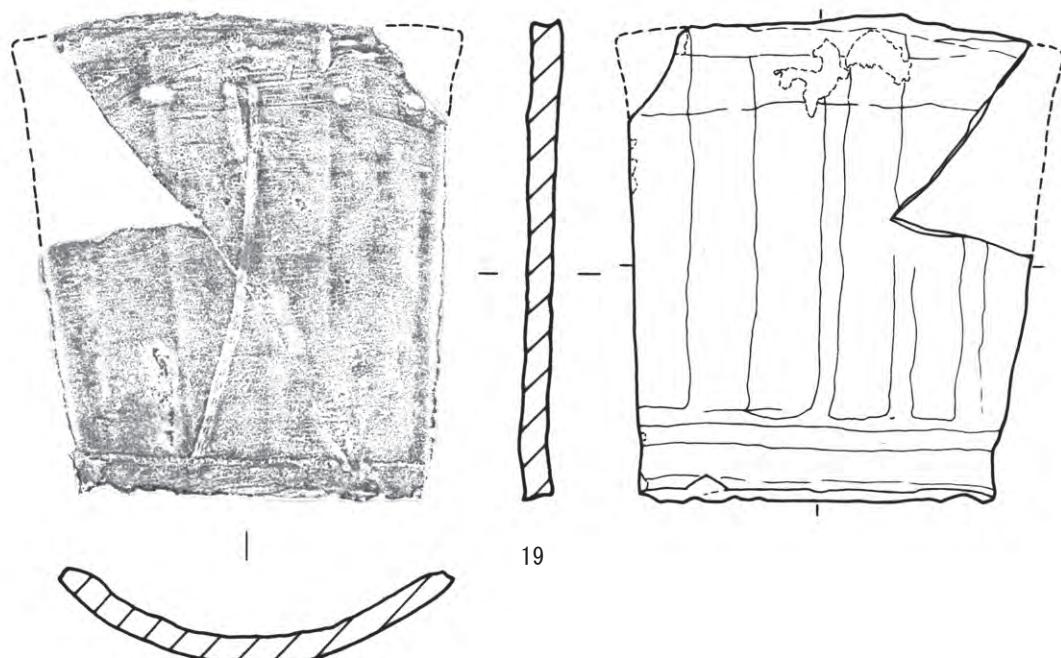
0 10cm

第46図 明朝系瓦（3）：丸瓦

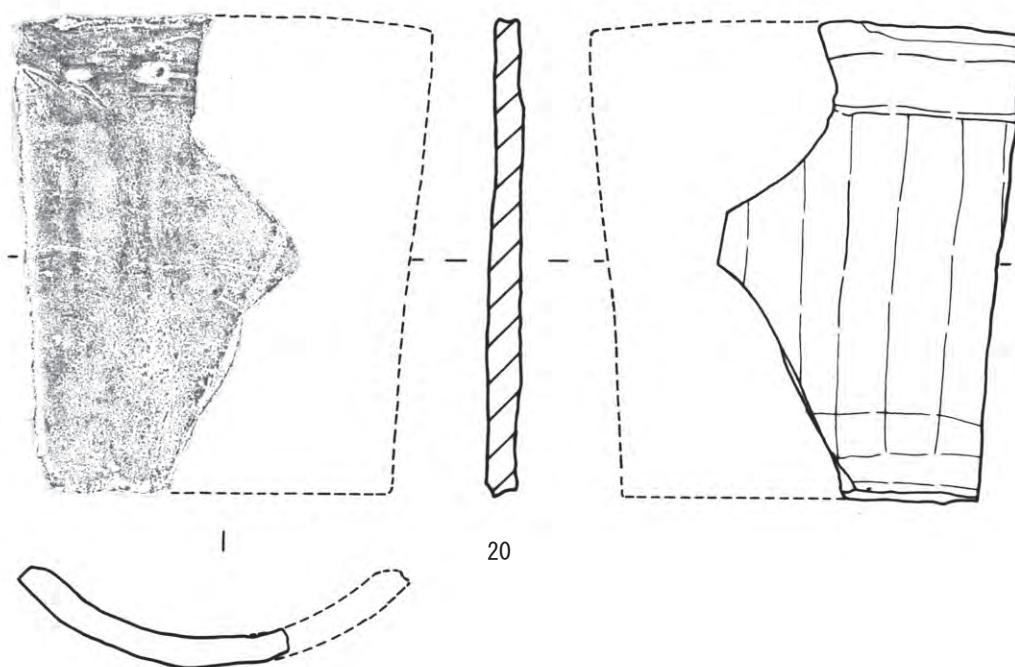


0 10cm

第47図 明朝系瓦（4）：丸瓦、平瓦



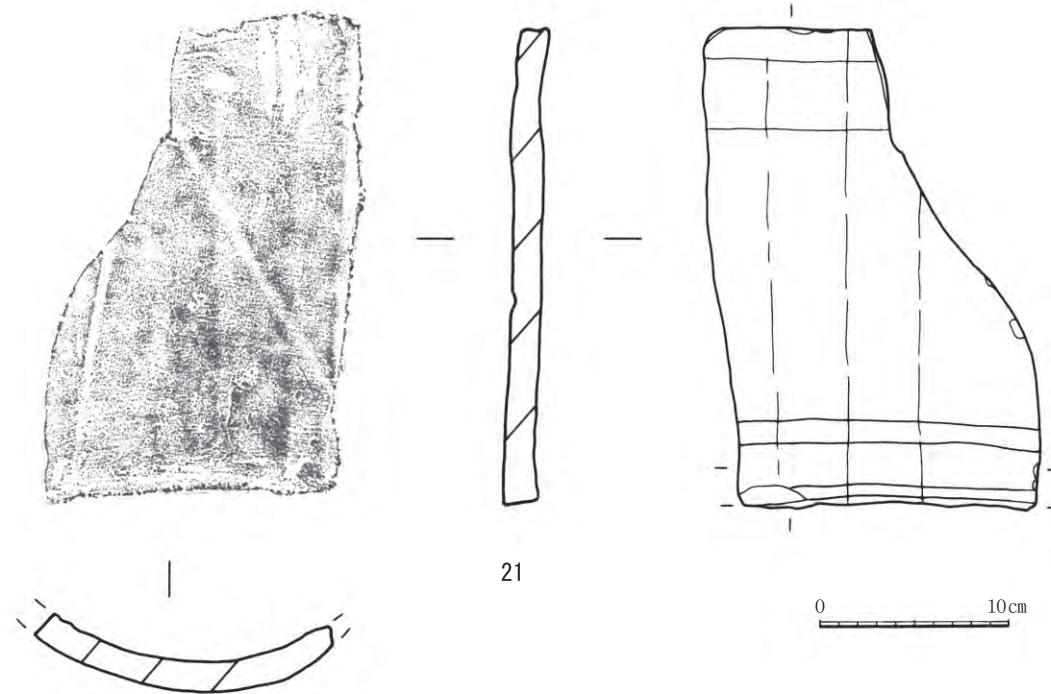
19



20

0 10 cm

第48図 明朝系瓦（5）：平瓦



第49図 明朝系瓦（6）：平瓦

第14節 塚

出土資料の大半が破片資料であり、今回は特徴的な資料を以下の5点取り上げた。形態が長方形状と三角形状と2つのタイプに大別することができる。長方形状のタイプにはL字状の脚が附属する資料と脚は附属せず、端部が段を有する薄手の資料が見られる。前者は三角形状のタイプと比べてやや薄くなる。色調は灰色で表面も丁寧に成形されている。三角形状のタイプは主に厚手で表面は摩耗している。おそらく、基壇床面の縁辺部に敷いていたものと考えられる。還元炎焼成により色調が灰色になるものと、酸化炎焼成によつて赤褐色になるものが見られ、今回の調査区では後者が全体の約6割を占めている。また、焼成が不良のものも多数見られる。

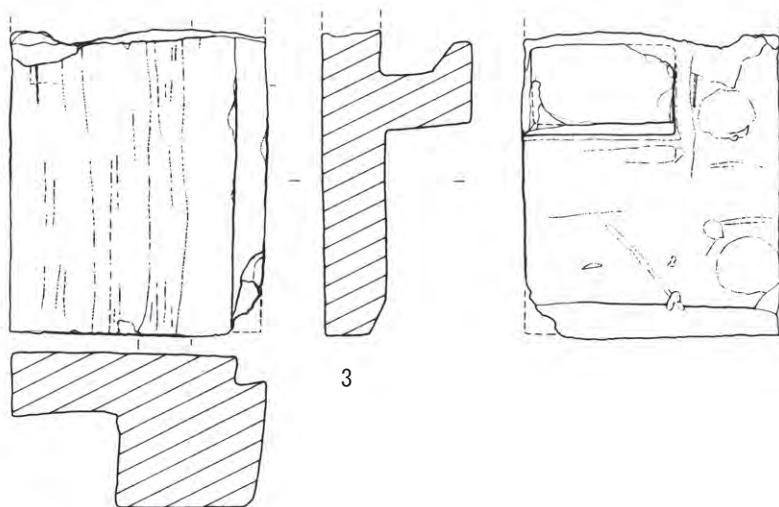
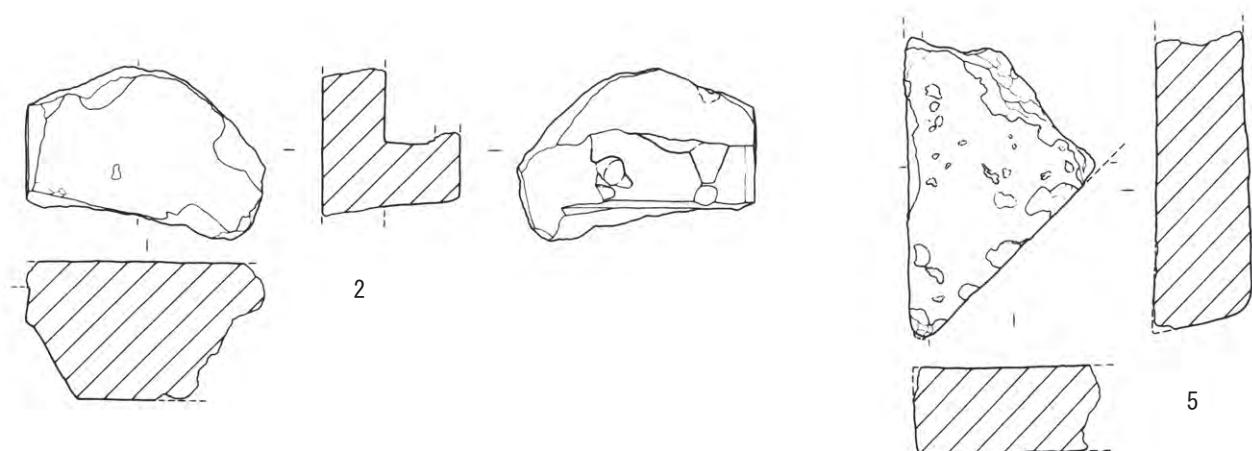
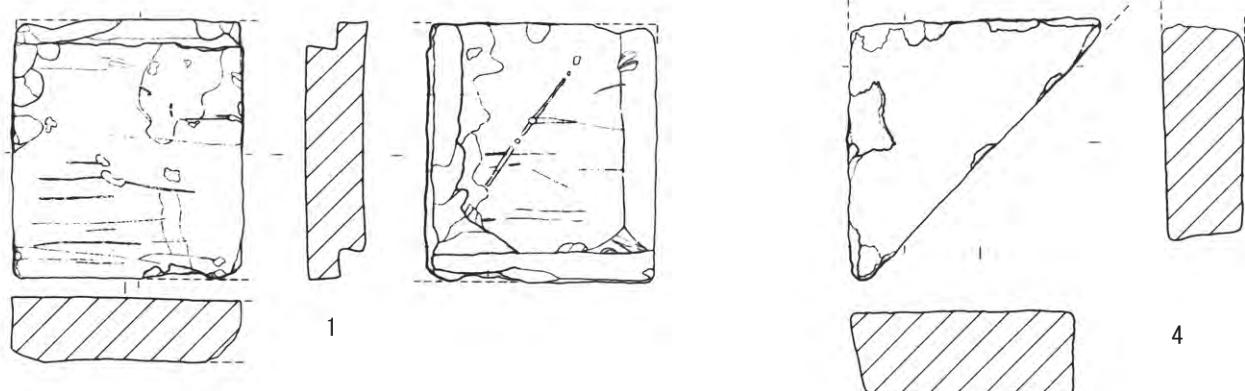
第44表 塚観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	残存長 残存幅 残存厚	観察事項	出土地
第50図 図版51 1	13.68 12.18 3.23	長方形の塚で両端部は段を有する。また、別の端部では斜めに面取りが成される。暗褐色。	二階殿 表採及び 表土層
第50図 図版51 2	7.51 12.63 大7.43小3.31	裏面に掛かりと思われるL字状の突起がある。本体部の成形は丁寧である。灰色。	二階殿 表採及び 表土層
第50図 図版51 3	16.13 13.70 大7.96小3.13	長方形の塚で裏面に掛かりと思われるL字状の突起がある。全体的に成形は丁寧である。また端部は有し、別の端部では斜めに面取りが成される。灰色。	二階殿 南トレンチ
第50図 図版51 4	13.19 13.38 4.35	三角形の塚で側面の成形は粗い。側面の立ち上がりが斜めになっており、格子状の敲き文が裏面に見ることができる。赤褐色。	二階殿 表採及び 表土層
第50図 図版51 5	12.92 11.60 4.82	三角形の塚でかなり厚手。全体的に成形は粗く、側面の立ち上がりが斜めになっている部分が見られる。灰色。	二階殿 表採及び 表土層

第45表 塚出土状況

遺物	コンテナ サイズ	コンテナ 数	重量 (kg)
塚	S	6	58.5
	M	10	171.76
合 計		16	230.26



0 10cm

第50図 塚

第15節 石製品

石製品は硯、碁石、蓋、石球が見られるが、大半が用途不明の製品である。中には琉球列島内で産出しない玉を使用した製品も見られる。また、従来までの首里城跡ではあまり類例が見られない装飾がなされた石製容器の蓋が出土している。

第46表 石製品観察一覧

単位:cm/g

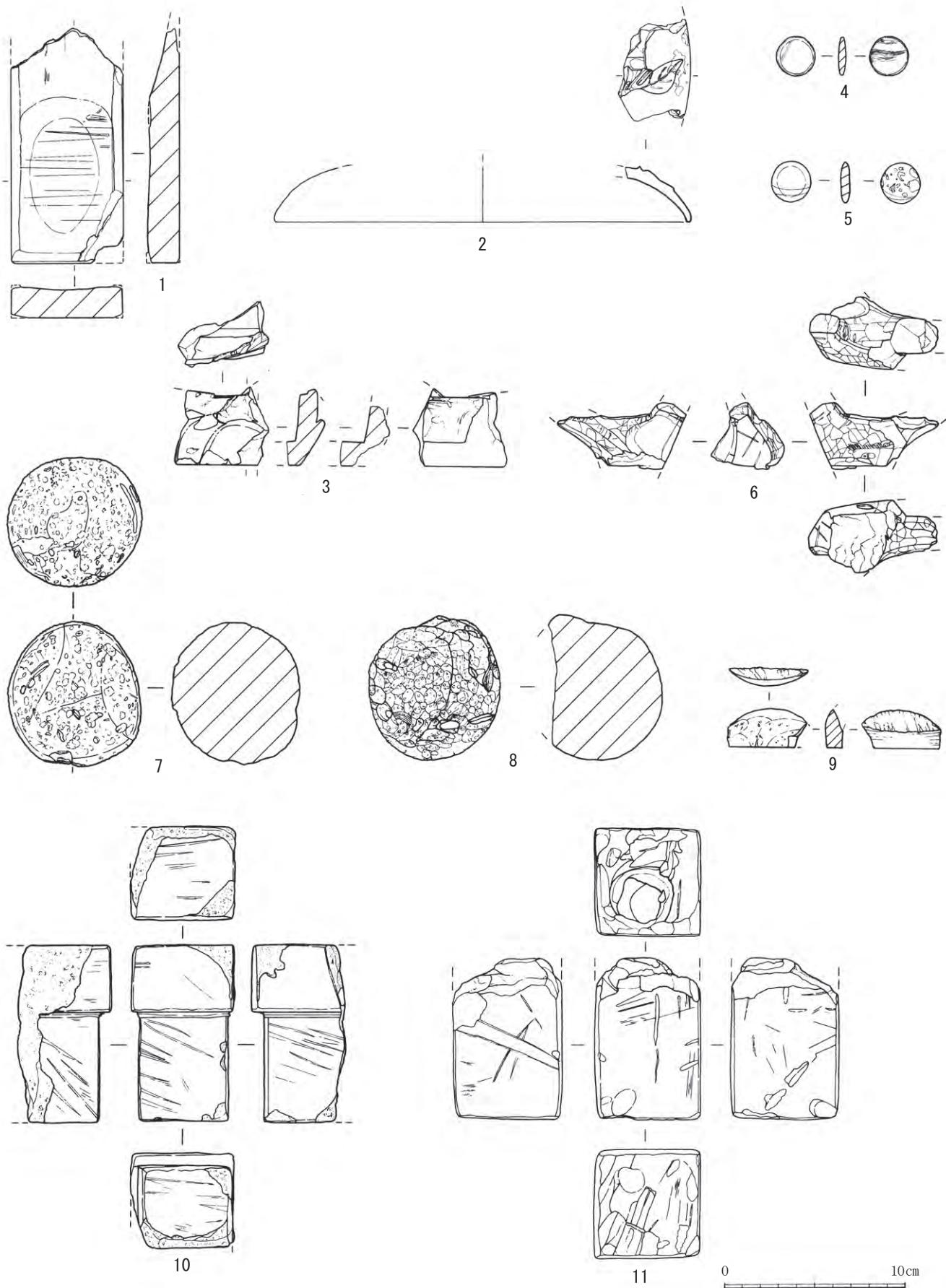
挿図番号 図版番号	器種	部位	残存長 残存幅 厚さ	重量	観察事項	出土地
第51図 図版52 1	硯		12.79 6.11 最大厚1.7 最小厚0.4	260	墨池(墨溜まり)の部分は欠損する。墨堂(墨擦り)部分は僅かに墨池に沿って窪みが見られる。また、横位の細かな傷が無数に見られる。	繼世門 表採及び 表土層
第51図 図版52 2	蓋	端部	口径23.0 4.54 5.38 最大厚0.76 最小厚0.22	20.35	白色の石材を加工しており、肉彫りで葉文が施されている。薄手で、端部は内傾する。	二階殿 表採及び 表土層
第51図 図版52 3			4.29 4.78 1.48	41.03	白色の石材を加工している。器種は不明であるが、箱状の製品になると思われる。小片であるため全容は分からないが、肉彫りで文様が施される。	二階殿 赤褐色土層
第51図 図版52 4	碁石		2.11 2.10 0.41	3.24	黒色で表面は一部剥落している。	二階殿 表採及び 表土層
第51図 図版52 5	碁石		2.20 2.16 0.52	3.73	断面はやや扁平となる。素材は石ではなく貝の可能性あり。	繼世門 表採及び 表土層
第51図 図版52 6			3.38 6.99 2.62	77.45	器種不明の滑石製品か。水平に切られている部分があることから脚部か。全体的に成形は粗い。	二階殿 表採及び 表土層
第51図 図版52 7	石球		8.01 7.16 7.05	540	歪な球形で砂岩製の石球。一部、敲打痕と思われる欠損が見られる。	繼世門 表採及び 表土層
第51図 図版52 8	石球		7.91 7.38 5.81	440	砂岩製の石球で一部欠損している。成形後の細かい調整痕が全体的に見られる。	大台所 コーラル層
第51図 図版52 9			2.02 4.45 0.95	11.33	深緑色の玉製品で円盤状の製品か。また、内面には直線状の加工が施される。	繼世門 表採及び 表土層
第51図 図版52 10			9.71 幅最大5.58 最小4.88 最大厚5.15 最小厚3.2	260	珊瑚石灰岩製の方柱状製品。三方に段を有する。	繼世門 表採及び 表土層
第51図 図版52 11			8.8 5.82 6.0	320	砂岩製の方柱状製品。	二階殿 瓦礫層

第47表 石製品出土状況 (1)

出土地	種類	硯	石球	方柱状 製品	蓋		碁石 端部	碁石 黒	碁石 白	円盤 状?	器種 不明	合計
					蓋	端部						
二階殿	表採及び表土層				1	8				1	10	
	瓦礫層			1				1			2	
	赤褐色土層									1	1	
大台所	コーラル層		1								1	
繼世門	表採及び表土層	1	1	1				1	1		5	
合 計		1	2	2	1	8	2	1	2	1	19	

第48表 石製品出土状況 (2)

遺物	コンテナ サイズ	コンテナ 数	重量 (kg)
石製品	M	1	9.6



第51図 石製品

第16節 貝製品

第52図1・2は、水磨を受けたマガキガイの殻頂部付近の資料である。2点とも水磨を受け、殻頂部が欠落してビーズ(貝銘)状を呈しているものの、砥磨等を施した稜が観察されないことから、通常では製品とは扱わないものである。類似例は、海岸汀線の波打ち際に死貝となった当該貝が波に洗われて打ち上げられたものが多数散在しており、砂丘遺跡出土であれば、到底製品として扱ってはいけないものである。

ここで、製品の対象として扱ったのは、自然ではその存在があり得ない内陸部に所在するグスクよりの出土であることから、何らかの目的があつて遺跡内に持ち運ばれたであろうということで、一応製品として扱うこととした。

同図3～6は、ヤコウガイを素材とした製品である。3はヤコウガイの体層部を切り取り、札状の短冊もしくは方形状の製品を意図して、加工したものである。縁辺部には砥磨などの明瞭な加工痕は認められないが、外面は表皮を除去し、真珠層を露出させている。

同図4は、養殖ヤコウガイの殻である。貝自体は自然貝そのままのものであり、特に加工等は見られないが、殻口部付近に1.8cm×1.8cmの小孔が穿たれている。

民俗事例等から、当該孔は稚貝の段階に穿たれ、ツル性植物で縄った紐で縛り、礁湖(イノー)内の礁池で成貝になるまで養殖を行ったとのことである。5も4と同様、養殖ヤコウガイの殻である。殻口部付近に穿たれた小孔の径は、4とほぼ同様で、1.8cm×1.7cmを測る。4と異なるのは、殻口部背後付近が除去されていることである。この除去は、あるいは匙等の製品を製作する意図で除去されたかも知れない。同図6は、匙状製品を目的として成形されたと思われるものである。螺肋が未だイボイボ状の斑点の段階にあり、筋状に繋がっていないことの成長度からして、成貝までは至っていない段階の貝を素材としたものである。標品は、全体として素材から大きく割り取った状態のもので、縁辺部等も成形は施されていない。さらに、器体の上三分の一程の箇所に細かい敲打成形による抉りが施されていることから、当該部を境に柄部と身部を作出していくとしている製作途上品である。

第49表 貝製品観察一覧

単位:cm,g

挿図番号 図版番号	種類名	出土地	法量					
			残存長	残存幅	最大厚 最小厚	重量	孔径	
							縦径	横径
第52図 図版53 1	マガキガイ製品	継世門 コーラル層	1.47	1.31	0.2 0.05	0.91	0.49	0.47
第52図 図版53 2	マガキガイ製品	大台所 中央トレンチ	1.81	1.8	0.4 0.2	2.16	0.65	0.53
第52図 図版53 3	ヤコウガイ製札状製品	継世門 表採及び表土層	2.93	1.59	0.55 0.2	3.81	—	—
第52図 図版53 4	養殖ヤコウガイ	二階殿 黒土層	17.9	16.3	—	1,100	—	—
第52図 図版53 5	養殖ヤコウガイ	継世門 表採及び表土層	17.5	8.9	—	780	1.34	1.28
第52図 図版53 6	ヤコウガイ製匙状製品の製作途上品	継世門 表採及び表土層	7.65	3.92	0.7 0.2	26.05	—	—

注「-」:計測不可

第17節 骨製品

ハブラシが2点得られている(第52図7・8)。

両者とも同一区および同一層よりの出土であるとともに、歯部の折損部は割れ口が新しいことから、あるいは同一資料が折損したものかも知れないが、判然としないことから、取りあえず別資料として扱うことにする。

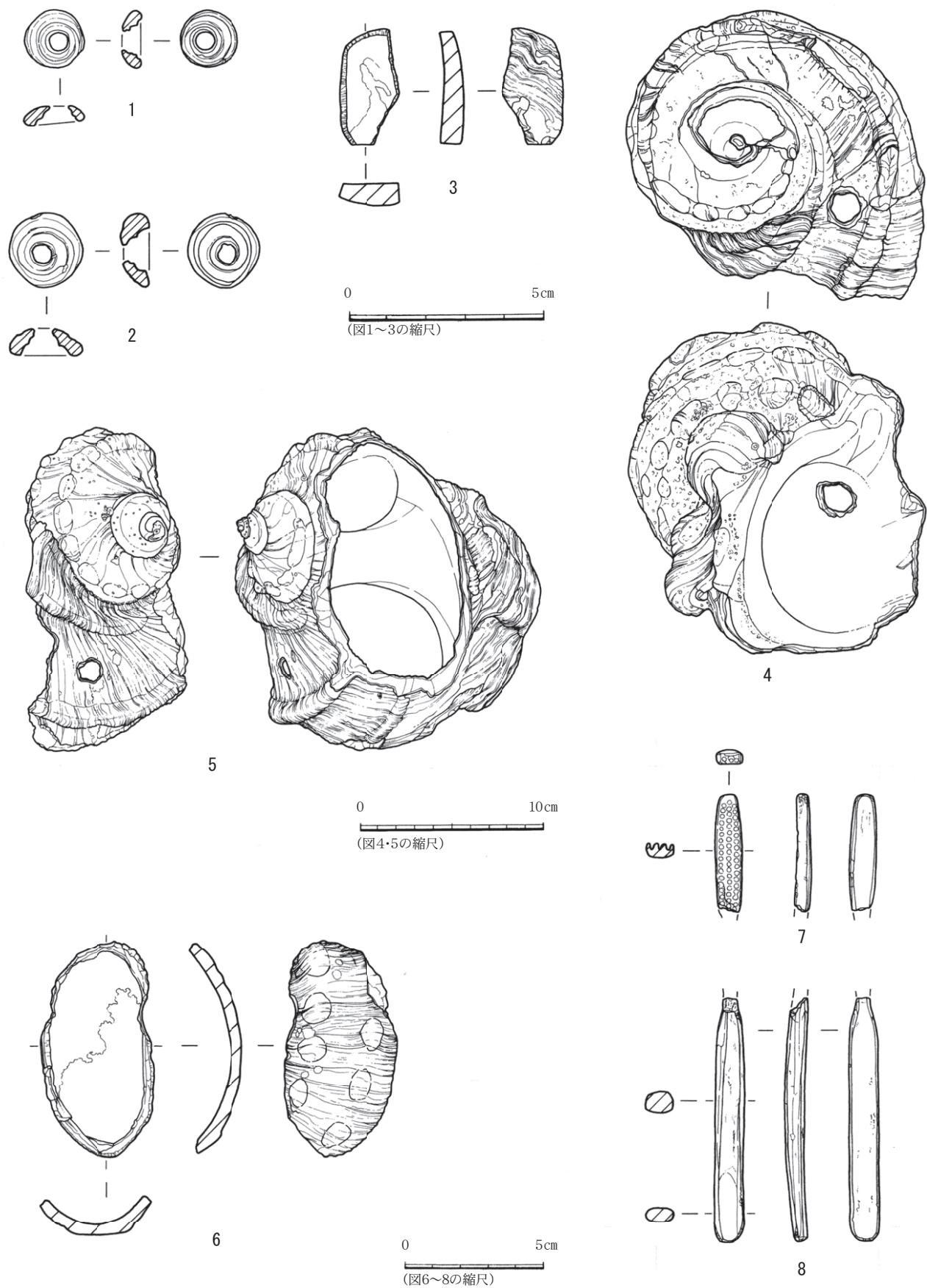
7は、柄部近くに窄まる付近から折損した毛孔部資料である。全体形状は、頭端が舌状を呈した細長い扁平状をなすとともに、植毛孔が穿たれた面は平滑面をなすが、背面は緩やかな曲面に仕上げている。毛孔部には3列の植毛孔が穿たれるとともに、頭部にも横位に3個の植毛孔が穿たれている。残存長4.2cm、最大幅1.01cm、最大厚0.79cm、残存重量1.79gを測る。二階殿表採及び表土層出土である。

8は、毛孔部との境目付近から折損した柄部資料である。全体形状は、毛孔部との境目付近から柄尻部にかけて約1cm程ハ字状に開いた後、ほぼ直線状をなして柄尻に延びていく形状をなす。柄尻の形状は先端が尖らず、どちらかと言えば緩やかな円弧を描く形状をなす。断面形状は柄尻部付近を扁平に仕上げているため、長楕円形状を呈するものの、毛孔部に行くに従って中央部が膨らんだカマボコ状をなす。柄尻の小孔はない。

残存長8.68cm、最大幅1.01cm、残存重量8.93gを測る。二階殿表採及び表土層出土である。

第50表 骨製品出土状況

出土地	種類	歯ブラシ
二階殿	表採及び表土層	2
継世門	表採及び表土層	1
合	計	3



第52図 貝製品1~6 骨製品7,8

第18節 ガラス玉

ガラス玉は48点得られている。

これらは、形態上、略円形状を呈する玉形、扁平状を呈する臼形、隅丸三角形、不定形があるが、圧倒的多数を占めているのは臼形で、総数48点のうち27点あり、全体の56.3%を占める。他形態では、不定形が6点(12.5%)、玉形と隅丸三角形が各1点(2.1%)ずつである。

そのほとんどが完形品であるが、図版54の1と21のみは破損品である。

色調別にみると、淡青色が最も多く、総数48点中20点(41.7%)を占めている。次に多いのが青色で10点(20.8%)、その次が水色7点(14.6%)、緑色2点(4.2%)、白濁2点(4.2%)、黄白色2点(4.2%)の順となっている。

第51表 ガラス玉観察一覧(1)

単位:mm

図版番号	形 状	色	完形・ 破損	外径 内径 高さ	重 量 (g)	観 察 事 項	出 土 地
図版54 1	玉形	水色	破 損	7.43 2.27 8.81	0.45	約二分の一を欠く破損品である。形態は、縦長の略楕円形状をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。	大台所 瓦礫層
図版54 2	臼 形	白濁	完形	9.70 2.57 6.37	0.78	端正な円形状をなす。輪郭と孔形も正円をなし、丁寧な造りである。螺旋状の筋は、さほど明瞭ではない。	二階殿 表採及び表土層
図版54 3	臼 形	淡青色	完形	4.67 1.10 2.81	0.09	略円形状をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。	二階殿 表採及び表土層
図版54 4	臼 形	緑 色	完形	3.80 1.26 3.02	0.05	端正な円形状をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。器表面は滑面を呈し、光沢が著しい。	大台所 瓦礫層
図版54 5	臼 形	青 色	完形	4.10 1.39 2.66	0.06	端正な円形状をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。	二階殿 コーラル層
図版54 6	臼 形	黄白色	完形	4.21 2.00 2.82	0.05	端正な円形状をなす。器表面には細かなアバタ状の気泡が観察される。	二階殿 表採及び表土層
図版54 7	臼 形	淡青色	完形	3.27 1.36 1.82	0.02	端正な円形をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。器表面は滑面を喪失し、光沢を失っている。	大台所 瓦礫層
図版54 8	臼 形	淡青色	完形	4.10 1.51 2.66	0.08	比較的端正な円形状をなす。どちらかと言えば、孔は片位置にあるうえ、小さい。螺旋状の筋は、明瞭ではない。	二階殿 表採及び表土層
図版54 9	臼 形	水色	完形	2.71 1.22 1.79	0.01	端正な円形をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。器表面は滑面を喪失し、光沢を失っている。	大台所 瓦礫層
図版54 10	臼 形	淡青色	完形	3.36 1.20 2.30	0.04	端正な円形をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。器表面は滑面を喪失し、光沢を失っている。	二階殿 表採及び表土層
図版54 11	臼 形	淡青色	完形	3.62 1.58 1.99	0.03	どちらかと言えば、歪な円形状をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。	二階殿 表採及び表土層
図版54 12	臼 形	淡青色	完形	4.01 1.96 1.84	0.02	全体形に対し、どちらかと言えば孔径が大きい。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。	二階殿 表採及び表土層
図版54 13	臼 形	青 色	完形	3.18 1.39 1.78	0.02	端正な円形をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。器表面は滑面を喪失し、光沢を失っている。	大台所 瓦礫層
図版54 14	臼 形	淡青色	完形	2.54 1.17 1.16	0.01	扁平度が著しい形態をなす。どちらかと言えば、全径に比して孔径が大きい。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明確でない。	繼世門 表採及び表土層

第52表 ガラス玉観察一覧(2)

単位:mm

図版番号	形 状	色	完形・破損	外径 内径 高さ	重量(g)	観 察 事 項	出 土 地
図版54 15	臼 形	水 色	完形	2.58 0.95 1.50	0.01	端正な円形状をなす。螺旋状の筋は明瞭ではない。	繼世門 表採及び表土層
図版54 16	臼 形	水 色	完形	2.93 0.96 2.34	0.03	端正な円形状をなす。コイル状の螺旋タイプである。器表面はかなりの風化を受け、剥落が著しいが、螺旋状の筋が僅かに確認できる。	大台所 瓦礫層
図版54 17	臼 形	水 色	完形	3.04 0.99 2.32	0.03	ややいびつな円形状をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。器表面は滑面を喪失し、光沢を失っている。	大台所 瓦礫層
図版54 18	臼 形	緑 色	完形	3.78 1.13 3.75	0.07	端正な円形状をなす。コイル状の螺旋タイプである。	二階殿 表採及び表土層
図版54 19	臼 形	水 色	完形	2.61 1.16 2.31	0.01	比較的端正な円形状をなす。螺旋状の筋は、明瞭ではない。	二階殿 表採及び表土層
図版54 20	隅丸 三角形	青 色	完形	6.55 — 4.15	0.22	火を受けて変形しているうえ、孔も塞がれている。器表面は爛れており、ガラス特有の滑面を呈している範囲は全体の約三分の一程である。	二階殿 表採及び表土層
図版54 21	不定形	淡青色	破損	3.09 1.43 2.61	0.02	いびつな形で、不定形状をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。器表面は滑面を喪失し、光沢を失っている。	大台所 瓦礫層
図版54 22	不定形	水 色	完形	2.75 1.47 2.95	0.02	いびつな形で、不定形状をなす。器表面の風化が著しく、剥落しているためか、螺旋状の筋は明瞭でない。器表面は滑面を喪失し、光沢を失っている。	大台所 瓦礫層

第53表 ガラス玉出土状況

分類・色調	玉形												臼形						隅丸 三角形	不定形				生成品				合計				
	淡 青 色	水 色	青 色		淡 青 色		水 色		白 濁		濃 青 綠 色		黃 白 色		赤 褐 色		綠 色			青 色	淡 青 色		水 色		青 色	淡 青 色		白 濁	淡 綠 色			
			破 損	破 損	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形		完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形	完 形						
出土地	表採及び表土層				1	1					1					1										2	1	1	1	8		
	瓦礫層						2																							2		
	二階殿 コーラル層					1																								1		
	黒土層						2		1									1												4		
	赤褐色土層						1	1																			1			3		
料理座	コーラル層																														1	
大台所	瓦礫層				1	1	1	3								1			1	1	1	1							10			
	黒土層					1																					2			3		
	東西石列										1			1																2		
	南北トレンチ														1															1		
継世門	表採及び表土層		1		2	2	1													1	1					1	2	1	1	13		
合 計			1	1	6	9	5	1	1	1	1	2	1	1	1	3	1	1	3	1	1	1	3	5	1	2	48					

第19節 煙管

煙管は総数14点得られている。今回出土した資料は全て分離型（雁首と吸口を羅字に接続するもので、「羅字キセル」とも称される）であり、一体型のいわゆる「延ベキセル」は確認されていない。材質でみると雁首は土製・施釉陶器製・無釉陶器製・金属製に大別されるが、吸口は施釉陶器製のみである。以下、図化した資料の観察所見を第55表に記す。

第54表 煙管出土状況

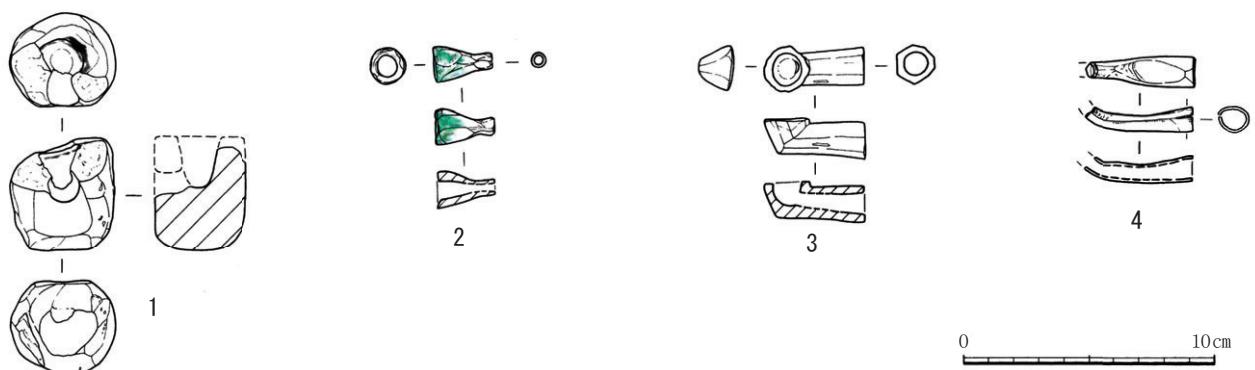
出土地	器種・部位	施釉陶器製	無釉陶器製	柱状形土製	金属製	合計
		吸い口	パイプ形	雁首	雁首	
二階殿	表採及び表土層	1	5		1	7
	瓦礫層		1	1		2
	褐色土層			1		1
	赤褐色土層		1			1
	上層		1			1
	下層		1			1
繼世門	表採及び表土層		1			1
	合 計	1	10	2	1	14

第55表 煙管観察一覧

単位:cm、()は残存長

挿図番号 図版番号	種類	部位	完形 破損	法量						観察事項	出土地	
				全長	高さ 幅	火皿径		接続部径		重量 (g)		
						外	内	外	内			
第53図 図版55 1	土製	雁首	破	3.63	4.44	(3.60)	1.80	—	1.20	58.92	火皿～小口の一部を欠損するがほぼ完形。火皿内部に煤が付着。	二階殿 瓦礫層
第53図 図版55 2	施釉陶器	吸い口	完	2.32	1.40	—	—	1.40	0.82	2.19	外面に綠釉を施釉。小口に使用痕(羅字を接続した際の擦跡)が残る。	二階殿 表採及び 表土層
第53図 図版55 3	無釉陶器	雁首	完	4.08	1.46	1.81	1.22	1.51	0.95	8.93	火皿内部に煤が付着。脂反し上面に敲打跡(使用時の痕跡か)が残る。	二階殿 赤褐色土層
第53図 図版55 4	金属製品	雁首	破	(4.33)	0.95	—	—	1.06	0.90	4.64	火皿が欠損。脂反し上面が変形しているため使用済みの資料と考えられる。	二階殿 表採及び 表土層

注 「—」:計測不可



第53図 煙管

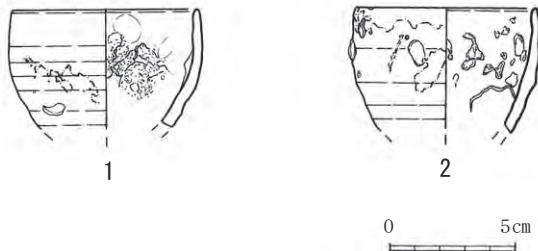
第20節 坙塙

2点出土している。何れも口縁部から胴部にかけての資料で、内外面共に銅滓が付着していることから、使用後に廃棄されたと考えられる。また、製造に関わる遺物は今回の調査においてこれら2点のみである。

第56表 坙塙観察一覧

挿図番号 図版番号	部位	口径 器高 底径	観察事項		出土地	単位:cm
			内面	外面		
第54図 図版56 1	口縁部	7.4 — —	口縁部は直口する。内外面には大量の銅滓が付着している。釉は内外面共施され、外面胴下部から露胎となる。		二階殿表採及び表土層	
第54図 図版56 2	口縁部	7.2 — —	口縁部は直口する。内面には銅滓が付着し、器面は紫色に変色している。外面にも銅滓が付着している。釉は内外面共施され、外面胴下部から露胎となる。		二階殿表採及び表土層	

注「—」:計測不可



第54図 静塙

第57表 静塙出土状況

出土地	部位	口縁部	出土地			
			二階殿	表採及び表土層		
			2			
			合 計			

第21節 金属製品

鉄製品と銅製品が出土している。鉄製品は鋳化により原形を保っていない資料が多いため、ここではそれらの多くを割愛した。銅製品は釘、簪、座金具、把手、飾り金具といった日用品としてのものから八双金物、覆輪などの武具に関係が深いものまで多種多様な製品が出土している。とくに飾り金具や八双金物などは鍍金がなされていることから、かなり希少性のある製品の一部であったことが窺い知れる。

第58表 金属製品観察一覧 (1)

挿図番号 図版番号	種類	残存長 残存幅	最大厚 最小厚 残存重量	孔径縦 孔径横	観察事項		出土地	単位:mm/g
					内面	外面		
第55図 図版57 1	角釘	34.59 3.13	3.30 0.83 2.14	— — —	小型の角釘で、先端は方錐状となる。頭部は方形で端部は広がる。頭部の長さは、縦4.32mm、横5.27mm。銅製。		大台所 黒土層	
第55図 図版57 2	釘	28.89 2.74	2.35 1.14 0.72	— — —	小型の角釘で、頭部はL字状となり、先端は方錐状となる。頭部は円形で端部は広がる。縦4.89mm、横4.61mm。銅製。		二階殿 表採及び 表土層	
第55図 図版57 3	釘	41.25 3.89	4.89 2.30 2.18	— — —	小型の釘で断面は多角形となる。頭部は円形で端部は広がる。頭部の長さは、縦4.90mm、横5.13mm。銅製。		二階殿 表採及び 表土層	
第55図 図版57 4	簪	109.68 3.93	3.47 0.93 4.49	— — —	カブは細長いスプーン状となり、竿部の先端は丸みを有している。また、竿の断面は六角形となる。銅製。		二階殿 表採及び 表土層	

注「—」:計測不可

第59表 金属製品観察一覧（2）

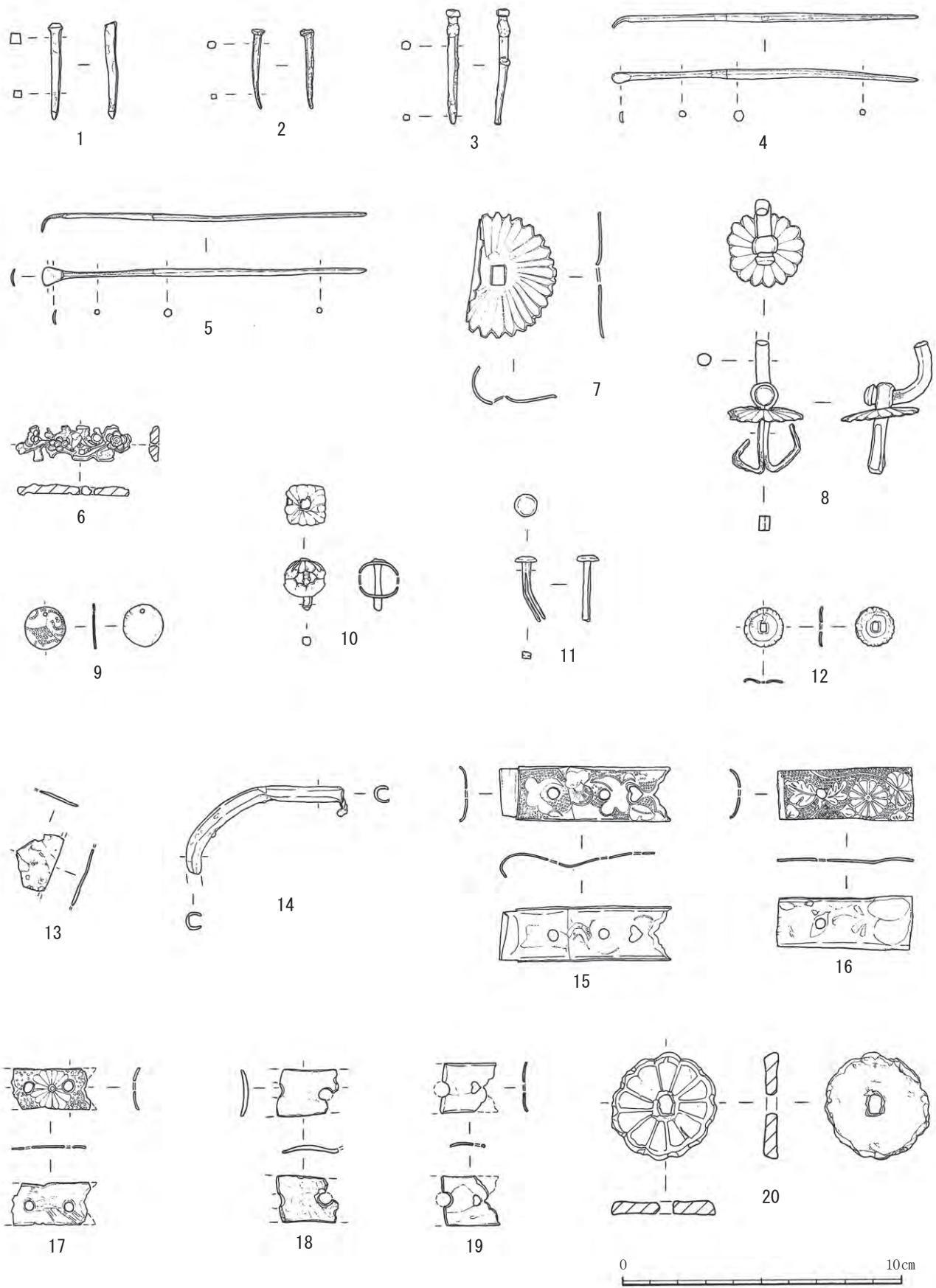
単位:mm/g

挿図番号 図版番号	種類	残存長 残存幅	最大厚 最小厚 残存重量	孔径縦 孔径横	観察事項	出土地
第55図 図版57 5	簪	116.63 6.04	2.66 0.45 3.11		カブは幅の広いスプーン状となり、竿部の先端は丸みを有している。また、竿の断面は六角形となる。銅製。	二階殿 表採及び 表土層
第55図 図版57 6		13.19 41.61	3.26 1.96 5.40		銅製の飾り金具で、梅樹が透かし彫りされる。梅花の部分のみ鍍金されている。裏面は平坦に仕上げている。	二階殿 褐色土層
第55図 図版57 7		44.77 30.55	1.33 1.23 8.20	7.05 4.22	調度品の飾り金具か。菊花を象っており、銅製。中央には方形の孔が穿たれ、孔から端部まで放射状に沈線が入り、菊の弁花を表している。	二階殿 表採及び 表土層
第55図 図版57 8	飾り留め金 具	48.00 28.00	5.00 1.00 14.92	— — —	調度品の引き手の一部か。座金具は菊花を象っており、中央に鉢が打たれている。鉢の先端は二叉に分かれ、折り返されている。銅製。	二階殿 表採及び 表土層
第55図 図版57 9		15.15 14.07	0.37 0.25 0.34	1.43 1.40	銅製の円盤状製品。歪な円形で表面には魚々子による文様が見られる。また小孔が1カ所穿たれている。	二階殿 下層
第55図 図版57 10		18.05 13.99	14.34 3.44 2.93	5.52 8.02	蓋の把手か。上面には菊文が見られ、側面には雲文状の透かしが見られる。中央部分には軸が見られる。銅製。	二階殿 赤褐色土 層
第55図 図版57 11	鉢	2.56 2.27	2.14 0.74 0.93	— — —	銅製の鉢で、頭部は鍍金されている。また、鉢の先端は二叉に分かれている。頭部の長さは、縦7.77mm、横7.71mm。	繼世門 埋土
第55図 図版57 12	八双金物の 留め金具 (鉢)	13.39 13.84	0.53 0.50 0.66	3.31 2.62	銅製の小型座金具。菊花を象っており、中央の方形孔から放射状に沈線が端部に向かって入る。	繼世門 表採及び 表土層
第55図 図版57 13	兜の飾り?	21.01 14.13	1.30 0.59 1.11	— — —	銅製の板。外面は鍍金されている。鍔形などの、兜の前立て飾りの一部か。	繼世門 コーラル層
第55図 図版57 14	覆輪	60.45 5.69	1.30 1.00 6.12	孔径 3.60	断面形がU字状となる。外面は鍍金されている。内部には僅かに木片が残る。	繼世門 黒土層
第55図 図版57 15	八双金物	19.77 62.52	0.98 0.65 5.32	右3.32 3.54 左3.53 3.62	牡丹唐草文が見られる。背景は魚々子で充填する。魚々子は列点状となり、輪郭線は蹴り彫りで表される。猪目透かしは丁寧である。	二階殿 表採及び 表土層
第55図 図版57 16	八双金物	18.89 48.98	0.89 0.78 4.54	3.53 3.65	菊唐草文が見られる。背景はやや大きめの魚々子で充填する。文様面には鍍金がなされ、文様は細かな蹴り彫りの沈線で描かれている。銅製。	二階殿 表採及び 表土層
第55図 図版57 17	八双金物	14.47 27.44	0.98 0.61 1.46	右3.98 3.95 左3.23 3.32	小型の八双金物。2つの孔の間に菊花文が見られる。魚々子は雑に打たれており、U字状となる。銅製。	繼世門 埋土
第55図 図版57 18	八双金物	16.82 20.86	1.26 0.90 2.54	— — —	小型の八双金物で無文である。	二階殿 表採及び 表土層
第55図 図版57 19	八双金物	17.13 19.50	1.28 1.03 2.19	3.66 2.47	小型の八双金物で無文である。端部は魚尾状となるが、かなり略化している。	二階殿 表採及び 表土層
第55図 図版57 20		38.09 37.64	4.81 3.20 35.24	7.06 4.61	厚みを有した板状製品。中央に孔が穿たれており、凸線が孔から端部に向けて入る。弁先が尖り、縁は鋸歯状となる。銅製。	二階殿 表採及び 表土層

注「-」:計測不可

第60表 金属製品出土状況

遺物	コンテナ サイズ	コンテナ 数	重量 (kg)
鉄製品	S	1	8.9
青銅	S	1	3.9
合 計		2	12.8



第55図 金属製品

第22節 錢貨

錢貨は総数85点出土している。産地ごとにみると近世以前に位置づけられる資料としては中国錢23点・日本錢2点・琉球錢1点が確認されており、それ以外に近代以降の日本錢や米国錢が少量含まれる。中国錢は開元通寶（初鑄621年）から永樂通寶（初鑄1408年）まで少なくとも15種類得られており、年代別では北宋錢が全体の約82%を占める。日本錢は新寛永期に位置づけられる寛永通寶が、琉球錢では世高通寶が出土しているものの、いずれも1~2点と非常に少ない。

これらの出土状況は地区別に偏りがみられる。具体的には二階殿地区から中国錢全体の約78%が確認されているのに対し、料理座・大台所・継世門の3地区では日本錢や琉球錢のほか、近代以降の錢種が多い傾向にある。以下、図化資料について観察表を提示する。

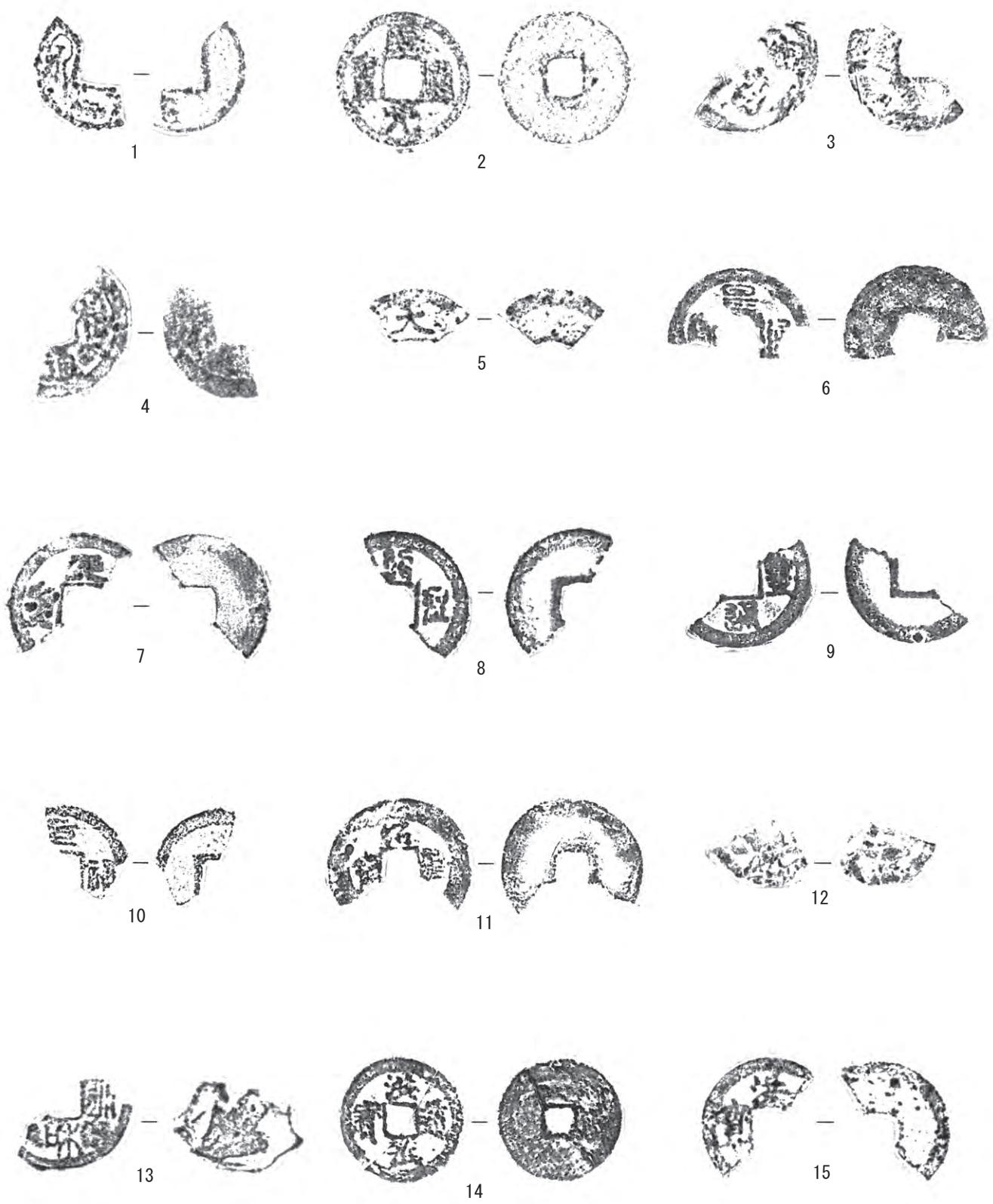
第61表 錢貨法量観察一覧

単位:mm,g,%

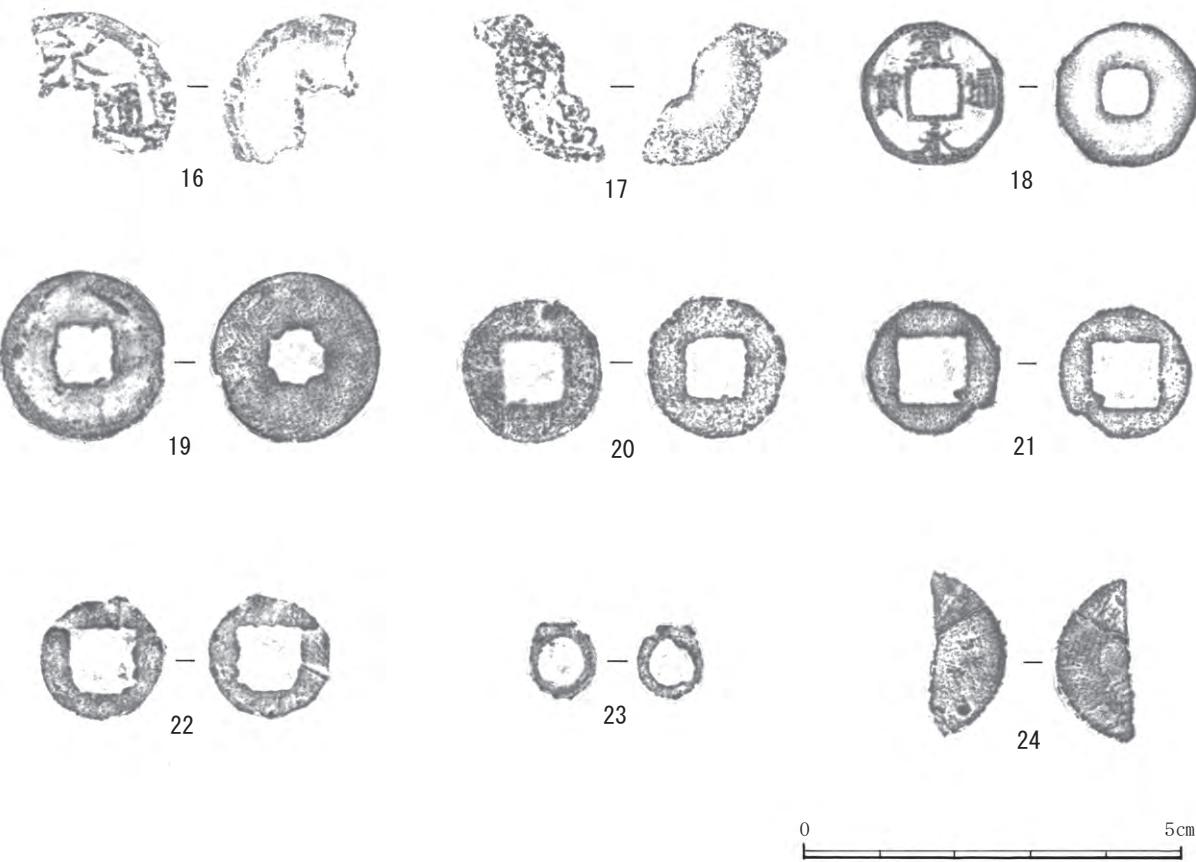
挿図番号 図版番号	錢名	初鑄年代	法量				背文	残存率	備考	出土地
			銭径	孔径	錢厚	重量				
第56図・図版58 1	貸錢?		—	—	0.9	0.9	—	45	泉の一宇が残存 (新の貨幣)	継世門 赤褐色土層
第56図・図版58 2	開元通寶	唐621年	23.5	5.5	1.5	3.4	—	100		継世門 黒土層
第56図・図版58 3	□徳元寶	北宋1004年	—	—	1.5	2.5	—	45	景德元寶	継世門 建物1
第56図・図版58 4	□禧通□	北宋1017年	—	—	1.2	1.2	—	45	天禧通寶	二階殿 赤褐色土層
第56図・図版58 5	天□□□	北宋1023年	—	—	1.2	1.0	—	25	天聖元寶	二階殿 赤褐色土層
第56図・図版58 6	皇□通寶	北宋1038年	—	—	1.3	2.3	—	60	皇宋通寶	二階殿 瓦礫層
第56図・図版58 7	至□□寶	北宋1054年	—	—	1.0	1.8	—	50	至和元寶or至和通寶	継世門 コーラル層
第56図・図版58 8	熙寧□□	北宋1068年	—	—	1.0	1.4	—	50	熙寧元寶	二階殿 下層
第56図・図版58 9	□豊通□	北宋1078年	—	—	1.0	1.5	—	50	元豊通寶	地区不明 コーラル層
第56図・図版58 10	元祐□□	北宋1086年	—	—	1.2	1.2	—	30	元祐通寶	二階殿 表採及び表土層
第56図・図版58 11	紹聖□寶	北宋1094年	—	—	1.6	3.0	—	70	紹聖元寶	二階殿 赤褐色土層
第56図・図版58 12	□觀□□	北宋1107年	—	—	1.4	0.9	—	20	大觀通寶	二階殿 赤褐色土層
第56図・図版58 13	□和通□	北宋1119年	—	—	1.4	2.6	—	30	宣和通寶。 三枚付着。 錢厚は1片のみの厚さです	二階殿 赤褐色土層
第56図・図版58 14	洪武通寶	明1368年	—	—	1.6	3.3	—	100	洪武通寶	二階殿 コーラル層
第56図・図版58 15	洪□□寶	明1368年	—	—	1.3	1.7	—	50	洪武通寶	二階殿 南トレンチ
第57図・図版59 16	永□通□	明1408年	—	—	1.4	1.9	—	40	永樂通寶	継世門 建物1
第57図・図版59 17	□高□寶	琉球1461年	—	—	1.4	1.6	—	45	世高通寶	料理座 コーラル層
第57図・図版59 18	寛永通寶 (新寛永3期)	1697~1747 1767~1781	18.6	6.1	0.8	1.3	—	100		継世門 黒土層
第57図・図版59 19	無文錢		21.8	7.2	0.9	2.2	—	100		二階殿 赤褐色土層
第57図・図版59 20	無文錢	中世	18.0	8.1	0.6	0.8	—	100		二階殿 表採及び表土層
第57図・図版59 21	無文錢	中世	17.0	8.4	0.4	0.6	—	100		二階殿 コーラル層
第57図・図版59 22	無文錢	中世	15.5	7.7	0.5	0.5	—	100		二階殿 下層
第57図・図版59 23	輪錢	中世	8.5	5.5	0.6	0.2	—	100		二階殿 表採及び表土層
第57図・図版59 24	不明		—	—	0.8	0.8	—	50		二階殿 表採及び表土層

第62表 錢貨出土状況

出土地	錢種	表採及び表土層										合計									
		埋土	瓦礫層	コーラル層	赤褐色土層	褐色土層	下層	南レンチ	コーラル層	石列	黒土層	東西石列	中央レンチ	表採及び表土層	埋土	コーラル層	黒土層	建物1	地区不明	出土地不明	合 計
	開元通寶																				9
	完形																				1
	天聖元寶																				3
	天禧通寶？																				4
	景德元寶																				1
	元祐通寶																				3
	元符通寶 or																				4
	元豐通寶																				4
	熙寧元寶																				23
	皇宋通寶 or																				11
	天聖通寶																				1
	至和通寶 or																				2
	元豐通寶																				3
	熙寧元寶																				3
	大觀通寶																				4
	紹聖元寶																				1
	元祐通寶																				2
	元符通寶 or																				23
	元豐通寶																				1
	宣和通寶																				2
	洪武通寶																				3
	洪武通寶																				2
	永樂通寶																				2
	世高通寶																				3
	寛永通寶																				4
	(新寛永3期)																				1
	無文錢																				9
	無文錢																				1
	輪錢																				3
	半錢																				1
	一錢																				1
	五錢																				1
	セント																				1
	不明																				9
	新貨幣																				1
	二枚付着錢																				3
	皇宋通寶・ 永樂通寶																				1



第56図 錢貨 (1)



第57図 錢貨 (2)

第23節 円盤状製品

円盤状製品の完形品は4点得られている。1は沖縄産陶器の胴部、2は褐釉陶器の胴部、3は天目茶碗の高台部、4は本土産陶器の底部を使用している。4点共に粗く打ち欠いて成形しており、大きさもあまり変わらない。

第63表 円盤状製品観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号	完・破	縦	横	厚さ	重量	素材	観察事項	出土地
図版60 1	完	51.84	52.17	11.5	52.49	沖縄産無釉陶器	内面から打ち欠いて成形している。かなり難に成形している。	二階殿 表採及び表土層
図版60 2	完	41.14	41.37	8.64	23.15	褐釉陶器	やや小型で、粗く打ち欠いて成形している。	二階殿 赤褐色土層
図版60 3	完	45.40	46.24	10.0	33.76	黒釉陶器	天目茶碗の高台を利用して周辺を打ち欠いて成形している。	二階殿 表採及び表土層
図版60 4	完	49.57	45.47	4.0	16.61	本土産磁器	高台際から4~8mmの胴部を打ち欠いて成形している。	二階殿 表採及び表土層

第64表 円盤状製品出土状況

素材 出土地		青磁	染付	中国産 褐釉陶器	タイ産 褐釉陶器	黒釉 陶器	本土 産?	本土産 磁器	本土産 陶器	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	陶質 土器	瓦質 土器	屋瓦	合計	
二 階 殿	表採及び表土層		3	16	3	1		1	1	2	12	1		19	59	
	瓦礫層				3										3	
	黒土層				2										2	
	赤褐色土層											2	2		4	
	褐色土層				2										2	
	礎道				1										1	
料 理 座	埋土					1										1
	コーラル層				1											1
大 台 所	埋土						1									1
	瓦礫層										1		1		2	
	黒土層			1		1					1		1		4	
	赤褐色土層				1										1	
繼 世 門	表採及び表土層											1				1
	埋土											2				2
	コーラル層			14		4							2	1	21	
	建物1						1									1
	東西石列				2	1										3
	南トレンチ	1														1
	テストピット				1											1
	出土地不明										1					1
合 計		1	3	44	10	2	1	1	1	3	19	1	4	22	112	

第24節 貝類及び獸魚類遺存体

食料残滓等としての貝類及び獸魚類遺存体も少くない出土量があるが、時間的な制約等から詳細な種同定及び数量の算出、あるいはそれらの比較検討までは至らなかった。

このため、その数量及び重量を出土遺物整理用のコンテナサイズ第65表に示しておきたい。

これらは、いずれ時間を要して詳細な種同定、さらには種ごとの数量比較等を行い、その組成比較等を行えればと考えている。

概観した限り、貝類では腹足綱：リュウテンサザエ科のカンギクやオニノツノガイ科のカニモリルイ、斧足綱：マルスダレガイ科のアラスジケマンガイ等の首里城跡内の他地区でも比較的ポピュラーな出土状況を見せていているものが主体をなしている。

また、脊椎動物遺存体では軟硬骨魚綱、爬虫綱、哺乳綱等が含まれる。この中でも目立つものとしては、奇蹄目ウマ科のウマや偶蹄目イノシシ科のリュウキュウイノシシ若しくはブタ、ウシ科のウシ等で

第65表 貝類及び獸魚類遺存体類量表

あることは貝類同様、首里城跡内の他地区でも主体をなしているものである。

遺物	コンテナ サイズ ⁶	コンテナ 数	重量 (kg)
貝	S	4	20.77
	M	17	227.4
	L	4	68.7
合 計		25	316.87
骨	S	5	12.97
合 計		5	12.97

第7章 総括

前章までにて、調査の内容および成果等について述べてきた。終章の本章では、調査によって明らかになったことなどについて整理し、総括としたい。

すでに述べたように、調査は1992(平成4)年に一部開園した国営沖縄記念公園首里城地区の未開園部分の整備計画に係る事前の遺構確認を目途としたものである。

調査地区は、首里城の中心的建物である正殿や南北殿、奉神門等の南東部に位置していた大台所、料理座一帯である。対象地一帯は、去った大戦によって壊滅的な打撃を受けるとともに、戦後は旧琉球大学の工芸棟設置による敷地造成等のため、敷き均されて旧地形は失われ、比較的平坦を呈していた。

かかる状況からして、調査着手前から当該地に所在していた大台所、料理座等の建物遺構については、良好な保存状態は望めないであろうことは予測できた。

調査の結果、建物群が位置していた一帯の地形は削平が少なくなく、表土層を除去すると、琉球石灰岩の基盤が露出した状況の箇所も散見された。このようなことから、調査によって得られた出土遺物のほとんどは岩盤の間隙や断片的に残存していた遺物包含層中から出土したものである。

検出された遺構には、大台所に関連するものとして中央石列、中央石敷、溝、西石列があり、料理座に関連するものとして東石疊、東石列(石積み)があるが、これらの検出遺構はいずれも単発的であったため、所在していた大台所若しくは料理座の建物のプランや規模等の把握は不可能であった。このことは、第3章で記したように、両建物とも昭和初期にはすでに姿を消し、建物の礎石すら残っていなかったということと併せて、沖縄戦による壊滅的打撃、さらにはこれに追い打ちをかけるように戦後の琉球大学工芸棟の設置等、種々のマイナス要因が重なった結果であることは多言を要しないであろう。

出土遺物は、従前の内郭地区および周辺地区等の出土状況と酷似しており、中国産を主体とし、タイ産、ベトナム産、朝鮮産、本土産、沖縄産等の陶磁器をはじめ、陶質および瓦質土器、屋瓦、博、金属製品、煙管、石製品、錢貨(古銭)、貝製品、骨製品、貝類および獸類遺存体等の種々の遺物が検出されている。紙幅の関係もあり、個々の遺物に関する詳細な所見は述べられないが、特徴的な点について概述する。

中国産陶磁器には青磁、白磁、染付等があるが、これらは主に碗、皿といった日用品が主体である。点数は少ないが、青磁では鉢や瓶、酒会壺といった大型製品や六角杯、蓋置、将棋の駒、器台といった希少器種の出土がみられる。白磁では県内でも出土例が多くない鳥の餌入れや安平壺2点が出土している。一方、染付では香炉や高足付杯などの希少器種が出土している。また、数は限られるが、壺や瓶と思われる元様式の染付も出土している。

これらを産地別にみると、青磁は龍泉窯系、染付は景德鎮窯系、白磁は徳化窯系、福建、廣東系が産地の主体をなしている。

色絵は、主に盤、鉢、瓶といった大型製品の出土がみられ、褐釉陶器は雑成形の壺に限

定されている。

これらの中国産陶磁器の年代であるが、14世紀以前の段階の製品も若干含まれるもの、当該期に属するものは極めて点数が限られ、主体をなしている時期は15世紀から16世紀頃と考えられる。

他に、黒釉陶器・瑠璃釉・緑釉・翡翠釉・法花・無釉陶器・紫砂も出土している。年代的には一部に14世紀後半に遡るもの（黒釉天目）や、17世紀以降に下るもの（瑠璃釉小杯・紫砂急須）もあるが、主体は15～16世紀に位置づけられる。特殊な資料として、器面に金彩が施された瑠璃釉の蓋付き筒形碗が挙げられよう。

タイ産陶磁器としては、土器（俗称ハンネラ）、青磁、鉄絵、褐釉陶器の出土がある。年代的には概ね15世紀～16世紀中葉に位置づけられよう。なかでも、青磁瓶（双耳瓶の底部と想定）は類例の少ない貴重な資料である。

ベトナム産陶磁器としては白磁、青花、色絵の出土がある。年代的には概ね15世紀～16世紀中葉に位置づけられよう。器外面に線彫り文様を施す白磁碗は、首里城跡のほか今帰仁城跡・浦添城跡などの大型グスクでのみ出土する特徴的な資料といえよう。

朝鮮産陶磁器としては象嵌青磁の出土があるが、年代的には概ね15世紀に位置づけられるものである。

本土産陶磁器としては、磁器と陶器があるが、磁器には青磁、白磁、染付、色絵があり、産地としては肥前や瀬戸、美濃などが確認される。年代的には近世（17世紀後半以降・肥前）と近代（瀬戸または美濃）に大別され、碗、皿（大皿含む）、小鉢などの供膳具が多くみられる。

陶器の産地は備前、肥前、京及び信楽（関西系）・薩摩などが確認された。年代的には一部近世以前に遡るもの（備前擂鉢）もあるが、主体は17世紀以降に位置づけられる。小碗、皿、小鉢などの供膳具に加え、壺や瓶などの貯蔵具もみられる。特筆されるものとして、高級な供膳具と考えられる薩摩・豊野系製品（白薩摩）が一定量出土している。

沖縄産陶器には施釉陶器と無釉陶器があるが、施釉陶器は碗、小碗、皿などの供膳具のほか、鉢などの大型品の出土が目立っている。年代的には近世後半～近代の資料が多数確認されている。無釉陶器は壺、甕などの貯蔵具のほか、大小の鉢類が多数みられる。年代的には一部に近世初期（17世紀前半～中頃）に帰属するものもあるが、主体は近世後半～近代に位置づけられるものである。

量的に多くはないが、陶質・瓦質土器も含まれ、陶質土器は火炉、鍋、土瓶、焙烙、竈など直接火を受ける製品が大多数を占める。年代的には近世後半～近代に位置づけられる。

一方、瓦質土器は植木鉢や擂鉢などのほか、円盤状または板状の蓋の出土がある。特記されるものとして、瓦質製の欄干の部材（逆蓮頭と手摺り）が出土している。類例は首里城跡東のアザナ地区にあり（盛本・山本編2004）、本例が2例目となる貴重なものである。

これらの年代的位置づけは16世紀後半が主体をなすが、円盤状または板状の蓋は15世紀代まで遡る可能性もある。

屋瓦は出土遺物の中で最も多く出土しており、高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦が見られ、種類は主に軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、軒瓦が見られる。高麗系瓦は、いずれも小片資料であるが、丸瓦と平瓦が確認されている。一方、大和系瓦は丸瓦が確認されているのみである。

瓦の中でも大半を占めているのが明朝系瓦で、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、軒瓦がある。軒丸瓦の瓦当文は、主に花柱を備え、花弁が全面的に広がるタイプと隅丸方形の花芯を上下に配し、花弁には多数の稜線を配するタイプの2種類に大別できる。

搏は、形態が長方形状と三角形状に大別できる。長方形状タイプにはL字状の脚が附属する資料が、三角形状タイプは主に厚手の資料が見られる。

金属製品には、鉄製品と銅製品があり、銅製品には釘、簪、座金具、把手、飾り金具といった日用品と、八双金物、覆輪などの武具のパーツ等、多種多様な製品が出土している。

なかでも、飾り金具や八双金物などは鍍金がなされていることから、かなり希少性を有した製品であったことが窺い知れる。

煙管は、雁首（土製・金属製・無釉陶器製）と吸口（施釉陶器製）の出土がみられ、すべて分離型（羅字キセル）であり、一体型（延ベキセル）は未確認である。

石製品には硯、碁石、蓋、石球が見られるが、大半が用途不明の製品である。使用石材が琉球列島で産出しない玉石を使用した製品も見られる。また、これまでの首里城跡の発掘調査ではさほど類例が見られない装飾がなされた石製容器の蓋が出土している。

錢貨は、中国錢（北宋錢が主体）・琉球錢（世高通寶、輪錢など）・日本錢（寛永通寶）が確認されている。中世～近世までの資料に破片が多く、全体の約88%を占めている。

貝製品は、水磨を受けたマガキガイの殻頂部付近の資料とヤコウガイ製の札状製品、さらには養殖ヤコウガイの殻、ヤコウガイの匙状製品がある。これらは、これまでにも首里城跡内の他の調査地区で出土例が知られている比較的ポピュラーなものである。

骨製品はハブラシの柄部と歯部である。骨製ハブラシもこれまでの他の調査地区での出土例が多出しているポピュラーなものである。

盛本 勲・山本正昭・編, 2004: 首里城跡－東のアザナ地区発掘調査報告書－。沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第20集。沖縄県立埋蔵文化財センター。沖縄県西原町。

図版1 調査区近景
(南西より)



図版2 大台所地区：
調査光景(西より)



図版3 大台所地区：溝
(南より)



図版4 大台所地区：溝
(西より)



図版5 大台所地区：西石列
(南より)



図版6 大台所地区：西石列
(北より)



図版7 大台所地区：西石列
(南東より)



図版8 料理座地区：
東石置及び東石列
(南東より)



図版9 料理座地区：
東石置及び東石列
(西より)



図版 10 料理座地区：東石畳
及び東石列近景
(西より)

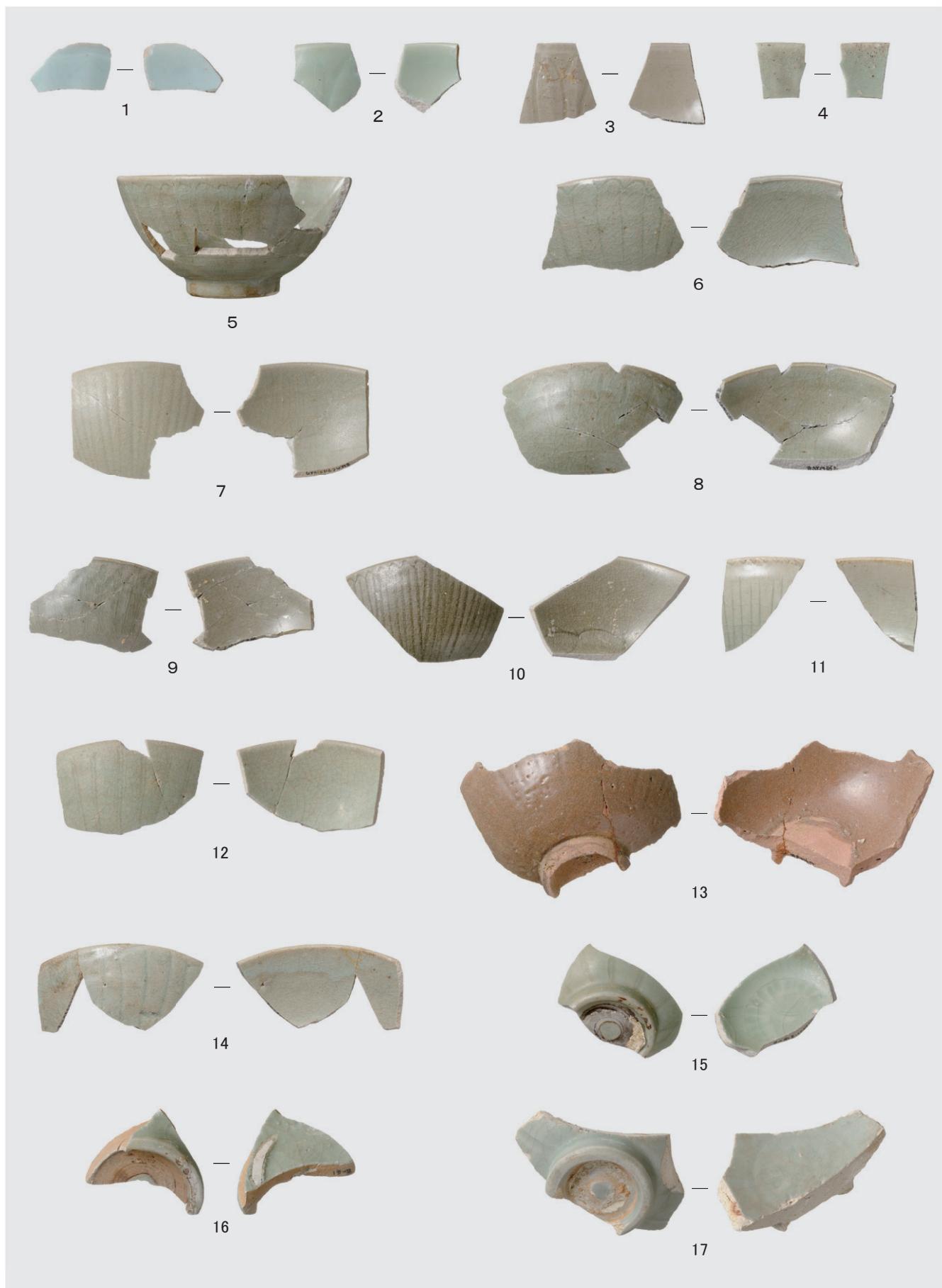


図版 11 料理座地区：
東石畠及び東石列
(南側)



図版 12 料理座地区：
東石畠及び東石列
(東より)





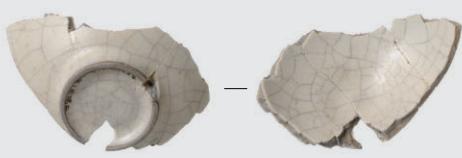
図版 13 青磁（1）碗



図版 14 青磁（2）碗



31



32



33



34



35



36



37



38



39



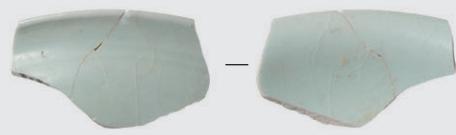
40



41

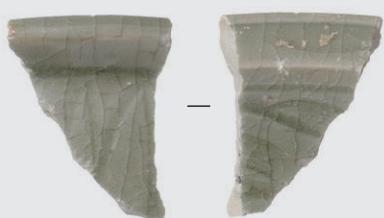


42



43

図版 15 青磁（3）碗・皿



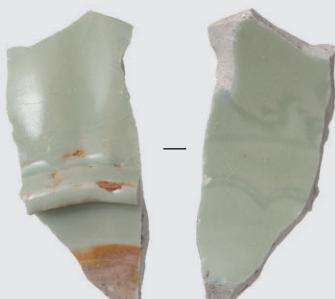
44



45



46



47



48



49

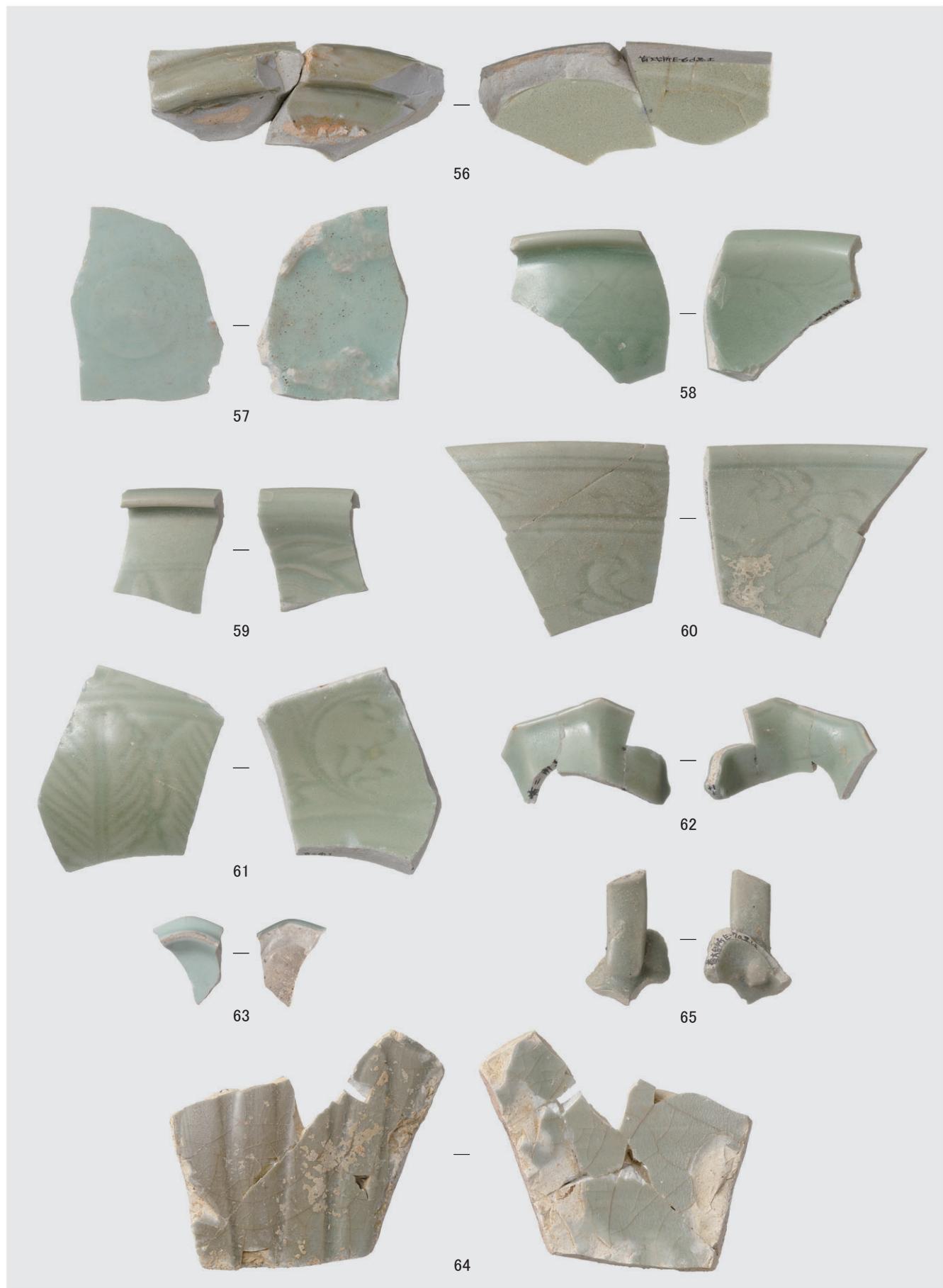


50

図版 16 青磁（4）盤



図版 17 青磁（5）盤



図版 18 青磁（6）盤・鉢



図版 19 青磁 (7) 瓶・水注・酒会壺・香炉・器台



79



80



81

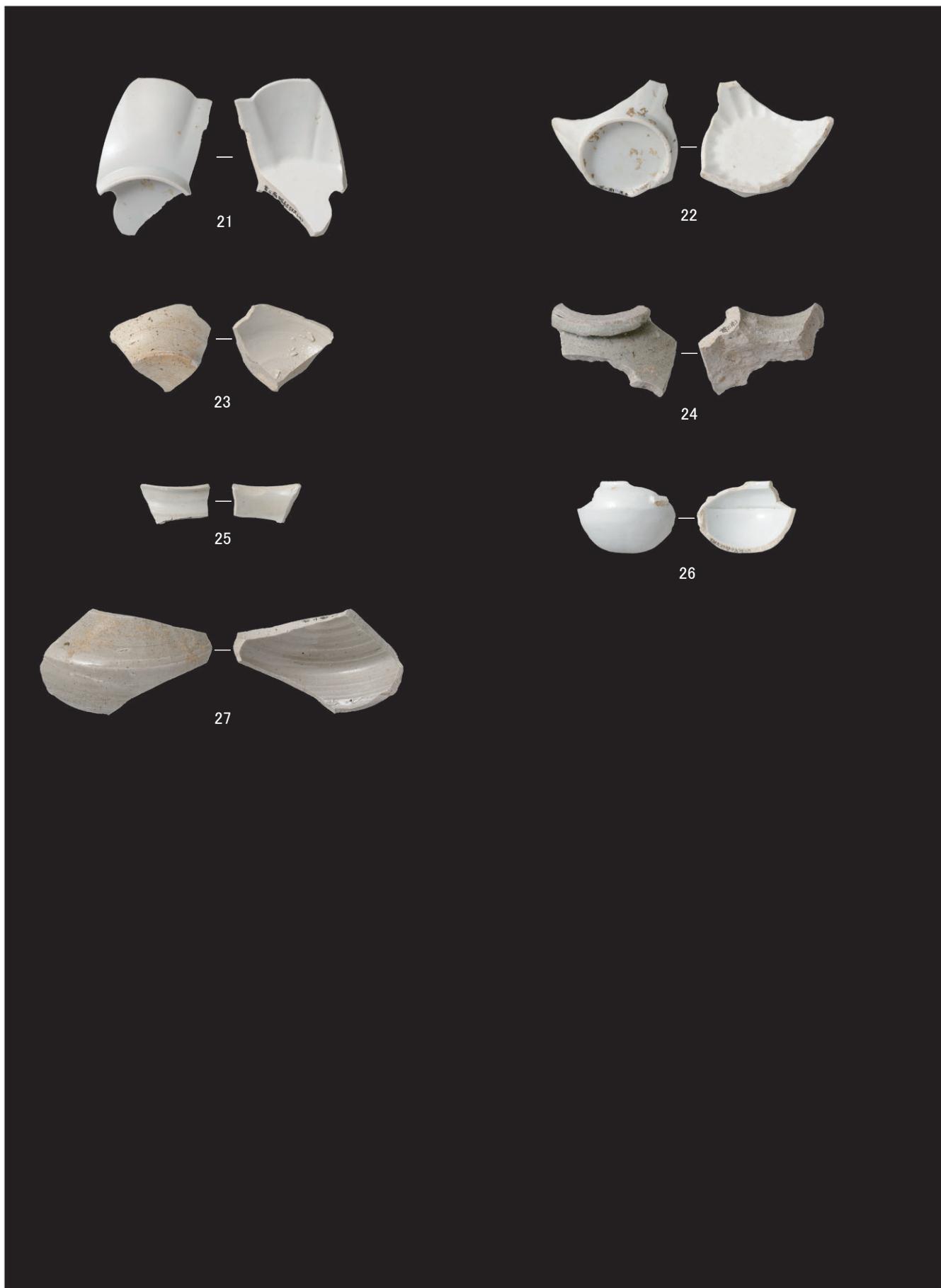


82

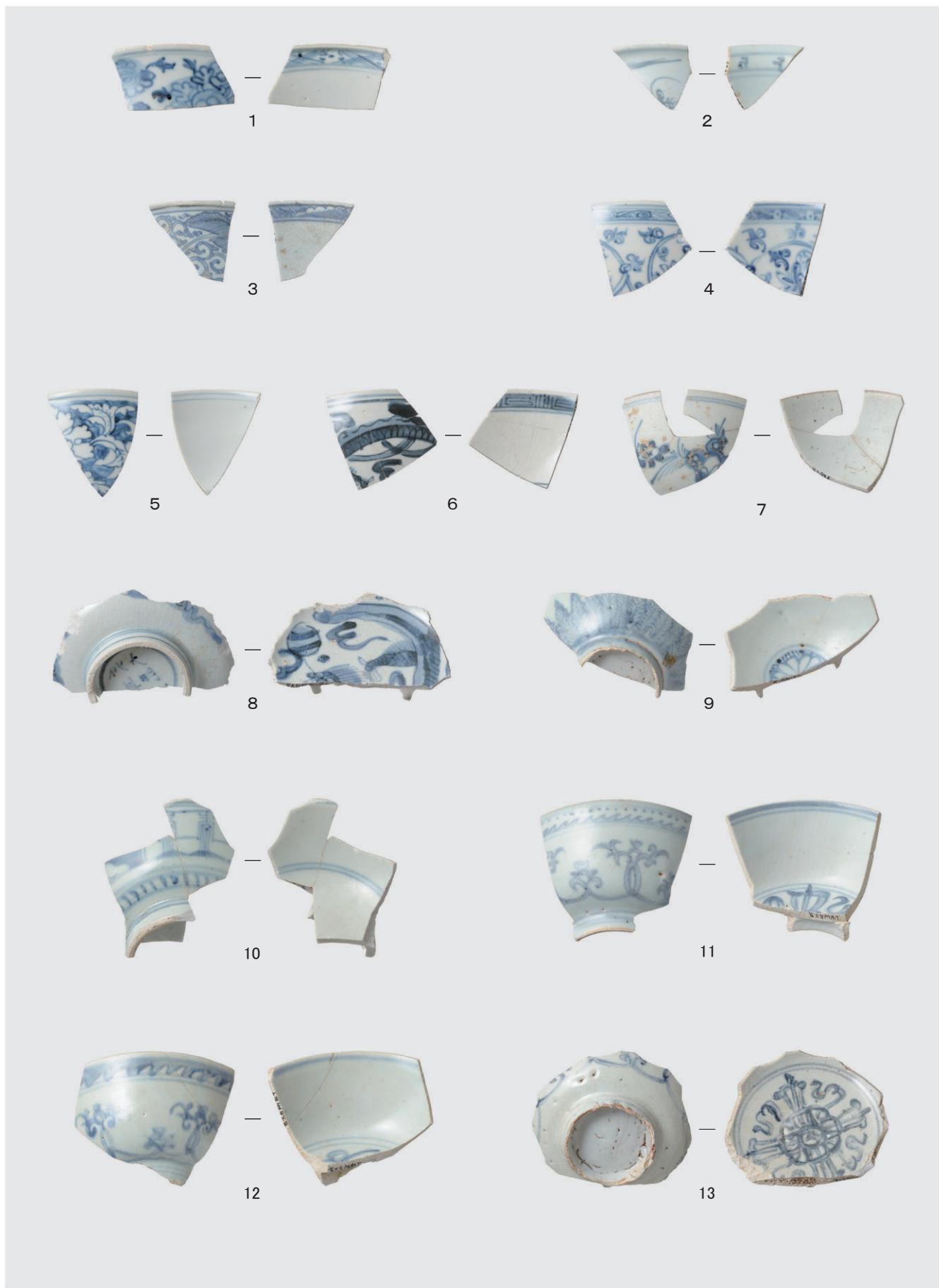
図版 20 青磁 (8) 駒・器種不明



図版 21 白磁（1）碗・小碗・杯・皿



図版 22 白磁（2）鉢・小鉢・杯・瓶・壺



図版 23 染付 (1)碗



図版 24 染付 (2) 碗



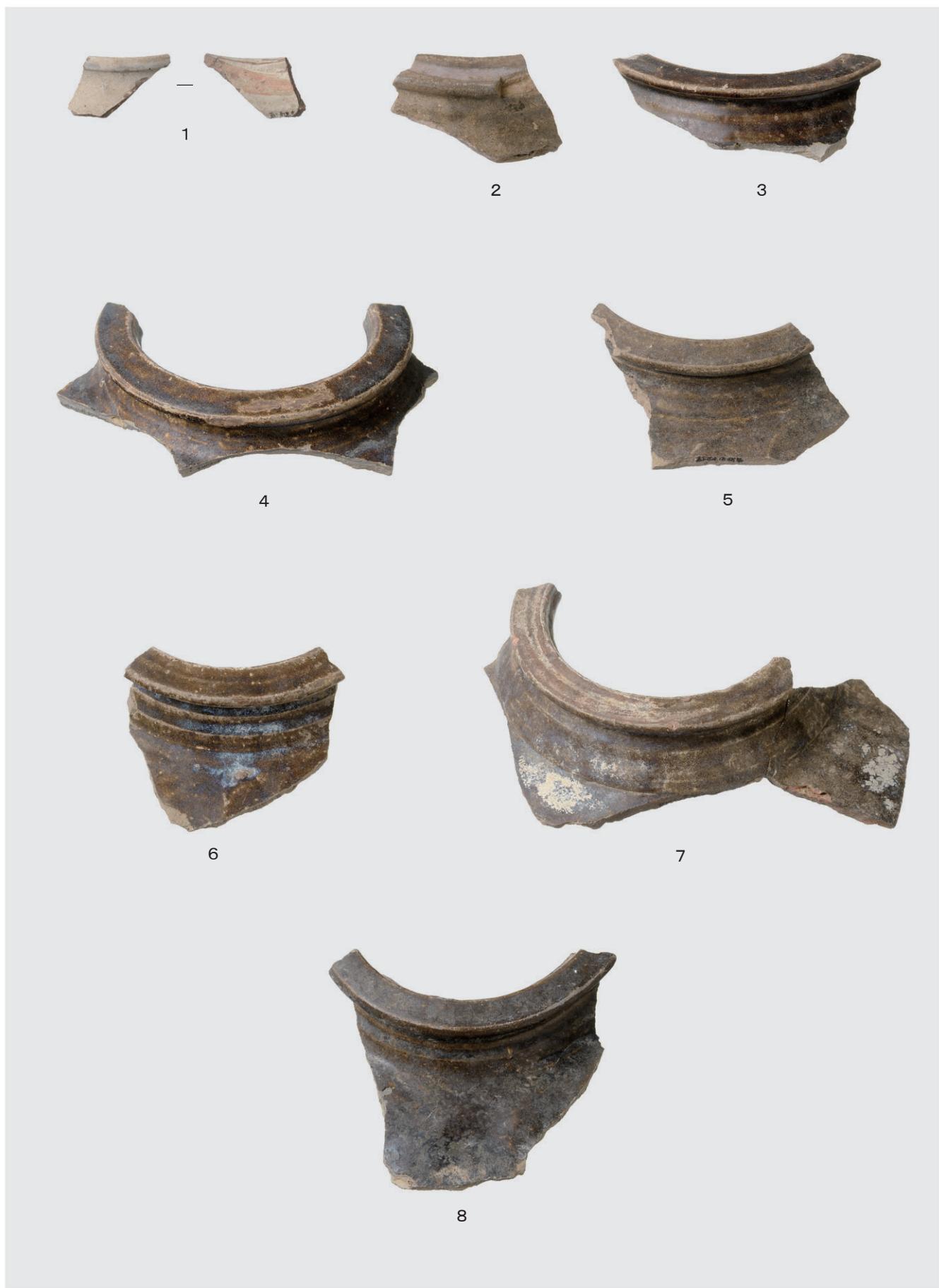
図版 25 染付 (3)皿・鉢・瓶



図版 26 染付 (4) 杯・壺・香炉



図版 27 色絵 碗・皿・鉢・瓶



図版 28 中国産褐釉陶器 (1) 壺



10



11



12



13



14

図版 29 中国産褐釉陶器 (2)壺



図版 30 中国産褐釉陶器 (3) 壺・鉢



図版 31 その他の輸入陶磁器（1）



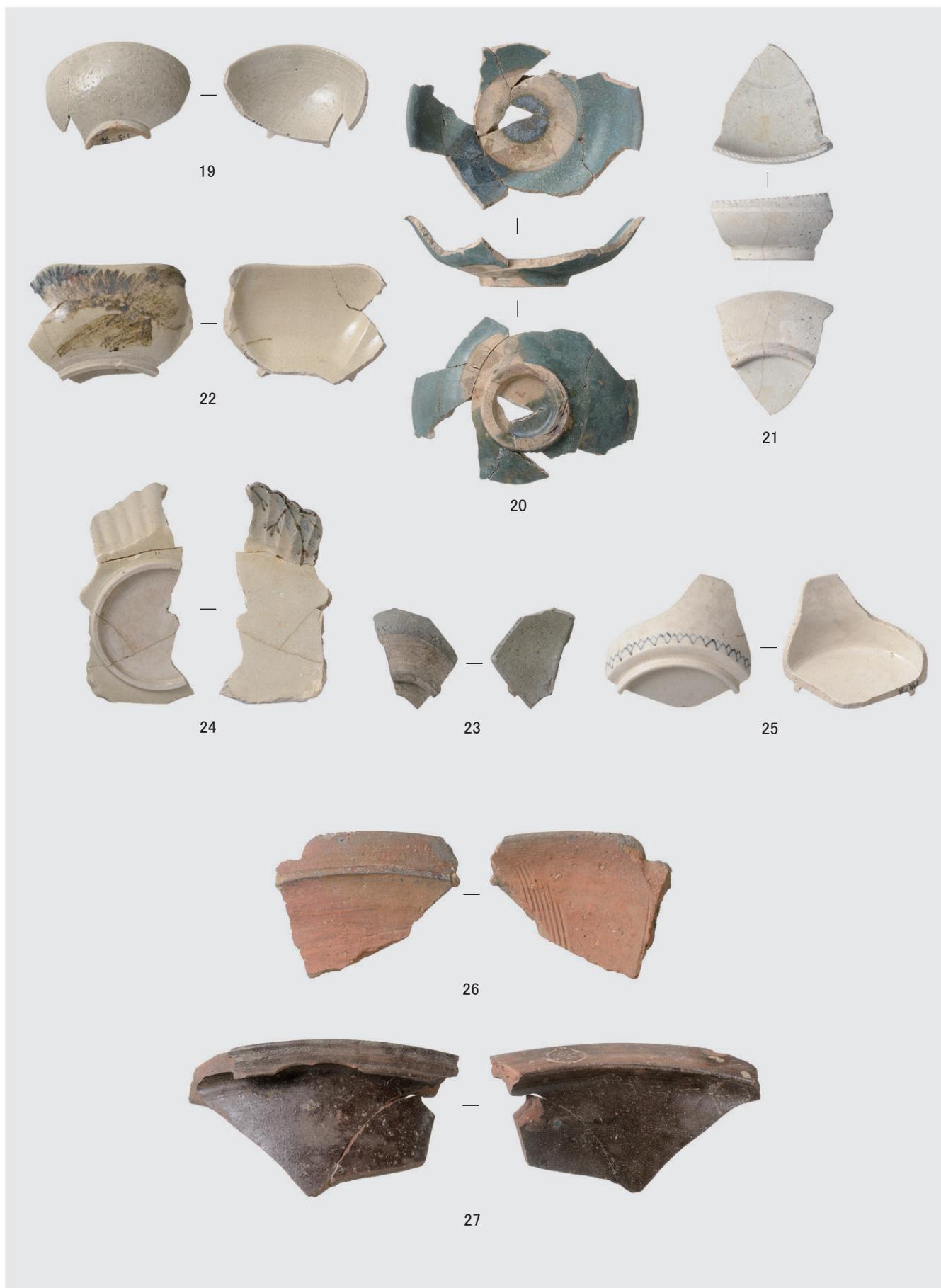
図版 32 その他の輸入陶磁器 (2) (3)



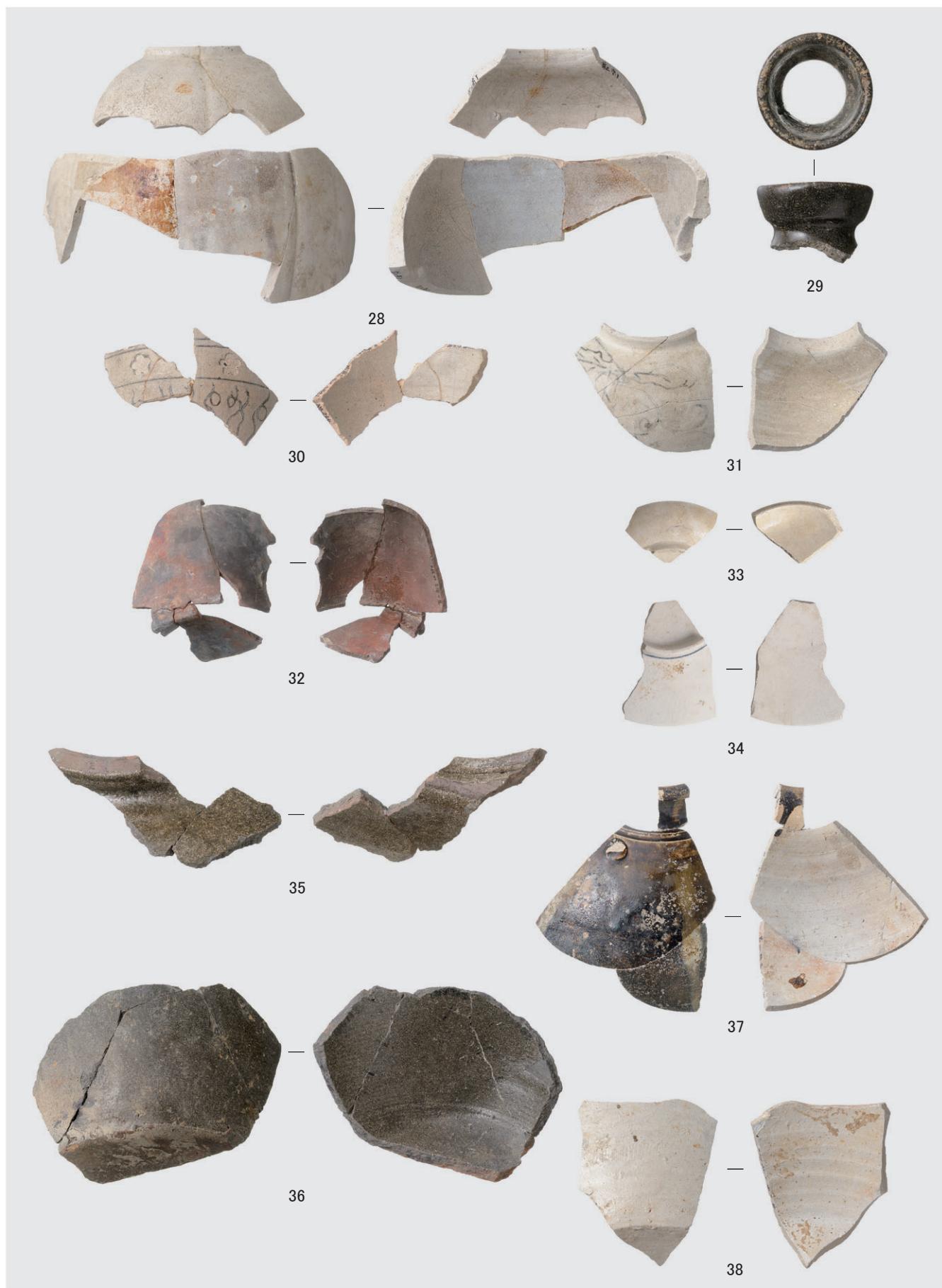
図版 33 本土産陶磁器（1）



図版 34 本土産陶磁器 (2)



図版 35 本土産陶磁器（3）



図版 36 本土産陶磁器 (4)



図版 37 沖縄産施釉陶器 (1)



図版 38 沖縄産施釉陶器 (2)



図版 39 沖縄産無釉陶器（1）



9

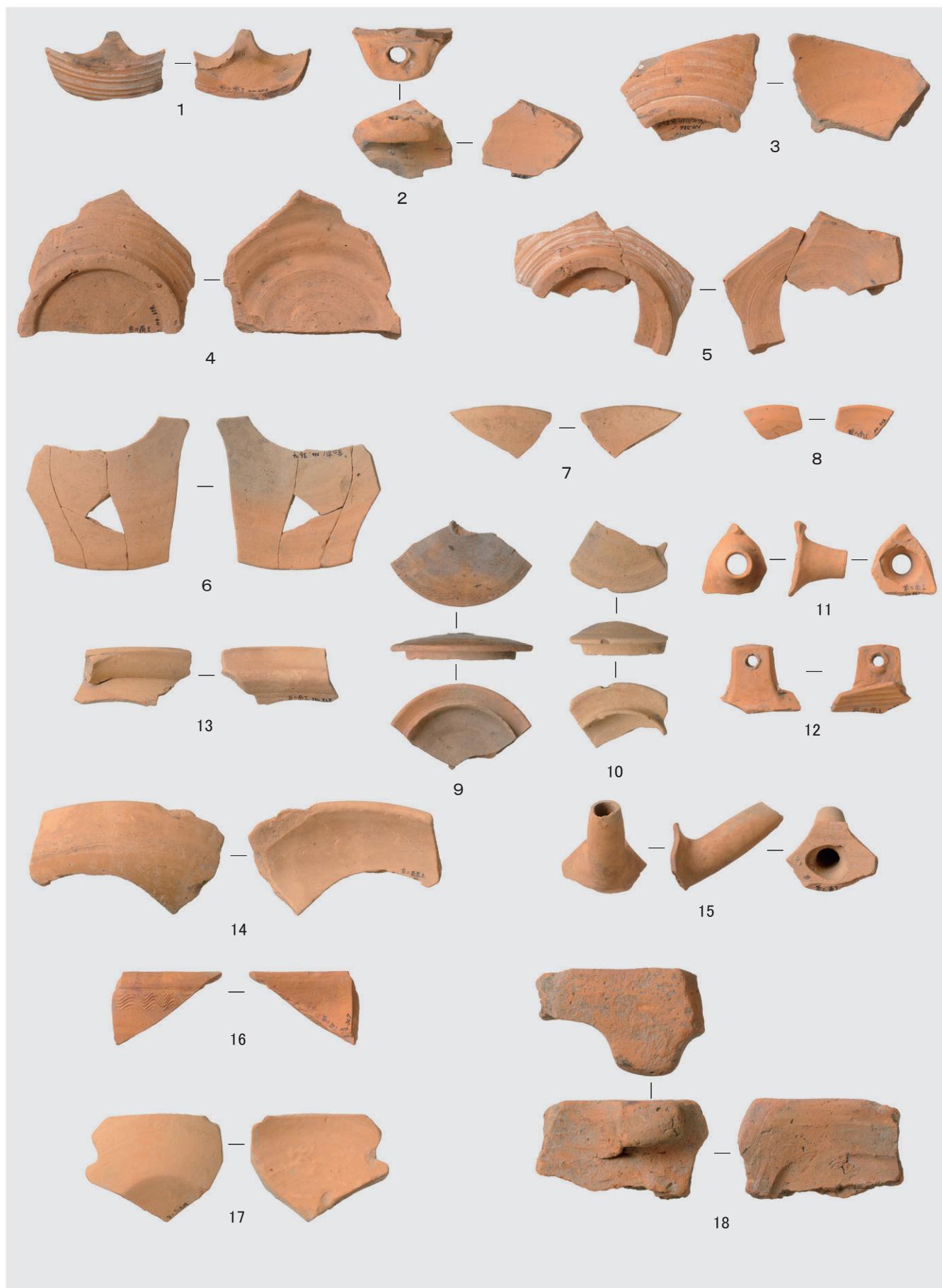


10



11

図版 40 沖縄産無釉陶器 (2)



図版 41 陶質土器 (1) 火炉・蓋・急須・鍋・焙烙 (2) 土瓶・鉢・皿・竈



図版42 瓦質土器（1）鉢



図版 43 瓦質土器 (2) 鉢



図版 44 瓦質土器（3）蓋・欄干



図版 45 土器



図版 46 屋瓦(1) 高麗系瓦：丸瓦、平瓦 大和系瓦：丸瓦



図版 47 屋瓦（2）明朝系瓦 :軒丸



図版 48 屋瓦 (3) 明朝系 : 軒平



図版 49 屋瓦 (4) 明朝系瓦 :丸瓦、平瓦



19



20



21



22

図版 50 屋瓦 (5) 明朝系瓦 : 平瓦



1



2



3



4

5

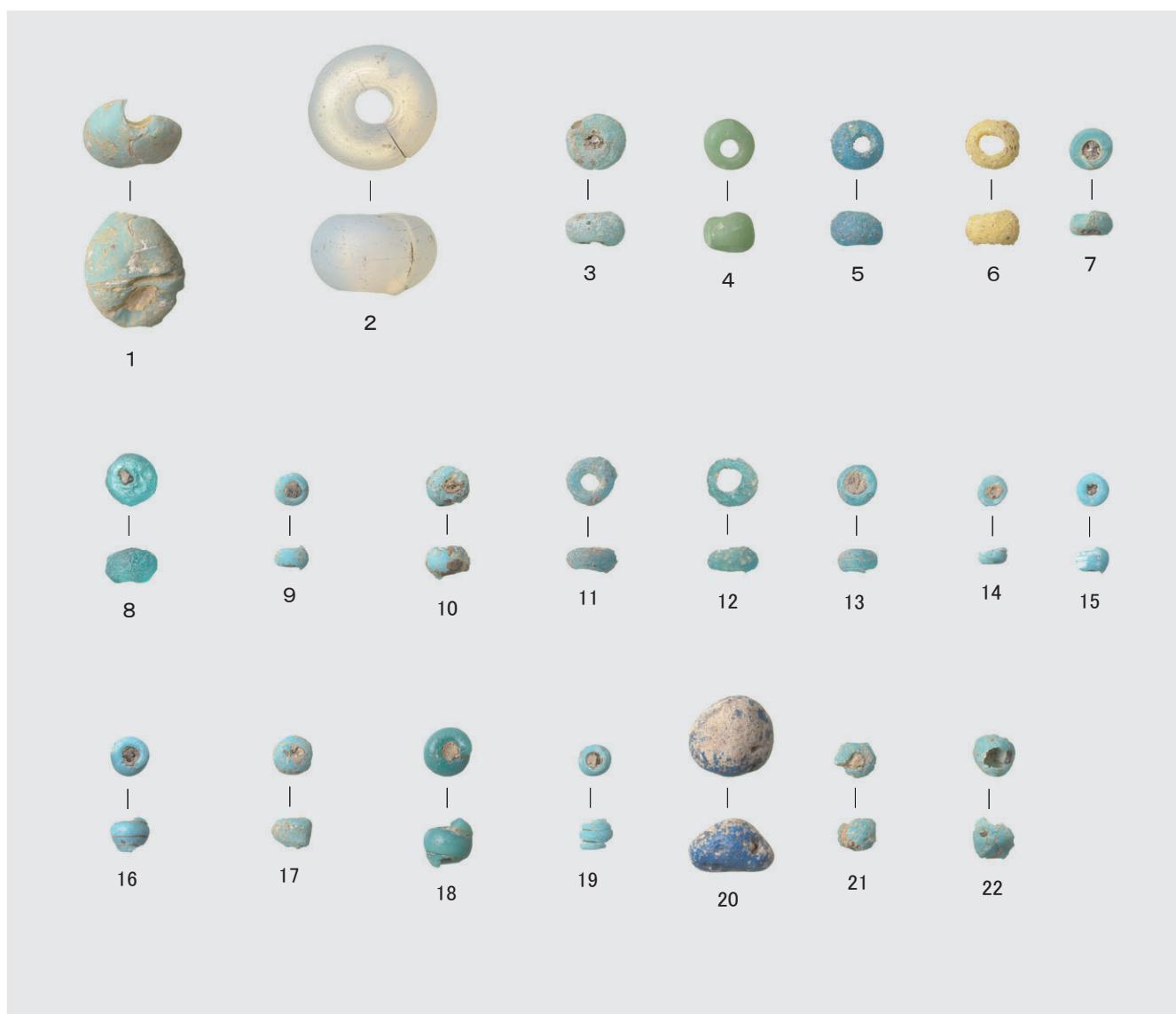
図版 51 塚



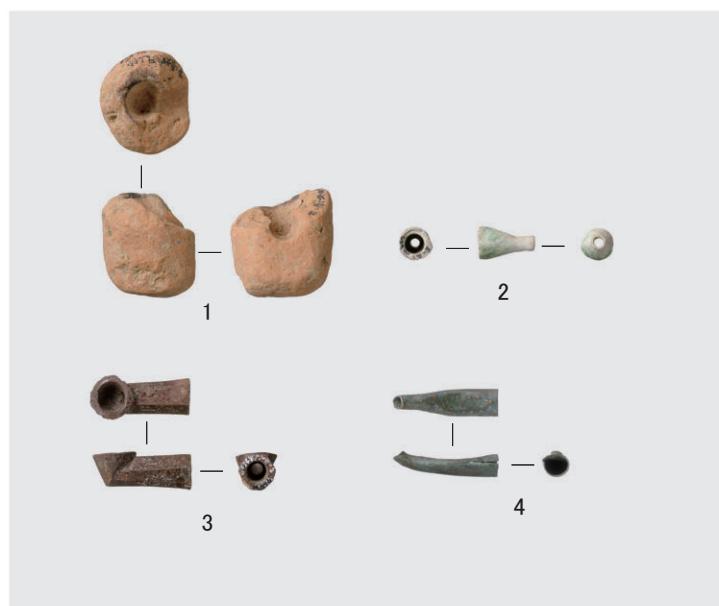
図版 52 石製品



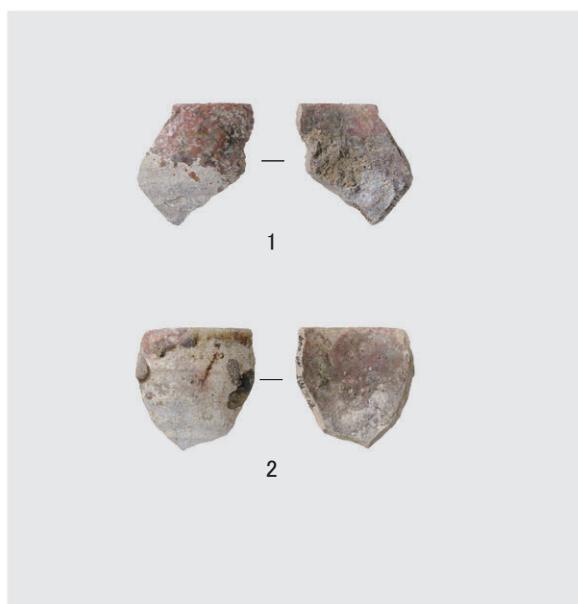
図版 53 貝製品 1～6 骨製品 7、8



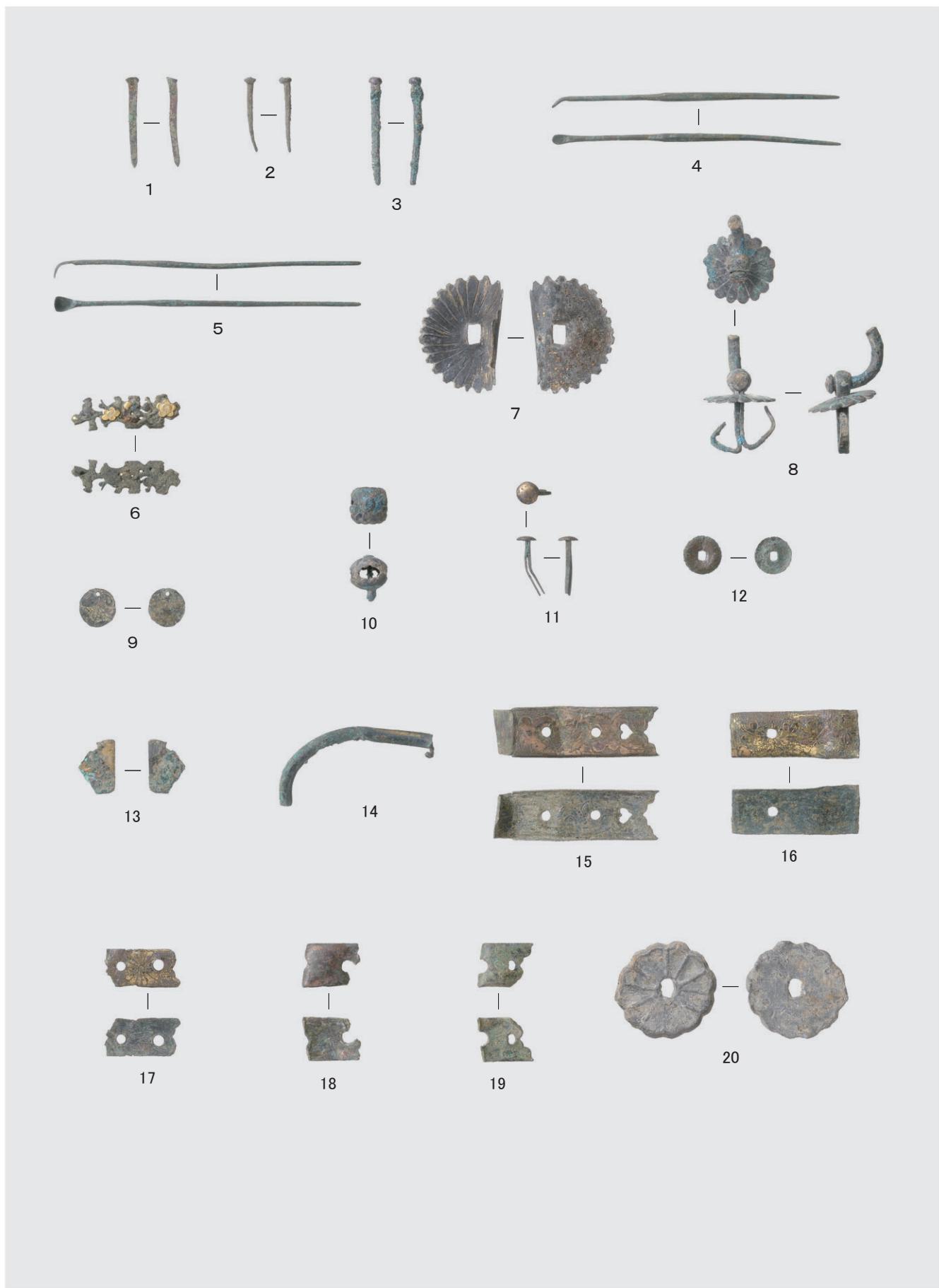
図版 54 ガラス玉



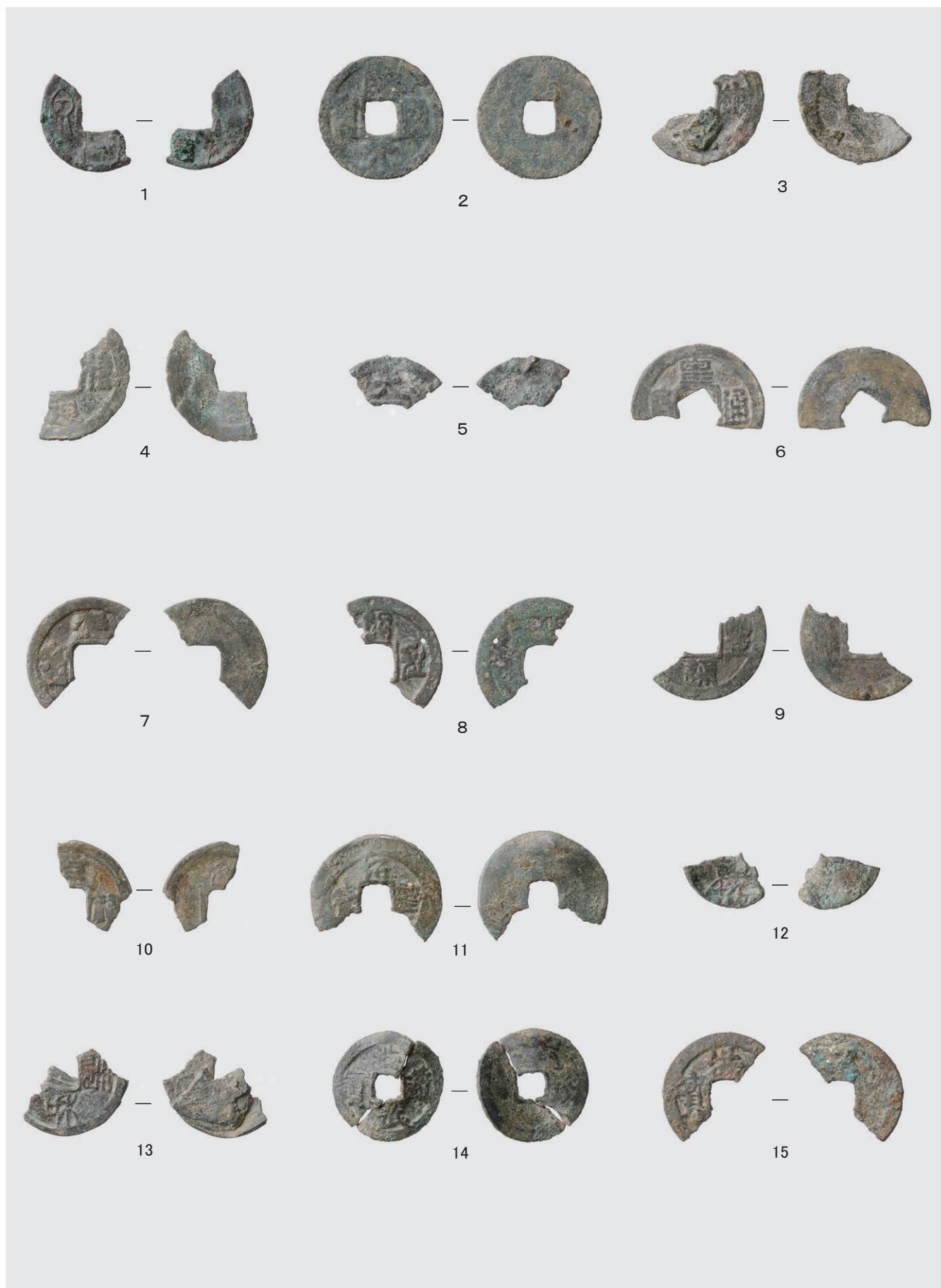
図版 55 煙管



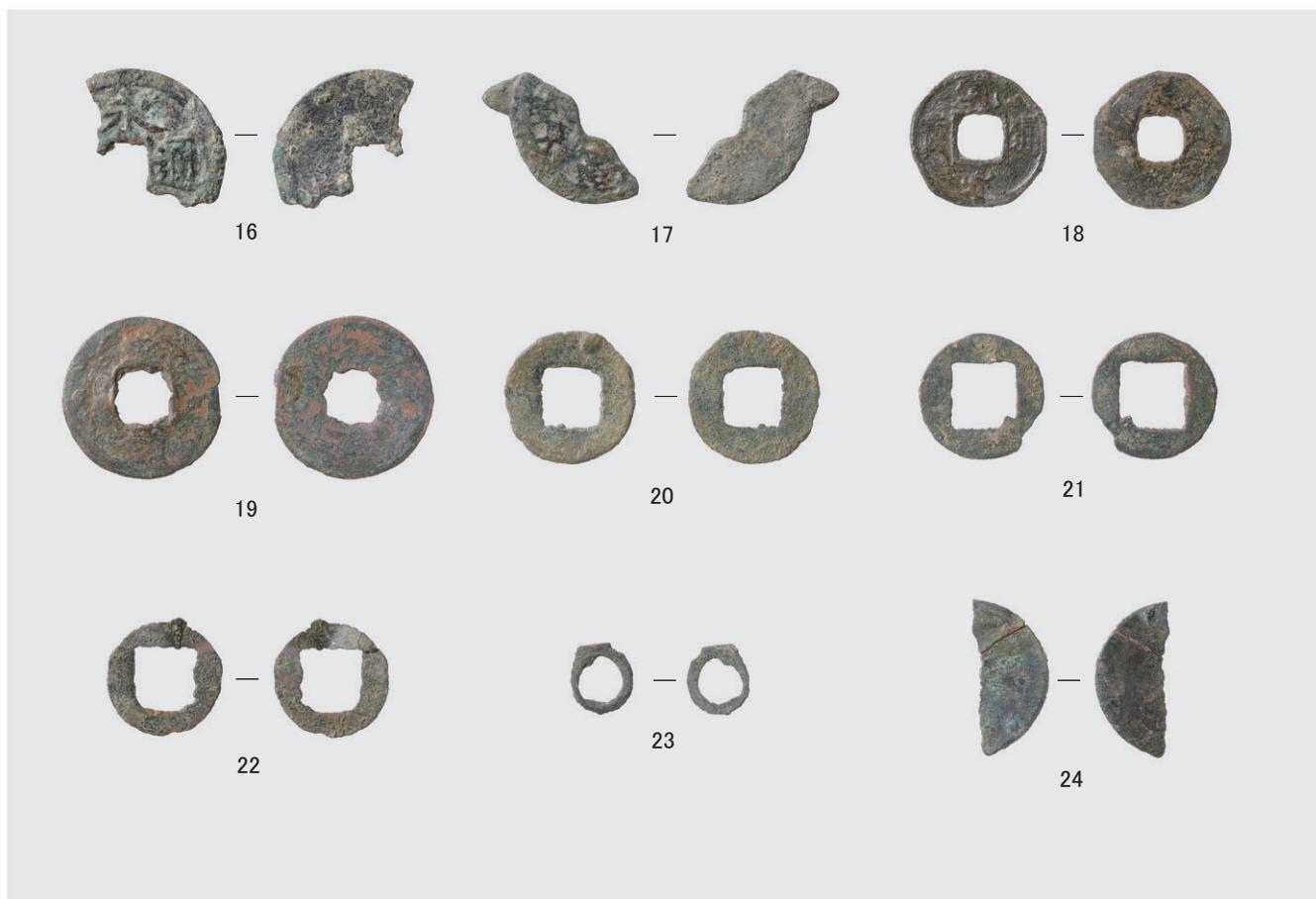
図版 56 埠堀



図版 57 金属製品



図版 58 錢貨 (1)



図版 59 錢貨 (2)



図版 60 円盤状製品

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しゅりじょうあと							
書 名	首里城跡							
副 書 名	大台所、料理座地区周辺発掘調査報告書							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第78集							
編著者名	盛本勲・山本正昭・新垣力							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8752 FAX 098-835-8754							
発行年月日	平成27(2015)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
首里城跡 うみのじゆくじゆ 大台所、料理座 しゅりじゅくちゆ 周辺地区	沖縄県 なはし 那覇市 しゅりじゅくちゆ 首里当蔵町 3丁目1番	那覇市 47201	-	26° 13'	127° 43'	1996.8.1 ～ 1997.2.28	920 m ²	国営沖縄記念公園(首里城地区)整備に伴う遺構確認調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
首里城跡 大台所、料理座 周辺地区	城 跡	グスク時代～ 近世	石列3、石敷1、溝1、 遺物包含層	中国産・タイ産・朝鮮半島産陶磁器、本土産陶磁器、土器、沖縄産陶器、金属製品、錢貨、骨製品、貝製品、石製品、ガラス玉、屋瓦、埠			特になし	
要 約	<p>昭和61年度に首里城公園計画(約18ha)のうち、内郭地区の4.2haが国営公園として閣議決定以降、昭和63年度から復元整備に伴う事前の遺構確認調査を県教委が国から委託を受けて実施してきた。正殿等を含む城の西側部分は平成4年度までに整備が完了し、開園したが、東～東南側は未整備である。</p> <p>未整備地区であった東南側の整備に係る基礎情報を得る目的で、平成8年度に大台所、料理座地区の発掘調査を実施した。本報告書はその内容である。</p>							

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第78集

首里城跡

—大台所、料理座地区周辺発掘調査報告書—

発行年 平成27（2015）年3月31日

発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

編集 沖縄県立埋蔵文化財センター調査班
〒903-0125

沖縄県中頭郡字上原193-7

TEL 098（835）8751・8752

FAX 098（835）8754

印刷 合資会社 精印堂印刷
沖縄県那覇市字真地399-3
TEL 098-832-1311

©沖縄県立埋蔵文化財センター 2015 Printed in Japan

許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。



沖縄県立埋蔵文化財センター